青森市埋蔵文化財調査報告書　第22集

小 三 内 遺 跡

発掘調査報告書

平成5年度

青森市教育委員会

序

青森市は、南に八甲田山、北に陸奥湾をのぞむ豊かな自然に囲まれたなかで歴史を重ねてまいりました。わたくしたちの遠い祖先も、この自然から多くの恵みを得ようとしてこの地に居を構えたのでしょう。

先人の足跡とも言える遺跡は、当市において現在200か所以上確認されています。なかでも三内地区は遺跡の密集地であり、円筒土器が数多く出土することが古くから知られていました。記録をたどると江戸時代の安永年間にまで遡ることができます。また、それらの性質等から、学術上大変貴重な地域とされています。

この度、この三内地区に青森県運転免許センターの新設が計画され、取付道路予定地が小三内遺跡を通ることになりました。そのため埋蔵文化財の取り扱いについて事業者と協議を重ねた結果、事前に発掘調査を実施し記録によって保存を図ることになりました。

本報告書は、この成果をまとめたものでありますが、研究者はもとより市民の皆様にとりましていささかでも役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に参加された調査員、関係機関並びに各位からのご指導、地元三内地区各町会からのご協力、さらに事業者である青森県警察本部の深いご理解に対して心より感謝申し上げます。

平成６年３月

青森市教育委員会
教育長　花　田　陽　悟

例　　言

1　本報告書は平成5年度に実施した青森県運転免許センター取付道路新設工事に係る小三内遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡番号は01017である。

3　各遺構の規模については、壁長（または長軸・短軸）・壁高では確認面から、ピット・壁溝では床面からの測定値を記した。主軸方位は、縄文時代の住居跡では長軸を、歴史時代の住居跡ではカマドの長軸を基準線とした。

4　遺構番号は、時代別でなく通し番号を用いており、住居跡では第7号が欠番である。なお、一般に土壙・土坑・竪穴遺構等の名称が付される遺構類を本報告書では「土壙」と呼称している。

5　執筆者名は、依頼原稿では文頭に記し、その他は文末に記した。

6　資料・試料の鑑定及び同定、分析について次の方々に依頼した（敬称略、順不同）。

遺跡周辺の地形及び地質	青森県立黒石高等学校教諭	工藤　一彌
石器の石質鑑定	〃	〃
低地域の古環境	大阪市立大学講師	辻　誠一郎
放射性炭素年代測定	八戸工業大学助教授	村中　　健

7　遺構、遺物の文、図中での表現は原則として次の様式、基準に依った。

(1) 土層の注記については「新版標準土色帖」（小山正忠、竹原秀雄1993）を用いた。

(2) 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構の平面図の使用方位は磁北を示した。

8　引用参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献については、著者名と西暦年で示した。

9　発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森市教育委員会で保管している。

10　発掘調査及び報告書の作成にあたって次の諸氏、諸機関から御教示、御指導、御協力を得た。
青森県教育庁文化課、青森県埋蔵文化財調査センター、青森県立郷土館、岩手県立博物館、大阪市立大学理学部植物分類学教室、八戸工業大学、地元各町会、青森市三内清掃工場、南木睦彦、植田弥生、赤沼英男、市川金丸、三宅徹也、相馬信吉、上野茂樹、三浦圭介、成田滋彦、畠山　昇、白鳥文雄、岡田康博、木村真明、阿部美杉、長瀬　昇、工藤直樹、木村　高、小笠原雅行、奈良昌毅、羽柴直人、永井　治、豊田宏良、井上雅孝、秦光次郎、安田勝雄、石橋孝宏　（敬称略・順不同）

凡　　例

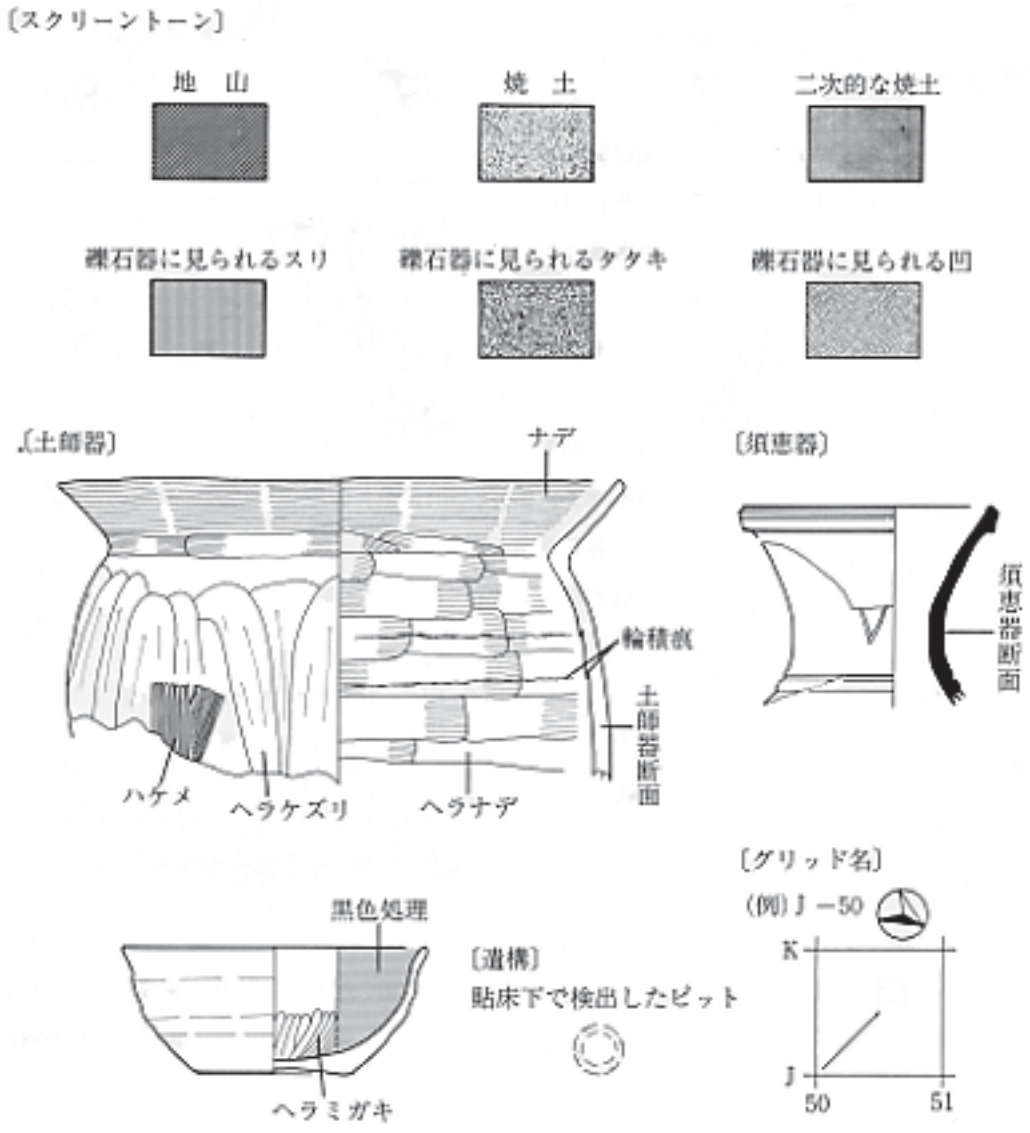
本報告書内で使用する、略称・表現方法・スクリーントーン等は以下のとおりである。

［略称］・「第○号住居跡」→「○住・○H」　・「第○号土壙」→「○土」

・「第○号焼土遺構」→「○焼」　・「第○号溝状遺構」一「○溝」

・「十和田ａ火山灰」一「To－a」　・「白頭山・苫小牧火山灰」一「B－Tm」

・遺構内のピット番号と深さ「第１号ピット深さ30cm」一「P1（－30）」



目　　次

序
例言
目次
第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査要項……2
第Ⅱ章　調査の方法と経過……5
　第1節　調査の方法……5
　第2節　調査の経過……5
第Ⅲ章　遺跡の環境……7
　第1節　遺跡周辺の地形と地質……7
　第2節　調査区域内の基本層序……11
　第3節　歴史的環境と周辺の遺跡……13
第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物……16
　第1節　検出遺構……17
　第2節　出土遺物……54
第Ⅴ章　歴史時代の遺構と遺物……70
　第1節　検出遺構……70
　第2節　出土遺物……122
第Ⅵ章　小三内遺跡低地域の古環境……125
第Ⅶ章　分析と考察……134
　第1節　歴史時代の住居跡について……134
　第2節　放射性炭素年代測定結果報告書……137
第Ⅷ章　まとめ……138
写真図版……143

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第１節　調査に至る経過

青森県警察本部は、青森県自動車運転免許試験場を現在の青森市大字新城字平岡から同市大字三内字丸山の沖館川遊水池へ新築移転し、新たに青森県運転免許センターとして開設することを決定した。

それに伴い、青森市教育委員会へ予定地内の埋蔵文化財の所在有無の確認がなされた。これを受けて確認したところ、同センターに接続させる新設の取付道路予定地が、周知の遺跡である小三内遺跡を通ることが明らかになった。そこで、遺跡の所在について回答するとともに、計画を変更し埋蔵文化財の現状保存が図られるよう要望し、もし変更できない場合には記録保存のため発掘調査が必要である旨を通知した。

その後、県警察本部と市教育委員会との間で保存についての協議を行ったが、結局、計画変更は難しいとの結論に車り、発掘調査による記録保存が図られることとなった。そして、県警察本部から、平成５年２月 16 日付け青警本運管第 66 号「青森県運転免許センター取付道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」において、当市教育委員会に調査の依頼が行なわれた。当委員会で検討の結果、文化財保護と開発事業の円滑な調整を図るために調査依頼を受諾することに至り、平成５年２月 25 日付け青市教委社第 58 号において、県警察本部へ受諾の旨の回答を行った。

その後、県警察本部と市教育委員会との協議の結果、現地での調査期間を平成５年５月 11 日から同年 10 月 29 日までとし調査面積を５，850 ㎡とする予定で調査を実施することに至った。

調査開始に先立ち、平成５年４月６日、委託者側及び関係者を交えた打ち合わせの機会を持った。調査対象の区域内にシラスによる盛土がなされている形跡があるとのことであり、深さ及び範囲を把握するため、試掘を行うことにした。

試掘を行うと、想像以上にシラスやコンクリート片、瓦礫等が深く入り込み、最深箇所では６メートルほどに及ぶところさえあった。ほかの試掘坑もシラスによって直接ローム層が覆われており、このことからある程度の広い範囲にわたり、黒色土を剥ぎ取った後シラスを盛ったことは明らかとなった。範囲確認のため、さらに１か所試掘坑を設定したが、その箇所でも同様にシラスが深く入っており、さらに掘り進めるとその下には、抜根等を多量に含み堅くしまった黒色土とロームブロックの混合層が厚く堆積しており、撹乱層と判断した。　（小林）

第2節　調　査　要　項

1　調　査　目　的

青森県運転免許センター取付道路新設工事に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2　浪跡名及び所在地

小三内遺跡（こさんない）

青森市大字三内字丸山 253 － 13 ほか

3　発掘調査期間

平成 5 年 5 月 11 日から同年 10 月 29 日まで

4　調査対象面積

5，850 ㎡

5　調査委託者

青森県警察本部

6　調査受託者

青森市教育委員会

7　調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課

8　調査協力機関

青森県教育庁文化課

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県青森土木事務所

財団法人青森県スポーツ振興事業団

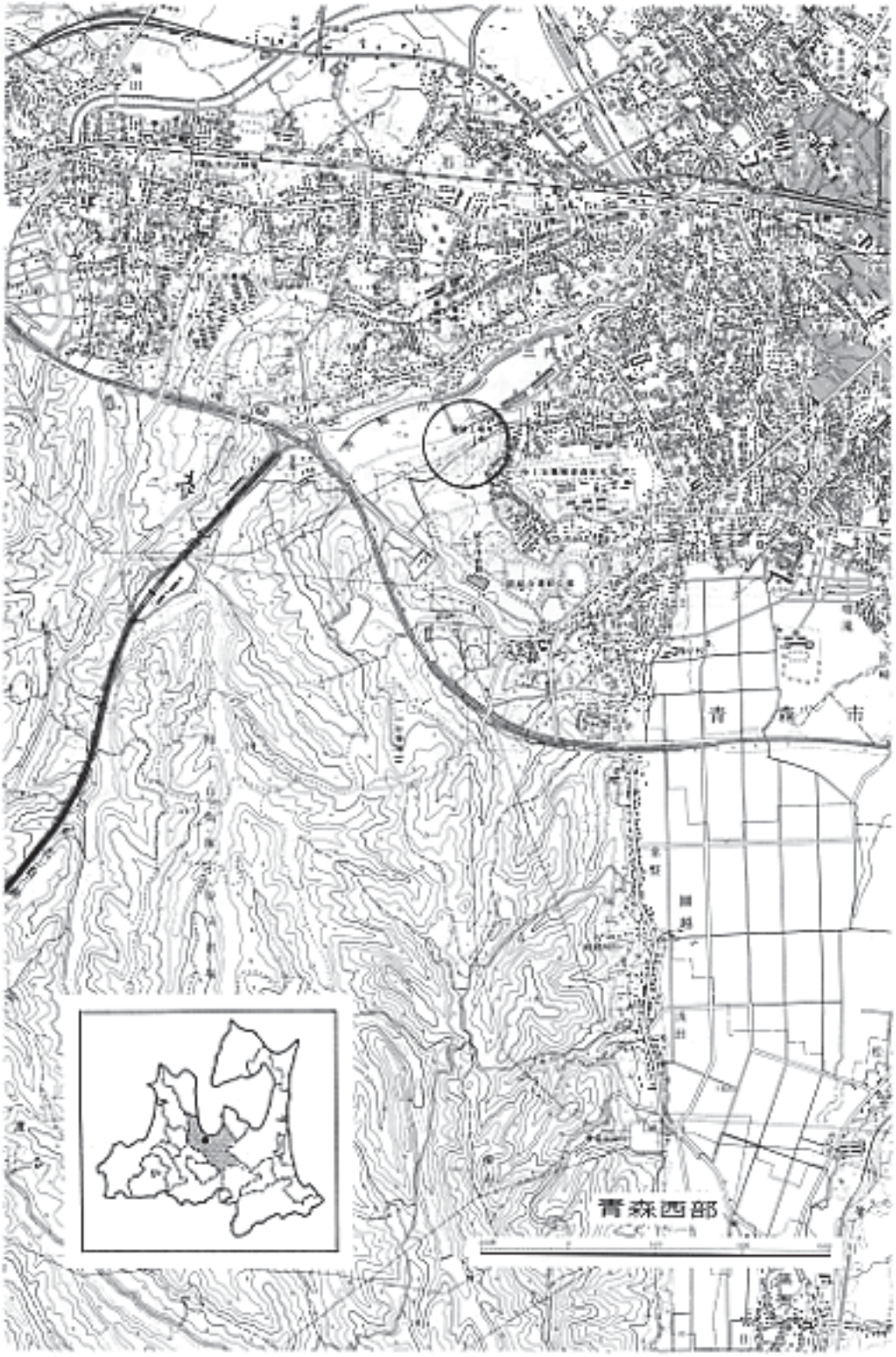
9　調　査　体　制

調査指導員	村　越　　潔	弘前大学教授（考古学）
調　査　員	高　島　成　侑	八戸工業大学教授（建築史）
〃	辻　　誠一郎	大阪市立大学講師（古生態学）
〃	工　藤　一　彌	青森県立黒石高等学校教諭（地質学）
〃	葛　西　　励	青森山田高等学校主事教諭（考古学）
〃	高　橋　　潤	青森山田高等学校教諭（考古学）
調査協力員	佐　藤　俊　勝	三内丸山町会長

調査事務局　青森市教育委員会

教　育　長	花　田　陽　悟
生涯学習部長	阿　部　祐之助
社会教育課長	寺　澤　松三郎
課□長□補□佐	□遠　藤　正　夫
主幹兼埋蔵文化財係長	塩　谷　光　男
指□導□主□事□	長　沼　圭　一
	徳　差　義　男
	小　林　　淳
主　　事	武　田　　均
	田　澤　淳　逸
	上　野　隆　博

調査補助員　金山　晃道、田波加奈子、工藤　文子、矢野　順司



第１図　遺跡位置図

第Ⅱ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

グリッドの設定は、工事用中心杭No．０とNo．２を結ぶ直線を調査区長軸方向の基準線（1ライン）とし、中心杭No．２でこれに直交する線を短軸方向の基準線（50ライン）として、調査区域全体に4m×4mのメッシュを組んだ。グリッド杭の表示は、中心杭No．２（J一50）を基点として、北へ51、52、53…、南へ49、48、47…の順に算用数字を付し、また、東へI、H、G…、西へK、L、M…の順にアルファベットを付した。各グリッドの呼称は、アルファベットと算用数字を組み合わせて示した（凡例）。具体的にはそのグリッドの南東隅のグリッド杭の表示によるものとした。なお、南北方向の基準線は、磁北より西偏およそ30°である。また、測量原点（B．M.）は、当委員会で平成４・５年度三内丸山（2）遺跡発掘調査のため本調査区域の西方約500m地点に設置済みのB．M.（標高14．300m）を基準とし、ここからレベル移動を行い標高14．000mの原点（B．M．1）を設置した。これをもとに、高低差およそ10mの調査区域全域に対処できるようにさらに数箇所設定した。

粗掘りは、土層の堆積状況を観察するために適宜セクションベルトを設定して、グリッド単位で掘り進めた。

遺構の精査は、原則として竪穴住居跡は四分法で、土壌は二分法、溝状遺構は適宜セクションベルトを設けて実施した。実測は、基本的には簡易遣り方測量で行い、必要に応じ平板測量も行った。縮尺は、20分の１を原則とし、微細図に関しては10分の１を採用した。

写真撮影にあたっては、35mmのモノクローム、カラーリバーサルの各フィルムを併用して作業の進展に伴い、必要に応じて行った。

第２節　調査の経過

５月11日、調査区域内の環境整備及び草刈り作業から調査を開始した。グリッド設定にあたっては、道路建設工事用の杭が一直線上にあるため、この延長軸線を基準線とすることとした。

12日、調査区域南側から粗掘りを開始した。同時に北側盛土の除去を重機で開始するが、この作業は21日まで継続した。

南側では、粗掘り開始直後に黄褐色ローム層（地山）が現れ、全体的に黒色の表土が０～20cmと非常に薄い状態が見られた。また、広い部分にわたり、黒色の表土下に撹乱状態の層が堆積し、漸移層を挟まず直接地山を覆っていた。さらに、この撹乱層の上面と地山の上面でキャタピラー

の跡と思われる痕跡が明瞭に識別され、宅地造成の際に、上位層のみならず地山まで重機によって削られて押し動かされたと判断された。旧区画の境界部分が僅かに土手状に残っていたこともあり、この部分からは住居跡とその外周溝と思われる黒色土の落ち込みが確認された。

北側区域でも、盛土の除去作業終了に伴い、人手による作業を開始した。この区域は盛土によって平坦となっていたが、元来は北側に向かい傾斜する地形であることが明らかになった。また、この傾斜地の上部においては、広範囲にわたって黒色土を完全に取り去ったり地山までえぐり取ったりした後にシラスを厚く入れるという状況が見られた。この状況の中でも幸いに下部においてはプライマリーな黒色土を残存する箇所があり、この堆積層をもとに調査区域全体の基本層序として把握した。

6月以降、粗掘り作業と併行して、確認された竪穴住居跡等の精査を開始した。第1号住居跡は、南壁にカマドを有していたが、かつての土取りの際、地形の傾斜に沿って貼床の北側半分ほどが剥ぎ取られていた。この台地傾斜部において竪穴住居跡は、縄文・平安時代あわせて計8軒確認された。

7月から8月にかけては、粗掘り・遺構精査と併行して、調査区域最北部の調査を行った。低地性のため湧水が多いのに加え雨天の影響もあり作業が遅れがちとなった。この区域は、台地から低地へ急激に傾斜する段丘崖状の地形である。近年行われた河川改修関連工事によって旧来の地形は若干失われていたが、褐色ロームによる盛土の下に砂層が3mほどの厚さで自然堆積していた。さらにその下位には湿性の黒色泥層、草本泥炭層、木本泥炭層、細砂層が存在し、それらには、河成堆積物あるいは淀み状態からの堆積物と思われる木類等が含まれていた。これらの成立時代の推定を行うためにも遺物包含の有無を確認したが一切見当たらず、この部分においては人間の直接的な行為で残ったものではないと推定した(最終的に場所の異なる東側張り出し部のごく一部に限って縄文前期の遺物密集地が確認された)。

9月に入り、調査区域内を通る道路部分の調査のため関係機関と連絡をとった。調整に手間取ったこともあり、9月末にようやく道路部分の土を取り始めた。まもなく灰白色火山灰の混入する住居跡が1軒確認され、これを第15号住居跡とした。

10月になり粗掘りもほぼ終了し、残った遺構と低地域の調査に重点を置いた。第13号住居跡は現代に掘られた大きな穴によって北側を撹乱されていたが、概ね規模の把握ができ、さらに多量の炭化材とその出土状況から焼失家屋と推定された。

10月29日、調査の全日程を終了した。　　(小林)

第III章　遺跡の環境

第１節　遺跡周辺の地形と地質

青森県立黒石高等学校教諭　工　藤　一　彌

青森平野は新生代第四紀に形成された海岸平野であり、東西約10km、南北約5kmのほぼ三角形をしている。北は陸奥湾に面し、南～東は八甲田山に連なる火山性の台地、西は標高50～150mの比較的緩傾斜の丘陵に囲まれている。西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大きな断層が存在しており、断層の東側が最大で800mも北に落ち込んだこと
によって、平野が形成されていった。

南側の火山性台地は八甲田カルデラから噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結擬灰岩」からなる台地で、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に没し、試錐データによると市の中心部では海面下500m付近まで達している。

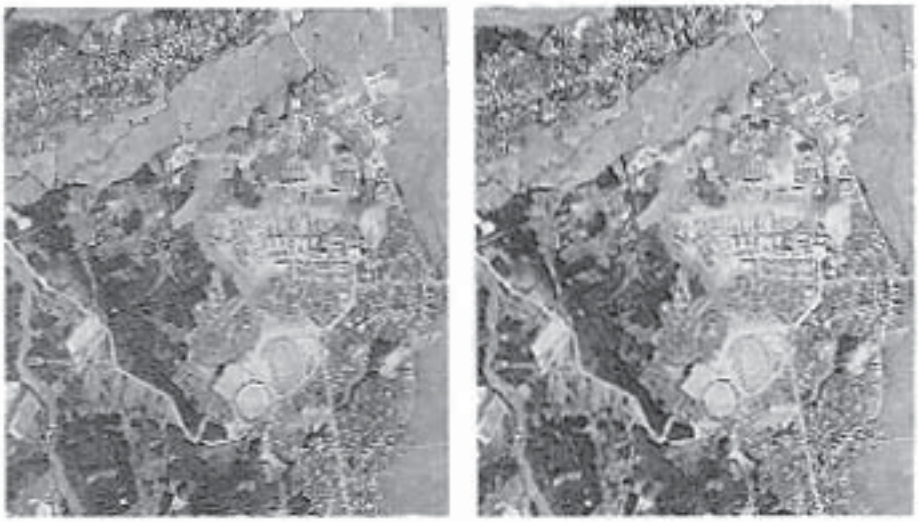
西部の丘陵地は開析が進み、稜線の標高は50～150mで緩やかに北に傾斜している。基盤は更新世の岡町層の礫岩・砂岩・シルト岩や鶴ヶ坂層の浮石質凝灰岩であり、これらの上に八甲田火砕流堆積物が重なり、最上位に火山灰層が堆積している。しかし、村岡・長谷（1990）により鶴ヶ坂層については八甲田火砕流堆積物を二分した内の1期の水底火砕流堆積物とする説も出されている。

本地域の火山灰層は沢田（1975）により３層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

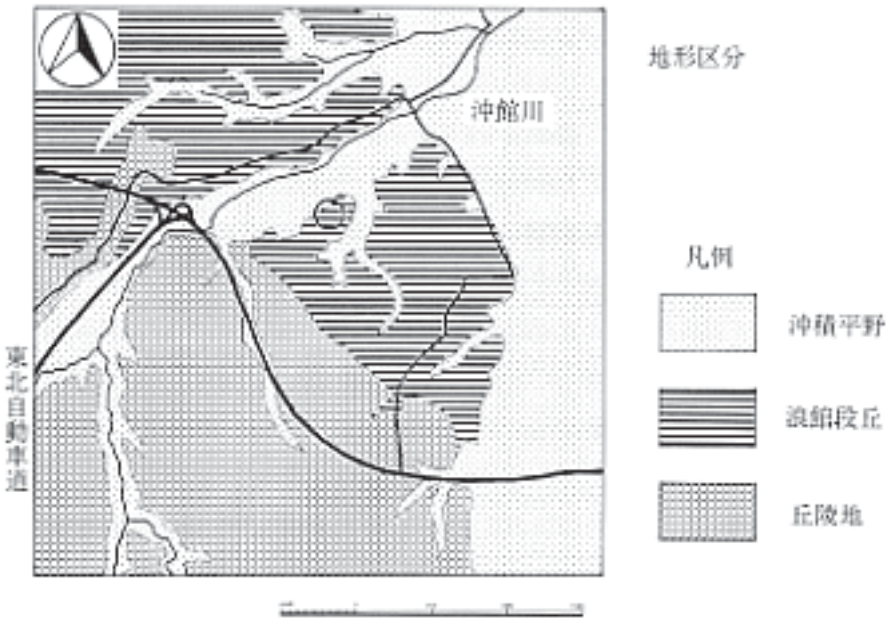
本遺跡は青森市西部の丘陵地の北東縁に位置し、第四紀更新世に形成された段丘面上に存在する。青森平野の西部の浪館～三内にかけて比較的開析の進んだ標高10～30mの平坦面が分布しており、氷河時代の海水準変動によって形成されたもので、浪館段丘と呼ばれており、標高によって2～3面に細分される。このような段丘は青森平野の西部に局部的に見られ、沖館川をはさみ、北の三内～石江地区と南側の浪館地区に分布する。沖館川の沖積平野は250～300mの幅があり、北東方向へ約1kmで青森平野へと続く。本遺跡は沖館川の南側の段丘面上に位置し、沖館川とその支流（現在は宅地化）にはさまれた平頂丘陵面の頂部に位置している。本遺跡では基盤の岡町層の青灰色擬灰質細粒砂岩の上に粘土質の風化帯をはさみ、月見野火山灰と

考えられる赤褐色火山灰と黄褐色火山灰が重なっており、黒色土は10～20cmと薄い。火山灰と黒色土はその境界も複雑で、厚さも場所によって著しく異なり、人工的に何度も改変されている。

なお、本地域は宅地化が著しいので、地形区分では1948年・1969年・1991年撮影の航空写真を使用し、原地形での区分を行った。

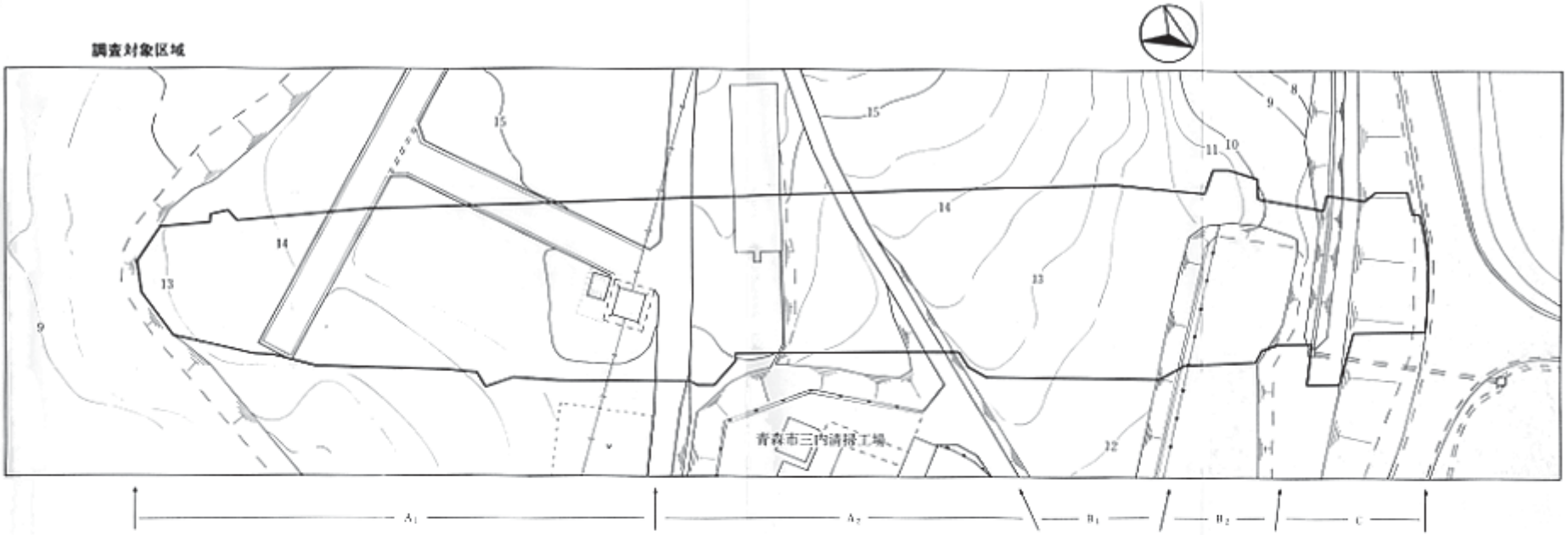


国土地理院撮影　1969年　空中写真

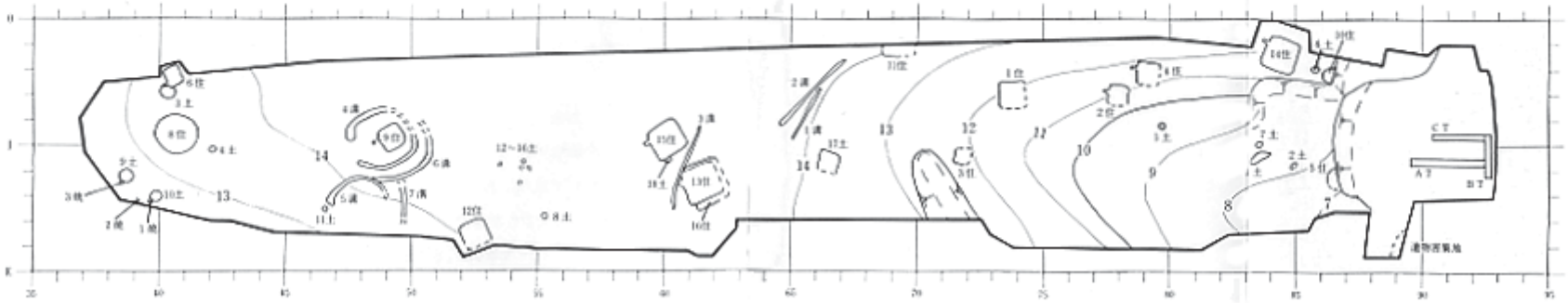


第2図　遺跡周辺の地形

調査対象区域



グリッド・遺構配置図



0 20 40m

第３図　調査対象区域、グリッド遺構配置図

第２節　調査区域内の基本層序

調査区域の基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層　表土、耕作土。

第Ⅱ層　黒褐色土（10YR3/1）シルト質。土師器・須恵器僅かに含む。

第Ⅲ層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質。上位に土師器。場所によって上面にＢ－Tm火山灰。

第Ⅳ層　黒褐色土（10YR2/1）シルト質。縄文中期の土器を含む（僅かに後・晩期）。

第Ⅴ層　褐色土□□（10YR4/6）漸移層。

第Ⅵ層　ローム層。地山。

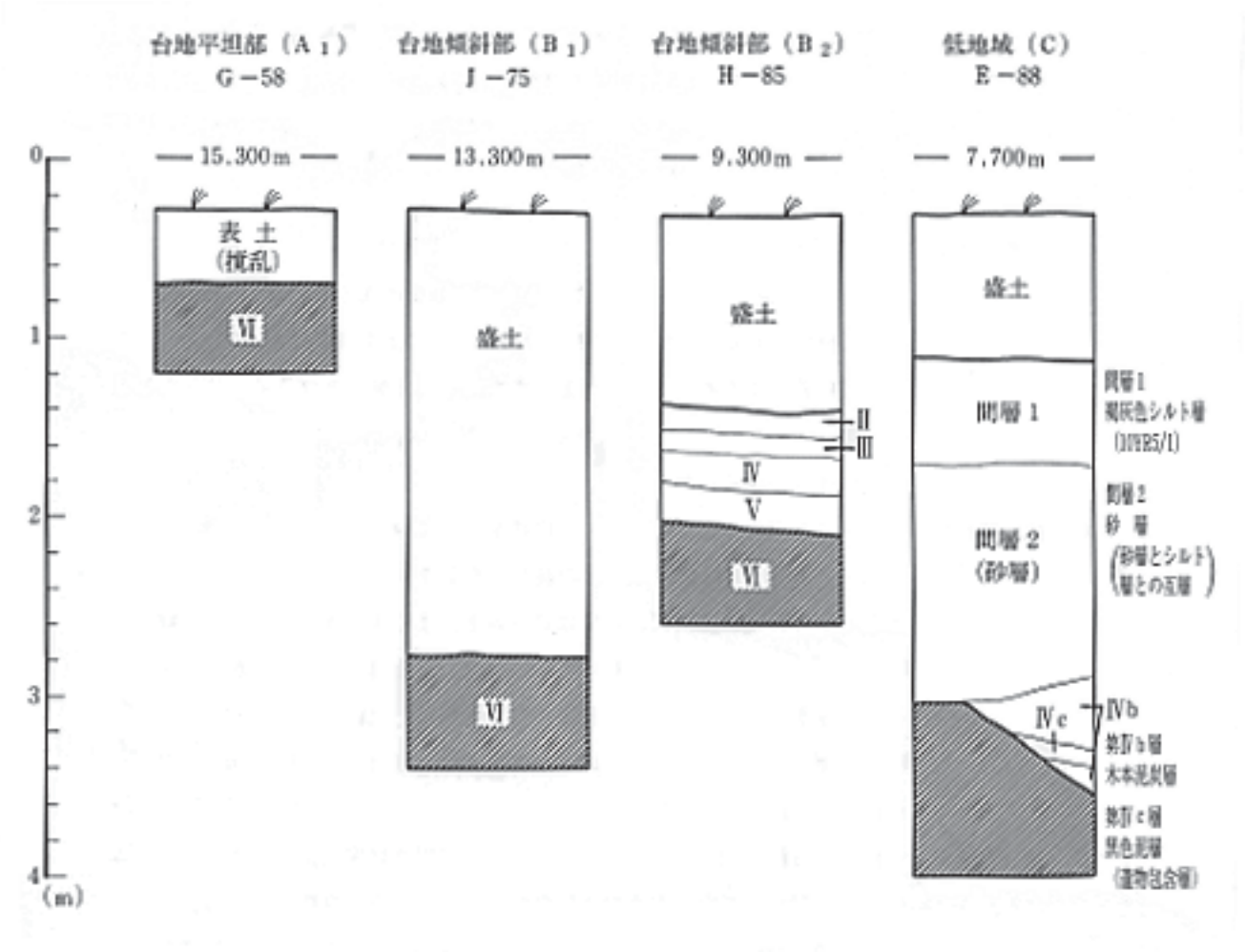
また、調査区域の撹乱・地形等を踏まえ便宜上次のように区分した（第３・４図）。

A. 台地平坦部　人の手がかなり入っており、宅地造成による撹乱層が広く見られる区域（A_1）と、現代のゴミを埋めた大きな穴が数箇所掘られた区域（A_2）とに大きく分けられる。A_1では、プライマリーな層の上を撹乱層が覆っているが、舌状に傾斜するため、ローム層上位まで削られる箇所とプライマリーな第㈹層以下を残している箇所とがある。A_2では、ゴミ穴の中にコンクリート破片や瓦礫等が埋められていた。

B. 台地傾斜部　シラスを支える土留によって、段状を呈していた。この傾斜地の上部（土留以南、B_1）では全域に廃材の混じったシラスを盛っている。盛土以前に土取りが行われ、箇所によってはローム上位まで削られ直接シラスにロームが覆われている。下部（土留以北、B_2）では、土留のやや南側から続くロームブロックを多量に含んだ黒色土が堅く盛られ、上部から寄せて固められた可能性がある。幸い、第Ⅱ層以下がプライマリーな状態で残っており、この一帯をもとに基本層序を設定した。

C. 低　地　域　□台地から段丘崖を下った北側にあたる。河川改修関連工事によってロームの盛土が行われているがその下に自然堆積層がある。自然堆積層は、上部と下部との二つに大きく分けられる。上部は厚い砂層（斜交層理が発達し、樹木・浮石礫も含む）であり、下部は木本泥炭層が主体でこの中に草本泥炭層、黒色泥層、レンズ状の薄い砂層等が挟在する。東側張出部で木本泥炭層に挟まれた黒色泥層（粗砂多量）から縄文前期の遺物包含層を確認した。また、ローム層（段丘崖）を直接覆う砂層の最下位からローム層に密着して縄文中期の土器片（接合個体）が出土した箇所がある。なお、砂層全体としては縄文前・中・後・晩期それぞれの土器片が部分的に上下関係にそぐわない堆積をして

いたが、砂層自体が侵食と堆積を繰り返した構造を呈していたため、河川の影響と判断した。低地域においては河川と湧水の影響によりA・B区域にはない層が存在するが、できるだけ台地に対応するようにした。　　（小林）



第4図　調査区域内の層序

第3節　歴史的環境と周辺の遺跡

青森市内において確認されている遺跡は、205か所を数える（平成5年4月現在）。そのなかでも、三内地区は遺跡の密集地であり、数度にわたる調査が実施されている。

この三内地区から土器が出土することは早くから知られており、江戸時代中頃の「永禄日記」(1778) の記録にまで遡ることができる。また、寛政年間の菅江真澄の記録にも円筒上層式土器が図化され登場している。このようなこともあり、近年までは三内地区から掘り出された遺物が多くの好事家の手に渡っていったと思われる。

このように知られていた三内地区において最初に調査が行われたのが、小三内遺跡である。昭和28年から33年にかけて4度にわたって、慶應義塾大学清水潤三氏と成田彦栄氏とによる合同調査が行われ、円筒上層式土器の包含層と円筒下層式期の「竪穴」の検出等が報告されている。この時点では、「小三内遺跡」の名称は用いられておらず「三内遺跡」とされていた。また、他の報告者によって「稲荷林」や「押し流れ」等の名称を用いられることもあった。このようななか、小三内遺跡以外にも同じ段丘上（台地上）の異なる場所から遺物の出土する地点が確認され、それらの名称を分ける必要が生じたと思われる。三内地区の集落が「大三内」と「小三内」とに呼び分けていたことから「小三内遺跡」と名称変更されて今日に至っている。

周辺の遺跡としては、同じ台地上に三内丸山（1）・(2）遺跡が隣接している。これらの遺跡も過去において数回調査されているが、平成4年度からは青森県教育委員会と青森市教育委員会との両者によって大規模な調査が行われている。特に、県教育委員会が行った縄文前期遺物包含層の調査では、従来の定説をくつがえすような成果を挙げ広く知られてるところとなっている。

台地から範囲を広げると、沖館川の対岸に三内沢部（1）・(2）遺跡があり、上流側に三内遺跡、さらに上流に上ると熊沢遺跡がある。この中で円筒下層式土器に着目すると、三内沢部（1）遺跡と熊沢遺跡からはともに円筒下層b式の土器包含層が確認されており、この時期における沖館川流域での分布とその関連性に注目される。一方、下流側においてこの時期に相当する遺跡は、現在のところ確認されていない。未確認ということもあるとは思うが、この時期において行動範囲を制限する要因が存在していたと言えるであろう。

土師器・須恵器が出土する遺跡も、三内遺跡、近野遺跡、細越遺跡、細越館遺跡、朝日山遺跡等数多く分布している。細越館遺跡から南小泉Ⅱ式に比定される土師器が出土しているが、調査の行われた他の遺跡では、平安期の9世紀後半～10世紀に位置づけられるものが主体である。

（小林）

第５図　周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　　代	備　　考	遺跡番号
1	三内霊園	三内字平山	散布地	縄（前・中）	三内霊園遺跡調査概報	18
2	石江	石江字平山	散布地	縄（前）		56
3	江渡	石江字江渡	散布地	縄（前）		163
4	三内沢部（1）	三内字沢部	集落跡	縄（早・前・中・後）・平安	三内沢部遺跡発掘調査報告書　41集	64
5	三内沢部（2）	三内字沢部	散布地	縄（中）		162
6	三内	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後）・平安	三内遺跡埋蔵文化財調査報告書　37集	19
7	三内丸山（1）	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後）・平安		20
8	三内丸山（2）	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後・晩）・平安	近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）、三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書　33集	21
9	小三内	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後・晩）・平安	日本考古学年報8	17
10	浪館（1）	三内字丸山	散布地	縄（前）		11
11	近野	安田字近野 三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後・晩）・平安	近野遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ	65
12	浪館（2）	浪館字平岡	散布地	縄（中・晩）		12
13	熊沢	岩渡字熊沢	集落跡	縄（早・前・中・後）	熊沢遺跡発掘調査報告書38集	55
14	安田（1）	安田字近野	散布地	縄（前）		15
15	安田（2）	安田字近野・ 細越字栄山	散布地	縄（前・中）		16
16	安田水天宮	安田字近野	散布地	縄（前・中・後）		14
17	細越館	細越字栄山	城　館	平安	青森県の中世城館	66
18	細越	細越字種元	集落跡	縄（晩）・平安	細越遺跡発掘調査報告書49集	13
19	朝日山（2）	高田字朝日山	集落跡	縄・平安		197
20	朝日山（3）	高田字朝日山	集落跡	縄・平安		198
21	朝日山（1）	高田字朝日山	集落跡	縄・平安・中世	朝日山遺跡発掘調査報告書87集	165
22	高田城	高田字日野	城　館	中世	青森県の中世城館	170
23	高田蝦夷館	高田字朝日山	城　館	中世	青森県の中世城館	171

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物

本章での縄文時代の遺構と遺物について記述する前に、ここで遺物のあらましについて簡単に触れておく。

出土した縄文時代の遺物は、ダンボール箱にして20箱である。このうち、土器は16箱、石器他は4箱である。土器は、低地遺物密集地の第Ⅳc層から7箱と間層（砂層）から1箱、台地上においては遺構内から5箱と遺構外から3箱である。前章までに述べてきたが、本調査区域では土木工事が行われており、そのためか遺構外からの出土は少ない。

今回の調査で出土した縄文時代の土器で量的に最も多いものは前期後半の土器群であるが、前述の低地第Ⅳc層がその包含層にあたる。しかし、この土器群は台地上から1片も出土しておらず、この時期の遺構も検出されなかった。

台地上では、中期から晩期にかけての土器が見られたが、遺構からは主に中期末から後期初頭に比定される土器群が出土している。このことから、縄文時代に本調査区域内における台地上に遺構が構築された時期は特定される。また、後期及び晩期に比定される土器は、ごく少量の出土であり、遺構外と低地における間層（砂層）から出土している。

間層から出土した土器については、上下関係にそぐわない出土が一部見られ、砂層自体の成立過程を考慮すると表採扱いとしてもかまわないと思われるものも含まれていたが、投棄されたと思われるものもあり、グリッド名は記している。

［縄文時代の出土土器分類基準］

Ⅰ群　縄文時代前期の土器

Ⅱ群　縄文時代中期前葉～後葉の土器

Ⅲ群　縄文時代中期末葉～後期初頭の土器

Ⅳ群　縄文時代後期前半の土器

Ⅴ群　縄文時代晩期の土器

以上、出土土器の簡単な分類であるが、Ⅰ群の土器については低地域遺物密集地のみの出土であり、本章第1節中の「4　低地域の調査」で扱うこととした。

また、第Ⅱ群～第Ⅴ群土器についての詳述は、遺構内出土と遺構外出土の両者を一括して、本章中「第2節　出土遺物」で扱うこととした。石器及び石製品も少量ながら出土しているが、これらついての詳述も土器と同様に「第2節　出土遺物」で扱うこととした。

第１節　検出遺構

1　竪穴住居跡

第５号住居跡（第６・７図）

[位　　置]　H・I－86、第Ⅵ層で確認した。

[重　　複]　西壁が風倒木痕により切られている。

[平面形・規模]　西側の風倒木痕及び北側の削平のため平面形・規模ともに不明であるが、炉の位置・形態と現存する壁の形状から長円形を有していたものと推測される。

[　壁　]壁面は、堅緻ではない。現存部の壁高は、35cmである。

[　床　]第Ⅵ層をそのまま使用している。凹凸があり、床としての踏み締めは強く見られない。

[壁　　溝]　なし。

[柱　　穴]　竪穴内に小さく浅いピットが存在するが、主柱穴としては規模が小さい。

[　炉　]土器片囲炉が検出された。焼土は、炉第２層が燃焼により変化したもので、ある期間連続して使用されている。構築方法としては、炉の概形を掘り込み、さらにその内側に土器片を立たせるため幅2cm・探さ2cmほどの連続する小溝状の落ち込みを巡らせたようである。同様の事例を踏まえると、隅丸長方形であった可能性がある。現存部で使用された土器は1個体のみだが復元にまで至らなかった。

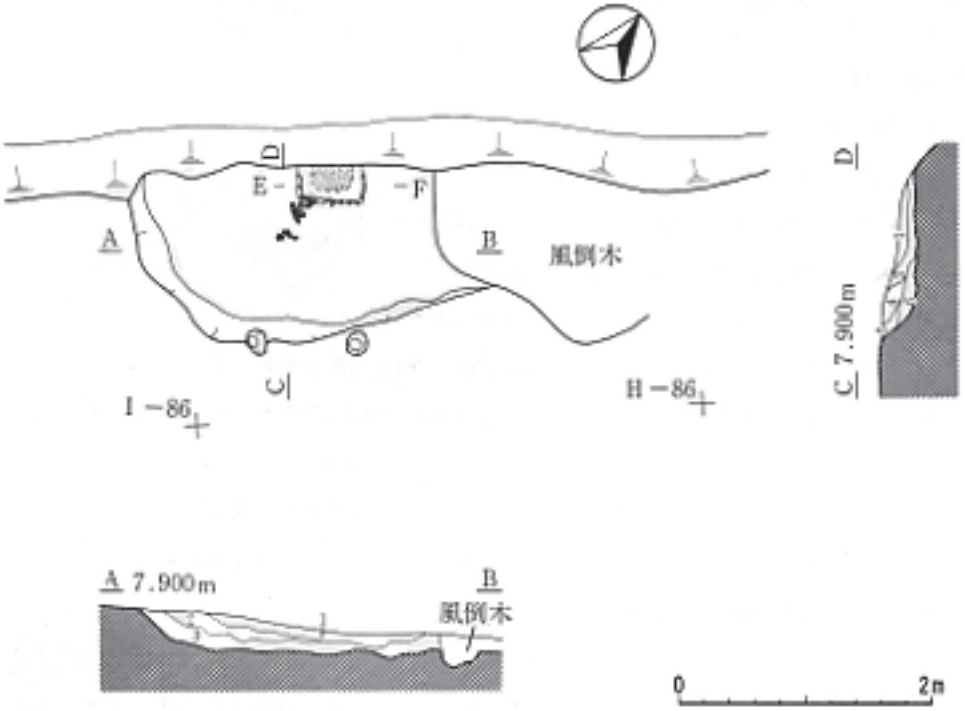
[堆　積　土]３層に分けられる。

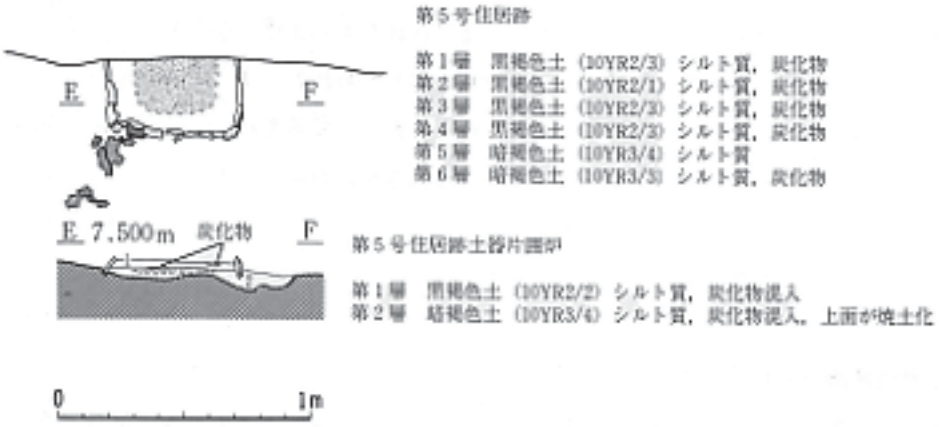
[その他の付属施設]　なし。

[出　土　遺　物]（第７図）　土器片囲炉に使用された１～３は、全体のプロポーションが不明なものの深鉢形を呈する粗製土器と思われる。胴部には斜行縄文が施されているが、原体の撚りが緩いためか、異条縄文あるいは付加縄文とも思われる部分が見られる。また、覆土中ではあるが床面近くから最花式土器が出土している（4）。この２つの個体が伴うものか不明であるが、前者も焼成・器厚等から中期末葉の土器と思われる。

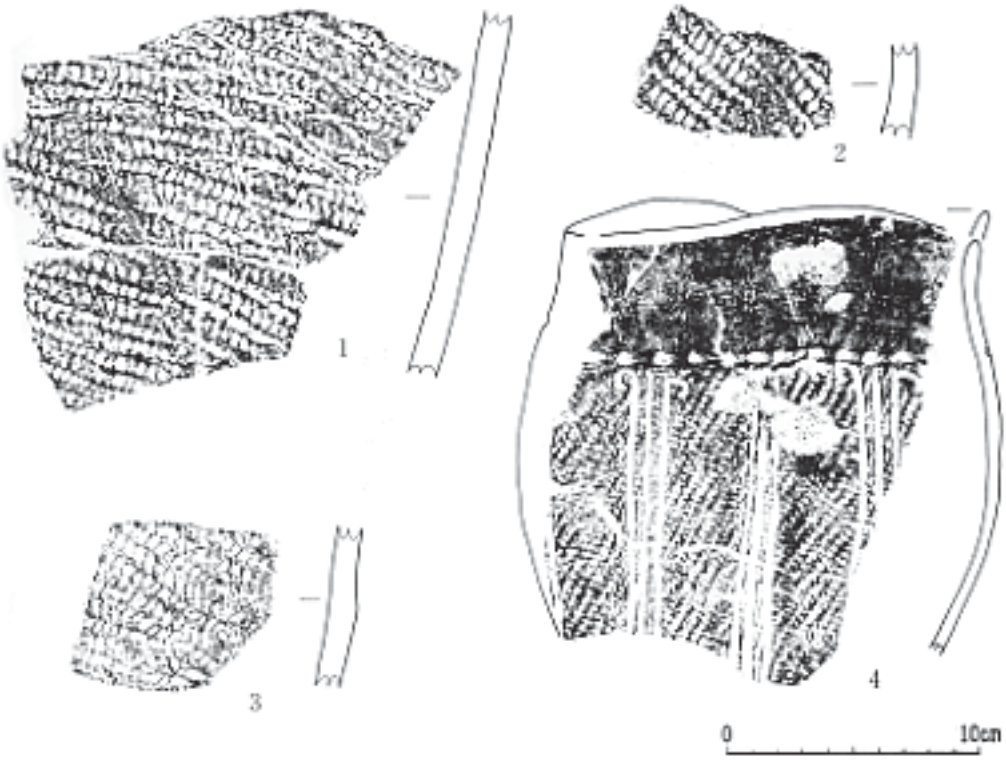
第８号住居跡（第８～15図）

[位　　置]　I・J－39・40・41、K－40・41、撹乱層直下、第Ⅵ層で確認した。この一帯は、宅地造成のために上位層が撹乱状態にある。撹乱層直下に第Ⅵ層及び遺構堆積土があるため第Ⅵ層上位までも削られた可能性があり、遺構の掘り込み層は消滅し不明である。





第6図　第5号住居跡・土器片囲炉



番　号	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
7-1	炉	深鉢　胴部	異条縄文？		Ⅲ	39
2	炉	深鉢　胴部	異条縄文？		Ⅲ	48
3	炉	探鉢　胴部	異条縄文？		Ⅲ	42
4	3・6・炉	深鉢　口頸	口頸部無文，列点文，ワラビ状懸垂文		$Ⅲ_2$	181

第７図　第号住居跡出土遺物

[重　　複]　なし。

[平面形・規模]　長軸７．5m、短軸６．5mの楕円形を呈する比較的大きな竪穴である。

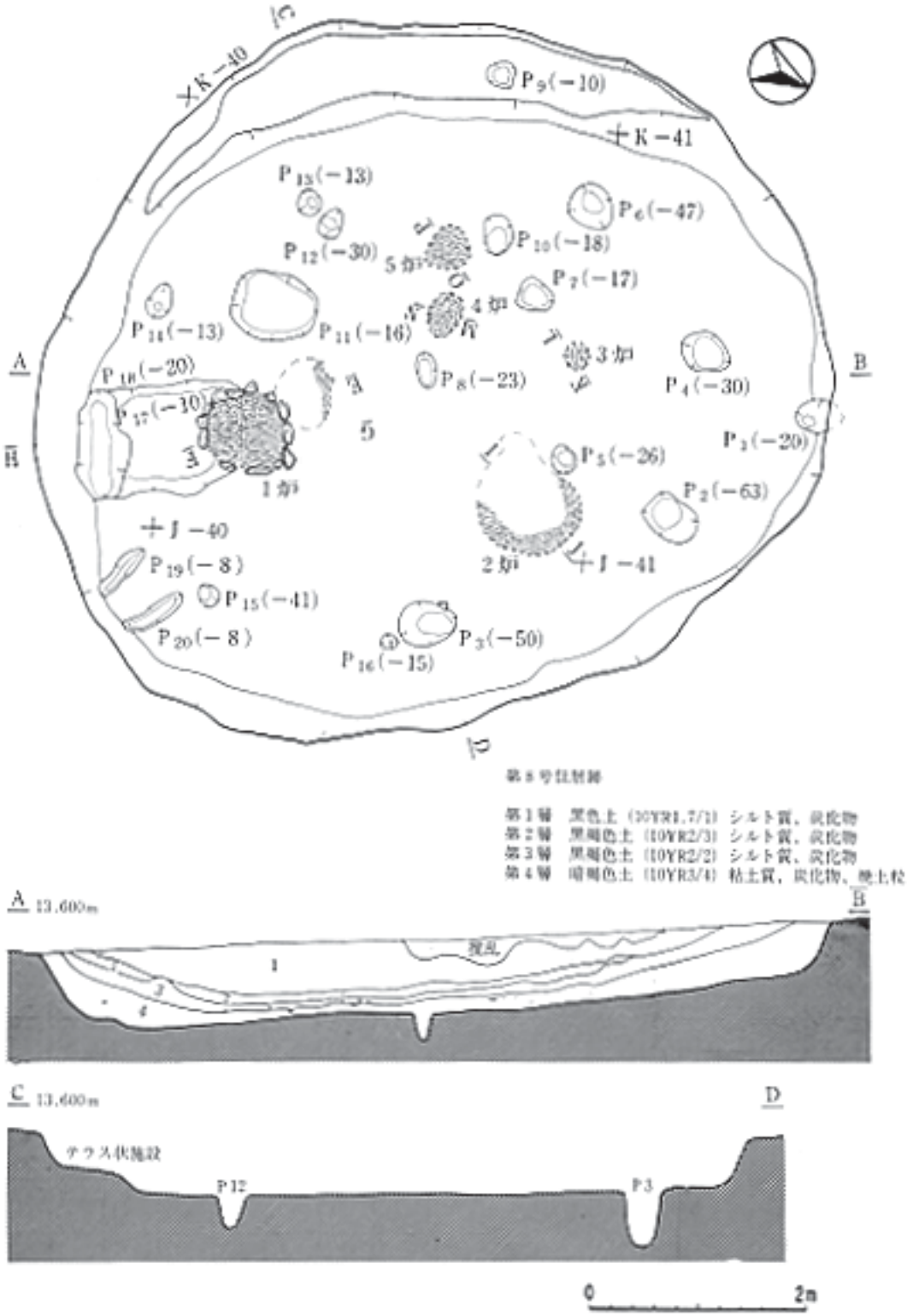
[　　壁　　]壁面は、堅緻である。壁高は、長軸南側で最も高く60cmである。

[　　床　　]基本的に第Ⅵ層を床とするが、第３～５号炉の付近のみ粘土質の貼床としている。床面全体は堅緻で凹凸は特に見られない。長軸線上南側に向かって傾斜して行き、南壁下が最も低位になる。

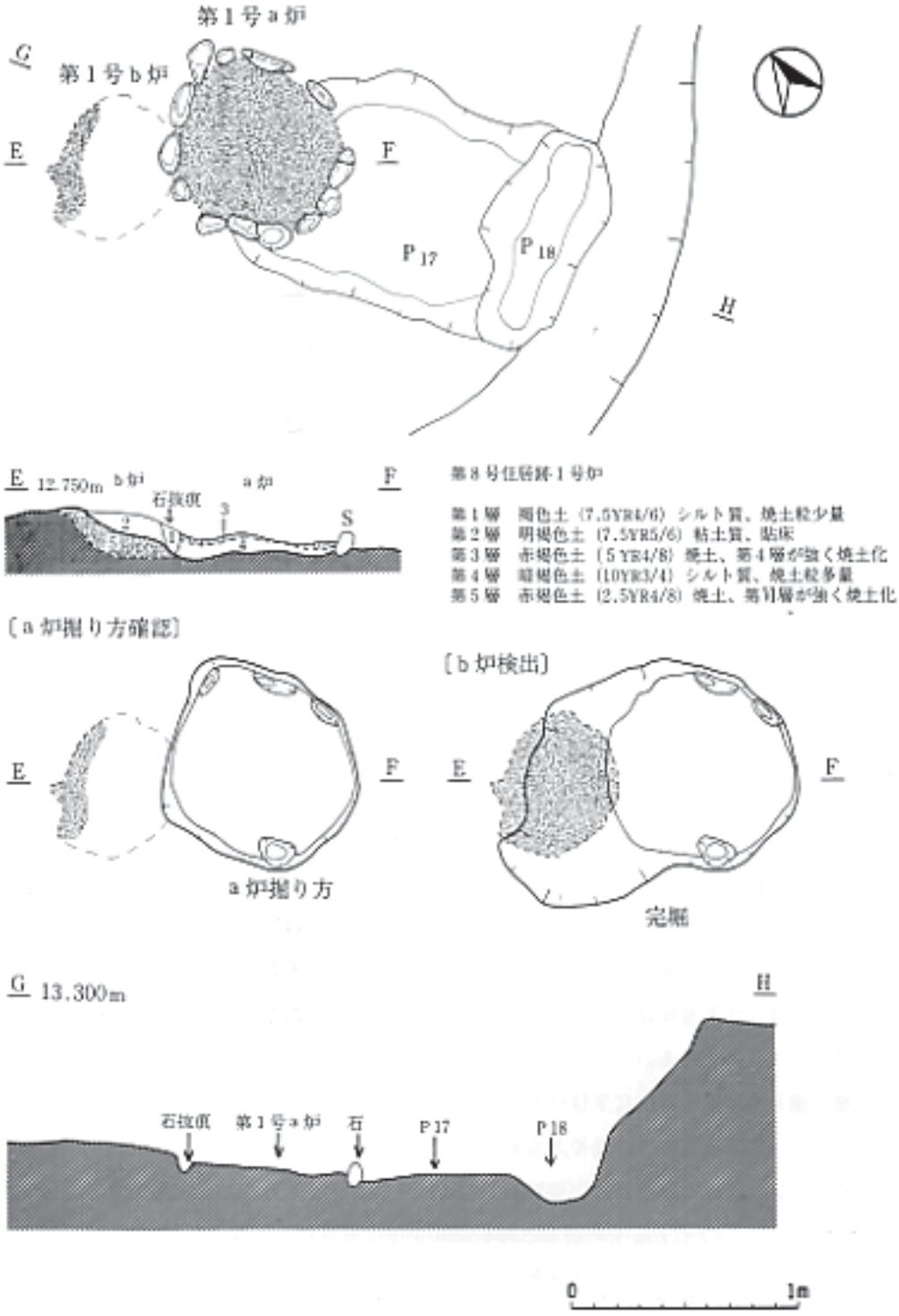
[壁　　溝]　なし。

[柱　　穴]　床面から検出したピット中、柱穴状ビットは合計14基であるが、主柱穴と思われるものは、P2・P3・P4・P6・P12・P14・P15の計７基である。

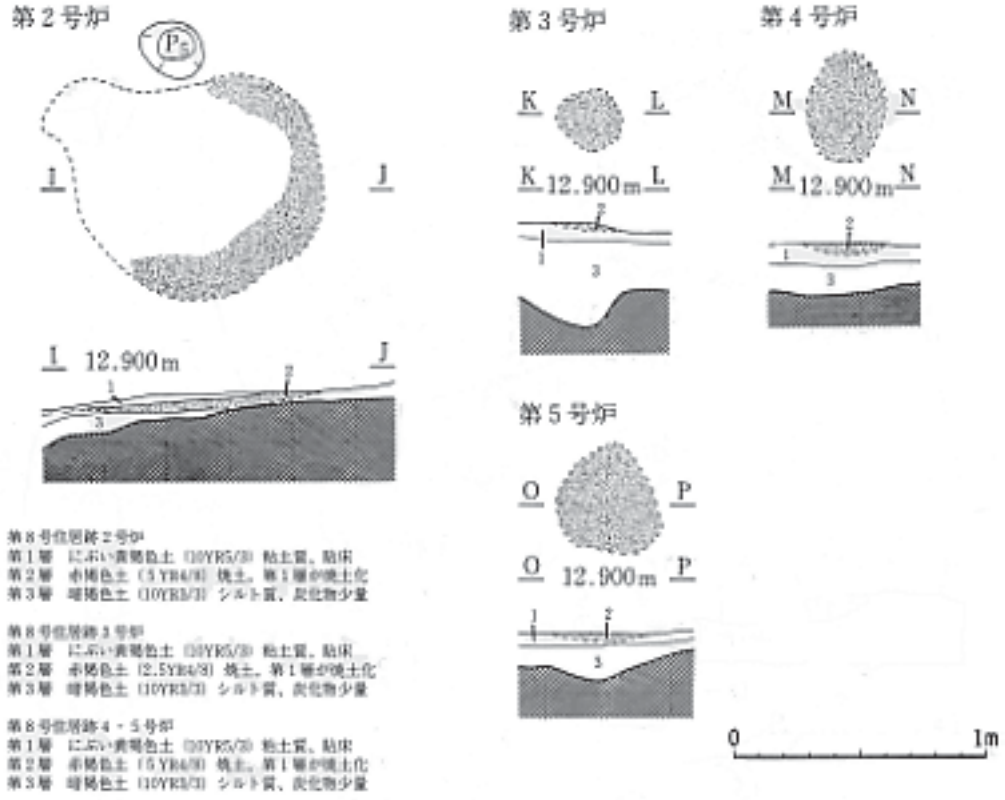
[　　炉　　]合計６基の炉を検出した。この中で、第１号ａ炉は、長軸線上南壁寄りに位置し、礫を巡らせた直径90cmの円形の石囲炉である。火床面は堅く焼けている。残存する石と抜き取り痕から、石は全周していたと判断した。また、この北側下部にもう一枚の焼土が存在し、第１号ａ炉は貼り床と同質の土を盛って新た


K −40
P9(−10)
K −41
P13(−13)
P6(−47)
P12(−30)
5 炉
P10(−18)
P7(−17)
4 炉
P14(−13)
P11(−16)
3 炉
A
B
P18(−20)
P8(−23)
P4(−30)
P17(−10)
5
P3(−20)
H
P5(−26)
1 炉
P2(−63)
J −40
2 炉
J −41
P19(−8)
P15(−41)
P20(−8)
P1(−50)
P16(−15)
第8号住居跡
第1層　黒色土（10YR1.7/1）シルト質、炭化物
第2層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質、炭化物
第3層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質、炭化物
第4層　暗褐色土（10YR3/4）粘土質、炭化物、焼土粒
A 13.600m
B
撹乱
1
3
4
C 13.600m
D
テラス状施設
P12
P3
0
2m

第8図　第8号住居跡



第9図　第8号住居跡第1号a・b炉

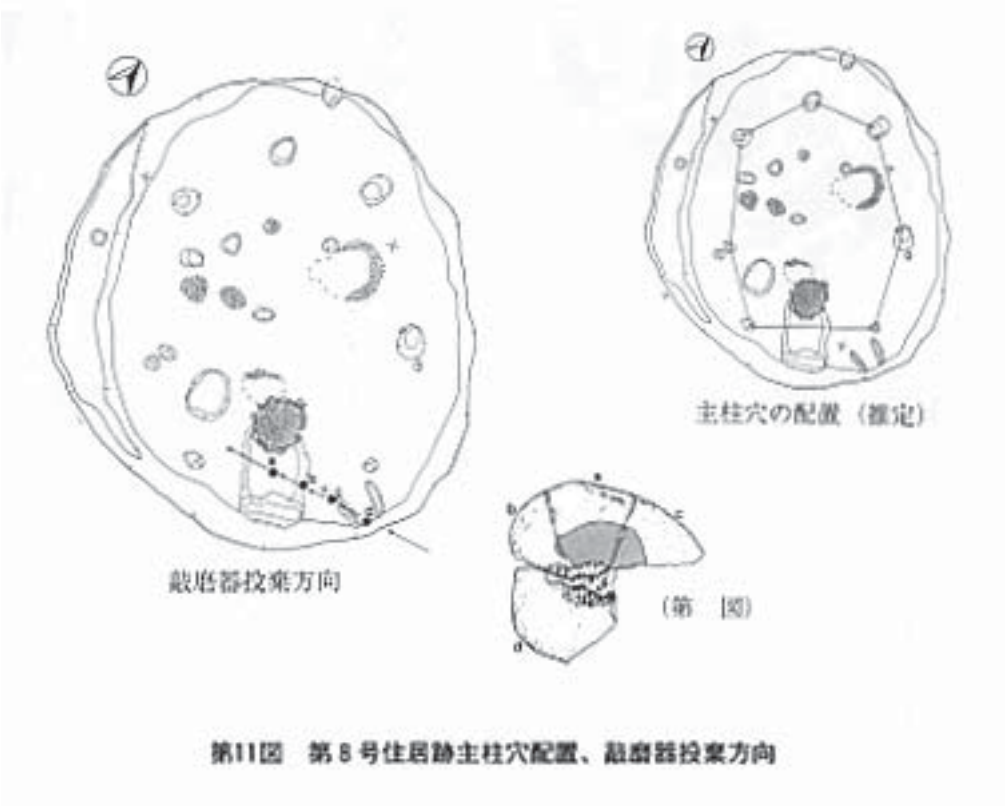


第10図　第８号住居跡第２・３・４・５号炉

に造られたものであることを確認した。下位焼土（第１号ｂ炉）は一部弧状に床面に現れていたが、検出した全体の形状は南壁方向へ傾斜する不整形を呈している。検出した面が火床面そのままのものであるか削られたものかは不明だが、第Ⅵ層が堅く焼けた地床炉であることは断定できる。第２号炉も床面検出時に焼土が弧状に現れたが、貼床によって覆われたものである。また、第３～５号炉は、貼床が短期間の燃焼で焼土化したと思われる比較的小規模な地床炉である。

[堆　　積　　土] 全体的に下位ほど粘性が強く、炭化物も上位に比べ多く混入している。堆積下位層、少なくとも第4層は、土質と遺物から人為的に埋められていると推測した。敲磨器（第15図17）は第４層と床面から出土した接合個体であるが、その出土地点を辿るとある位置から投棄されたと考えられ（第11図）、それと同時に覆土４層を堆積させる行為を行ったと推測できる。

[その他の付属施設]　遺構内西側にテラス状の段を検出した。当初、遺構の重複または改築によるものと考えられたがその形跡は見られず、本遺構に伴う施設と判断した。形状は、壁面からの幅60cm、床面からの高さ40cm、長さ6mの弧状を呈する。貼



第11図　第８号住居跡主柱穴配置、敲磨器投棄方向

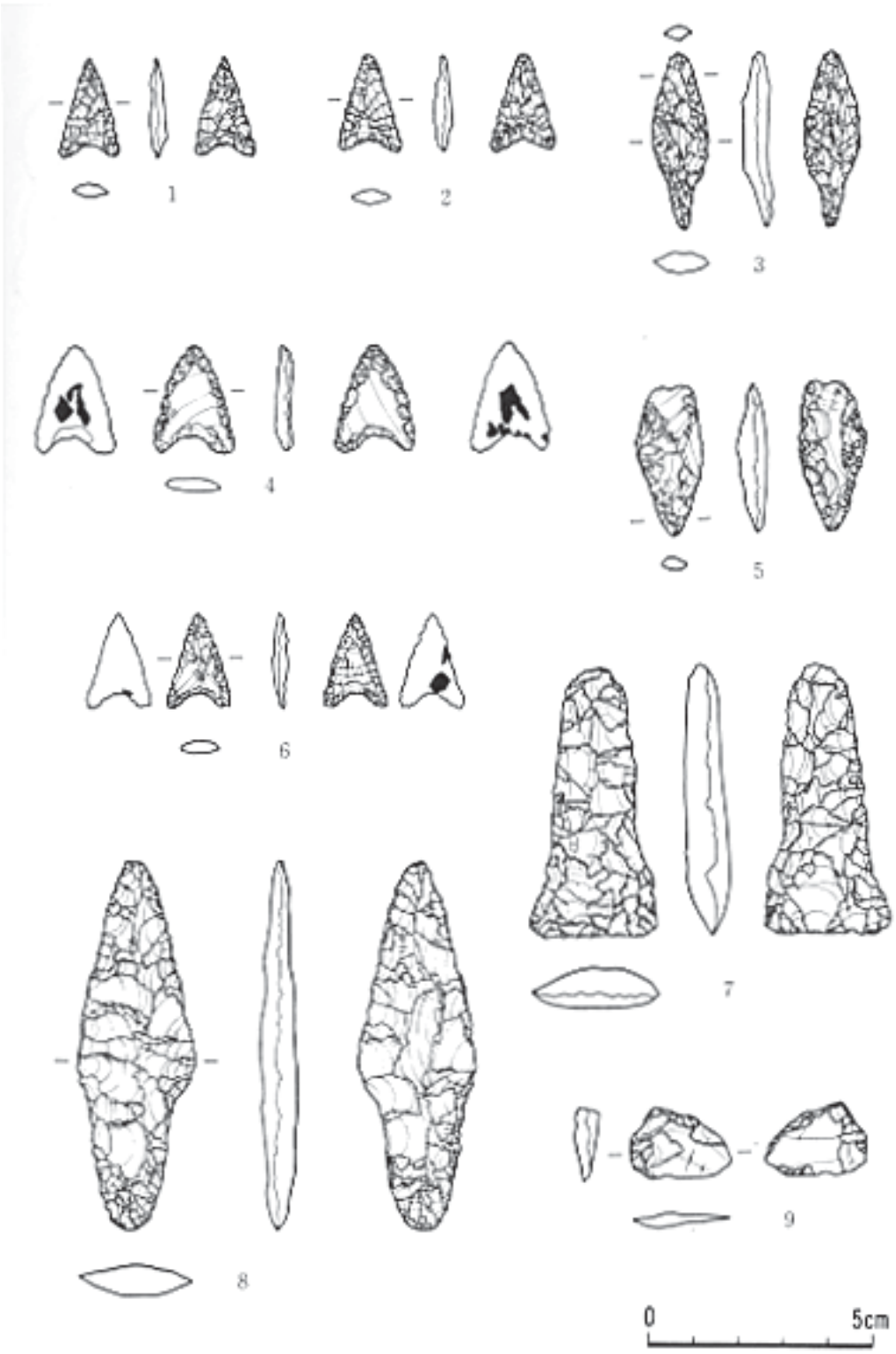
床と類似する粘土質だが、第Ⅵ層の掘り残しによるものである。

また、南東壁の直下から中央方向に２本対峙して細くくぼんだ１組のピットを検出した。長さ60cm、幅15cm、探さ8cmの短い溝状を呈している。壁直下ということもあり、入口に伴う施設の痕跡の可能性があるが、人為的に掘り下げられたものか、何らかの行為でくぼんだものかは不明である。

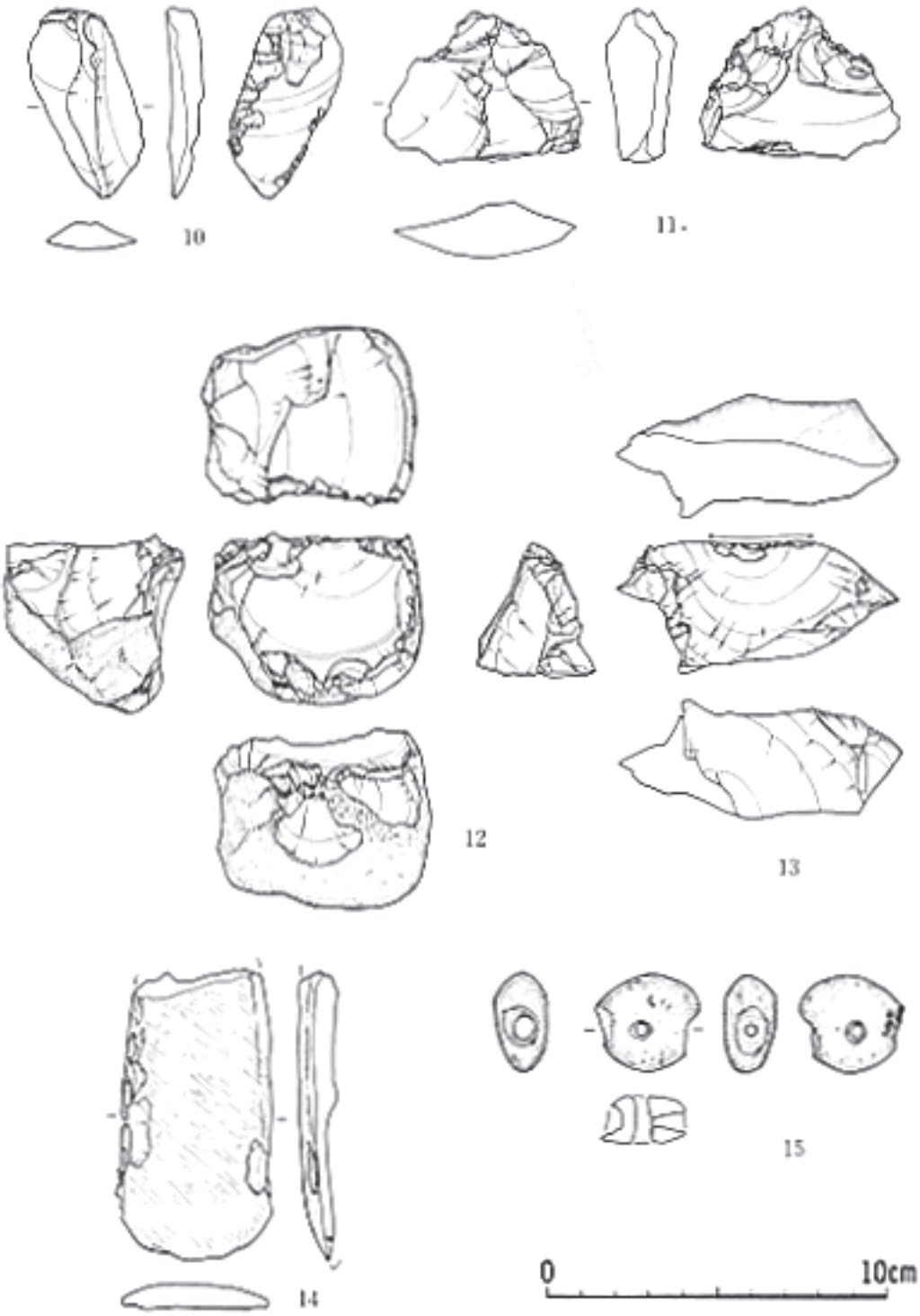
[出　土 遺　物]（第12～15図）床面からの出土は粗製土器の破片のみである。大木10式併行期の土器に伴う可能性があるが、復元できたものはない。また、覆土４層中から、余市式土器群と思われる破片が出土している（1・9・10）。その他の土器としては同じく覆土中ではあるが、数条の懸垂文を有する２～４と磨り消しの区画を有する７・８とが見られ、大木10式併行期の土器と思われる。懸垂文の２～４は最花式の可能性もある。土器以外では、石鏃、石匙、篦状石器、不定形石器、敲磨器、石核、有孔石製品等が覆土中から出土している。また、18は青竜刀形石器の柄部と思われるが、４層からの出土であり本住居が廃棄された際の混入と推測される。本住居の営まれた時期、また、廃棄された時期の決定には判断材料が乏しいが、床面から出土した粗製土器および覆土中の土器群、炉の最終形態を踏まえると大木10式併行期と思われる。

番　号	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
12－1	4	深鉢　口頸部	LR単節，バンド状貼付（刺突）		$Ⅲ_4$	179
2	3・4	深鉢　胴部	二条懸垂文　地文縄文　RL単節		$Ⅲ_2$～$Ⅲ_3$	133
3	4	深鉢　胴部	四条懸垂文　単節		$Ⅲ_2$	134
4	4	深鉢　胴部	沈線		$Ⅲ_2$～$Ⅲ_3$	136
5	1	深鉢　口縁	縄文			140
6	4	深鉢　口縁	沈線		$Ⅲ_3$	135
7	4	深鉢　口縁	口唇部肥大，磨消縄文		$Ⅲ_3$	141
8	3・4	深鉢　胴部	磨消縄文　RL単節		$Ⅲ_3$	131
9	床直	深鉢　口縁	波状突起　バンド状貼付（連続刺突）		$Ⅲ_4$	125
10	4	深鉢　口縁	波状突起　バンド状貼付（連続刺突）		$Ⅲ_4$	126

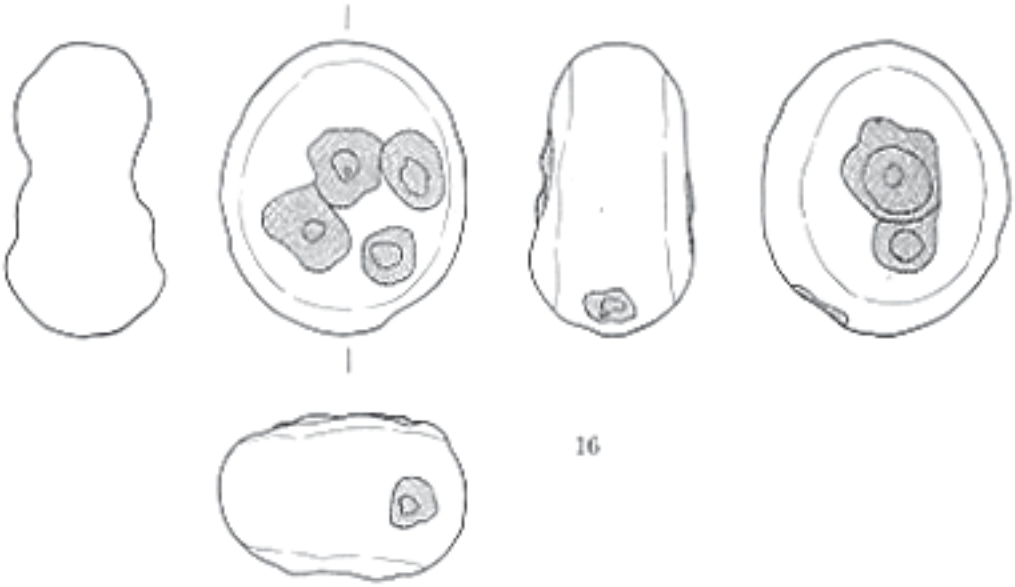
第 12 図　第 8 号住居跡出土遺物（1）

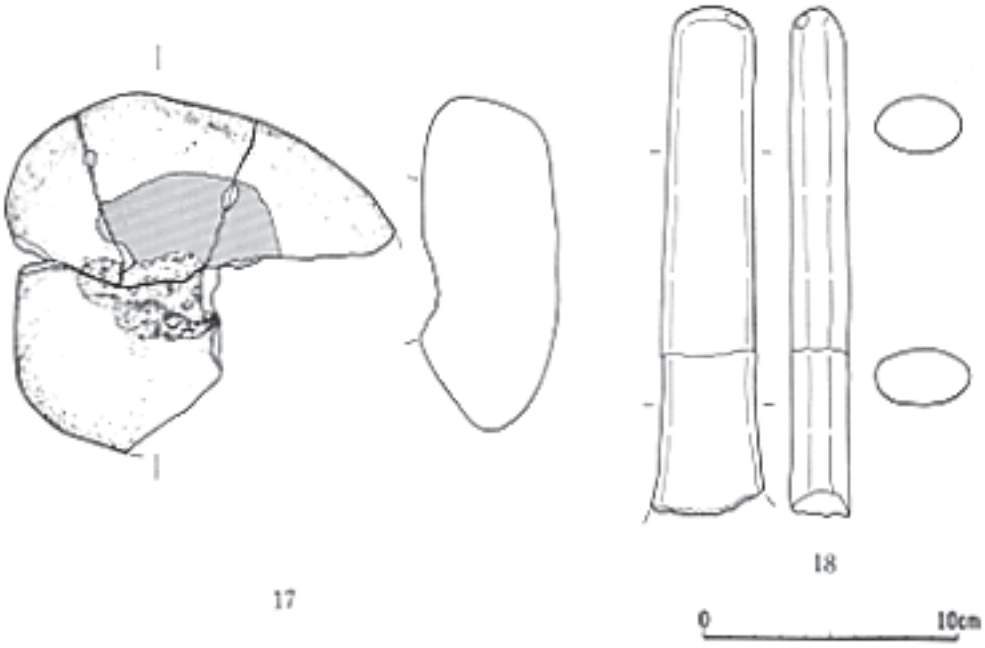


第13図　第８号住居跡出土遺物(2)

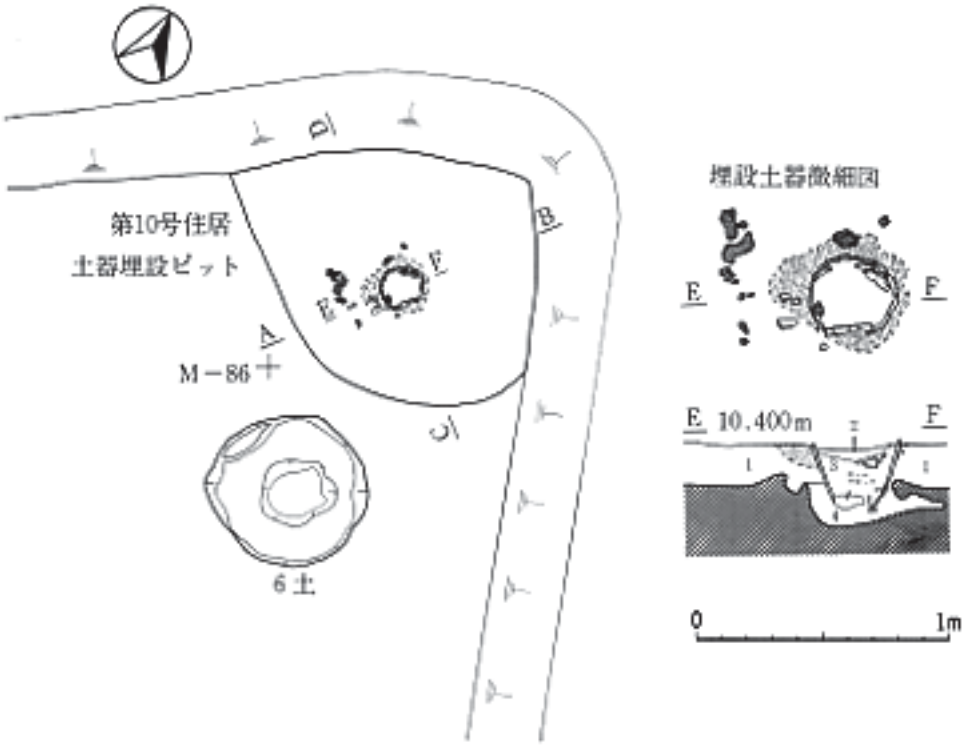


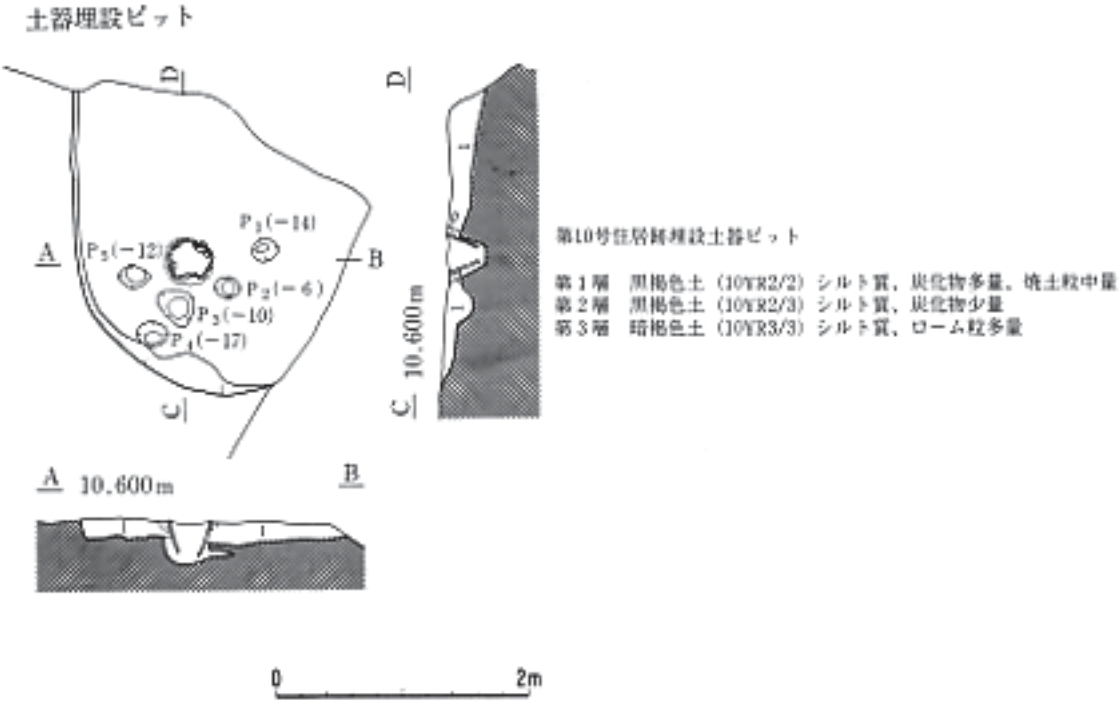
第14図　第８号住居跡出土遺物(3)





第15図　第８号住居跡出土遺物(4)





第16図　第10号住居跡

第10号住居跡（第16・17図）

[位　　置]　L－86、第Ⅵ層で埋設土器を伴う黒色土の落ち込みを確認した。この時点では、この落ち込みを単独の遺構としていたが、これを施設として伴った遺構の可能性があり、住居跡として扱うこととした。

[重　　複]　第6号土壙が南側にあるが、その関係については不明である。

[平面形・規模]　埋設土器を伴うピットの確認面において炭化物が面として出土していた。この面に至るまで周囲には第Ⅴ層（漸移層）は存在しなかったため、平面形・規模ともに不明だが大きな遺構と思われる。東側斜面は、近年の掘削によるものである。また、北側斜面は段丘崖と思われたが、黒色土の堆積状況から、何らかの工事によるものと思われる。

[　壁　]不明である。

[　床　]土器埋設ピットの周囲第Ⅵ層を床面とする可能性がある。この面は第Ⅵ層であり、堅緻である。

[壁　溝]　なし。

[柱　穴]　埋設土器ピット内底面に柱穴状の小ピットが存在するが、性格は不明である。

[　炉　]埋設土器口縁部周辺に炭化物が面として出土した確認面を当時の生活面と推定した。埋設土器外部の堆積土が焼けているが、土器内部から焼土を検出していない。

[堆　積　土]第Ⅵ層を覆っていた堆積土が覆土と思われるが、不明である。

[その他の付属施設]　なし。

[出　土　遺　物]（第17図）1は埋設された土器で、深鉢形を呈しLR単節の原体を横位回転させた斜縄文のみの文様である。時期を特定しにくいが、器形から後期～晩期の粗製土器と思われる。

2　土　　壙

第1号土壙（第18図）

[位　　置]　Ⅰ－81、西から東へ傾斜する第Ⅵ層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

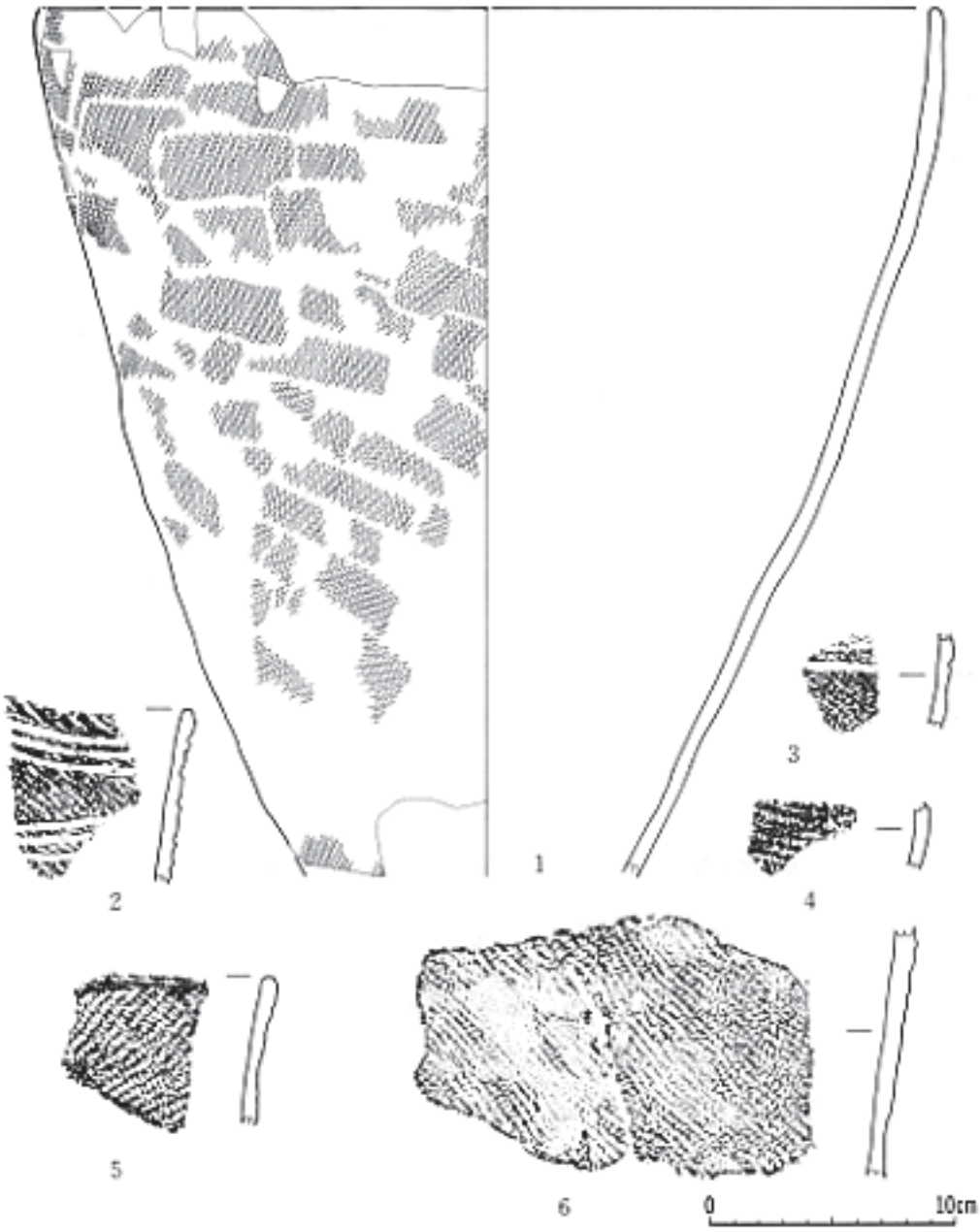
[形　状・規　模]開口部で径1．3mの不整円形を呈する。断面形は鍋底状を呈する。

[　壁　]壁高は40cmであり、しまりは普通である。

[　底　]第Ⅵ層を底面としている。しまりは普通である。

[堆　積　土]5層に分層される。いずれにもローム粒の混入が見られる。

[出　土　遺　物]土器片が5点出土したが、摩滅などにより時期決定までには至らなかった。



番　号	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
17－1	埋設	深鉢	LR単節　横位回転		Ⅳ～Ⅴ	178
2	フク土	深鉢　口縁	RL単節，沈線文		II_3	4
3	フク土	深鉢　胴部	RL単節，沈線文		II_3	7
4	フク土	深鉢　胴部	RL単節			8
5	フク土	深鉢　口縁	RL単節			5
6	フク土	深鉢　胴部	RL単節			6

第17図　第10号住居跡出土遺物

第2号土壙（第18図）

[位　　置]　H－84・85、第Ⅵ層で長軸が傾斜方向と斜交する黒色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[形　状・規　模]開口部で1．8m×0．9mの長楕円形を呈する。

[　　壁　　]壁高は30cmであり、しまりは強い。

[　　底　　]第Ⅵ層を底面とするが、しまりは壁ほど強くない。

[堆　　積　　土]5層に分層され、全体的にパミスの混入が見られる。第5層では、少量の炭化物の混入が見られた。

[出　土　遺　物]出土していない。

第3号土壙（第18図）

[位　　置]　K・L－40、第Ⅵ層で炭化物の混入した褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　第6号住居跡と西側で重複しており、本遺構が古い。

[形　状・規　模]開口部で2．3m×2．1mの不整円形を呈する。断面形は緩やかな曲線で鍋底状を呈する。

[　　壁　　]壁高は40cmで、しまりは強い。

[　　底　　]第Ⅵ層を底とし、しまりは強い。

[堆　　積　　土]5層に分層される。いずれも粘性があり、炭化物が含まれている。

[出　土　遺　物]出土していない。

第4号土壙（第18図）

[位　　置]　Ⅰ－42、第Ⅵ層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[形　状・規　模]開口部で0．9m×0．8mの楕円形、底部で径1mの不整円形を呈する。断面形は、いびつなフラスコ状を呈する。

[　　壁　　]底部付近では、しまりが強い。壁高は60cmである。

[　　底　　]第Ⅵ層を底面とし、しまりは強い。南側壁際に小ピット1個を検出した。

[堆　　積　　土]4層に分層され、第1・2・4層に炭化物の混入が見られる。ローム粒は全体に混入している。

[出　土　遺　物]出土していない。

第５号土壙（第18図）

[位　　置]　Ｉ－83、第Ⅵ層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[形　状・規　模]開口部で３．7m×１．6mの長楕円形を呈する。断面形は、船底状を呈する。

[　　壁　　]掘り方は整っていない。壁高は80cmで、しまりは比較的強い。

[　　底　　]第Ⅵ層を底面とし、平面形は不整形である。

[堆　　積　　土]３層に分層され全体的に浮石粒が含まれている。第２層に微量の炭化物が見られる。

[出　土　遺　物]出土していない。

第６号土壙（第19・21図）

[位　　置]　Ｌ・Ｍ－85、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　北側に第10号住居跡として扱った土器埋設ピットがあるが、本遺構と第10号住居跡の関係については不明である。

[形　状・規　模]開口部で径１．3mの円形を呈する。底面中央で円形の落ち込みを検出した。

[　　壁　　]壁高は40cmで、しまりは強い。

[　　底　　]第Ⅵ層を底とし、平坦でしまりも強い。中央部の円形の掘り込みも同様である。

[堆　　積　　土]４層に分層される。第１～３層に炭化物の混入が見られる。

[出　土　遺　物]第１層から縄文のみの破片と十腰内Ｉ群の網目状撚糸文が出土し、第３層からも摩滅した地文縄文のものが１点出土したが時期決定までには至らなかった。

第７号土壙（第19・21図）

[位　　置]　Ｉ・Ｊ－83、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[形　状・規　模]開口部で０．9m×０．8mのほぼ円形を呈する。

[　　壁　　]しまりは普通である。壁高は20cmで、緩やかな曲線で底面に至る。

[　　底　　]第Ⅵ層を底面とし、しまりは普通である。

[堆　　積　　土]２層に分層され、炭化物と浮石粒が混入し、間層にはローム粒が多量に含まれる。

[出　土　遺　物]（第21図）　５は第２層からの出土であり、榎林式に比定される。

第8号土壙（第19図）

[位　　置]　G－55、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[形　状・規　模]開口部で0．8m×0．4mの長楕円形、底部で1．2m×1．0mの不整形を呈する。断面形はフラスコ状を呈する。

[　　壁　　]しまりは強い。壁高は50cmである。

[　　底　　]第Ⅵ層を底面とし、しまりは強い。やや曲線を描くが、ほぼ平坦である。

[堆　　積　　土]第9層に分層される。炭化物はあまり見られない。全体にローム粒が混入している。

[出　土　遺　物]出土していない。

第9号土壙（第20・21図）

[位　　置]　H－38、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　東側に第3号焼土遺構があるが、本遺構との関係は不明である。

[形　状・規　模]開口部で径1．5mの不整円形、底部で1．7m×1．5mの不整円形を呈する。断面形はフラスコ状を呈する。

[　　壁　　]しまりは異なり、開口部を過ぎるとは強くなる。壁高は120cmである。

[　　底　　]第Ⅵ層を底面とし、ほぼ平坦である。

[堆　　積　　土]13層に分層される。全体的に粘性が強い。第8層に微量の焼土粒が含まれる。第9・10・12層は壁と同様の粘土質だが、炭化物の混入やしまりに違いが見られる。

[出　土　遺　物]（第21図）　8は円筒上層e式と思われ、9は石錘である。ともに覆土中からの出土である。

第10号土壙（第20図）

[位　　置]　G・H－39・40、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　東側に第1号焼土遺構があるが、本遺構との関係は不明である。

[形　状・規　模]開口部で1．8m×1．6mの不整円形、底部で1．3m×1．2mの不整円形を呈する。断面形はフラスコ状を呈する。

[　　壁　　]壁高は130cmである。

[　　底　　]第Ⅵ層を底面とし、ほぼ平坦な面を呈する。

[堆　　積　　土]21層に分層される。全体的に炭化物が含まれる。

[出　土　遺　物]出土していない。

第11号土壙（第19図）

[位　　置]　G－46、第Ⅵ層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[形　状・規　模]開口部で径0．8mの不整円形、底部で0．6m×0．5mの不整円形を呈する。断面形は鍋底状を呈する。

[　　壁　　]壁高は20cmで、しまりは普通である。

[　　底　　]第Ⅵ層を底面とし、緩やかな曲線を描いている。

[堆　　積　　土]4層に分層される。いずれの層にも炭化物が含まれる。

[出　土　遺　物]出土していない。

第18号土壙（第19図）

[位　　置]　Ⅰ－60、第Ⅵ層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　南東側で第15号住居跡と重複するが、本遺構が古い。

[形　状・規　模]重複しているが、0．7m×0．6mの楕円形で、断面形はいびつなフラスコ状を呈すると思われる。

[　　壁　　]壁高は20cmで、しまりは強い。

[　　底　　]第Ⅵ層を底とし、やや曲線を描いている。

[堆　　積　　土]2層に分層される。どちらにも炭化物が含まれる。

[出　土　遺　物]出土していない。

3　焼土遺構

第1号焼土遺構（第20図）

[位　　置]　G－39、第Ⅴ層で確認した。

[重　　複]　西側に第10号土壙があるが、関係は不明である。

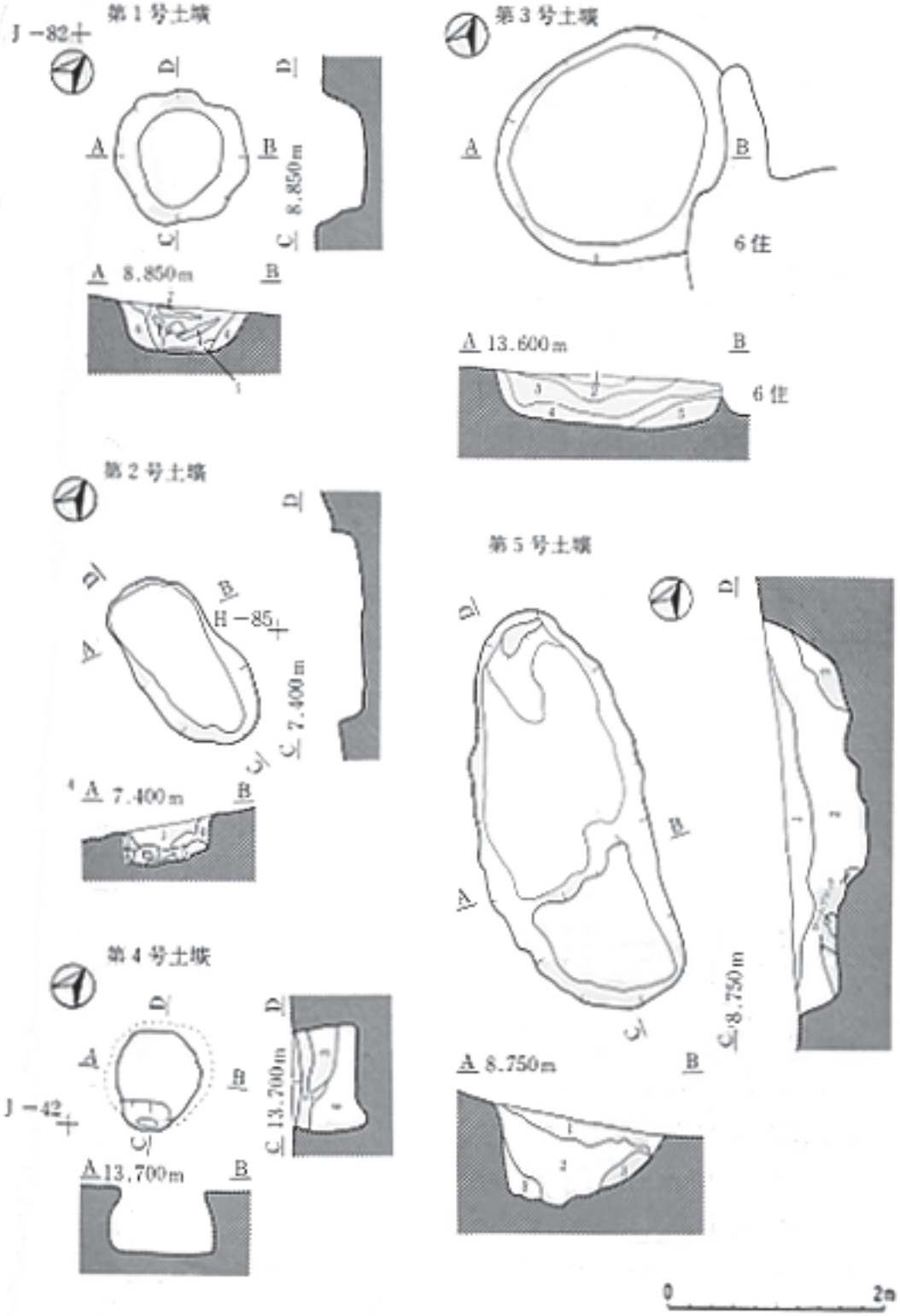
[形　状・規　模]1．0m×0．7mの楕円形を呈する。第Ⅴ層が焼土化したものである。

第2号焼土遺構（第20図）

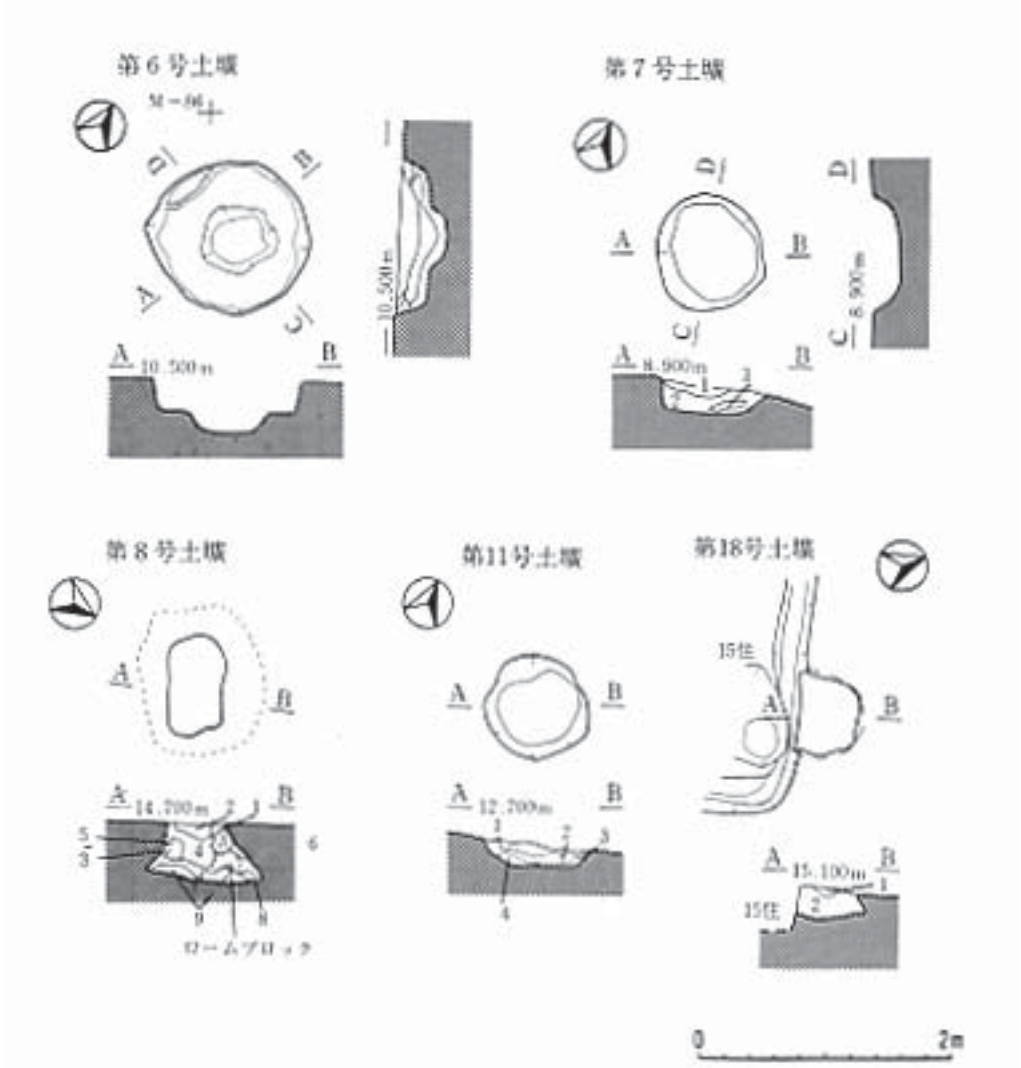
[位　　置]　G－39、第Ⅴ層で確認した。

[重　　複]　なし。

[形　状・規　模]調査範囲外に続き不明だが、0．7m×0．5mと推測される。第Ⅴ層が焼土化したものである。



第18図　第1・2・3・4・5号土壙



第6号土壙

第1層　黒色土（10YR1.7/1）シルト質
第2層　黒色土（10YR1.7/1）シルト質
第3層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質、ローム粒多量
第4層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質
第5層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質

第7号土壙

第1層　黒色土（10YR1.7/1）シルト質
第2層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質、パミス少量
第3層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質
第4層　褐色土（10YR4/6）シルト質、ロームブロック多量
第5層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質、炭化物少量

第8号土壙

第1層　褐色土（10YR4/4）粘土質、炭化物少量
第2層　暗褐色土（10YR3/4）粘土質、炭化物多量
第3層　褐色土（10YR4/4）粘土質、炭化物少量
第4層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）粘土質、炭化物微量
第5層　褐色土（10YR4/4）粘土質、炭化物微量

第11号土壙

第1層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質、炭化物少量
第2層　褐色土（10YR4/4）シルト質、炭化物少量
第3層　明黄褐色土（10YR6/8）シルト質
第4層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質、炭化物微量

第18号土壙

第1層　黒色土（10YR1.7/1）シルト質、パミス微量
第2層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質、炭化物微量
第3層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質、ロームブロック

第6号土壙

第1層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質、炭化物微量
第2層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質、炭化物少量
第3層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質、炭化物微量
第4層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質

第7号土壙

第1層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質、炭化物微量
第2層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質、炭化物微量
第3層　褐色土（10YR4/4）シルト質、ローム粒多量

第8号土壙

第1層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質
第2層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質
第3層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質、ローム粒少量
第4層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質、ローム粒微量
第5層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質
第6層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質、ローム粒多量
第7層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質
第8層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質、ローム粒多量
第9層　褐色土（10YR4/4）シルト質

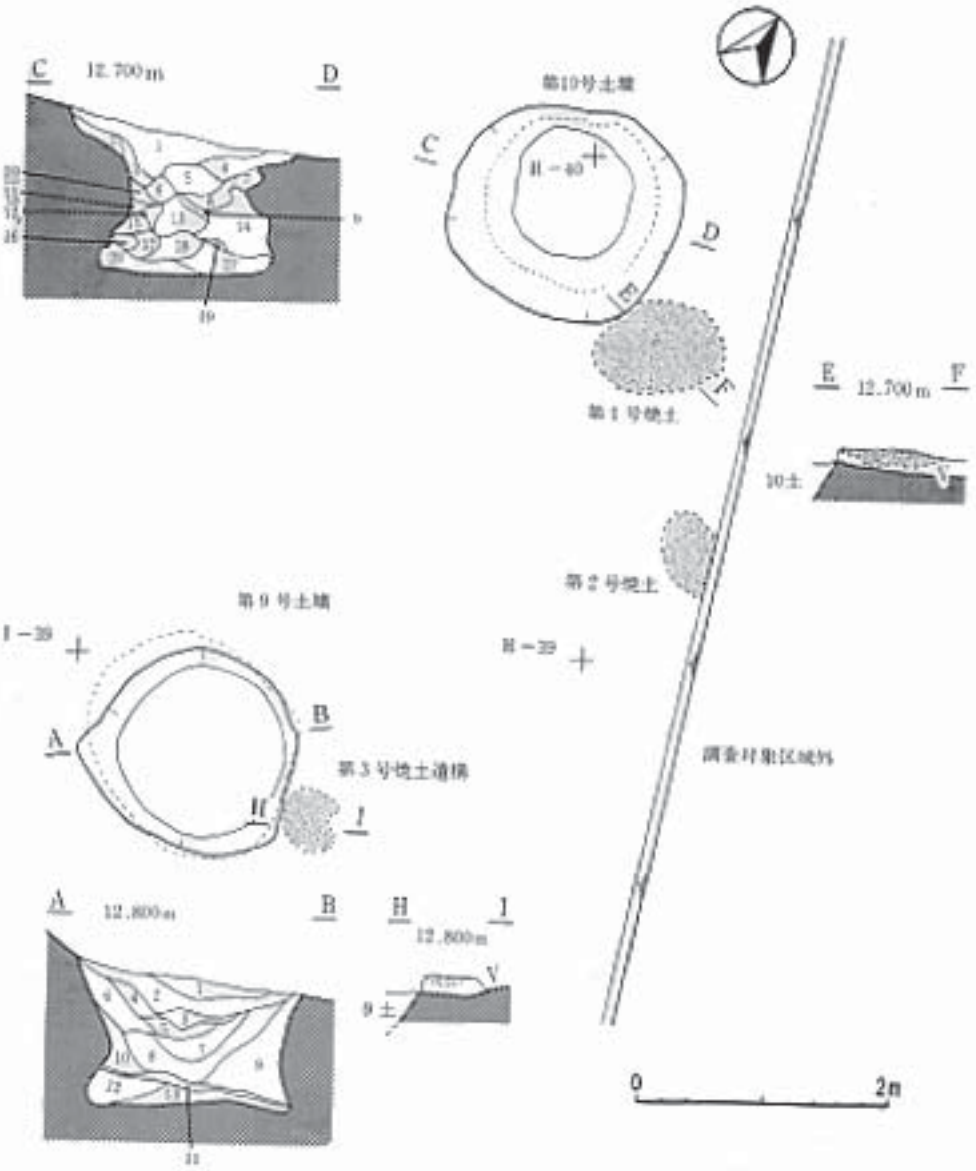
第11号土壙

第1層　黒色土（10YR1.7/1）シルト質、炭化物少量
第2層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質、炭化物少量
第3層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質、炭化物微量
第4層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質、ローム粒多量

第18号土壙

第1層　黒褐色土（10YR3/2）粘土質、炭化物少量
第2層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質、炭化物微量

第19図　第6・7・8・11・18号土壙



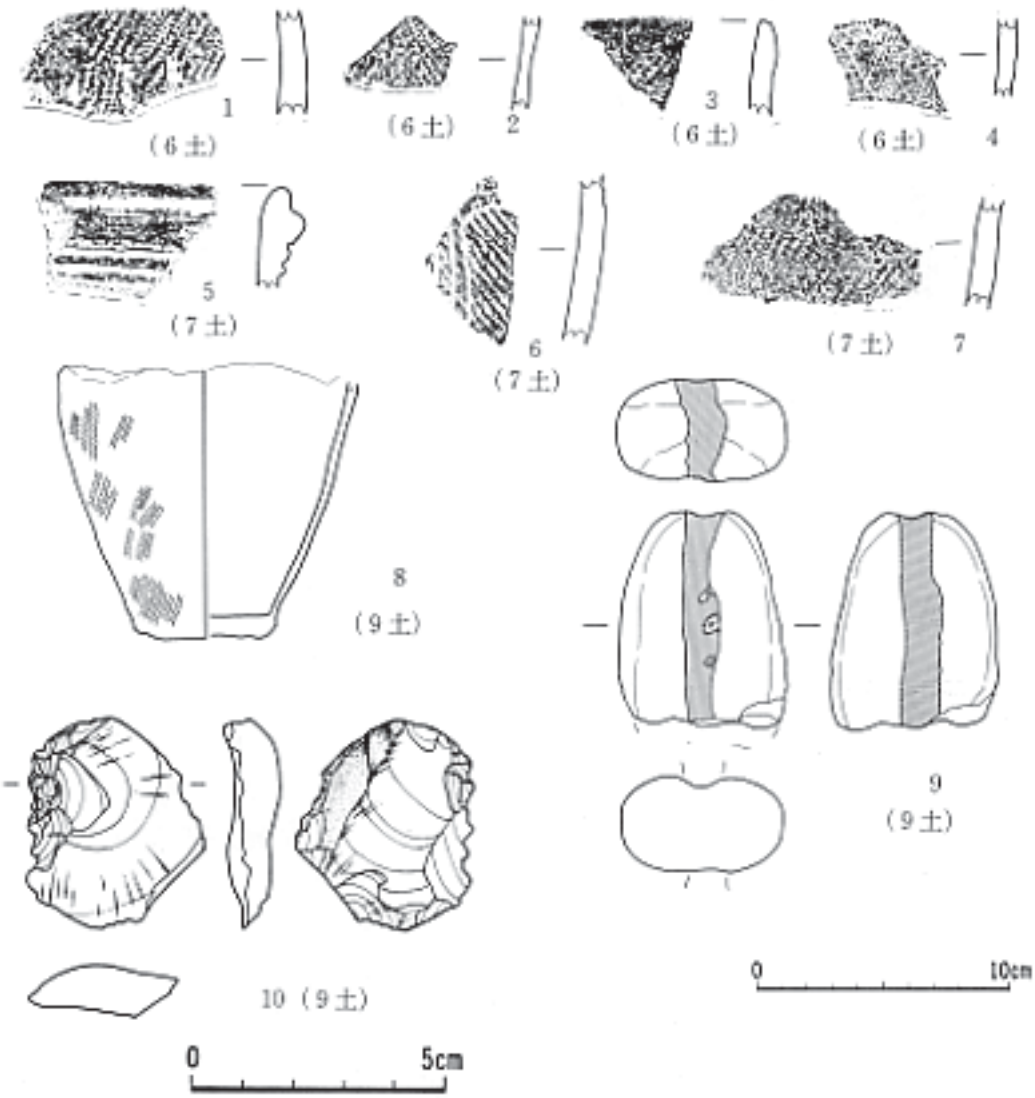
第9号土壙

第1層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質，炭化物少量
第2層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物少量・礫少量
第3層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物微量
第4層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）粘土質，炭化物少量
第5層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質
第6層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質，炭化物微量
第7層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物微量
第8層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物多量，礫少量
第9層　褐色土（10YR4/4）粘土質，礫少量
第10層　褐色土（10YR4/6）粘土質，炭化物微量
第11層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物少量
第12層　明褐色土（7.5YR5/6）粘土質
第13層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物少量

第10号土壙

第1層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物微量，礫少量
第2層　褐色土（10YR4/6）シルト質，炭化物微量
第3層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質，炭化物微量
第4層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物微量，礫微量
第5層　黒褐色土（10YR3/1）シルト質，炭化物少量
第6層　黒色土（10YR2/1）シルト質，炭化物多量
第7層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）シルト質，炭化物微量
第8層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物多量
第9層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物微量，焼土粒少量
第10層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質，炭化物微量
第11層　褐色土（10YR4/4）粘土質，（整崩落）
第12層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物微量
第13層　黒褐色土（10YR3/1）シルト質，炭化物多量
第14層　褐色土（10YR4/4）粘土質，パミス多量，礫少量
第15層　褐色土（10YR4/4）粘土質，炭化物微量
第16層　にぶい黄橙色土（10YR7/4）粘土質，（整崩落）
第17層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘土質
第18層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物少量，パミス少量
第19層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）粘土質
第20層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質，炭化物少量，礫多量
第21層　褐色土（10YR4/4）粘土質，炭化物微量

第20図　第9・10号土壙，第1・2・3号焼土遺構



番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
21－1	6土	フク土1	深鉢　胴部	RL単節			27
2	〃	フク土1	深鉢　胴部	RL単節			28
3	〃	フク土1	深鉢　口縁部	RL単節			29
4	〃	フク土1	深鉢　胴部	網目状		IV_1	30
5	7土	フク土2	深鉢　口縁部	口唇部肥大，沈線文		III_1	1
6	〃	フク土2	深鉢　胴部	RL単節，沈線		III_2～III_3	2
7	〃	フク土2	深鉢　胴部	LR単節			3
8	9土	フク土	深鉢　胴部	LR単節		II_3	180

第21図　第6・7・9号土壙出土遺物

第３号焼土遺構（第20図）

［位　　置］ Ｈ－38、第Ｖ層で確認した。

［重　　複］ 西側に第９号土壙があるが、関係は不明である。

［形　状・規　模］0．6m×0．5mの不整楕円形を呈する。第Ｖ層が焼土化したものである。

焼土遺構は計３基検出したが、すべてＧ・Ｈ－38・39内にまとまっており、焼土はいずれも第Ｖ層が燃焼により変化したものである。当時の生活面が焼土を検出した面だとすると、掘り過ぎを考慮しても、第Ｖ層あるいは第Ⅳ層下位ということになり、屋外炉または屋外での何らかの燃焼行為の形跡と判断される。３基のうち２基は、いわゆるフラスコ状ピットの東側にあり、付属するものとも思われるが、詳細は不明である。

4　低地域の調査

(1)　調査の概略

調査区域北側の段丘崖以北を低地域として扱った。

この区域は、近年の土木工事による地形の変化が見られるものの、工事による盛土の下に自然層が堆積している。

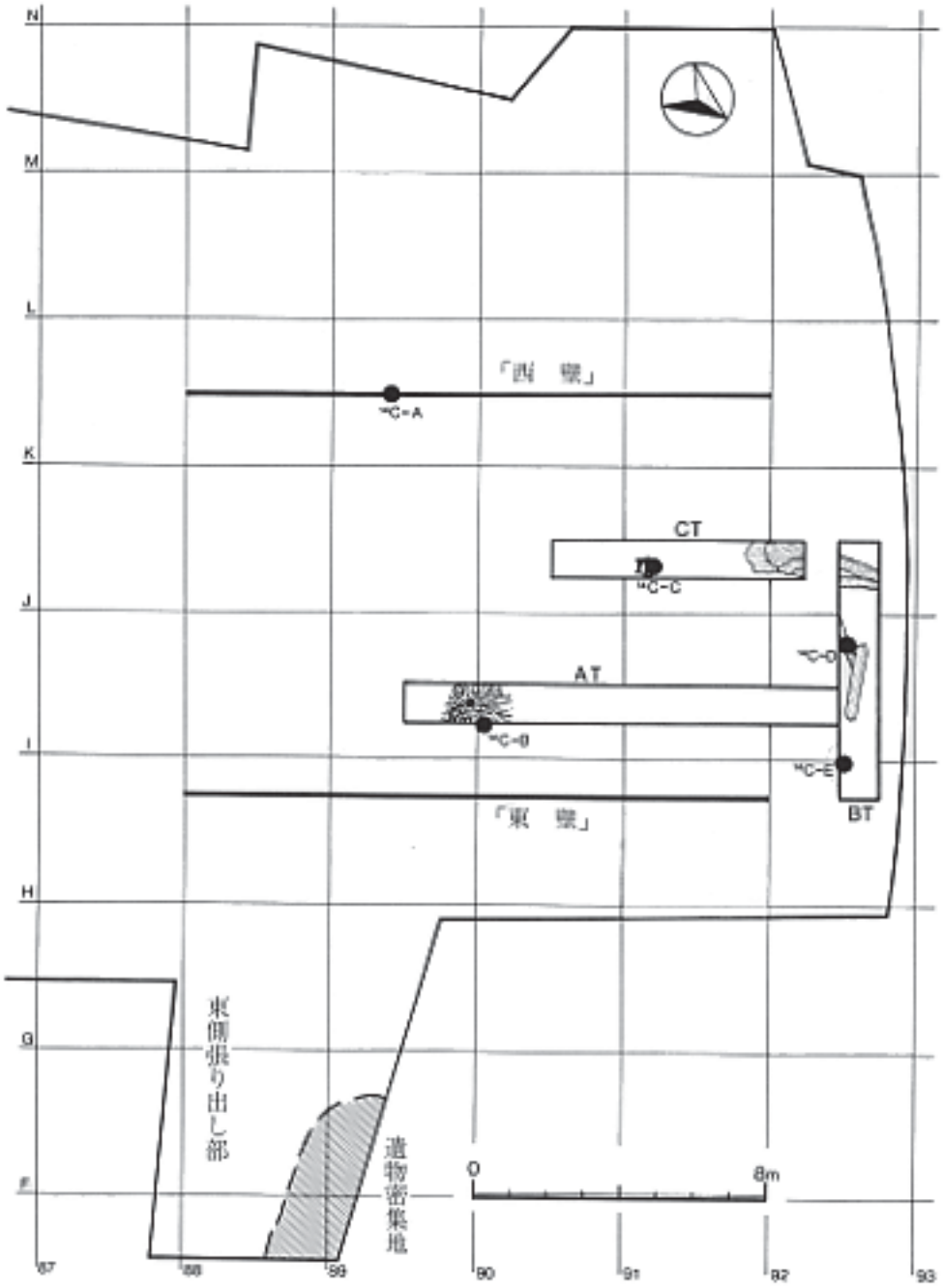
この自然堆積層は、その堆積状況から上位と下位に大きく二分される。上位層は厚く堆積した砂層であり、沖館川による堆積層である。この層には、流木等が含まれている。また、2～3cm大のパミスの層も砂層中に挟まれている。下位層は木本泥炭層が主体であり、草本泥炭層や黒色泥層等が部分的に見られる。これらの中にさらに薄く砂の層が挟在しており、流水により削られては堆積するという活動が繰り返されたことがわかる。

木本泥炭層の成立時期を確定するため、Ａ・Ｂ・Ｃの３本のトレンチを設定した。しかし、この３本のトレンチからは土器などの遺物は出土せず、加工の痕跡の見られない流木などの植物遺体のみ出土した。

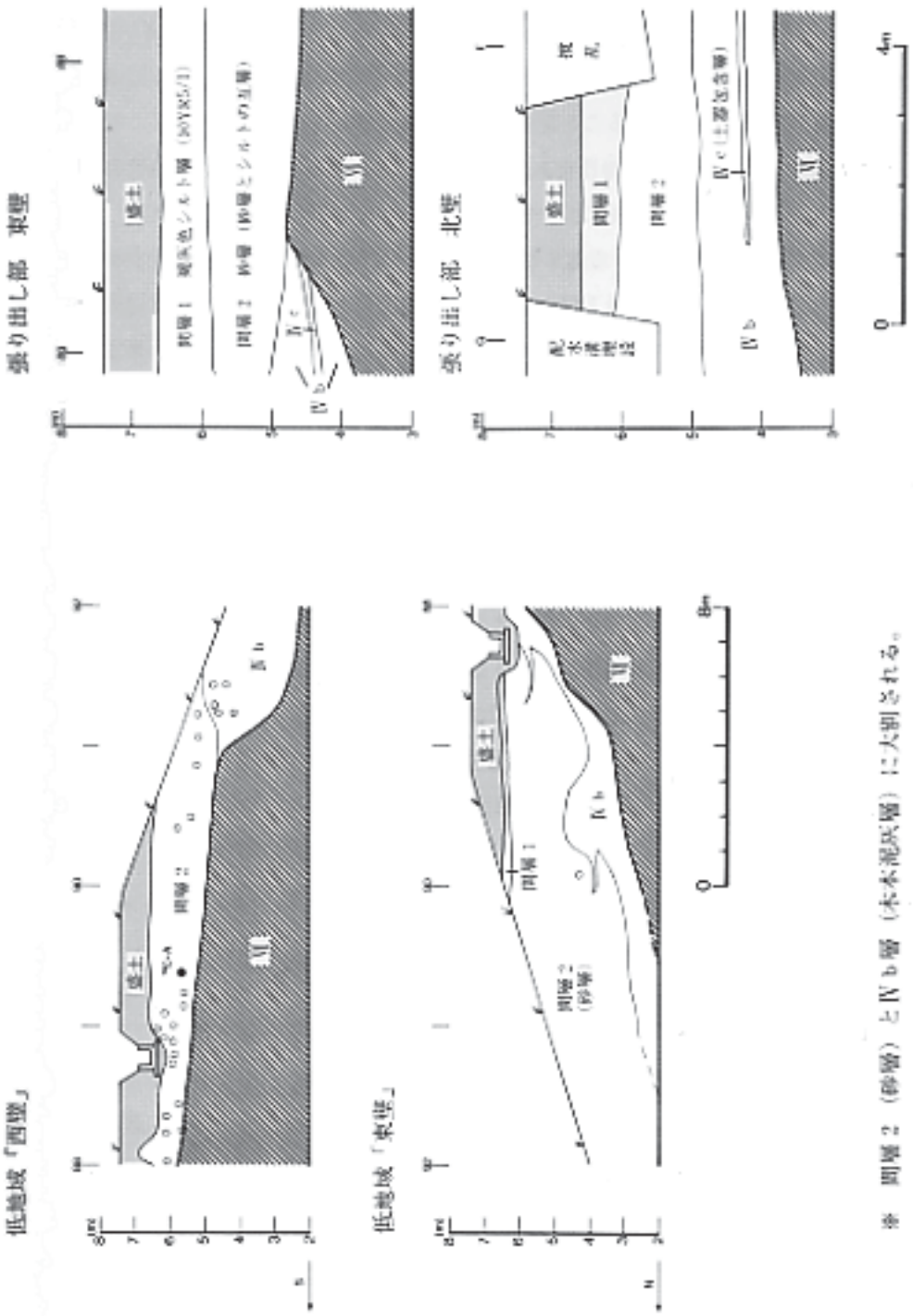
調査時に「東壁」と呼称していたセクションラインに黒色泥層が見られたため、調査区域である東側張り出し部に範囲を広げた。まもなく、加工した痕跡の見られる棒状の木製品が出土し、その周囲から土器底部の破片が１片出土した。

確認のためさらに２グリッドほど東に進んだところで、土器包含層を確認した。この包含層は砂粒を含んだ2～10cm厚の黒色泥層で、縄文時代前期後半の円筒下層ｄ式土器が主体となっている。

この包含層であるが、東側張り出し部のほぼぎりぎりの部分で確認された。地形的には北西側から南東側に入り込む沢状または段丘崖状の地形であると思われ、そこに土器が廃棄された


N
M
L
K
J
I
H
G
F
「西　壁」
14C-A
CT
14C-C
14C-D
AT
14C-B
14C-E
BT
「東　壁」
東側張り出し部
遺物密集地
0
8m
87
88
89
90
91
92
93

第 22 図　低地域の調査



※　間層2（砂層）とⅣb層（本本泥灰層）に大別される。

第 23 図　低地域の層序

ことにより成立した捨て場であると思われる。この包含層自体は、その上下を木本泥炭層に挟まれている。このことから、元来そこには段丘崖から北側に向かいなだらかに堆積していた第Ⅳｂ層があり、前期後半の円筒下層ｄ式期に土器の廃棄行為が行われ、その後再び第Ⅳｂ層の堆積が始まったために第Ⅳｃ層が埋没したと思われる。また、包含層である第Ⅳｃ層黒色泥層には前述のとおり砂粒が含まれていることから、廃棄行為が行われた時点においてこの場所にも何らかの形で流水が及んでいた可能性がある。再開した第Ⅳｂ層の堆積過程も、層中に薄い砂層が多く見られることから、断続的に淀み状態になっていたと思われる。

第Ⅳｂ層の再堆積は、その上位層である厚い砂層の堆積の始まりによって終了する。この砂層の成立時期は特定しにくいが、最下位から縄文中期の円筒上層ｅ式土器、中位周辺から後期と晩期の土器が出土していることで、中期末から晩期にかけて断続的に起きたと推定される。

（2）遺物密集地第Ⅳｃ層出土遺物

①Ⅰ群１類　円筒下層式前半の土器に比定されるもの
②Ⅰ群２類　円筒下層式後半の土器に比定されるもの

遺物が密集して出土した部分を遺物密集地として扱った。ここから出土した遺物は、ダンボール７箱である。このほとんどが前期後半円筒下層ｄ式土器の破片である。石器・礫類は１箱にも及んでいない。また、遺物密集地の範囲外ではあるが、加工痕のある棒状木製品がＨ－88の黒色泥層から出土しているが、密集地から流れ込んできたものかは不明である（第40図17）。第Ⅳｃ層遺物包含層出土の土器破片は、口縁部から底部まで復元できた個体はなく、各部位の文様の相互の関係をつかめなかった。また、器形における微妙なプロポーションも型式決定の１要素であるが、不明である。

以下に述べる分類は、施文技法に主眼を置いて行った。

①Ⅰ群１類　円筒下層式前半の土器に比定されるもの（第24図１～５・７）

この土器群の出土は数点と非常に少なく、第Ⅳｃ層出土の中では一見して異質である。

□□ｉ　器形は、いずれも円筒深鉢形を呈すると思われる。
□ii　口縁には、平口縁と小波状口縁とが見られる。
iii　口頸部には、絡条体や原体による回転施文が行われる。
□iv　頸部には、隆起帯があるものとないものがある。
□□v□ 口縁部は、直線的なものとやや外反するものとがある。

□□ vi　胴部文様では、本群に分類可能なものとして原体斜位回転が見られる。
□ vii　胎土には、繊維が含まれる。
viii　色調は、灰褐色系を呈する。
□□ ix　内面調整は、顕著ではない。

1～3は、口頸部の幅も7cmを越える比較的幅広を呈し、2と3は、小波状口縁を呈すると思われる。また、1と3は、摩滅しているが頸部につまみ出しによる隆帯を持つ。

口頸部の回転施文には、不整撚糸文（1・2)、網目状撚糸文（3)、LR単節の横位回転（4)、羽状縄文（5・7）が見られる。

なお、LR単節は第Ⅳc層出土破片の中でごく稀である。

また、羽状縄文は円筒土器において初現は下層b式期とされているが（江坂、1957)、5・7はこれにあたるものと思われる。

②Ⅰ群2類　円筒下層式後半の土器に比定されるもの（第24図8～第27図36）

本群の土器が、第Ⅳc層出土の大部分を占める。しかし、口縁部から底部まで復元でさた個体はない。

なお、このように円筒下層式後半とする従来の細分については、C式・d_1式・d_2式が型式設定されている。しかし、今回の出土したものに、C式と断定できるものは見られず、また、d_1式とd_2式の包含層を細別できるほどの出土数でもないため、一括して「円筒下層d式に比定される土器」として、この「Ⅰ群2類」で扱うことにする。

□□□ i　器形は、いずれも円筒深鉢形を呈するが、胴部が若干膨らむものもある。
□□ ii　口縁には、平口縁と波状口縁・小波状口縁とが見られる。
□ iii　口頸部には、無文素地に撚糸押圧や絡条体による幾何学文様が見られる。
□□vi 頸部には隆起帯を有するものが多く、その頂部及び上下に撚糸押圧や刺突等が多く見られ、頸部直下に羽状縄文を施文したものも多い。
□□□ v　口縁部は、直線的なものとやや外反するものとが多い。
□□ vi　胴部文様では、本群に分類可能なものとして、単節・複節・付加縄文の斜位又は横位回転、撚糸文・羽状縄文・木目状撚糸文・多軸絡条体撚糸文が見られる。
□ vii　胎土に繊維を含むものが大多数を占めるが、含まれる繊維の量はⅠ群1類より少ない。
viii　色調は、黒色系を呈するものがほとんどだが、灰褐色系のものもある。
□□ ix　内面調整は顕著に見られ、研磨されたものも多い。

口頸部の幅は、Ⅰ群1類に比較すると狭く、2cm程度のものと3～4cmのものに大別される。

波状・小波状口縁のもの（31・32）は、その口縁に平行するように撚糸が押圧される。

口頸部に押圧された幾何学文には、頸部に平行（8～15・26・28)、頸部に斜行（16～25)、平行と斜行の組み合わせ（18～23)、X字状（29・33）が見られる。口縁部から垂下させたものもある（16・19・23・34)。また、撚糸の平行押圧間に、垂直またはやや傾斜させて撚糸押圧を行うもの（25・27)、列点状に撚糸押圧または刺突を行うものがある。この中で平行押圧間の列点は、上層a式に属する要素（山内、1929）への類似性を有しているが、他要素との関係で本群として扱った。

口唇部には、撚糸押圧（13～16)、撚糸回転（28・33～35)、刻目状（36）が見られる。また、口唇部に段を有し、そこに列点刺突を行うものがある（30)。これは、上層a式に発展する移行期的な手法と思われる。

頸部の隆帯は、Ⅰ群1類に比べ細くなり隆起させた線状である。この頂部に撚糸を押圧するものと刺突を行うものとがある。前者には、降帯に1、2条押圧するもの（16～26）と列点状に押圧するもの（29）とがある。後者には、押圧等で口縁部と胴部を区画している。

口頸部の形状では、直線的なものとやや外反するもの（19・22・36）とが多く見られる。稀に内傾ぎみに立ち上がるもの（28）と若干キャリパー状を呈するもの（32）もある。

③Ⅰ群の胴部・底部

本項では､胴部と底部の破片でⅠ群の土器と認められるものの類別までには至らなかったものなどを扱う。

i　撚糸斜位回転（37～42)いわゆる縦走縄文であるが、RL単節とRLR複節が見られ、LR単節は少ない（40)。また、16は付加縄文である。

ii　撚糸横位回転（43～45）いわゆる斜縄文である。iと同様に、RL単節が多く、LR単節は☆のみと少ない。

iii　羽状縄文（46～48）　いずれもLとRの2本の撚糸を交わらせた上で、RLとLRとした結束原体を横位に回転させている。頸部隆帯直下に見られるものが多いが、46は胴部の地文としている。

iv　単軸絡条体（49～55）いわゆる「撚糸文」で、比較的多く見られる。撚糸1本のみの軸への巻き付けと見ていたが、数本まとめて巻き付けた可能性もある。また、ここで扱った手法を、摩滅や軸への巻き付けの状態等のために、iの手法に含めた可能性もある。なお、55は、回転方向を変えた交差施文である。

□□□ v　木目状撚糸文（58～62）58～60は、一般的に見られるものである。撚糸の軸への取り付け方法だが、これらは1本の撚糸を2つに折り曲げて、その曲折部を軸に挟み込むか差し込んだ後、左右の傾きを反対にして巻き付けたものと思われる。このような場合、挿入部の反対側に曲折部のはみ出た状態となるものが比較的多いが、今回の調査では見られなかった。

また、撚糸を折り曲げずにそのまま軸に通して木目状を成す絡条体としたものも比較的多く報告されているが、これも見られなかった。異質なものとして61・62は、一見すると単なる木目状ではあるが、軸への取り付け部を境にLとRの撚りの異なる2本の無節原体が見られる。これは、1つの軸にLとRを巻さ付けたものと思われるが、2種類の異なる絡条体を用いて、木目状撚糸文を意識して施文した可能性も考えられる。

□□ vi　不整撚糸文（56・57）

□ vii　多軸絡条体撚糸文（63・64）下層d_2式に多く見られる手法であるが、数片に見ることができた。

viii　綾繰文（44・45）

④Ⅱ群1類　円筒上層式前葉に比定される土器（第30図1）

第Ⅳc層から、本群に属するものが数片出土した。本群は間層（砂層）中からも出土している。本層については前述の通り砂が入り込んでいるため、後の流水による撹拌作用による混入の可能性もあるが、本層から数片のみとはいえ、出土したことで余計に本層の埋没時期を難しくしている。このⅡ群1類土器とした円筒上層a式は、江坂氏によってa_1式とa_2式とに細分されているが（江坂、1970）、今回はまとめてa式として扱った。

⑤その他の遺物

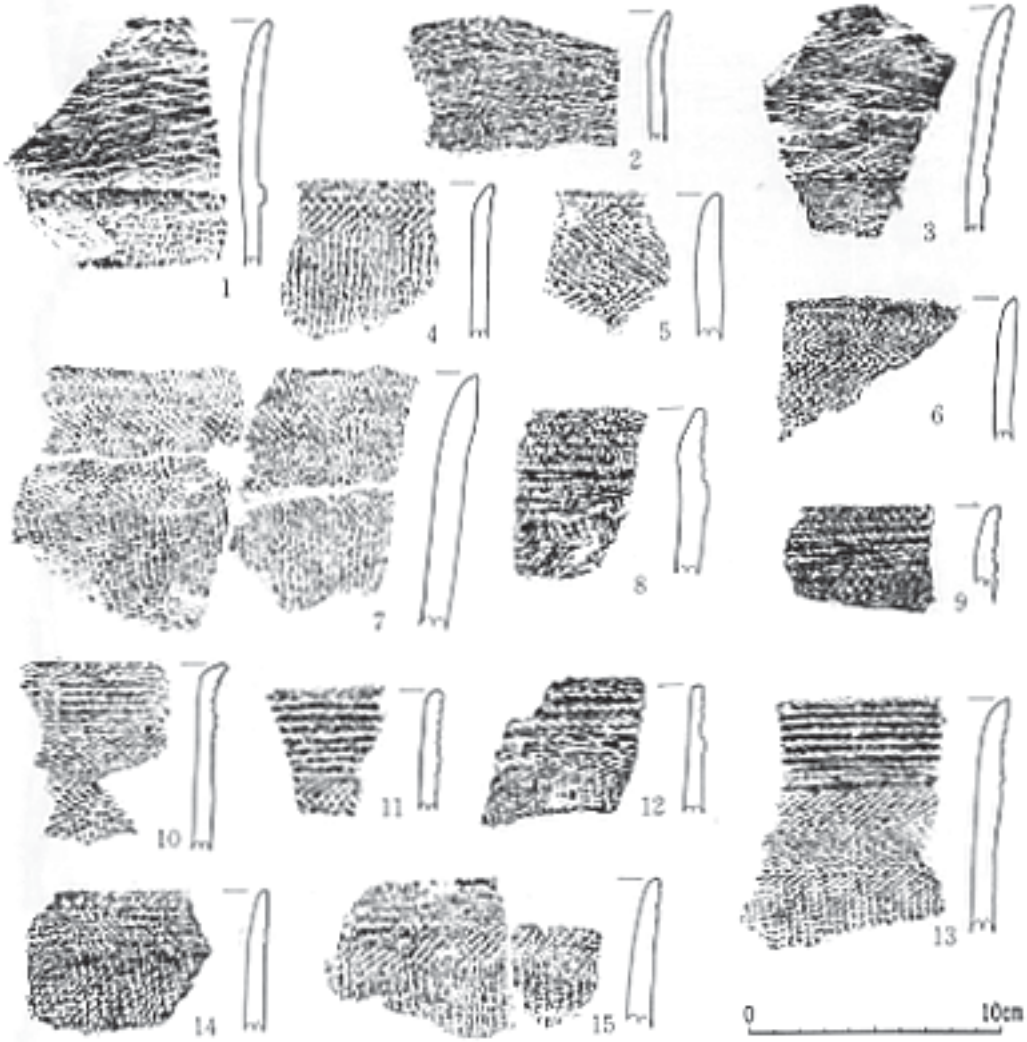
遺物密集地第Ⅳc層から土器以外に出土したものは、第30図2の礫石器である。不明な点もあるが石錘とした。その他に礫が20個ほど出土したが、加工痕・使用痕は見られなかった。

(3) 低地域における第Ⅳc層包含層と砂層

第Ⅳc層は、G－88・89で第Ⅳb層の中に消えている。そのため、遺物の包含層も同様にそれ以上西側に広がっていない。ただし、H－89では土質（泥質）のほぼ同じ層が堆積している。この層の上位地点からは棒状木製品（第40図17）と木炭と思われる炭化物、時期不明の土器底部が出土している。木製品については、明らかに面取りや削りを行ったと思われる加工痕が見られる。また、断面には弧を描く年輪が見られ、板目に割った木材を細分したものと思われる。

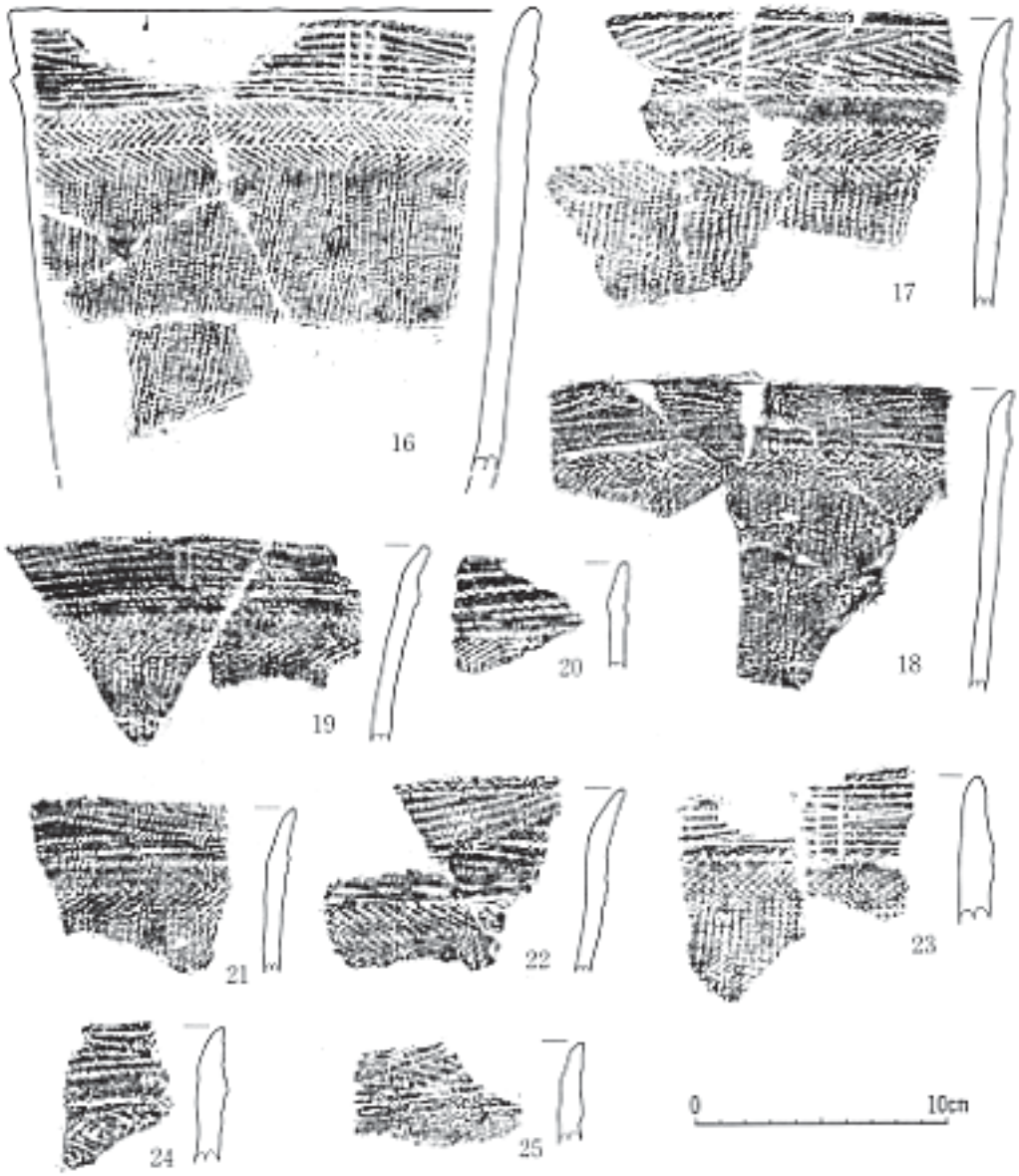
これらの出土が結果的に遺物密集地の検出と第Ⅳb層・第Ⅳc層決定の発端となったが、この

地点において第Ⅳｂ層は、薄い砂層との互層堆積でほとんど無いような状況である。また、遺物の出土した地点の20cmほどすぐ上では厚い砂層が堆積を始めているが、その下部付近からは、縄文晩期と思われる土器片が出土している。G－88砂層最下位でグライ化したローム層に直接密着しながら円筒上層ｅ式土器が出土していただけに、地山であるローム層の傾斜に沿った下側とはいえ、砂層下位にまで晩期の遺物が入り込んでいることは、砂層の堆積過程における撹拌拝作用によるものであろう。（小林）



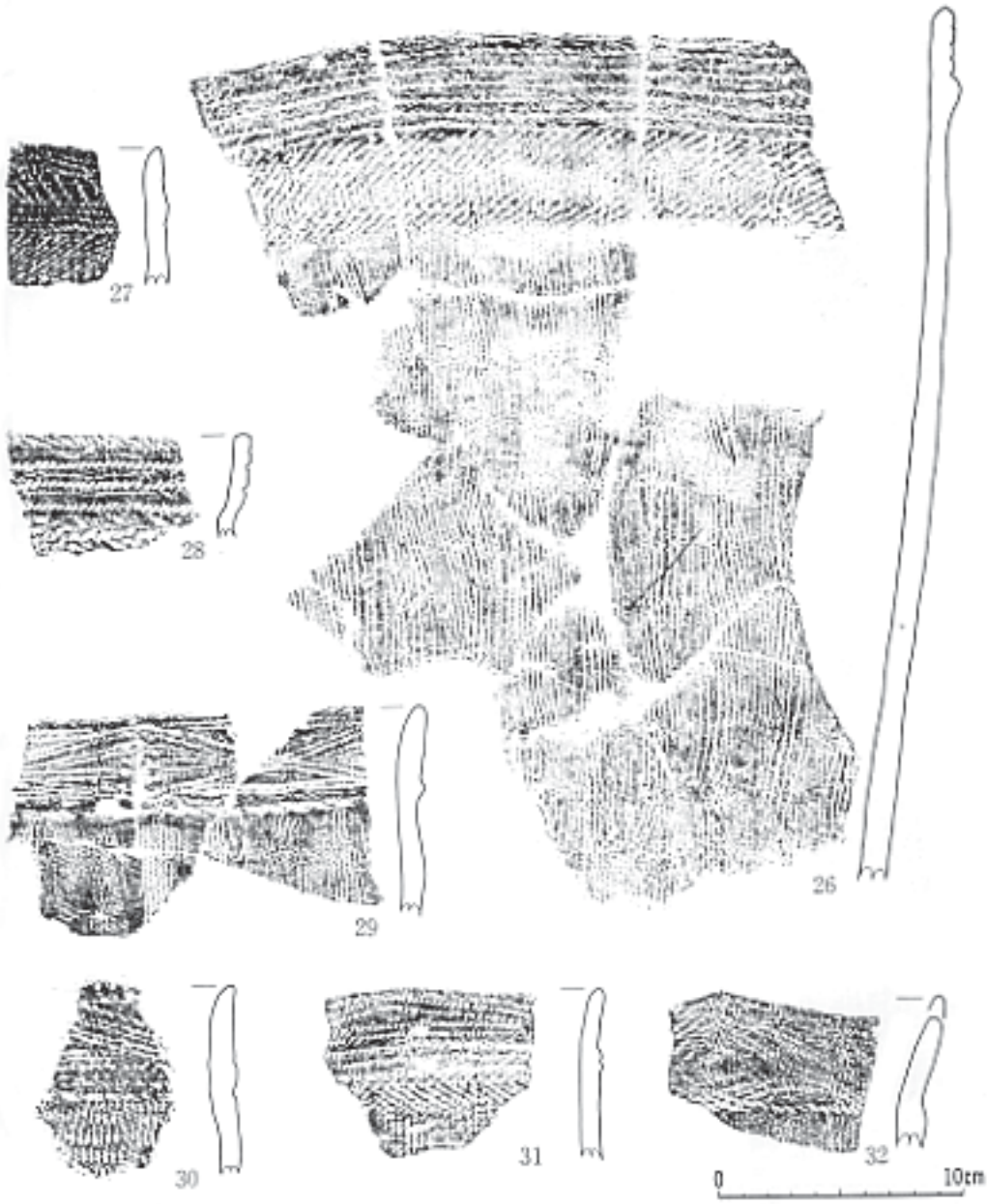
番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内面	分　類	整理番号
24－1	E－88	Ⅳc	深鉢　口頸	不整撚糸文　隆起帯（原体押圧）		I_1	52
2	E－88	Ⅳc	深鉢　口縁	波状口縁　不整撚糸文		I_1	53
3	E－88	Ⅳc	深鉢　口頸	波状口縁　綱目状撚糸文　隆起帯		I_1	54
4	F－89	Ⅳc	深鉢　口縁	平口縁，単節横位回転（LR）単節斜位回転（LR）		I_1	57
5	F－89	Ⅳc	深鉢　口縁	平口縁，羽状縄文		I_1	58
6	E－89	Ⅳc	深鉢　口縁	平口縁，羽状縄文（三段）	調整研磨	I_2	59
7	E－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，羽状縄文，斜位回転		I_1	55
8	E－88	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平），隆起帯，複節斜位	調整	I_2	66
9	F－88	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平），隆起帯	調整	I_2	67
10	E－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平・垂直），羽状	調贅	I_2	61
11	E－88	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平），隆起帯（押圧）	調整	I_2	69
12	F－88	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平），隆起帯（刺突）	調整	I_2	68
13	F－88	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平），隆起帯（押圧）	調整	I_2	70
14	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平）	調整研磨	I_2	62
15	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平），横位回転　斜位回転	調整研磨	I_2	63

第 24 図　第Ⅳc 層出土遺物（1）



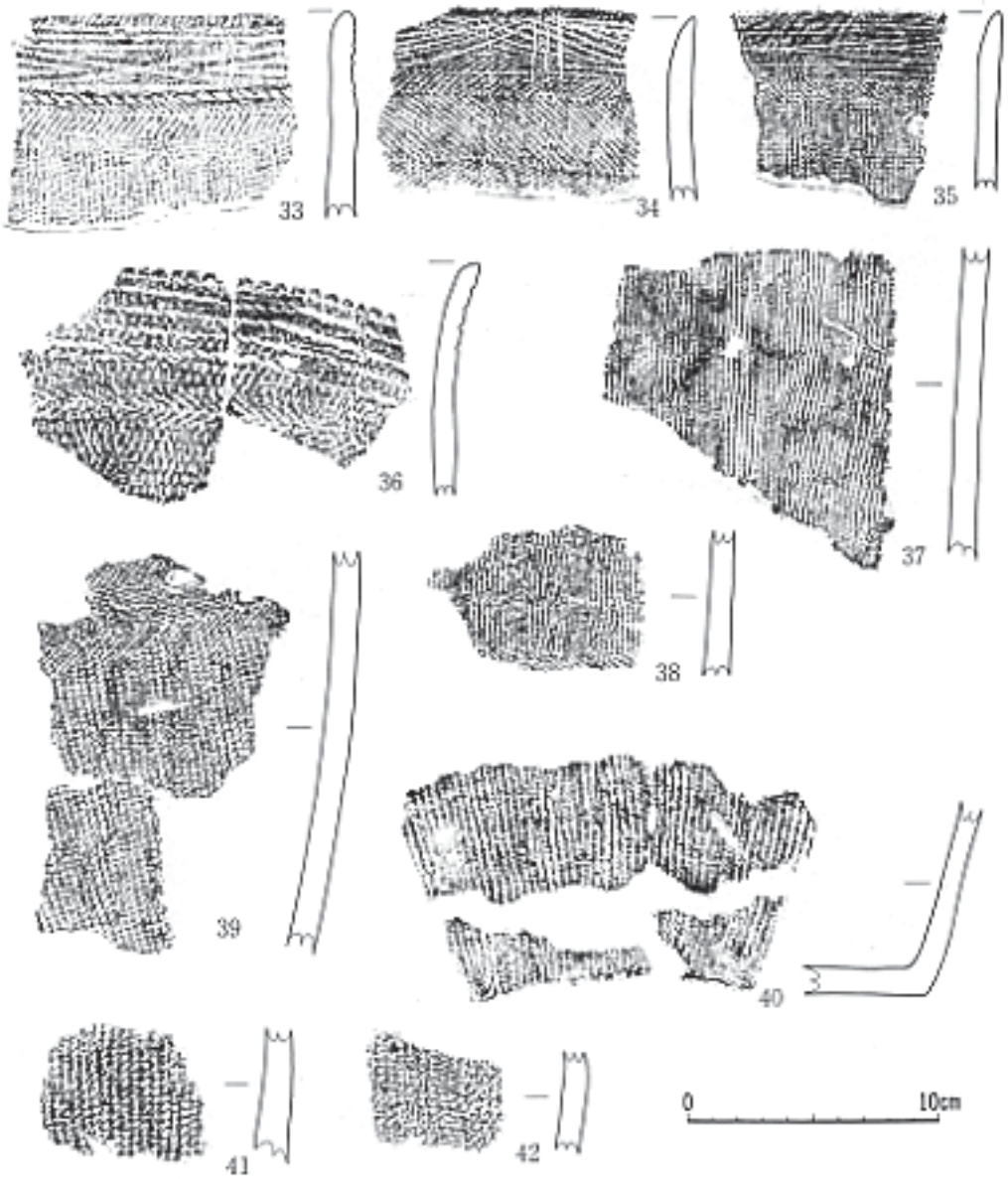
番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
25－16	E－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平・斜位・垂直），隆起帯，付加縄文	研磨	I_2	93
17	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位），隆起帯（押圧）		I_2	77
18	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平・斜位），隆起帯（押圧）		I_2	86
19	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位・垂直），隆起帯（押圧）		I_2	85
20	F－88	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位），隆起帯（刺突）	研磨	I_2	90
21	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位・水平），隆起帯（押圧）	研磨	I_2	84
22	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位），隆起帯（刺突）		I_2	80
23	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位・水平・垂直），隆起帯（押圧）	研磨	I_2	79
24	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位・水平），隆起帯（押圧）		I_2	87
25	F－88	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位），隆起帯（押圧）		I_2	88

第25図　第Ⅳc層出土遺物（2）



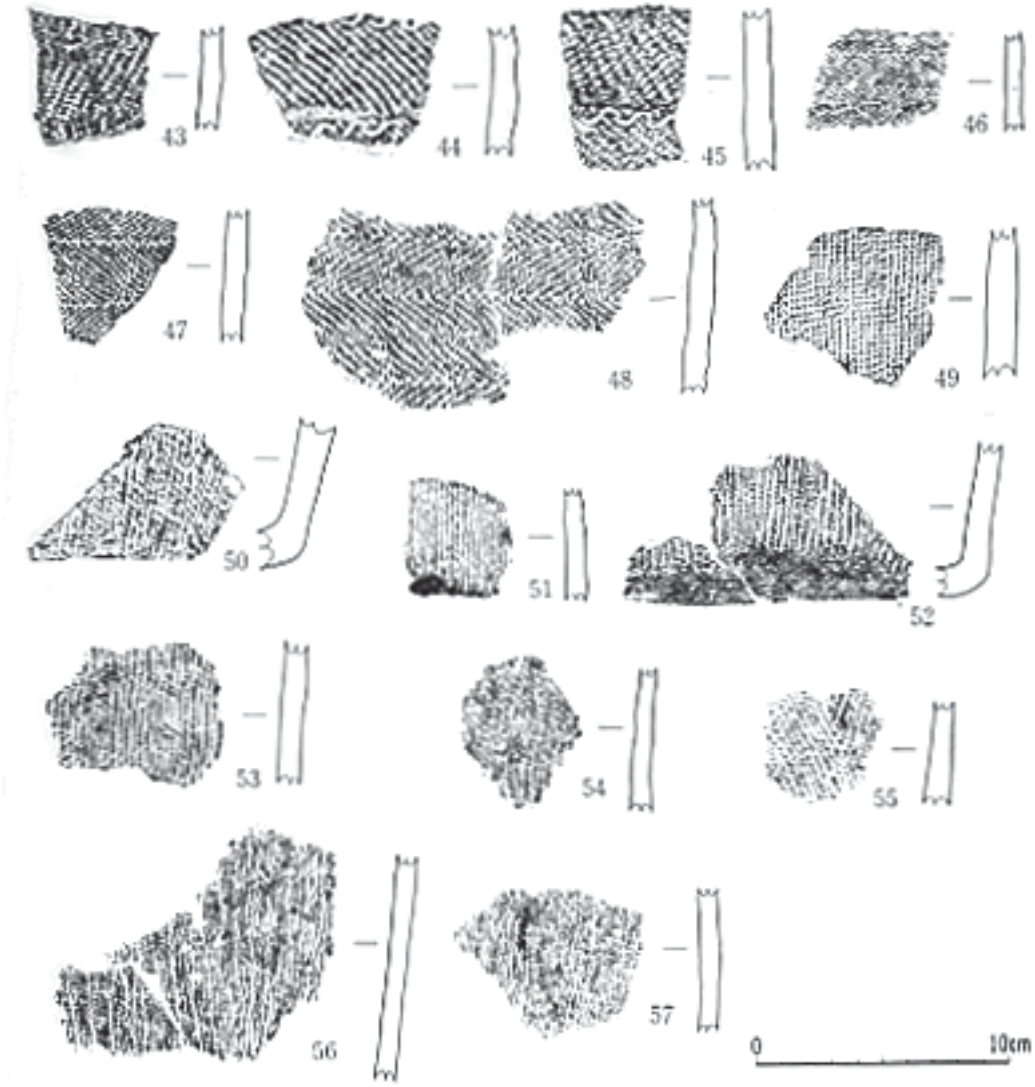
番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内面	分　類	整理番号
26－26	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（水平），隆起帯（押圧），撚糸文		I_2	96
27	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位）．隆起帯（押圧）	研磨	I_2	82
28	E－88	Ⅳc	深鉢　□頸	平口縁，押圧（水平）	調整	I_2	65
29	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位・水平），垂直刺突，隆起帯	研磨	I_2	78
30	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位），隆起帯（刺突）	研磨	I_2	81
31	F－88	Ⅳc	深鉢　口頸	小波状□縁，押圧（水平・斜位），隆起帯（押圧）	調整	I_2	94
32	G－88	Ⅳc	深鉢　□頸	波状口縁，押圧，隆起帯　キャリパー状	調整	I 2	95

第 26 図　第Ⅳ c 層出土遺物（3）



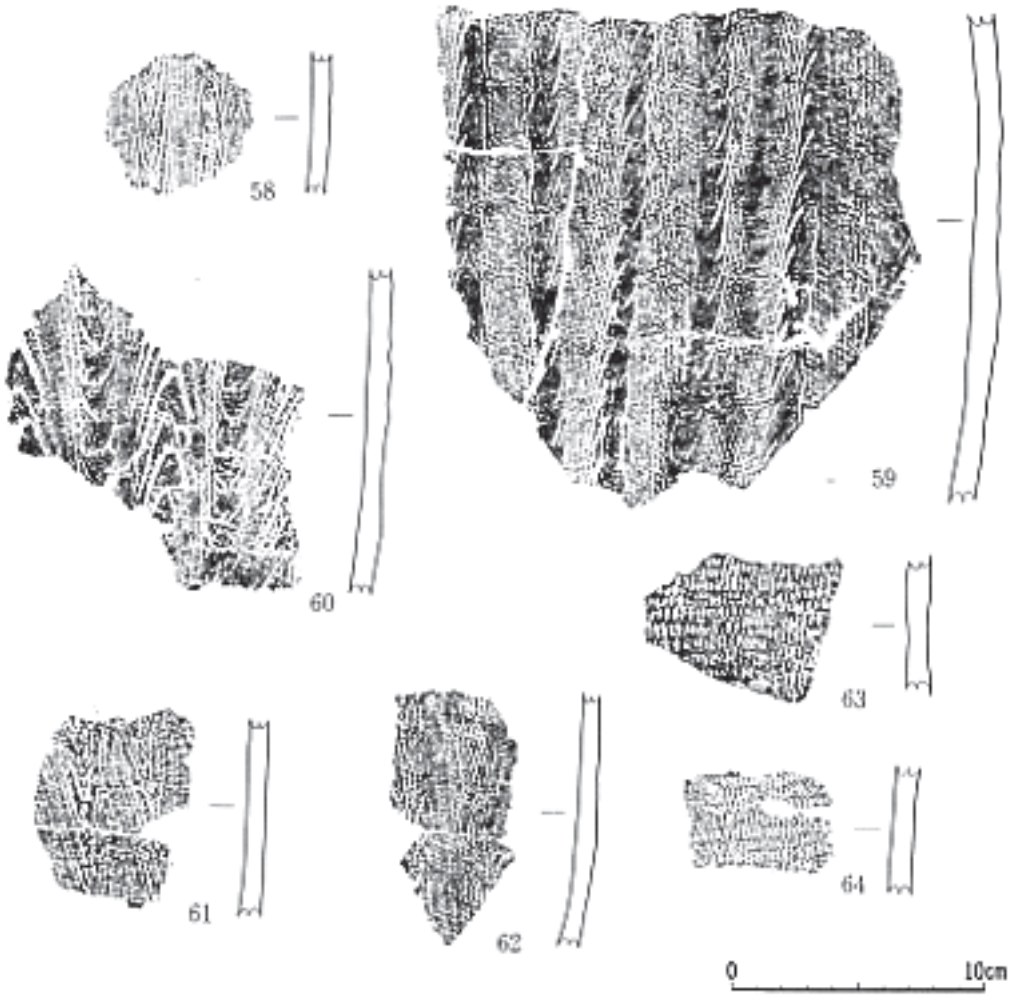
番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
27－33	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位・水平）	調整	Ⅰ	76
34	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位・水平）	調整	$Ⅰ_2$	75
35	F－88	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁，押圧（斜位・水平）	調整	$Ⅰ_2$	74
36	F－89	Ⅳc	深鉢　口頸	平口縁（刻目状押圧），押圧（水平）	調整	$Ⅰ_2$	60
37	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	撚糸文	調整研磨	Ⅰ	99
38	E－88	Ⅳc	深鉢　胴部	単節斜位回転　RL		Ⅰ	121
39	E－88	Ⅳc	深鉢　胴部	単節斜位回転　RL	調整	Ⅰ	97
40	F－89	Ⅳc	深鉢　底部	単節斜位回転　LR		Ⅰ	123
41	E－88	Ⅳc	深鉢　胴部	複節斜位回転　RLR	調整	Ⅰ	100
42	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	複節斜位回転　RLR		Ⅰ	101

第 27 図　第Ⅳc 層出土遺物（4）



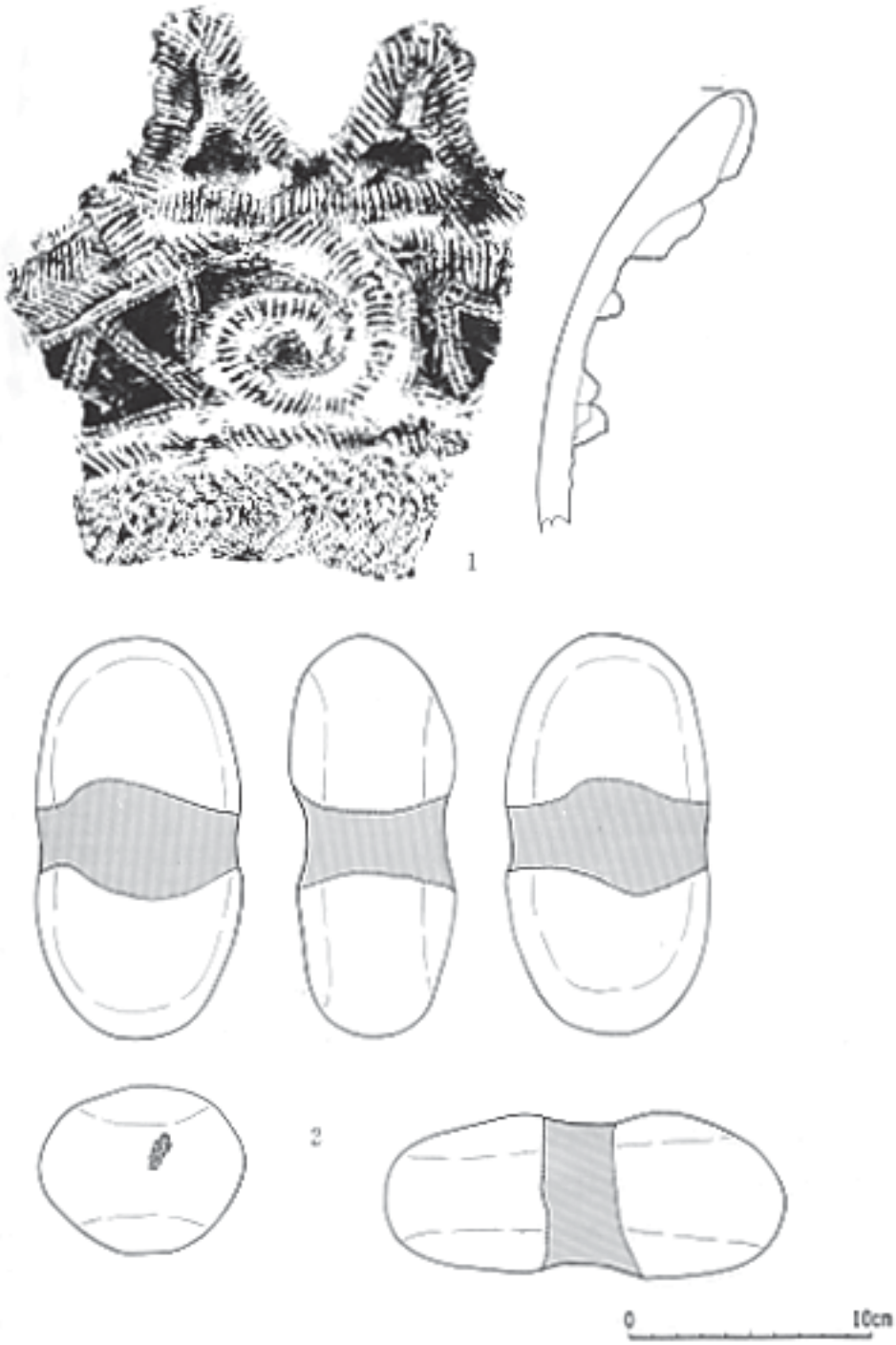
番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
28－43	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	単節横位回転　LR		I	124
44	E－89	Ⅳc	深鉢　胴部	単節横位回転　綾絡文　RL	調整	I	102
45	E－88	Ⅳc	深鉢　胴部	単節横位回転　綾絡文　RL	調整	I	103
46	E－88	Ⅳc	深鉢　胴部	羽状縄文	調整	I	106
47	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	羽状縄文	調整	I	105
48	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	羽状縄文	調整	I	104
49	E－89	Ⅳc	深鉢　胴部	撚糸文	調整	I	98
50	F－89	Ⅳc	深鉢　底部	撚糸文	調整	I	109
51	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	撚糸文	調整	I	108
52	F－89	Ⅳc	深鉢　底部	撚糸文	調整	I	107
53	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	撚糸文	研磨	I	111
54	E－89	Ⅳc	深鉢　胴部	撚糸文	調整	I	110
55	F－88	Ⅳc	深鉢　胴部	撚糸文（交差）	調整	I	122
56	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	不整撚糸文		I	117
57	F－88	Ⅳc	深鉢　胴部	不整撚糸文		I	118

第28図　第Ⅳc層出土遺物（5）



番　号	地点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
29－58	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	木目状撚糸文	調整	Ⅰ	113
59	G－88	Ⅳc	深鉢　胴部	木目状撚糸文	調整研磨	Ⅰ	112
60	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	木目状撚糸文		Ⅰ	114
61	F－88	Ⅳc	深鉢　胴部	木目状撚糸文		Ⅰ	116
62	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	木目状撚糸文		Ⅰ	115
63	E－88	Ⅳc	深鉢　胴部	多軸絡条体回転	調整	Ⅰ	119
64	F－89	Ⅳc	深鉢　胴部	多軸絡条体回転	調整	Ⅰ	120

第29図　第Ⅳc層出土遺物（6）



番号	地点	層位	器種・部位	外面の文様	内面	分類	整理番号
30-1	F-89	Ⅳc	深鉢・口頸部	突起　粘土紐貼付　鋸歯状押圧		Ⅱ$_1$	148

第30図　第Ⅳc層出土遺物（7）

第2節　出土遺物

1　土　　器

Ⅰ群　縄文時代前期の土器

1類　円筒下層式前半の土器に比定されるもの（第1節で扱った）

2類　円筒下層式後半の土器に比定されるもの（　　〃　　）

Ⅱ群　縄文時代中期前葉～後葉の土器

1類　円筒上層式前葉の土器に比定されるもの

2類　円筒上層式中葉の土器に比定されるもの

3類　円筒上層式後葉の土器に比定されるもの

Ⅲ群　縄文時代中期末葉～後期初頭の土器

1類　榎林式土器に比定されるもの

2類　最花式土器に比定されるもの

3類　大木10式併行期の土器に比定されるもの

4類　余市式土器群に比定されるもの

Ⅳ群　縄文時代後期前半の土器

1類　十腰内Ⅰ群土器に比定されるもの

Ⅴ群　縄文時代晩期の土器

今回の調査で出土したものは、変化に富んではいるがその数は少ない。各土器群の名称と分類基準は、先学諸氏の研究成果をもとにしたが、今回の調査で見られる状況等を踏まえ、上記のような基準をとった。なお、Ⅰ群については第1節で扱ったため、本節では省略する。

(1)　Ⅱ群1類　円筒上層式前葉の土器に比定されるもの

円筒上層a式土器（第31図1・2）

江坂（1970）・村越（1974）両氏設定の上層a_2式に比定できる土器群である。口頸部文様帯に太い粘土紐の隆帯を貼り付けている土器群である。太い粘土紐には撚糸の押圧が施されている。この部位には地文縄文は施されず、鋸歯状の幾何学的な文様が押圧施文されている。口縁部に大きな突起を有する。1には突起部から垂下する橋状把手が見られる。

(2)　Ⅱ群2類　円筒上層式中葉の土器に比定されるもの

円筒上層c式土器（第31図3・4、第32図5）

江坂・村越両氏の上層c式に比定できる土器群であるが、円筒上層b式以降の各型式において、そのメルクマールに不明瞭な点が若干感じられる。本報告書では、口頸部文様帯を粘土紐の貼り付けと刺突文で構成する土器群のみを本類とした。刺突文は、5に若干爪形状の意匠が見られるが、3と4ではその意匠は失われた刺突となっている。

(3) II群3類　円筒上層式後葉の土器に比定されるもの

円筒上層d式土器（第32図7・8）

江坂氏の上層d式・e式、村越氏の上層d_1式・d_2式に比定される土器群である。しかし、両氏の見解に若干異なる点があるため、本報告書では口頸部文様帯を粘土紐の貼り付けにより構成する土器群を本類とした。粘土紐の簡素化とともに口頸部文様帯が胴部へ下降しその範囲が広くなっている。7は粘土紐に押圧文が見られ器形等からも上層c式的であるが、刺突文の有無により本類に加えた。8は、穿孔直下にV字型の嘴状の把手が貼り付けられている。

円筒上層e式土器（第32～34図9・10・12）

村越氏の上層e式、江坂氏の上層f式に比定される土器群であるが、村越氏の見解を有力と見ているとともに最近の事例でも上層e式として報告されていることもあり、本報告書でも村越氏の見解に準拠したい。口頸部文様帯として胸骨状の沈線文がみられるが、地文縄文のみものもあり明確な主文様帯が失われたものもある。10は、今回の調査で出土した縄文土器の中で最大のものであり、砂層最下位でローム層に密着して出土した破片の接合個体である。

(4) III群1類　榎林式土器に比定されるもの（第34図13・14、第35図15～17）

口縁部が肥大化し、口唇部に太い沈線が描かれる土器群を本類としている。口唇部の沈線は、その端末においてループ状になっている。胴部においても太い沈線で文様を構成し、連弧状やループ状を呈していると思われる。今回出土したものは破片のみであるが、15は大型の深鉢形を呈すと思われる。また、17は、大木8b式深鉢形土器頸部の可能性もある。

(5) III群2類　最花式土器に比定されるもの（第7図4）

内傾する無文の口頸部を有し、頸部に連続刺突文、胴部に懸垂文が描かれている土器群である。第5号住居跡から出土したものは、2つないし3つの波状口縁で、胴部にはワラビ状の3本1組の懸垂文が描かれている。

(6) III群3類　大木10式併行期の土器に比定されるもの（第12図7・8、第35図18・19）

今回出土したもののなかで器形を把握できたものは18の1個体のみである。18は胴部に膨らみをもつ細長い深鉢形を呈すると思われる。沈線によるＪ字状文、波頭状文が見られ、Ｊ字状文内に刺突が行われている。また、第８号住居跡から出土したものに磨消しの区画を有するものが見られる。

(7) III群４類　余市式土器群に比定されるもの（第12図１・９・10）

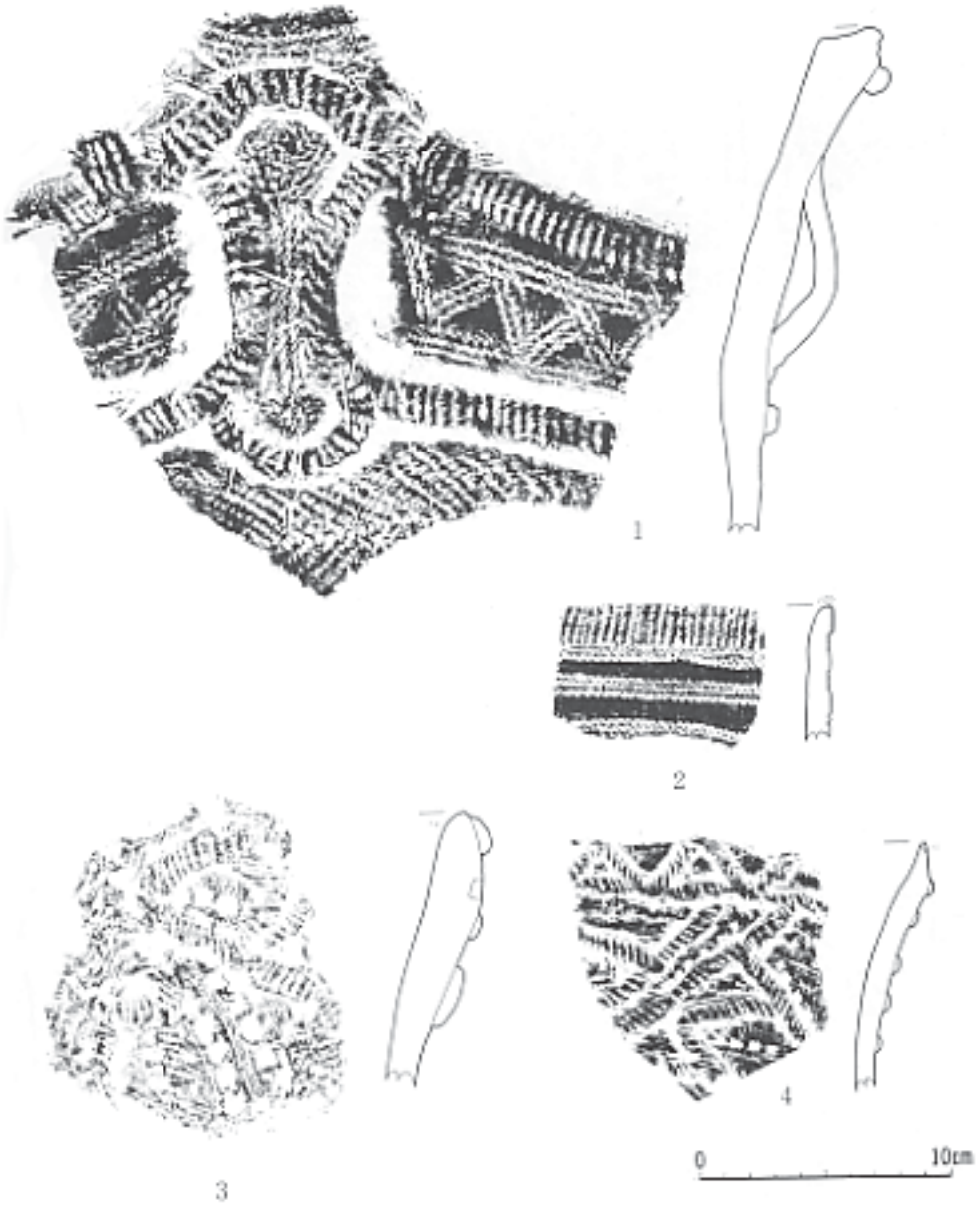
第８号住居跡のみの出土である。１は、幅2cm・厚０．5cmほどのバンド状（箍状）の隆起帯を粘土紐の貼り付けにより口縁部に１本、肩部に２本作り、さらにその頂部に連続刺突文を施文している。肩部のバンドの間を除く器表面全体にLR単節を横位回転させており、施文順位は、粘土紐貼り付け→縄文施文→連続刺突文である。胴部から肩部までゆるやかな膨らみを持って立ち上がり、肩部から頸部まで微妙にカーブを描いて内に向かうが、頸部から口縁部までは再びゆるやかに外反する。全体的に滑らかな曲線を描いている。口縁部に最大径を有し、器高30cm・口径18cm・肩部15cmほどの法量と准測される。余市式土器群中、静狩式・レンガ台式・ノダップⅡ式など終末期の型式が考えられるが、レンガ台式に比定されると思われる。共伴する土器型式については、堆積土中からの出土であるため、ここでの特定は避けたい。

(8) IV群１類　十腰内Ｉ群土器に比定されるもの（第36図22～27）

沈線による渦巻文（曲線文）と網目状文が見られる。

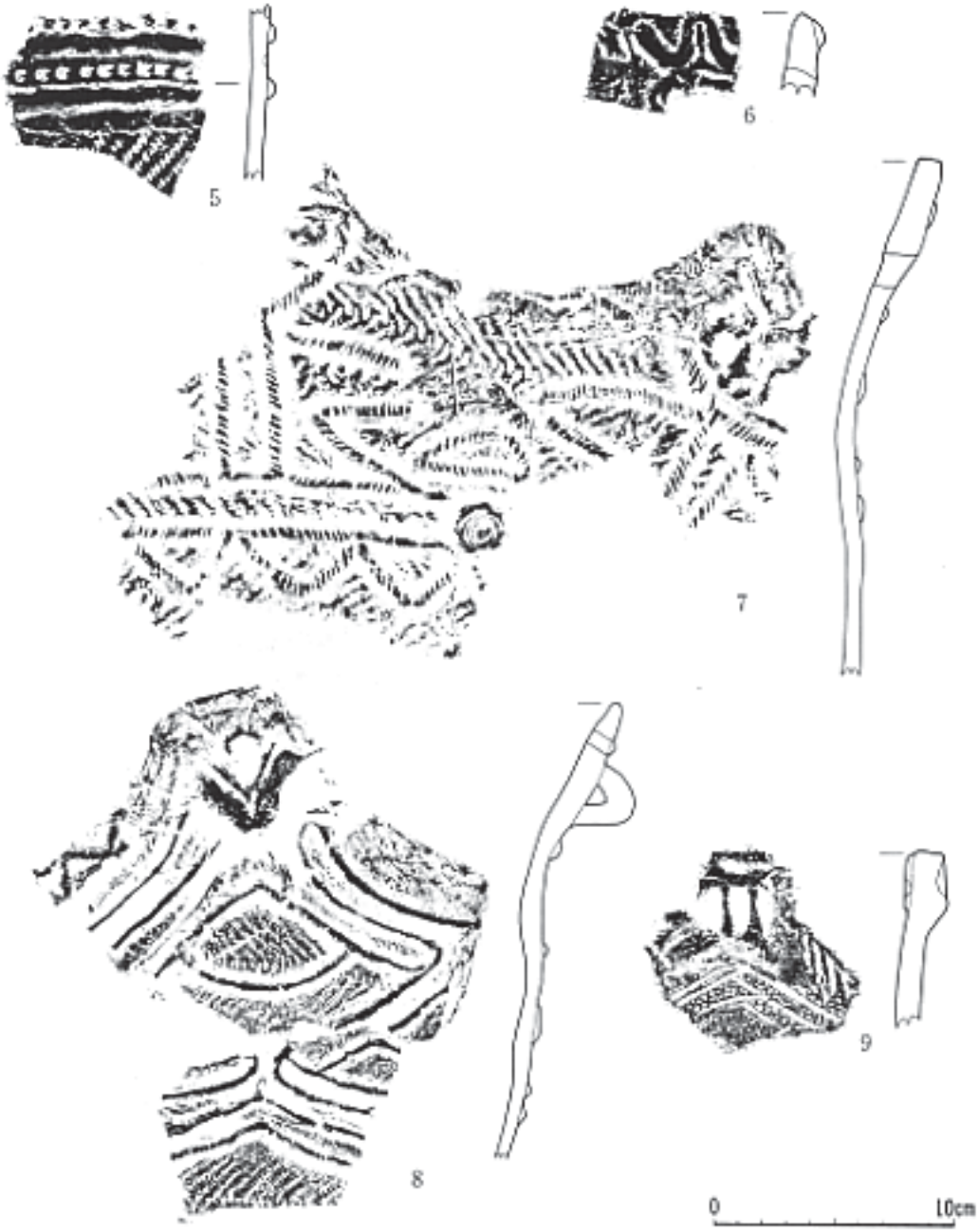
(9) Ｖ群　縄文時代晩期の土器（第17図１、第37図28・29）

本類は、明確に型式を特定できない。28は条痕文を施された土器である。このような条痕文土器は、後期後半から現れ晩期に続くことが知られている。28についてはロ縁部の小突起から晩期の土器とだけしておきたい。第10号住居跡で埋設された土器については、後期から同様の粗製土器があるため、後期後半から晩期の粗製土器としておきたい。（小林）



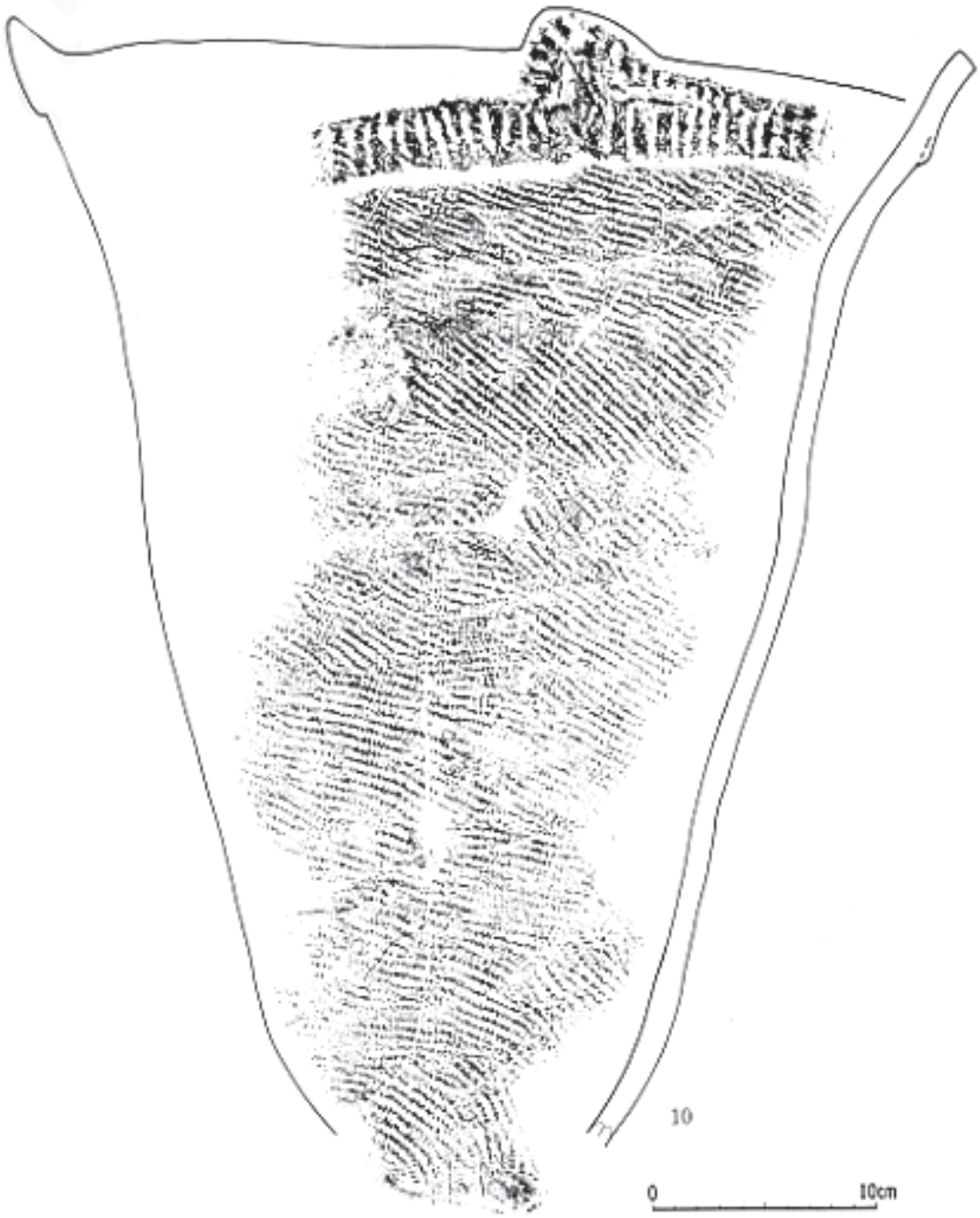
番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
31－1	G－88	間層	深鉢　口縁	弁状突起，把手，押圧（鋸歯状）		II_1	149
2	H－88	間層	深鉢　口縁	平口縁，押圧（平行）		I_2～II_1	150
3	G－88	間層	深鉢　口縁	粘土紐貼付，刺突		II_2	152
4	F－89	間層	深鉢　口縁	粘土紐貼付，刺突		II_2	151

第31図　遺構外出土土器（1）



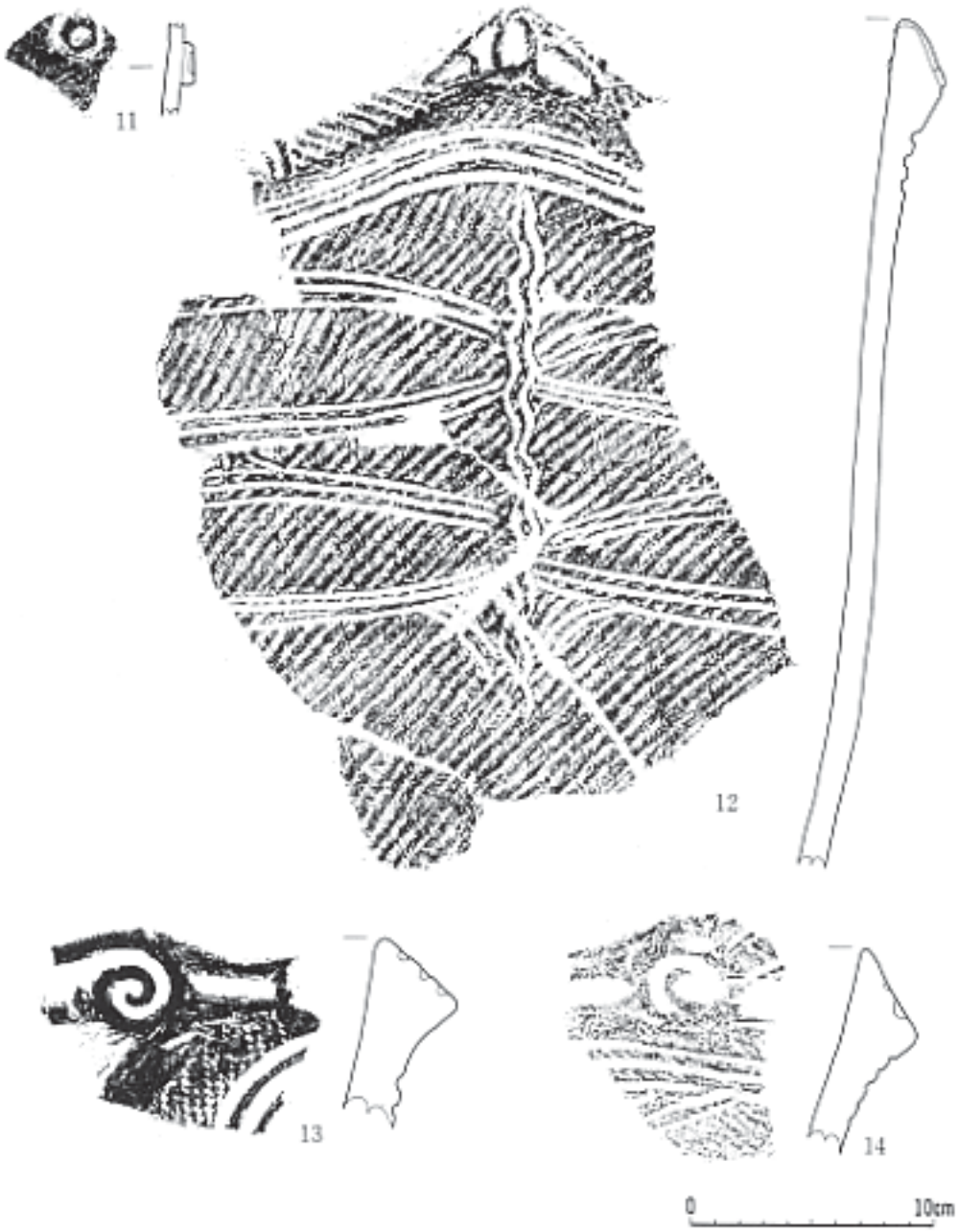
番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
32－5	G－88	間層	深鉢　頸部	粘土紐貼付，刺突		II_2	153
6	G－88	間層	深鉢　口縁突起	粘土紐貼付		II_3	160
7	G－85・86	Ⅳ層	深鉢　口縁	粘土紐貼付，		Ⅱ3	172
8	G－88	間層	深鉢　口縁	粘土紐貼付，把手		Ⅱ3	154
9	G－88	間層	深鉢　口縁	沈線		Ⅱ3	155

第32図　遺構外出土土器（2）



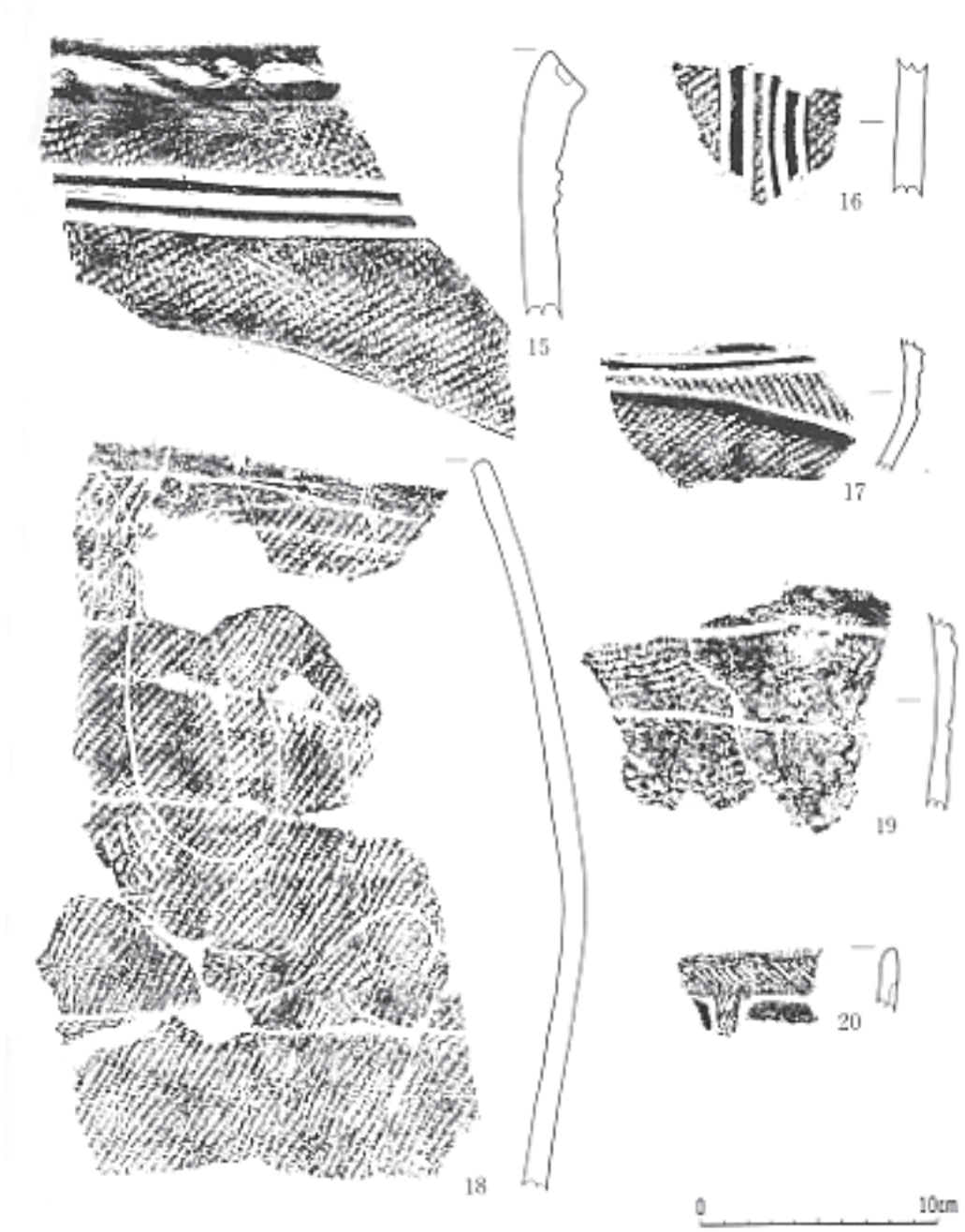
番号	地点	層位	器種・部位	外面の文様	内面	分類	整理番号
33-10	H-88	間層	深鉢	LR単節		II_3	173

第33図　遺構外出土土器（3）



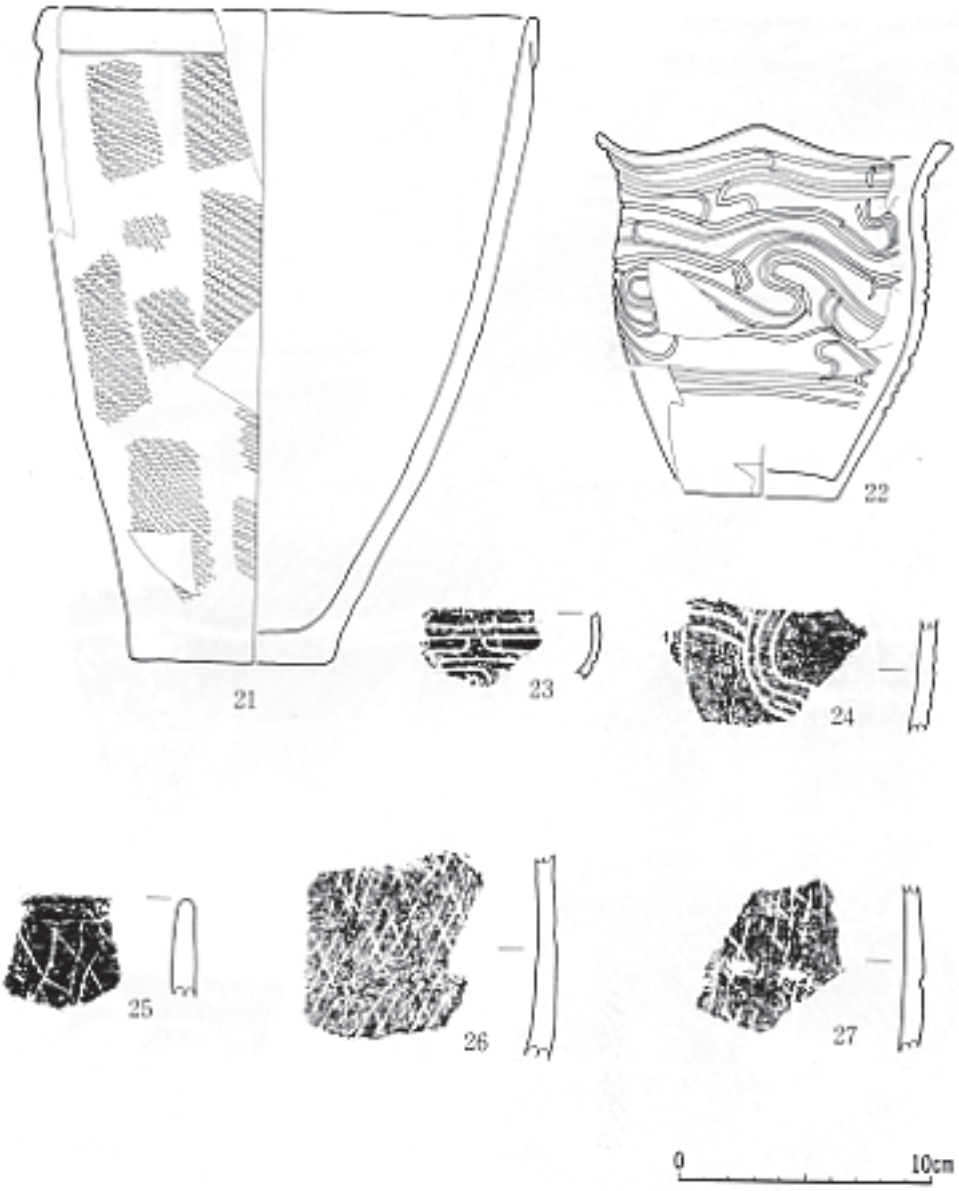
番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
34－11	Ⅰ－39	Ⅳ層	深鉢　口縁	ぼたん状貼付け		$Ⅱ_3$	145
12	H－39	Ⅳ層	深鉢	沈線		$Ⅱ_3$	146
13	H－88	間層	深鉢　口縁	口唇部肥大　渦巻状沈線		$Ⅲ_1$	159
14	H－83	Ⅳ層	深鉢　口縁	口唇部肥大　渦巻状沈線		$Ⅲ_1$	156

第34図　遺構外出土土器（4）



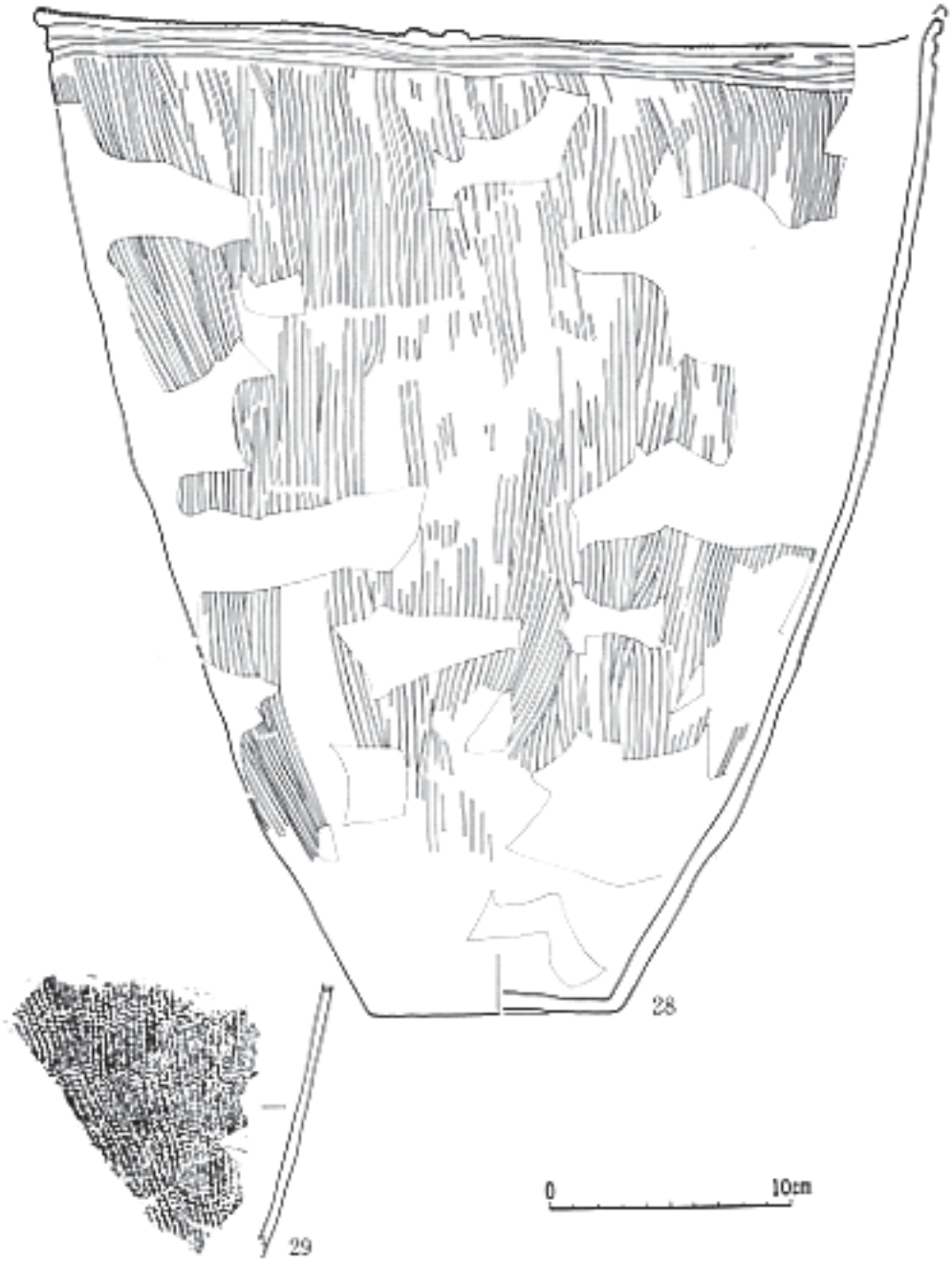
番　号	地　点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
35―15	G－88	間層	深鉢　口縁	口唇部肥大，渦巻状沈線，LRL複節		III_1	157
16	G－88	間層	深鉢　胴部	沈線，LRL複節		III_1	162
17	C－88	間層	深鉢　頸部	沈線，RLR複節		III_1	161
18	C－81・85	Ⅳ層	深鉢	J字状文（刺突），波頭状文，RL単節		III_3	147
19	G－88	間層	深鉢　胴部	磨消縄文		III_3	163
20	H－88	間層	深鉢　口縁	磨消縄文		Ⅲ	167

第35図　遺構外出土土器（5）



番　号	地点	層位	器種・部位	外面の文様	内　面	分　類	整理番号
36－21	H－88	間層	深鉢	折返口縁，LR単節		Ⅲ	174
22	G－80	Ⅳ層	深鉢	波状口縁，沈線		$Ⅳ_1$	175
23	H－88	間層	鉢？　口縁	平口縁，沈線		$Ⅳ_1$	169
24	H－88	間層	深鉢　胴部	沈線		$Ⅳ_1$	168
25	H－88	間層	深鉢　口縁	網目状		$Ⅳ_1$	164
26	G－88	間層	深鉢　胴部	網目状		$Ⅳ_1$	165
27	G－88	間層	深鉢　胴部	網目状		$Ⅳ_1$	170

第36図　遺構外出土土器（6）



番号	地点	層位	器種・部位	外面の文様	内面	分類	整理番号
37-28	H-83	Ⅳ層	深鉢	小突起，沈線，刻目，状痕		V	176
29	H-89	間層	深鉢	LR単節		V	177

第37図　遺構外出土土器（7）

2　石器・石製品

剥片石器27点、礫石器6点、石製品3点出土した。総点数が少ないため、一般的な名称を用いて分類し、遺構内、遺構外出土のものを一括して記載する。計測表は表2で一括表示する。なお、計測値は残存部の数値である。

(1) 剥片石器

石鏃（第13図1～4・6、第38図1～4）

9点出土した。内訳は、遺構内出土5点、遺構外出土4点である。遺構内出土のものは、第8号住居跡からの出土である。凹基無茎鏃が4点（1・2・4・6）あり、1・2・6は形状がほぼ同様である。6はピッチ痕が残っており、1・2にはみられない。4は前述のものに比べて大きめであり、周縁部のみ調整している。刃部が丸みを帯びており、両面にピッチ痕がみられる。3は凸基有茎鏃で先端部が摩滅しており、石錐としても使用された可能性がある。遺構外出土のものは、凹基無茎鏃1点、尖基無茎鉄1点、平基有茎鏃2点である。38図4は、平基有茎鏃で先端部を欠失している。38図2は尖基無茎鏃の木葉形、38図3は平基有茎鏃で先端部と基部の一部を欠失している。

石槍（第13図8、第38図5～8）

5点出土した。第8号住居跡出土の13図8は、両面を全面剥離調整している。先端部を欠失しているものの、ほぼ完形品である。茎部の先端は丸みをおびている。器厚が薄く、ナイフとしても使用していた可能性がある。他の4点は全て基部のみの出土であり槍先部分は欠失している。38図5・7は尖基で、38図6・8は平基である。

石錐（第13図5）

1点出土した。五角形を呈し、先端部は使用痕とおもわれる摩滅がみられる。基部は薄く尖っている。

石匙（第39図9）

1点出土した。撹乱層からの出土である。横長剥片を素材とした縦型石匙である。表面右側縁部に調整を加え刃部としている。左側縁部は若干調整がみられるが打瘤痕が残っており、ほとんど調整されていない。つまみは、やや右よりに作られていて、両側を両面から調整して抉りを作出している。刃部両面にはポリッシュと思われる光沢がみられる。

石箆（第13図7）

1点出土した。第8号住居跡からの出土で完形品である。両面を全面剥離調整している。基部は丸みを帯びている。刃部は両面から調整を施し直線的であり、断面は凸レンズ状である。両側縁から刃部にかけて直線的で、刃部付近から若干ふくらんでいる。

不定形石器（第13図9、第14図10～13、第39図10～14）

10点出土した。第8号住居跡出土の13図9は周縁部のみを調整しており主要剥離面を大部分残している。14図10は主要剥離面の片縁部ともう一方の縁部の一部を調整し刃部を作出している。遺構外出土の39図10は、先端に刃部を作出し、尖った部分が摩滅しており石錐として使用した可能性がある。39図11は基部付近に黒色の物質が付着している。39図12は一端に礫面を残しており、両側縁部の約半分を調整しており、先端部に抉入がみられる。39図13は周縁部を調整しており幅広部に刃部を作出しており角度は急である。一辺が正面方向からの力による折損面であり、二次的な加工がみられないことから、石篦の刃部の可能性もある。

(2) 礫石器

磨製石斧（第14図14）

1点出土した。節理面で剥離した欠損品で、基部と刃先部分は残っていない。表面に製作過程の研磨によるものとみられる擦痕がみられ、片側縁に二次加工の調整がみられる。

石錘（第21図9、第30図2）

2点出土した。第9号土壙出土の21図9は、凝灰岩を素材とし、周囲に敲きによる帯状の溝を作出している。第30図2は、やや細長いずんぐりした石英安山岩を素材とし、全体がなめらかであり、中央部は特にていねいに研磨され若干くぼんでいる。

凹石（第15図16、第40図15）

2点出土した。第8号住居跡出土の第15図16は楕円形の凝灰岩礫を素材とし、両面と稜部の3面に敲打による数箇所のくぼみがある。第40図15はやや角張った安山岩を素材とし、広い面を機能面として使用している。くぼみは直径約2cm大で各面に1つずつあり、敲打によるものである。さらに機能面にはスリがみられ、稜部には擦痕がみられる。

台石（第15図17）

1点出土した。4個体に割れた状態で出土した。接合した結果、楕円形の安山岩礫を素材としており、一部欠失していた。中央部に敲打によるものとみられるくぼみがあり、そこを中心に割れ、そのまわりには擦痕がみられる。

(3) 石製品

石冠（第40図16）

1点出土した。閃緑岩を素材とし全面をていねいに磨いている。頭部から基底部が一体化し、底面がほぼ平坦である（呼称参考：中島、1983）。正面から見ると半円を両端で切ったような形状で、基底部はやや膨らんだ長方形を呈している。側面は三角形で角の部分は瘤状に張り出し

ている。両端部は敲きによる調整が施されており、ややくぼんでいる。

青竜刀形石器（第15図18）

1点出土した。蛇紋宕を素材とし、柄部のみの出土であるため全体の形は不明であるが、破損部では棟部・刃部に向かう広がりが明瞭である。製作段階は、ていねいに研磨されていることから、最後の仕上げの第四段階と考えられる（富樫、1983）。また、棟区のカーブがゆるく階段状をなさないこと、柄部が細身であることから、A－2もしくはB－2形式（富樫、同）のいずれかに分類されると考えられる。

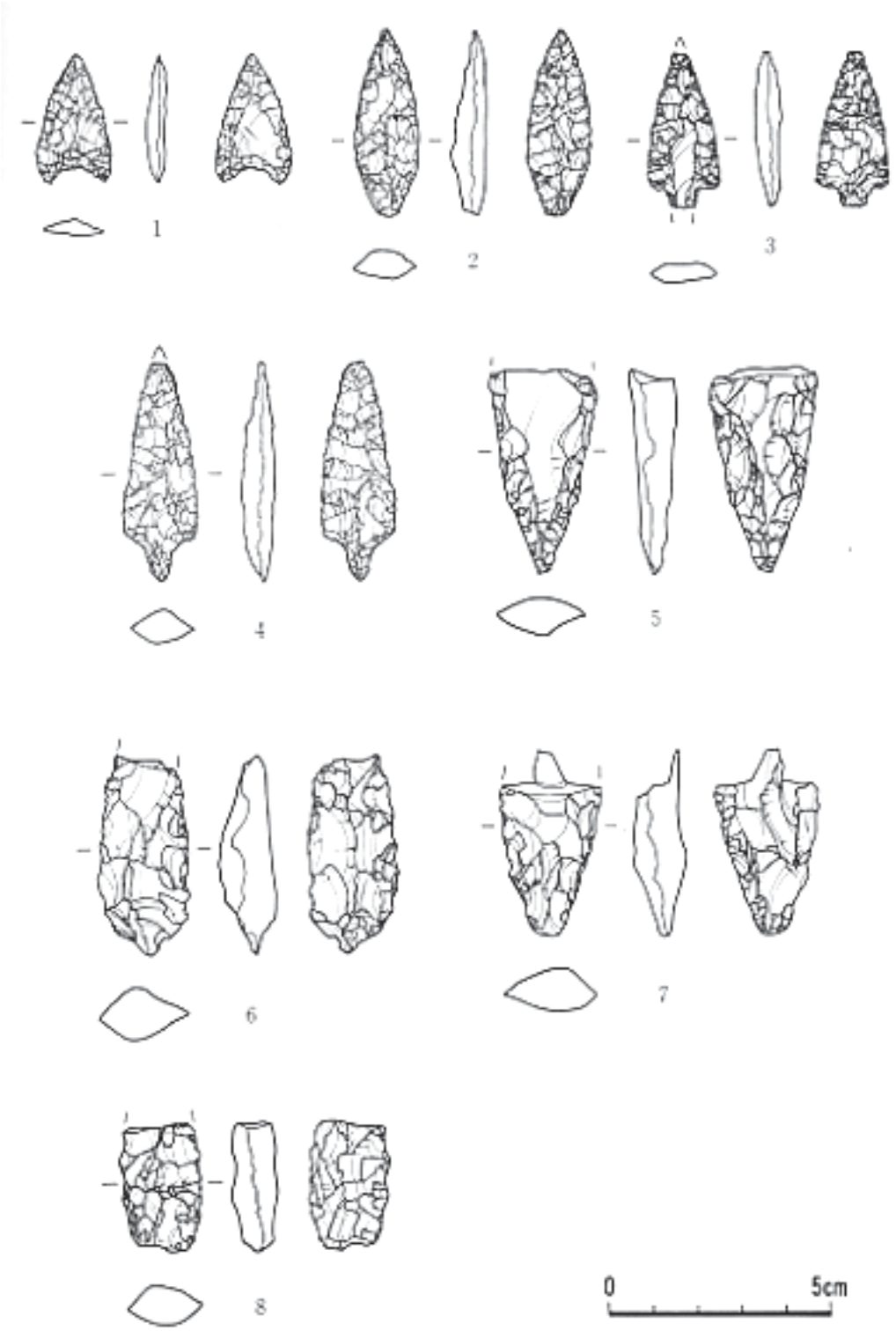
有孔石製品（第14図15）

1点出土した。泥岩を素材とする垂飾品である。中央部を貫通する穿孔のほかに、側面両端から中心に向かい2つの穴が施され、一方は穿孔につながり、他方はつながっていない。

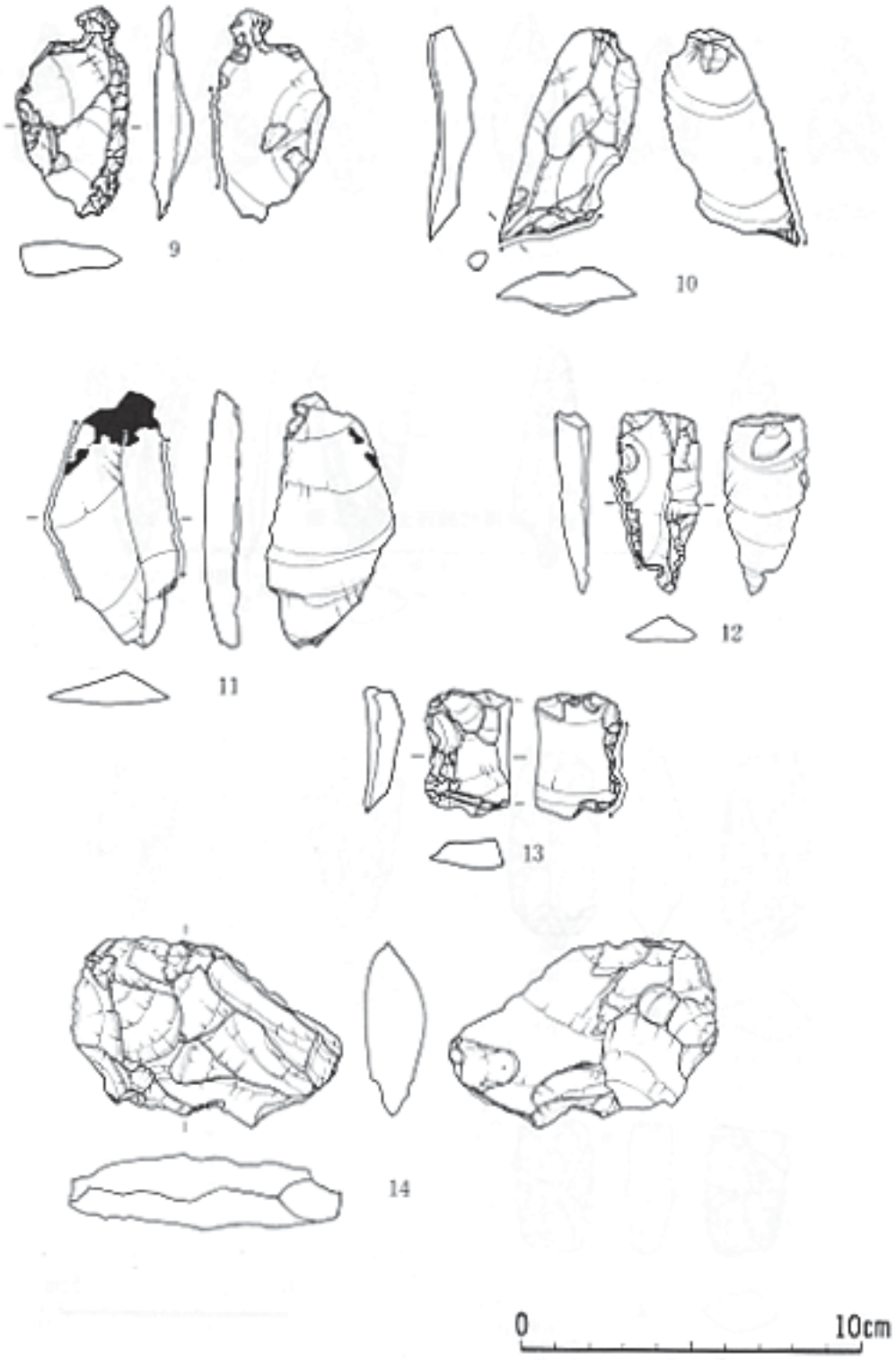
（田澤）

表2　出土石器計測表（抄）

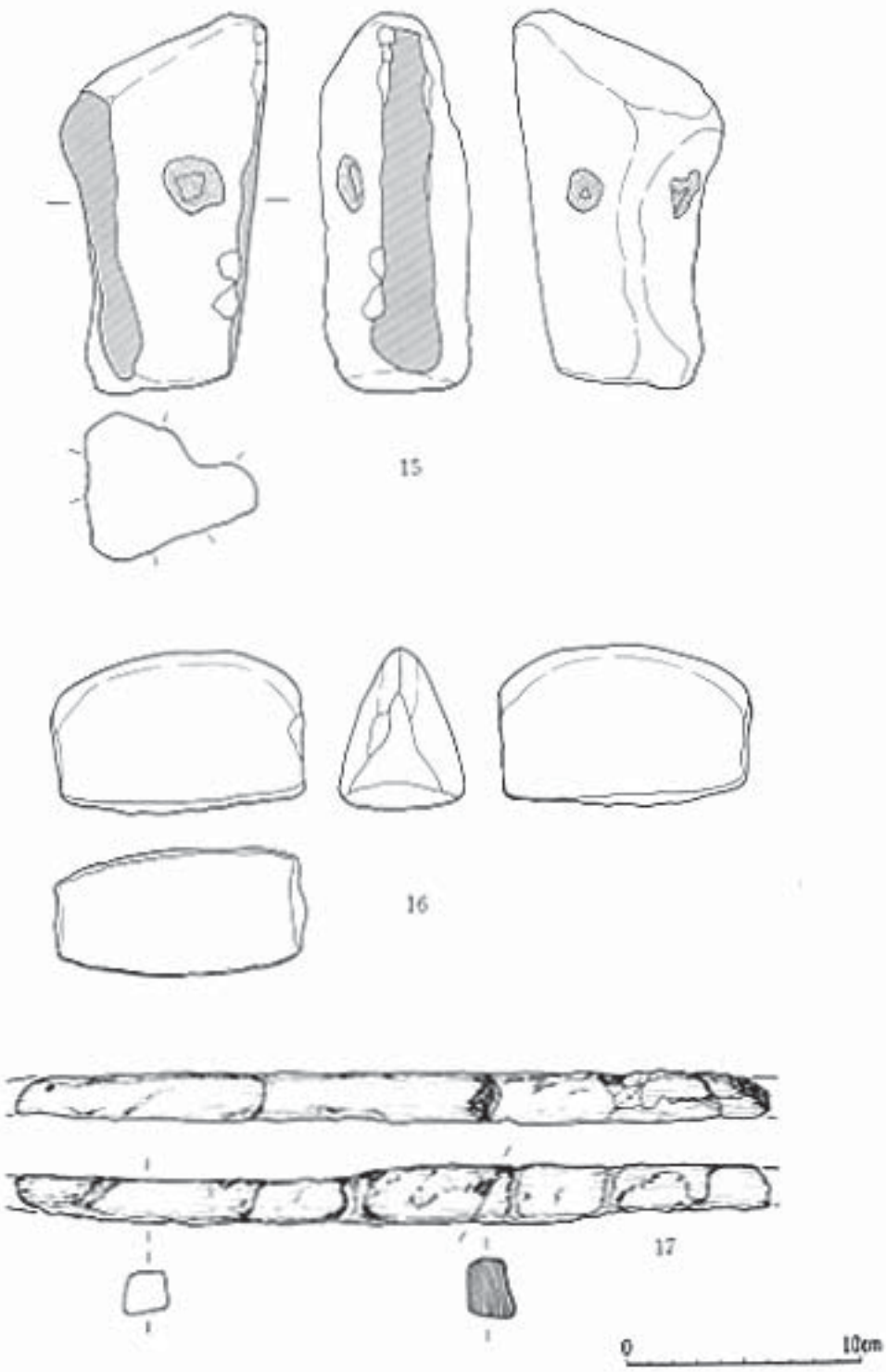
図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	器種	整理番号	備考
			長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）				
13－1	8H	3	22	14	4	0．7	硬頁	鏃	1	凹基無茎
2	〃	〃	22	15	4	0．8	〃	〃	2	〃　（先欠）
3	〃	〃	40	13	6	2．4	〃	〃	5	尖基有茎（先欠）、錐？
4	〃	4	25	18	4	1．2	頁	〃	4	凹基無茎
5	〃	〃	33	15	7	2．8	〃	錐	6	
6	〃	3	21	14	3	0．6	〃	鏃	3	凹基無茎
7	〃	4	68	29	10	14．6	硬頁	箆	18	
8	〃	〃	83	26	8	12．8	〃	槍	11	有舌尖頭器
9	〃	〃	23	16	5	1．6	珪頁	不	21	
14－10	〃	3	56	34	11	14．6	頁	〃	20	
11	〃	4	58	44	20	40．8	〃	〃	23	
12	〃	P_2	63	51	52	208．3	〃	〃	24	
13	〃	4	83	39	35	80．1	頁	〃	22	
14	〃	P_3	86	46	11	49．5	凝泥	斧	29	破損
15	〃	4	31	29	16	11．0	泥	飾	42	有孔石製品
38－1	G－39	IV	29	17	4	1．5	硬頁	鏃	8	凹基無茎
2	G－84	〃	42	14	8	3．7	頁	〃	10	凸基有茎（茎欠）
3	G－83	III	35	17	6	2．7	〃	〃	9	平基有茎（先・茎欠）
4	15　H	P_1	50	17	8	4．5	硬頁	〃	7	凸基有茎（先欠）
5	J－67	III	46	25	11	10．1	〃	槍	13	基部・尖基
6	G－84	II	45	20	15	10．1	〃	〃	14	〃・平基
7	J－67	III	42	23	11	8．1	〃	〃	12	〃・尖基
8	G－84	II	29	18	10	6．1	〃	〃	15	〃・平基
39－9	H－62	撹	63	33	11	16．4	〃	匙	16	縦型
10	H－85	IV	63	41	14	19．7	百	不	26	
11	表　採	－	75	38	11	22．8	〃	〃	27	
12	J－51	I	53	25	11	10．8	硬頁	〃	17	
13	J－63	－	25	37	12	10．7	頁	〃	19	箆？
14	表　採	－	80	56	22	79．0	頁	〃	28	



第38図　遺構外出土石器(1)



第39図　遺構外出土石器(2)



第40図　遺構外出土石器(3)・石冠・木製品

第Ⅴ章　歴史時代の遺構と遺物

第１節　検出遺構

1　竪穴住居跡

第１号住居跡（第41～44図）

[位　　置]　K・L－73・74、第Ⅵ層で確認したが、北東隅では貼床が消滅していた。

[重　　複]　なし。

[平面形・規模]　隅丸正方形を呈し、主軸方位はS－23°　－Eである。壁長は、南壁4．1m・西壁4．4mである。

[　壁　]南壁と西壁がわずかに残っていた。壁高は、南壁・西壁ともに20cmである。

[　床　]確認時において既に床が消滅している部分もあったが、全体的に貼床である。床面は平坦だが、若干北側に下る傾斜が見られる。

[壁　溝]　南北の壁下で検出した。深さは10cmである。

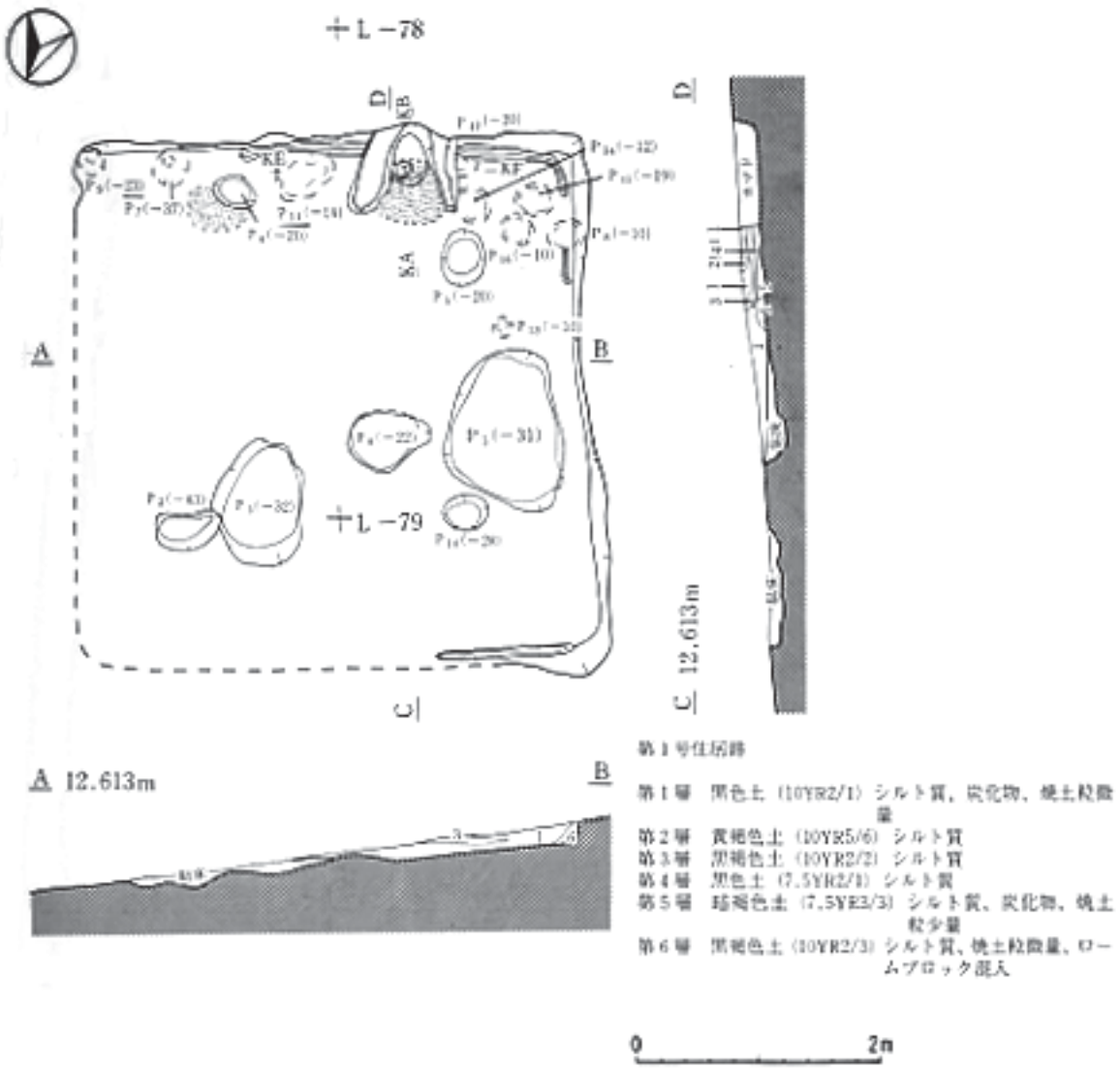
[柱　穴]　ピットは合計16基検出した。このうち柱穴は、北側ではP_2とP_{10}と思われるが、南側では特定できなかった。なお、P_4は焼土化した床面を掘り込んでいる。

[カ　マ　ド]南壁西寄に位置する。南側の張り出しが、煙出孔あるいは煙道部の一部にあたる。袖は、粘土を貼り構築している。燃焼部に土師器坏（4）が逆さに置かれ、支脚として使用されている。燃焼室自体の高さは、検出状況が良好でないため不明だが、住居廃絶時に崩壊したと考えられる。土師器甕のかなり細かい破片が堆積土中から出土し、カマド崩落土内と判断した。また、このカマドの東側1mに焼土が見られ、床面が焼けた一次的な焼土である。確認状況が良好でなかったため断定でさないが、カマドの作り替えの可能性がある。

[堆　積　土]6層に分層した。1・5・6層に炭化物や焼土粒が見られる。火山灰は見られない。

[その他の特秩施設]　P_1には、木灰が2cmほどの厚さで数枚堆積し、焼土粒や土師器片も含まれている。P_1の性格として、灰捨て場的な用途が考えられる。

[出　土　遺　物]土師器と須恵器片が出土した。4は、カマドの支脚として使用され、内面にはミガキ調整が施されている。2は、南壁から床面に傾き、底部を壁溝に落とした状態で出土した。須恵器片は、1・5層・床面・P_5から出土している。この中に坏の破片は含まれておらず、いずれも甕・壷類である。また、少数破



第41図　第1号住居跡

片だが、須恵系土器と内面黒色処理の土師器坏も出土している。また、粒状や柱状の炭化材が、南西隅から対角線上に床面やや上から出土している。

第2号住居跡（第45～46図）

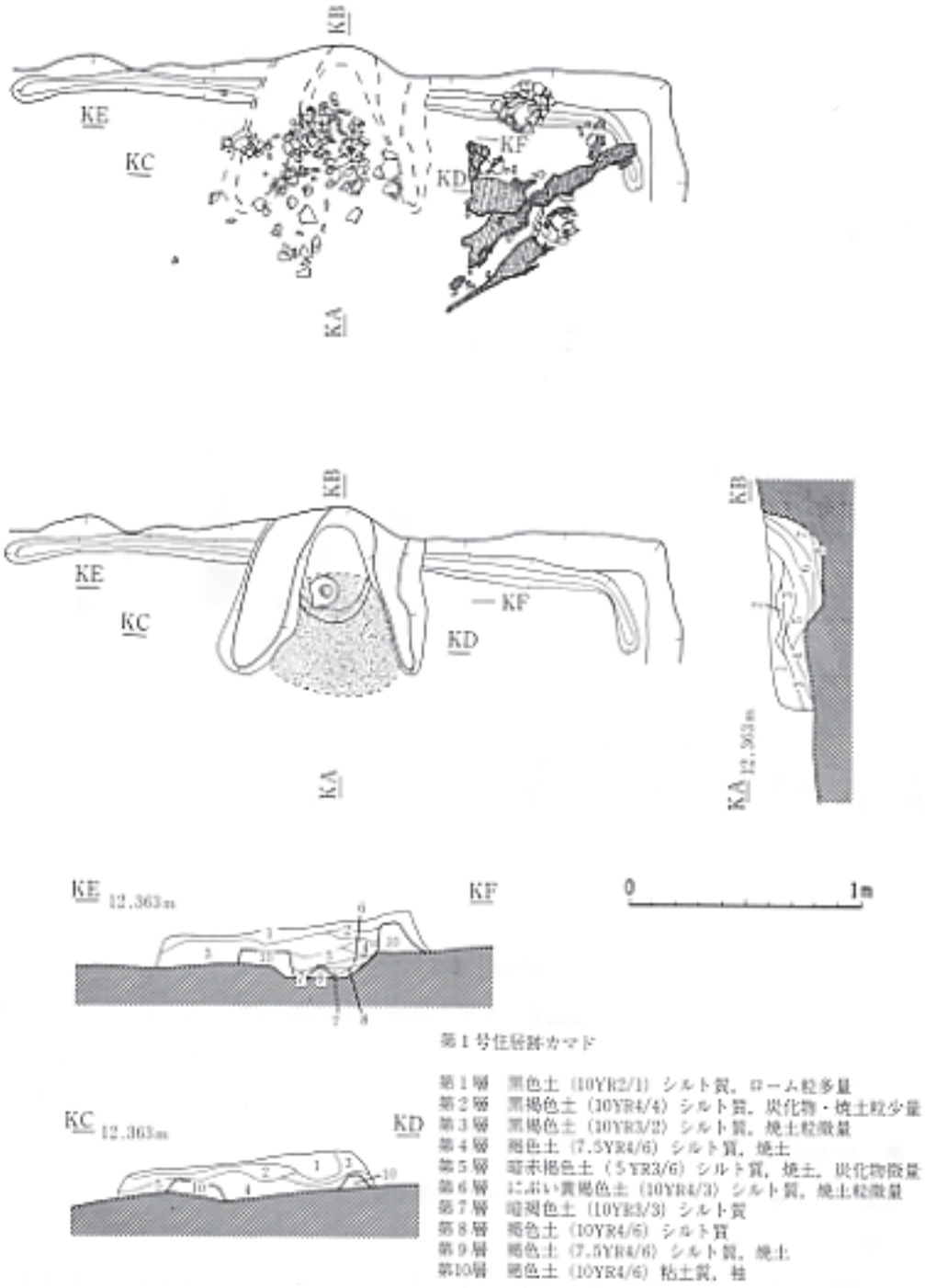
[位　　置]　K・L－77・78、第□層で東壁が失われた状態で確認した。

[重　　複]　なし。

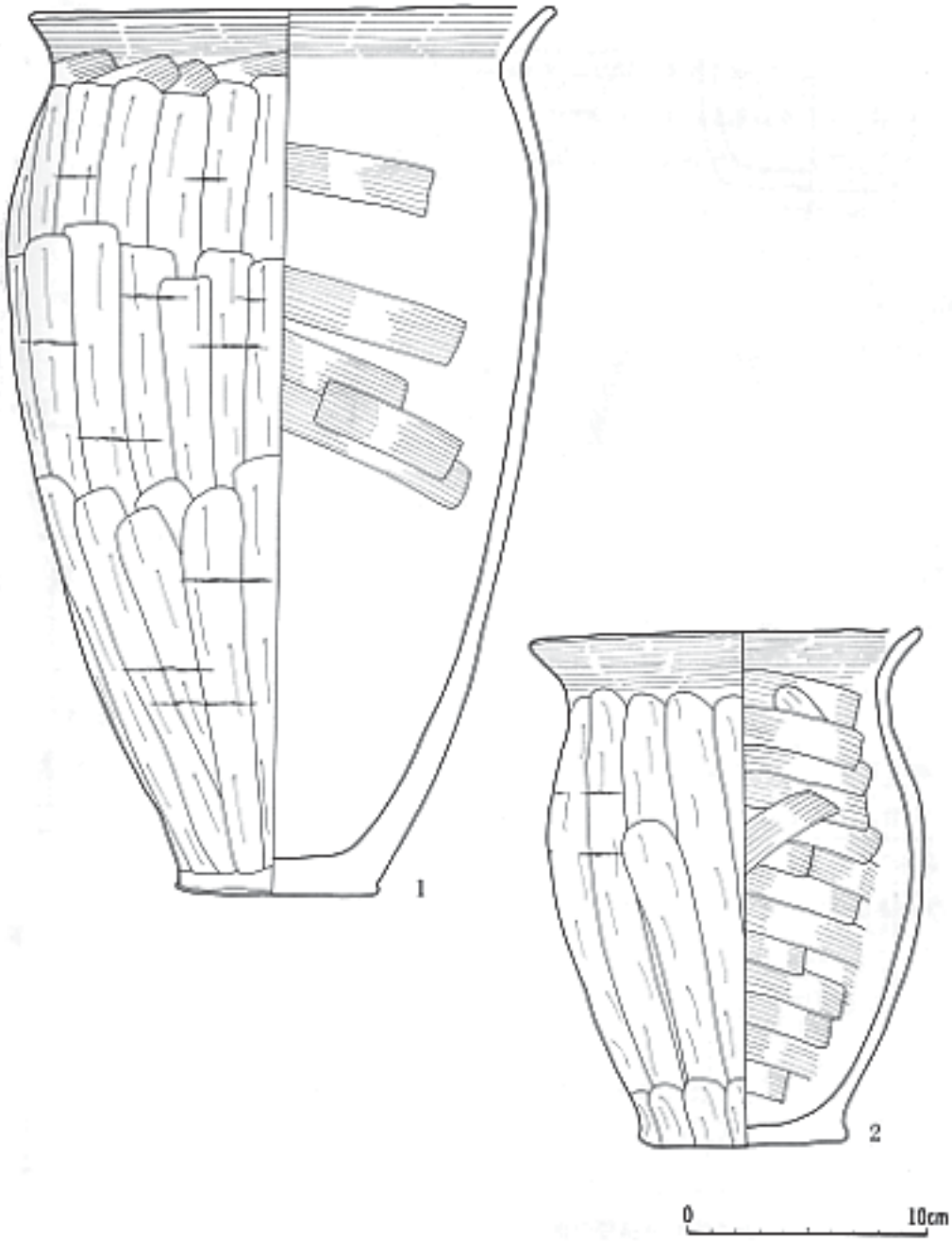
[平面形・規模]　隅丸方形を呈し、主軸方位はS－170　－Eである。壁長は、南壁3．3m・北壁3．3m・西壁3．0mで、東壁は3．2mと思われる。

[　　壁　　]壁高は、南壁・北壁・西壁でいずれも60cmである。

[　　床　　]床は、西側で第Ⅵ層を利用し、中央付近から東側は傾斜地形であるためか貼

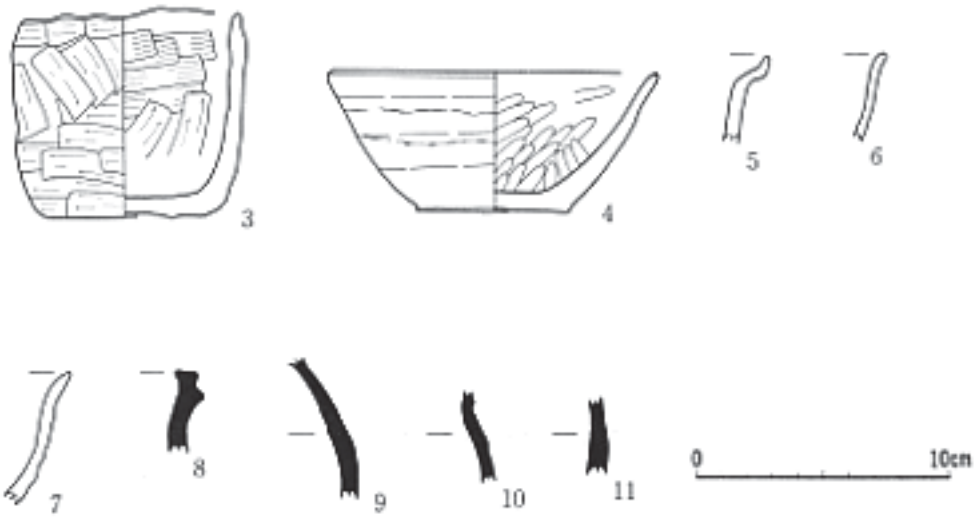


第42図　第1号住居跡カマド



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
43-1	カマド	土師器　甕	22.0	37.5	8.5	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ		砂底	甕Ⅰ$_1$	57
2	床直	土師器　甕	16.5	21.5	8.8	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラナデ	砂底	甕Ⅰ$_2$	30

第43図　第1号住居跡出土遺物（1）



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
44-3	カマド	土師器	8.5	7.7	6.3	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ		小型	25
4	カマド	土師器　坏	13.2	5.5	6.2	輪積み痕					ヘラミガキ	回転糸切り	坏$_1$	8
5	4	土師器　甕	－	－	－	ロクロ	－	－	ロクロ	－	－	－	甕Ⅱ□	46
6	床直	土師器　坏	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	ロクロ	ロクロ	－	－	坏$_4$	45
7	1	土師器　坏	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	ミガキ	ミガキ	－	－	坏$_3$	47
8	1，P$_1$	須恵器　長頸壷	－	－	－	ロクロ	－	－	ロクロ	－	－	－		52
9	カマド5	須恵器　長頸壷	－	－	－	－	ロクロ	－	－	ロクロ	－	－		53
10	カマド5	須恵器　長頸壷	－	－	－	－	ロクロ	－	－	ロクロ	－	－		54
11	1	須恵器	－	－	－	－	ヘラケズリ	－	－	－	－	－		55

第44図　第1号住居跡出土遺物（2）

床としている。床面は平坦である。

[壁　　溝]　南壁カマド以東、北壁全長、西壁北側に壁溝が構築されている。東壁直下にも構築されていたと思われる。また、南壁直下を走る壁溝はカマド右袖の下で途切れるため、壁溝の構築はカマド構築以前に行われている。

[柱　　穴]　遺構内において計3基のピットを検出した。柱穴の配置は、不明である。また、壁外北西側に計2基のピットを検出したが、この関係も不明である。

[カ　マ　ド]南壁西寄に位置し、半トンネル式の煙道を有する。煙道南端で第7層の下部が焼けており、この層が煙道の天井となっていたと思われる。袖は、粘土を貼って構築している。燃焼部から土師器坏の破片（4）が出土したが、支脚としては用いられていない。煙道底面から土師器甕の胴部破片が出土し、流れ込みと思われる。燃焼部の認定が遅れ、燃焼室自体の高さは不明であるが、住居廃絶時に崩壊したと考えられる。

[堆　積　土]18層に分層した。全層にわたり炭化物の混入が見られ、6・9・16層に多く含まれている。また、6～9・12・14～16層に焼土の混入が見られ、特に12層が多い。火山灰は見られない。

[その他の特殊秩施設]　なし。

[出　土　遺　物]土師器・須恵器片がともに少数出土している。土師器甕における主な外面調整は胴部のヘラケズリで、土師器坏ではロクロ整形無調整である。1は、第1・6・10層から出土した接合個体で鉢形とでも呼べる器形で、底面は砂底である。須恵器については、カマド付近から出土した坏が唯一形状を判断できるもので、その他は厚手の細片のみで甕・壷類と思われる。

第3号住居跡（第47～48図）

[位　　置]　Ⅰ－71、第Ⅵ層で北西側が消滅した状態で確認した。

[重　　複]　なし。

[平面形・規模]　北西側を失うが不整方形を呈すると思われ、主軸方位はS－90°　－Wである。唯一残る南壁の壁長は、2．8mである。他の壁長もほぼ同様と思われる。

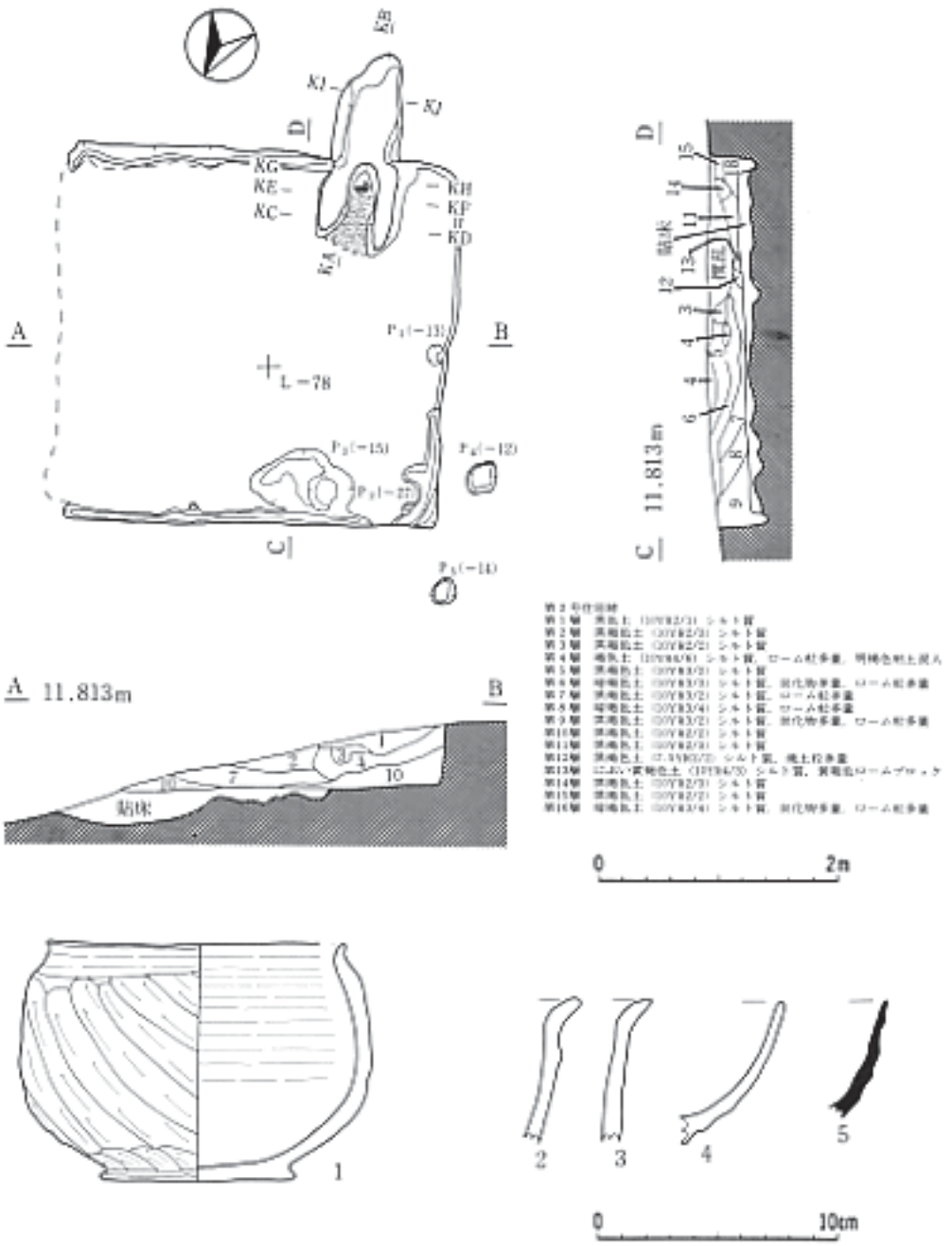
[　壁　]南壁及び東壁の壁高は、35cmである。

[　床　]ほぼ全体が貼床である。床面は平坦面を呈し、踏み締めは感じられない。

[壁　　溝]　なし。

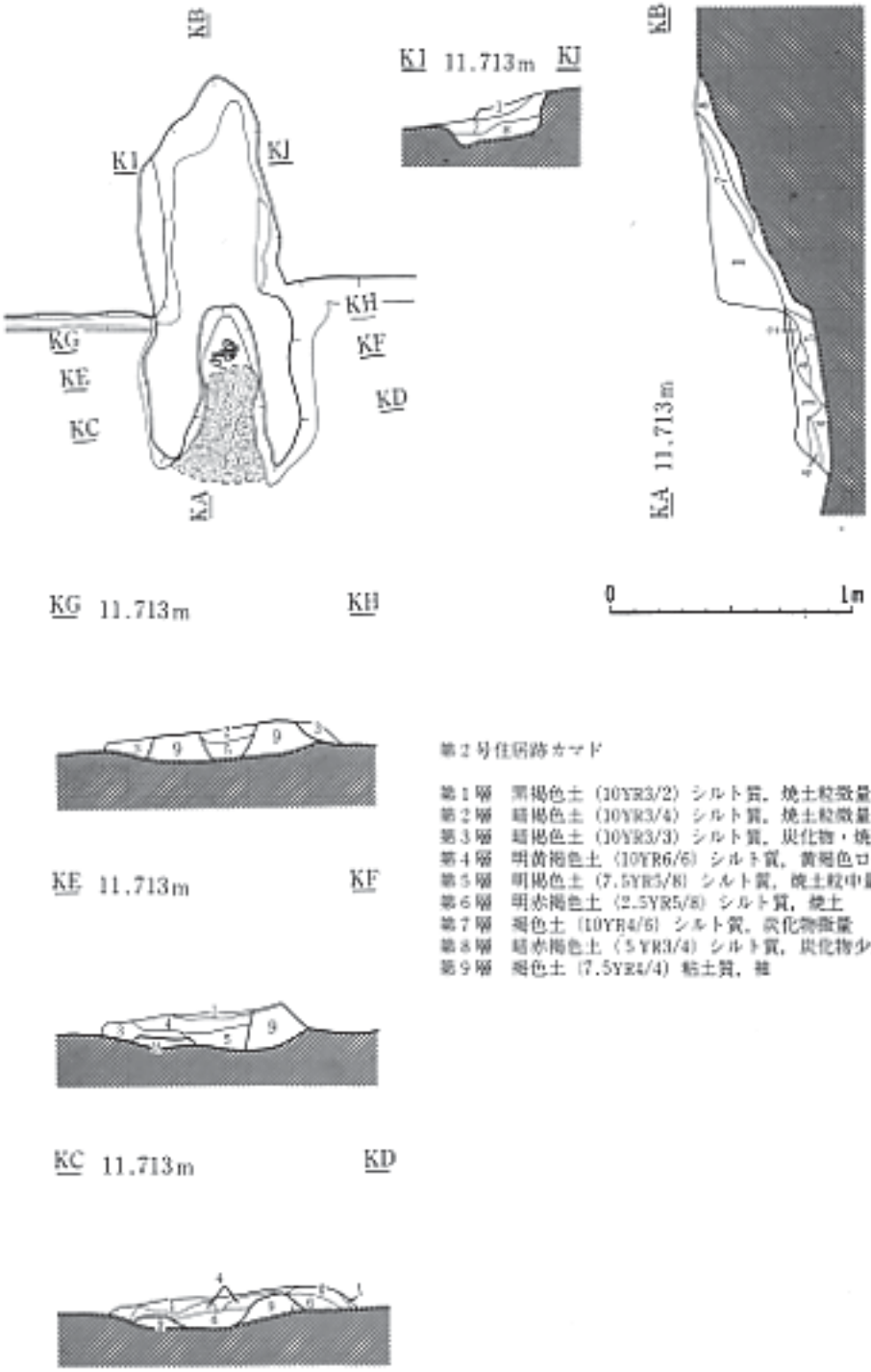
[柱　　穴]　貼床下でピット1基を検出した。開口部60×75cmで40cmの深さを持つ。

[カ　マ　ド]西壁南寄に位置するが、煙道部は消滅により不明である。袖は、粘土を貼っ



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
45-1	1・6・10	土師器　小型	12.3	10.0	8.3	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	砂底	小型	19
2	7	土師器　甕	－	－	－	ナデ	ヘラケズリ	－	ナデ	－	－	－	甕Ⅱ$_1$	48
3	1	土師器　甕	－	－	－	ロクロ	輪積痕	－	ナデ	－	－	－	甕Ⅱ$_2$	49
4	カマド	土師器　坏	－	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラナデ	ロクロ	ロクロ	－	坏$_3$	51
5	カマド，床	須恵器　坏	－	－	－	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	－	坏a	50

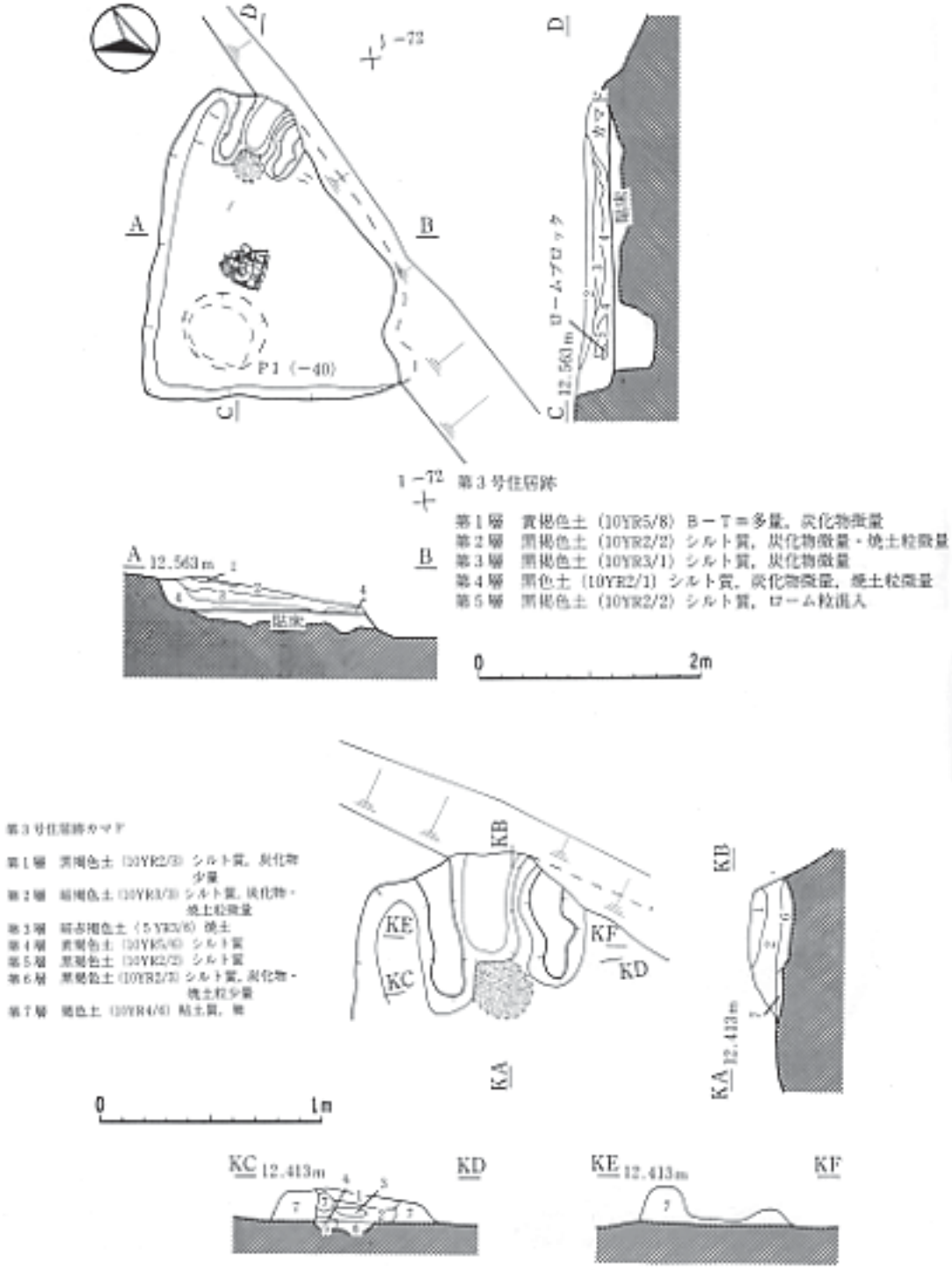
第45図　第2号住居跡出土遺物



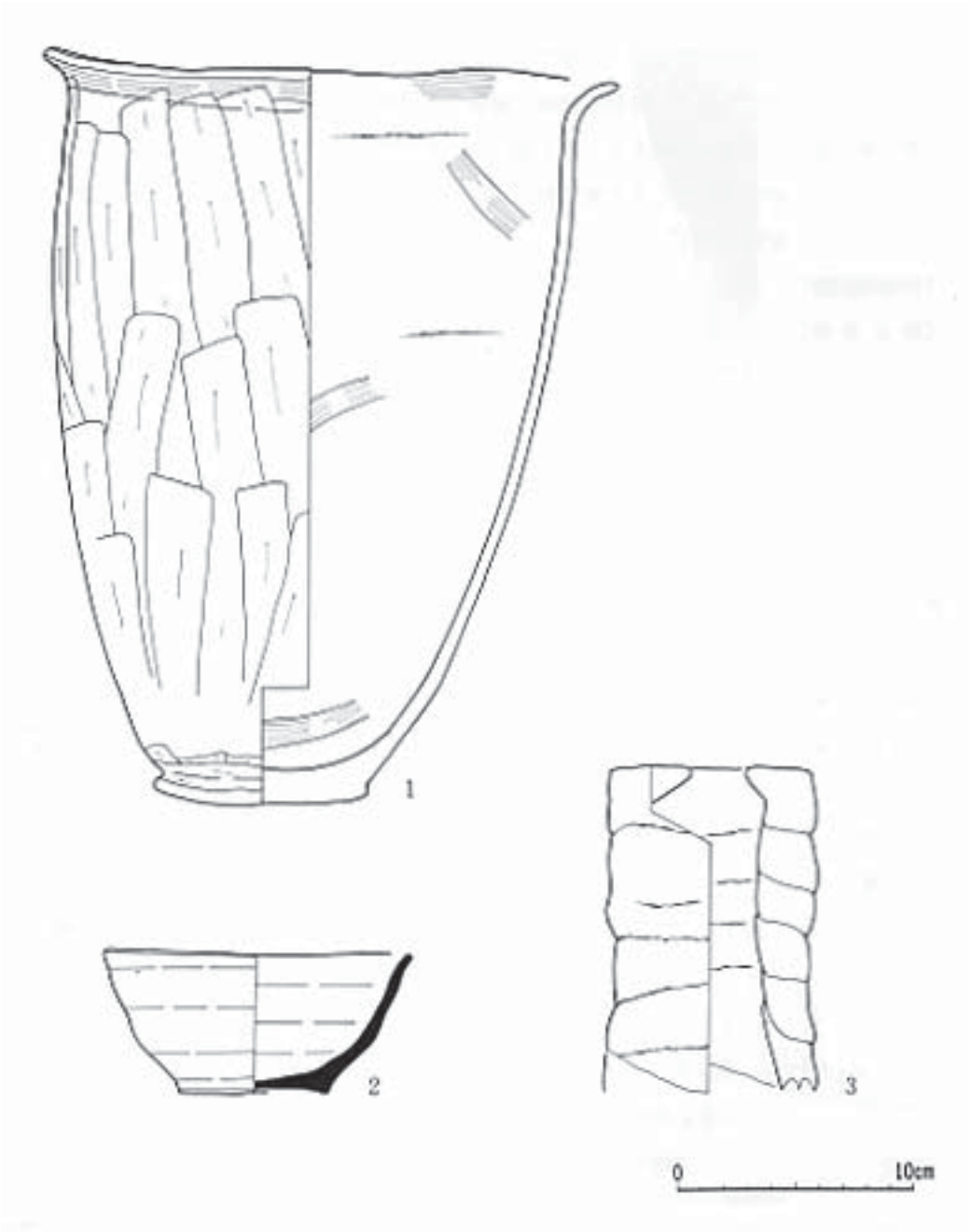
第2号住居跡カマド

第1層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質，焼土粒微量
第2層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，焼土粒微量
第3層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物・焼土粒微量
第4層　明黄褐色土（10YR6/6）シルト質，黄褐色ローム
第5層　明褐色土（7.5YR5/8）シルト質，焼土粒中量
第6層　明赤褐色土（2.5YR5/8）シルト質，焼土
第7層　褐色土（10YR4/6）シルト質，炭化物微量
第8層　暗赤褐色土（5YR3/4）シルト質，炭化物少量
第9層　褐色土（7.5YR4/4）粘土質，粘

第46図　第2号住居跡カマド



第47図　第３号住居跡カマド



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
48-1	床直	土師器　甕	24.5	32.0	9.0	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ輪積痕	ヘラナデ	砂底	甕Ⅱ$_1$	19
2	4	須恵器　坏	13.1	6.0	6.1	ロクロ	－	ロクロ	ロクロ	－	ロクロ	回転糸切り	坏a	48
3	5	支脚	8.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－		50

第48図　第3号住居跡出土遺物

て構築している。燃焼部は、あまり強く焼けていない。燃焼室自体の高さは不明であるが、住居廃絶時に崩壊したと考えられる。

[堆　　積　　土] 5層に分層した。第1層には、黄褐色火山灰が多く含まれ、色調とガラス質が含まれることと鉱物粒子の細かさから白頭山・苫小牧火山灰と推定した。炭化物は第1～4層に混入し、焼土粒は第2・4層に混入している。

[その他の特殊施設] なし。

[出　土　遺　物] 土師器・須恵器片がともに少数出土している。1は床面に倒壊しており、底面は砂底である。土師器甕における主な外面調整は、胴部のヘラケズリである。土師器坏については、細かな破片が2点出土したのみだが、ロクロ整形無調整である。須恵器については、坏（2）が第4層から出土し、その他は厚手の細片のみで甕・壷類と思われる。

第4号住居跡（第49～51図）

[位　　置] M・N－78・79、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複] 北側を大きく撹乱されている。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、主軸方位はS－19°　－Eである。壁長は、南壁3．6m、西壁3．5mである。

[　　壁　　] 壁高は、南壁で45cm、西壁で25cmである。

[　　床　　] 西側では第Ⅵ層を床とし、東側では貼床である。床面には若干凹凸がある。

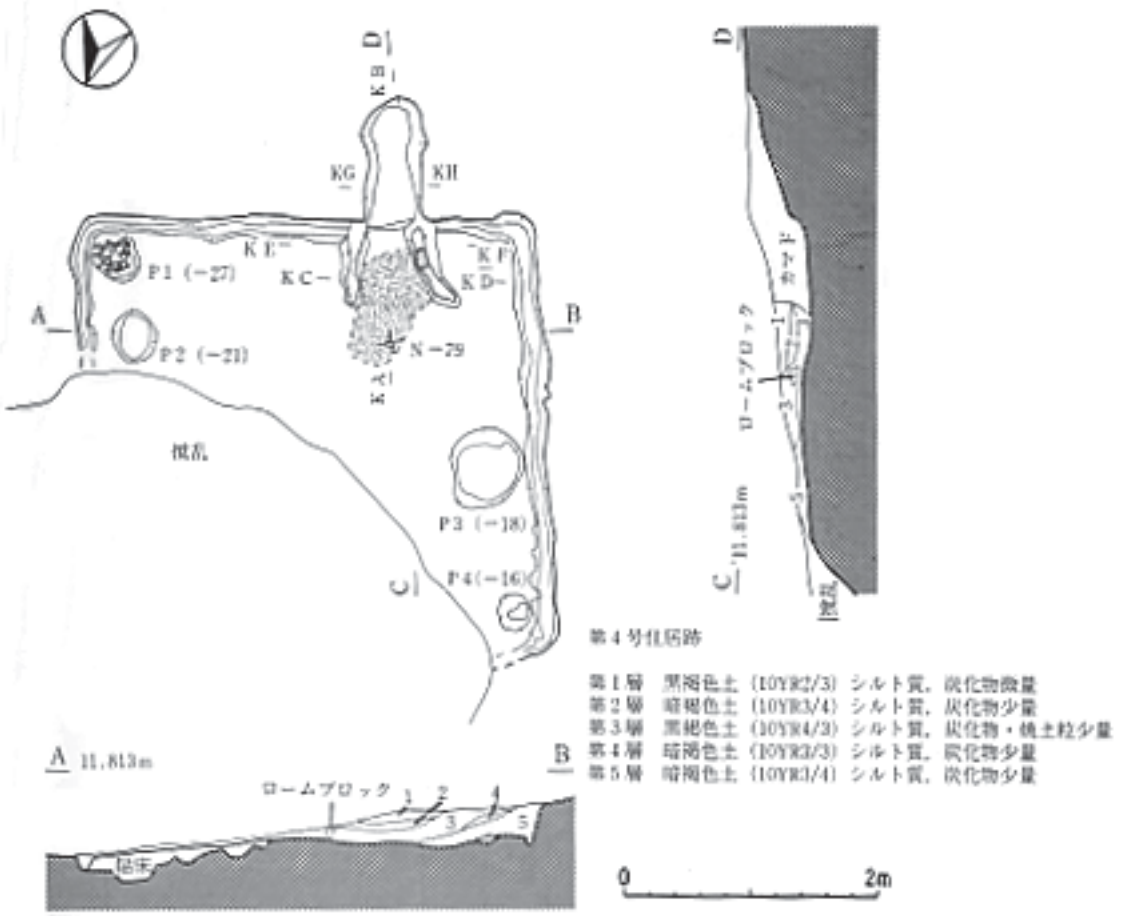
[壁　　溝] ほぼ全周する。カマドの袖の下で壁溝は途切れることから、壁溝の構築は、カマド構築以前に行われている。

[柱　　穴] 計4基のピットを検出した。柱穴は、P_4とP_1あるいはP_2と思われる。

[カ　マ　ド] 南壁西寄に位置し、半トンネル式の煙道を有する。袖は、粘土を貼って構築しており、西側の袖には芯材として板状の礫を用いている。燃焼部には、支脚として土師器の甕が使用されている。燃焼室の高さは30cm以上と思われ、住居廃絶時に崩壊したと考えられる。東側の焼土は二次的なもので、カマドの崩壊時のものと思われる。

[堆　　積　　土] 5層に分層した。全層に炭化物が混入し、第3層には焼土粒が混入している。火山灰は見られない。

[その他の特殊施設] P_3底面に少量の二次的な焼土が見られるが、その性格は不明である。



第49図　第４号住居跡

[出　土　遺　物] 土師器・須恵器片がともに少量出土している。５は、支脚として使用された

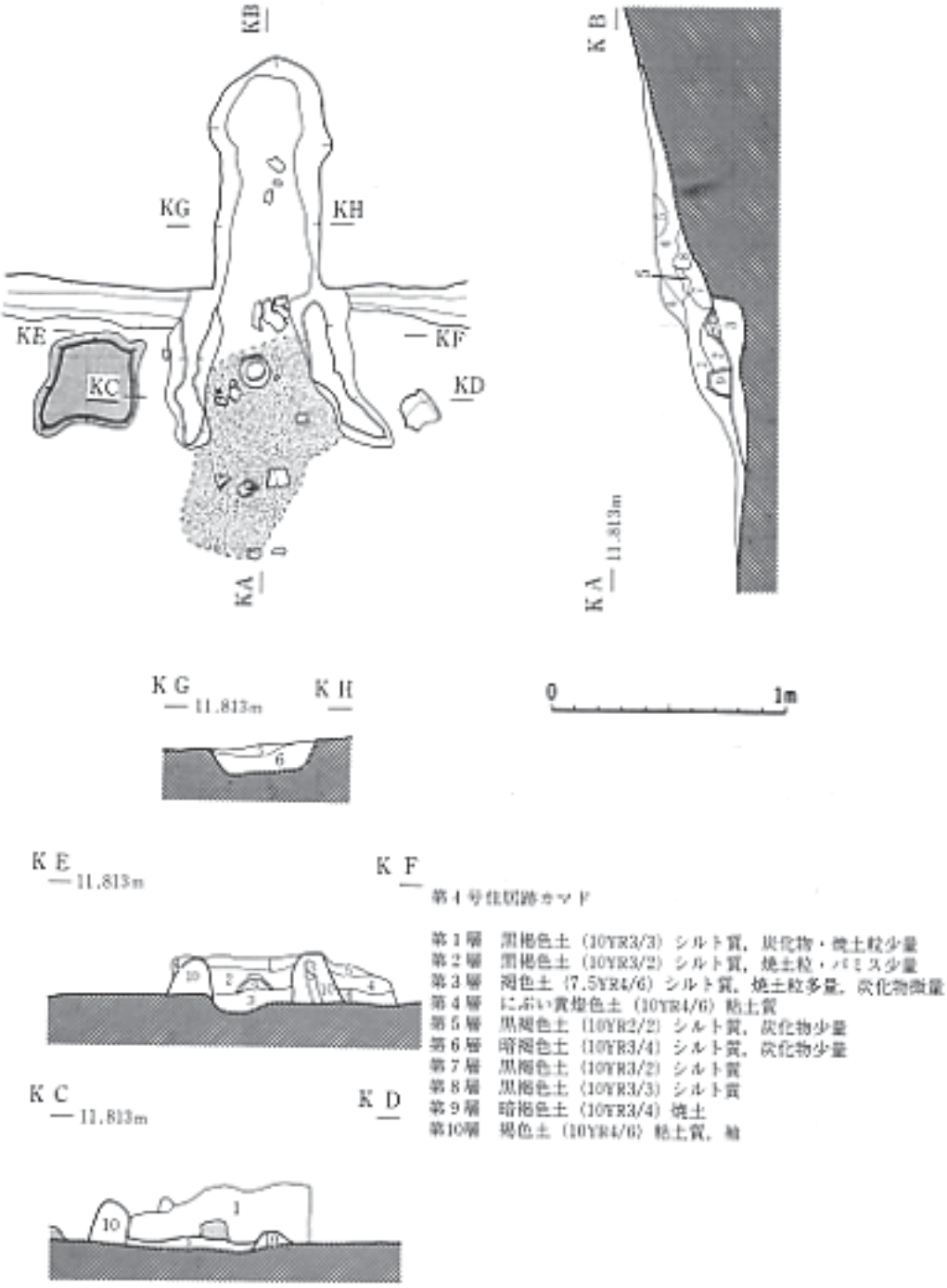
[出　土　遺　物]土師器・須恵器片がともに少量出土している。5は、支脚として使用された土師器甕である。1は、P_1とカマド堆積土からの接合個体である。土師器甕における主な外面調整は胴部のヘラケズリ、土師器坏ではロクロ整形無調整である。ただし、2の甕はロクロ調整後のヘラケズリである。また、5の底面は砂底で、3は木葉痕である。須恵器については、床面から坏の破片1点と厚手の破片1点の計2点のみの出土である。また、須恵系土器の坏の破片も2点出土している。

第6号住居跡（第52図）

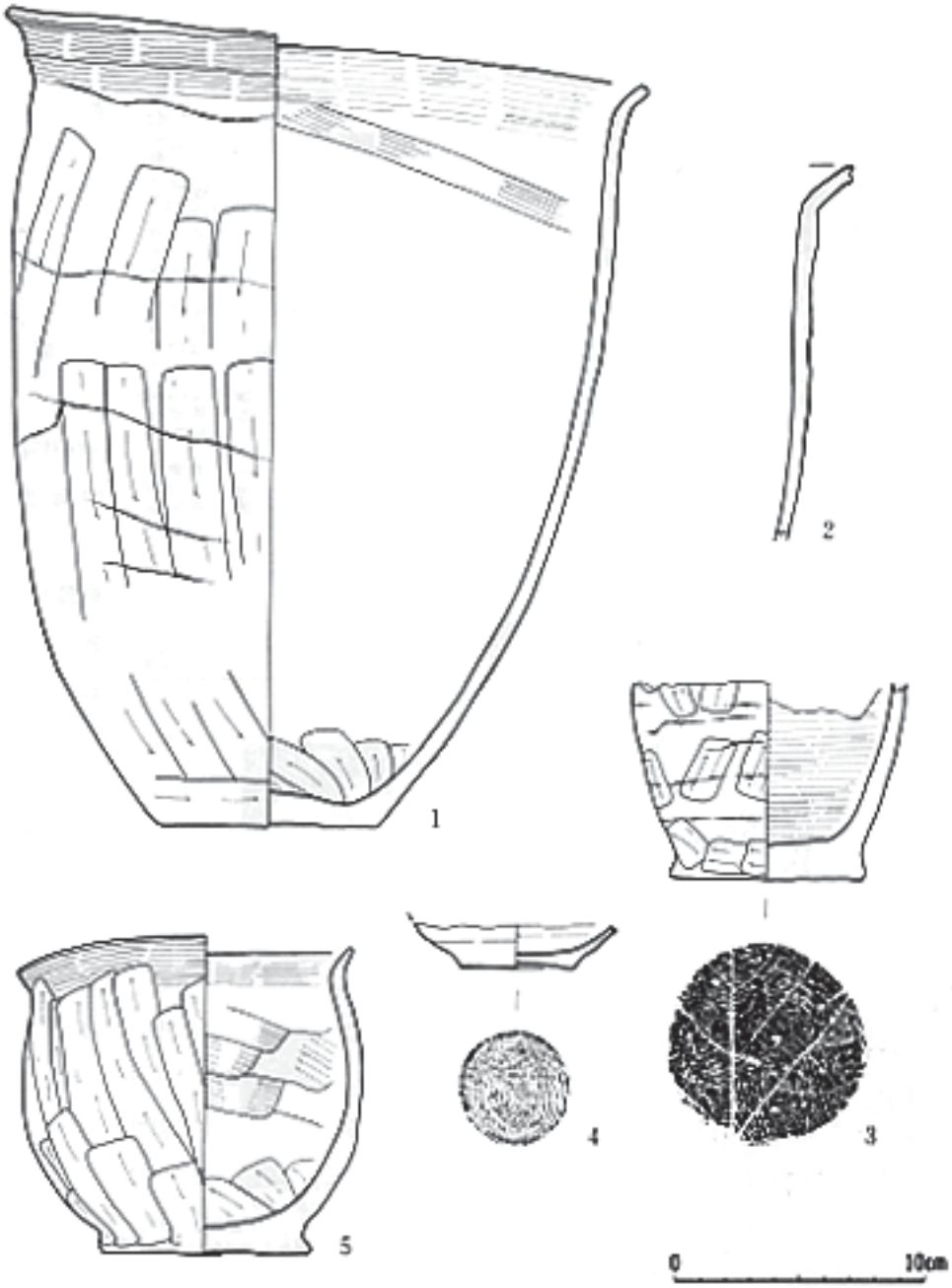
[位　　置]　L・M－40、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　南東側で第3号土壙と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模]　隅丸方形を呈し、主軸方位はS－61°　－Eである。壁長は、南壁2．7m・北壁2．5m・東壁2．5m・西壁2．5mである。

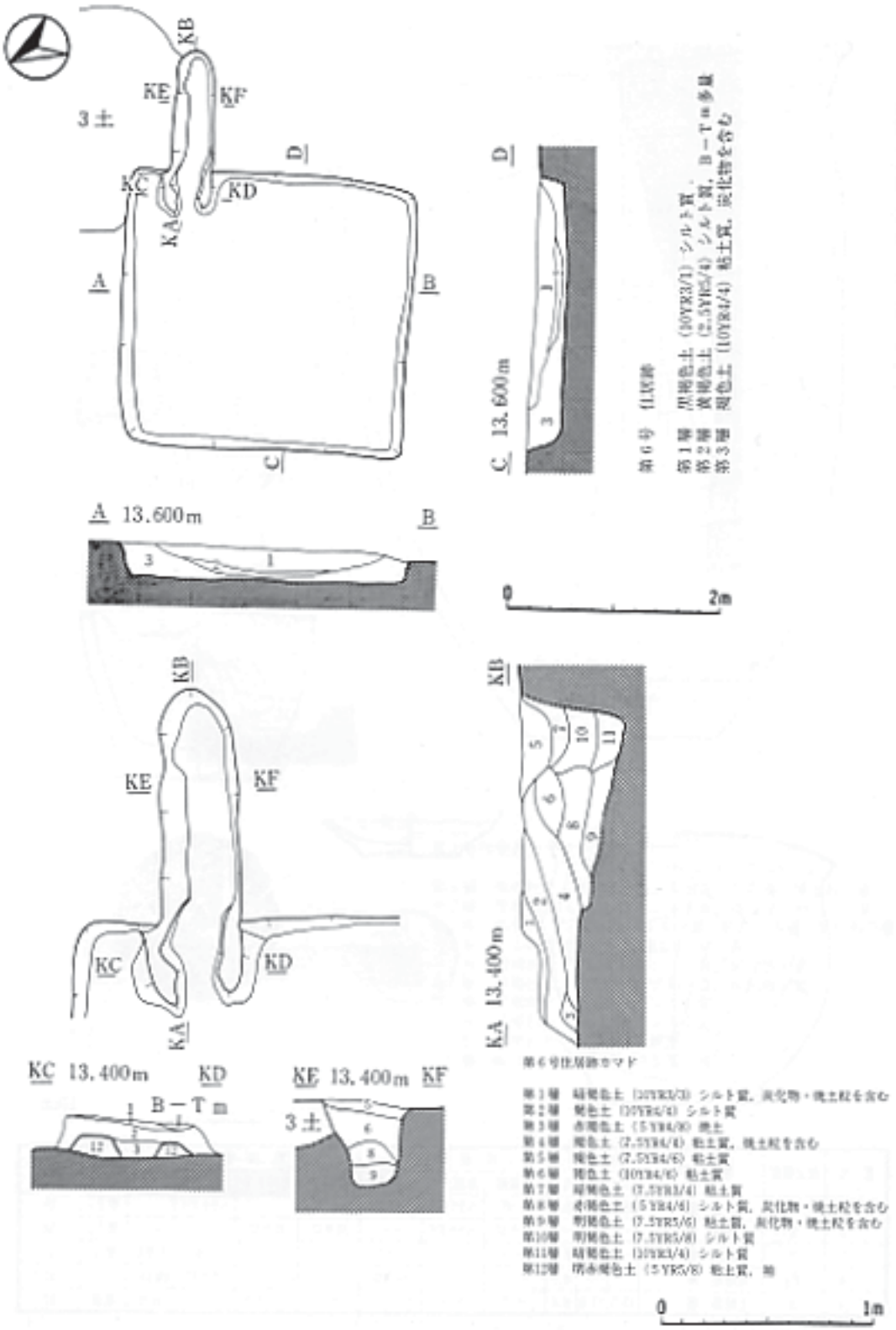


第50図　第４号住居跡カマド



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外面調整			内面調整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
51-1	カマド□ P_1	土師器　甕	26.0	33.0	8.5	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ		ヘラケズリ		甕Ⅰ$_2$	15
2	5	土師器　甕	－	－	－	ロクロ	ヘラケズリ	－	ロクロ	ロクロ	－	－	甕Ⅰ$_3$	58
3	3	土師器　甕	－	－	8.0	－	－	ヘラケズリ	－	－	ヨコナデ	木葉痕	甕Ⅱ□	43
4	P_1	須恵器　坏	－	－	4.5	－	－	ロクロ	－	－	ロクロ	回転糸切り		61
5	3	土師器　甕	13.5	12.8	8.6	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	砂底	甕Ⅲ	17

第51図　第4号住居跡出土遺物



第52図　第６号住居跡・カマド

[　　壁　　]壁高は、南壁20cm・北壁30cm・東壁30cm・西壁20cmである。

[　　床　　]第Ⅵ層を床にしている。床面は平坦であり、堅緻である。

[壁　　溝]　なし。

[柱　　穴]　検出されなかった。

[カ　マ　ド]南壁車寄に位置し、半トンネル式の煙道を有する。袖は、粘土を貼って構築している。燃焼室の高さは不明だが、住居廃絶時に崩壊したと考えられる。第1層上向で黄褐色の火山灰を検出した。

[堆　積　土]3層に分層した。第2層に黄褐色の火山灰が多量に含まれ、色調とガラス質を含むことと鉱物粒子の細かさから白頭山・苫小牧火山灰と推定した。

[その他の特殊施設]　なし。

[出　土　遺　物]土師器甕の破片が堆積土から少量出土している。

第9号住居跡（第53～55図）

[位　　置]　Ⅰ・Ｊ－47・48、第Ⅵ層で暗褐色土と灰白色火山灰の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[平面形・規模]　隅丸方形を呈し、主軸方位はＳ－52°　－Ｅである。壁長は、南壁3．3m・北壁3．2m・東壁3．2m・西壁3．1mである。

[　　壁　　]壁高は、南壁40cm・北壁55cm・東壁45cm・西壁50cmである。

[　　床　　]第Ⅵ層を床にしている。床面は平坦であり、堅緻である。

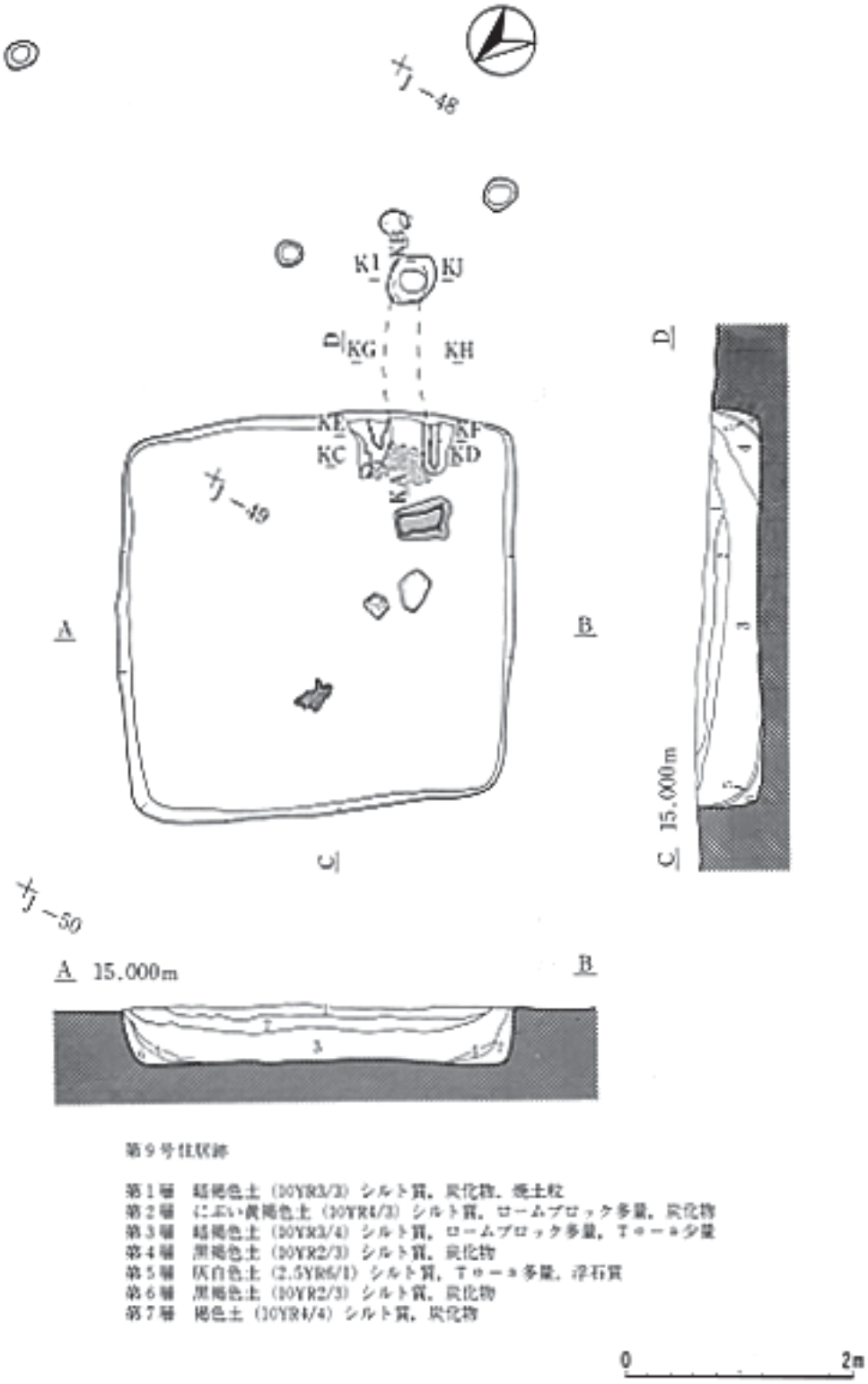
[壁　　溝]　なし。

[柱　　穴]　検出されなかった。

[カ　マ　ド]南壁西寄に位置し、トンネル式の煙道を有する。袖は、地山を掘り残して構築している。燃焼室の高さは不明だが、住居廃絶時に崩壊したと考えられる。燃焼部の北側に二次的な焼土があり、崩壊時のものと思われる。煙道は、煙出側に何かい下降し、煙出孔の直下は一段掘り下げられている。煙道内に灰白色火山灰が混入している。

[堆　積　土]7層に分層した。第5層に灰白色火山灰が多量に含まれ、色調と粒子の粗い浮石質であることから十和田ａ火山灰と推定した。この火山灰は、床面のほぼ直上にまで入り込んでいる。また、第5層より上位の第2・3層には、ロームブロックが多量に含まれている。これらのことから、本遺構が廃絶後まもなく十和田ａ火山灰の混入があり、その後人為的に埋め戻したと推定した。

[その他の特殊施設]　外周溝として、第4号溝状遺構が考えられる（第80図）。また、カマド南側

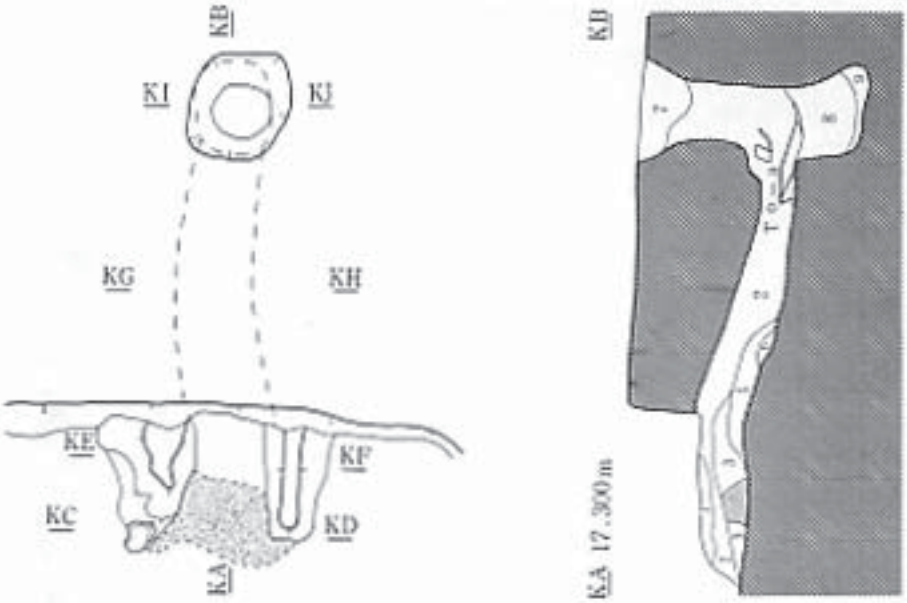


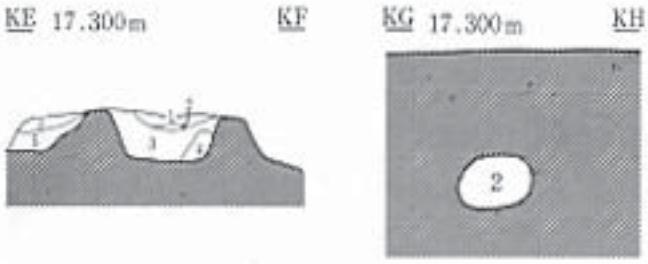
第９号住居跡

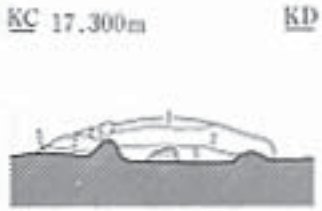
第１層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物，焼土粒
第２層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質，ロームブロック多量，炭化物
第３層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，ロームブロック多量，Ｔｏｍａ少量
第４層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物
第５層　灰白色土（2.5YR6/1）シルト質，Ｔｏｍａ多量，浮石質
第６層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物
第７層　褐色土（10YR4/4）シルト質，炭化物

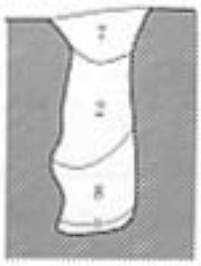
0　　2m

第53図　第９号住居跡







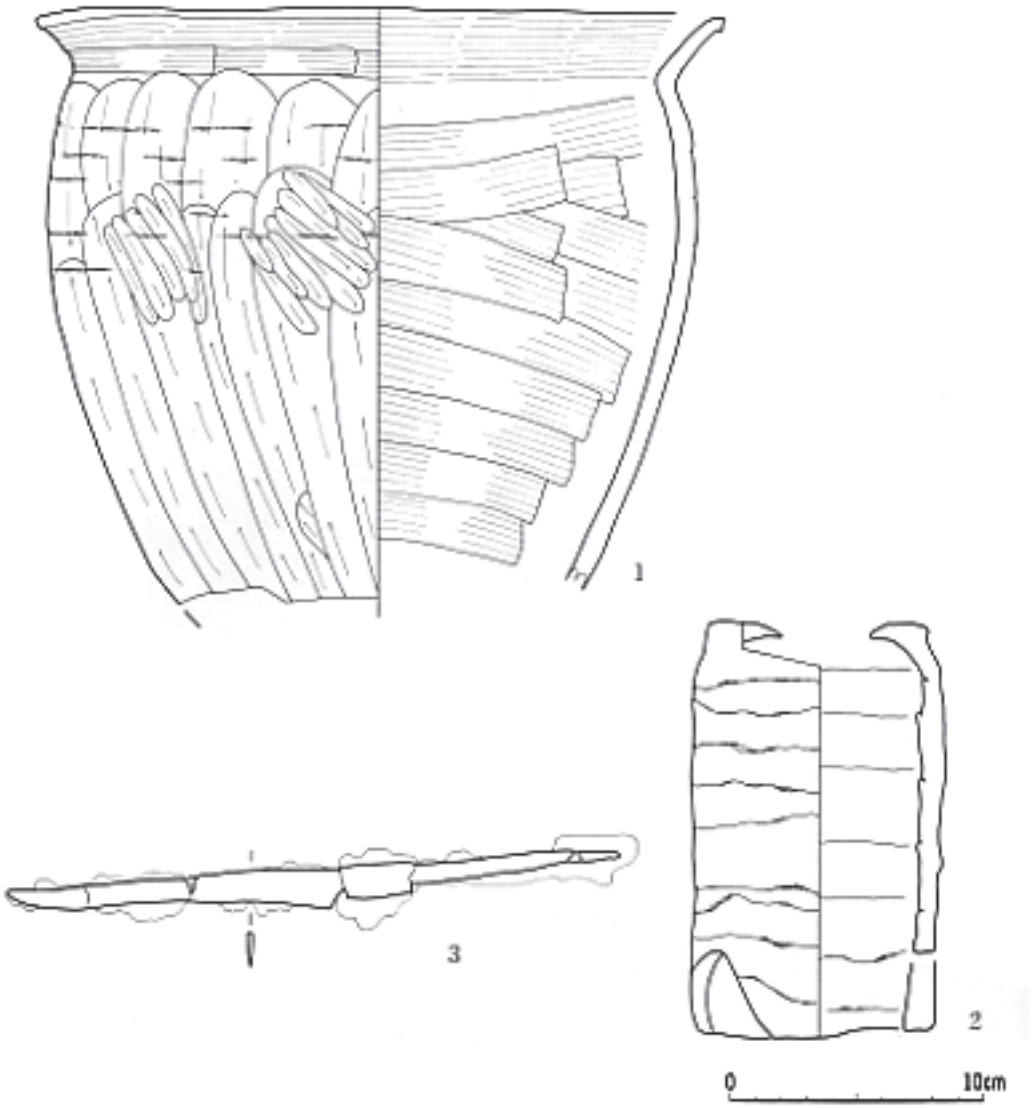


第9号住居跡カマド

第1層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物少量
第2層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，Tローム混入
第3層　黄褐色土（10YR5/6）粘土質
第4層　赤褐色土（5YR4/6）焼土
第5層　黄褐色土（10YR5/6）シルト質，ローム粒主体
第6層　褐色土（7.5YR4/6）シルト質，焼土
第7層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，Tローム微量
第8層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物少量，Tローム微量
第9層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，Tローム微量

0　1m

第54図　第9号住居跡カマド



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
55-1	床直	土師器　甕	－	－	－	ナデ	輪積痕ヘラナデ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	－	甕Ⅰ$_1$	34
2	床直	支脚	8.5	16.3	9.5	－	－	－	－	－	－	－		39

第55図　第9号住居跡出土遺物

に計5基の第1号柱穴状ピット群を検出した（同図）。

[出　土　遺　物]床面中央部から支脚が倒壊して出土したが、カマドに用いられていたものと思われる。刀子（3）は、堆積土内からの出土である。なお、不定形の自然礫も床面から出土したが、遺構内で用いられたものかは不明である。また、板状の炭化物を床面で検出している。

第11号住居跡（第56図）

[位　　置]　M・N－68・69、盛土除去中に第Ⅴ・Ⅵ層に落ち込む黒褐色土と多量のロームブロックの混入した貼床を確認した。

[重　　複]　なし。

[平面形・規模]　調査区域範囲外に及んだため全体像は不明だが、東壁は5mほどである。

[　壁　]撹乱を受けていることもあり南壁のみの検出だが、壁高は25cmである。

[　床　]一部で第Ⅵ層を床にしているが、東側は貼床である。

[壁　　溝]　なし。

[柱　　穴]　計3基のピットを検出したが、柱穴の配置は不明である。

[カ　マ　ド]検出していない。

[堆　積　土]4層に分層した。盛土と撹乱層から、上位堆積層がかなり削られたと推測される。

[その他の特殊施設]　なし。

[出　土　遺　物]床面から、土師器・須恵器片がともに出土している。土師器では、甕の破片が見られる。須恵器では、1と2の2個体である。

第12号住居跡（第57図）

[位　　置]　F・G－52・53、第Ⅵ層で撹乱を受けた床面を確認した。

[重　　複]　ほぼ全域に撹乱が見られる。

[平面形・規模]　検出時の状況が良好でないため断定できないが、各壁の壁長を3．0～3．5mと推定した。

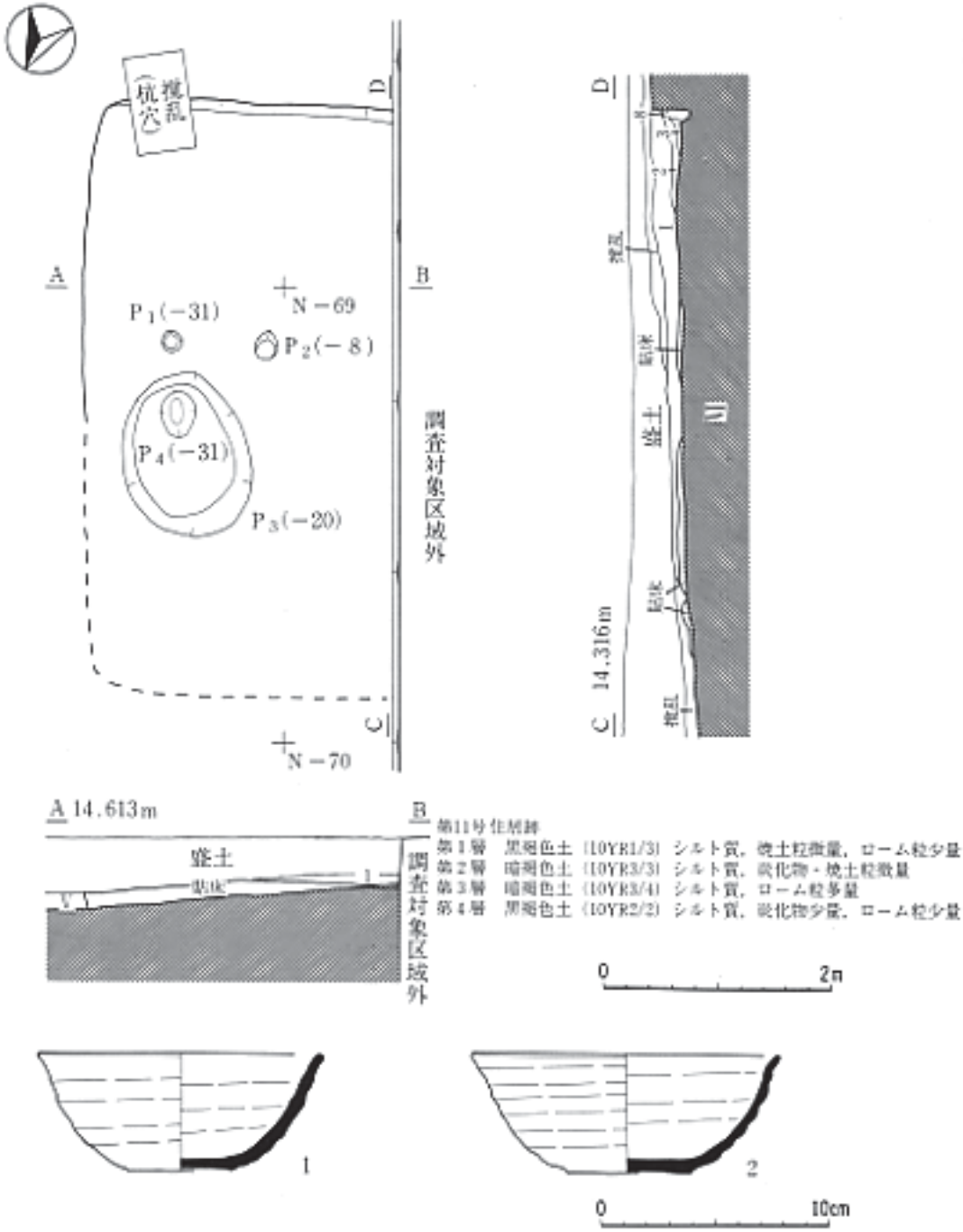
[　壁　]壁高は、西壁で25cm・北壁で10cmのみの検出である。

[　床　]第Ⅵ層を床にしていると思われるが、撹乱のため不明な点が多い。

[壁　　溝]　なし。

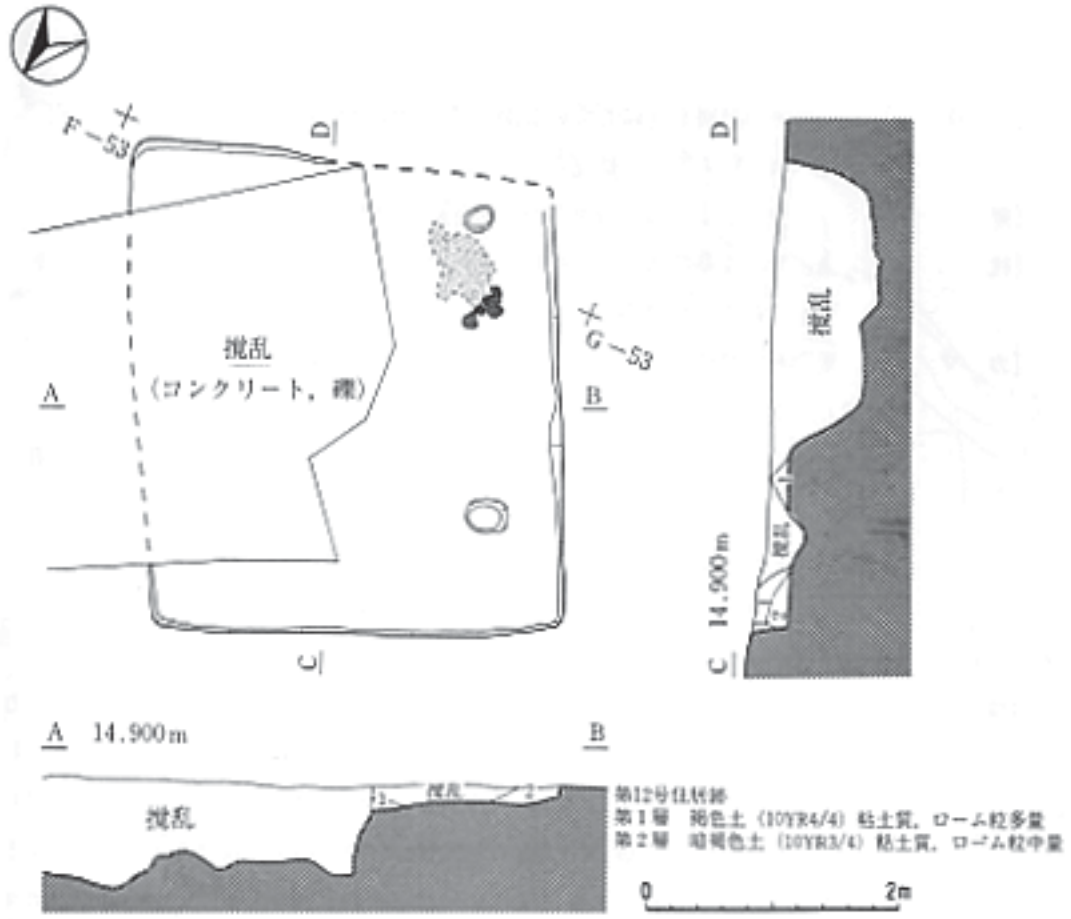
[柱　　穴]　計2基のピットを検出したが、柱穴の配置は不明である。

[カ　マ　ド]南側に焼土の痕跡を検出した。しかし、燃焼を直接受けた面は失われている。



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
56-1	1	須恵器　坏	12.6	5.2	4.6	ロクロ		ロクロ	ロクロ		ロクロ	回転糸切り	坏a	20
2	床直，1	須恵器　坏	13.7	5.3	5.4	ロクロ		ロクロ	ロクロ		ロクロ	回転糸切り	坏a	18

第56図　第11号住居跡・出土遺物



第57図　第12号住居跡

また、その北側から炭化物が出土したが、この性格は不明である。

[堆　　積　　土] 2層に分層した。ともに粘土質であり、ローム粒を含んでいる。

[その他の特殊施設]　なし。

[出　土　遺　物] 撹乱層から土師器の破片が出土している。

第13号住居跡（第58～65図）

[位　　置]　G・H・I－60・61・62、第Ⅵ層で撹乱を受けた黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　第16号住居跡と重複し、本遺構が新しい。また、南西隅で第3号溝状遺構と重複するが、本遺構が古い。

[平面形・規模]　隅丸方形を呈し、主軸方位はS－28°－Eである。壁長は、南壁5．4m・東壁5．6m・西壁5・6mである。北壁は5．8mと推測される。

[　　壁　　] 北側ほど壁高は低く、北壁は撹乱により存在しない。南壁が最も高く、50cmである。

[　　床　　]一部で第Ⅵ層を床にしているが、ほぼ全体が貼床である。床面は、若干凹凸が見られ、踏み締まりは見られない。

[壁　　溝]　ほぼ全周する壁溝を検出した。南壁のカマドの下で、壁溝は途切れている。

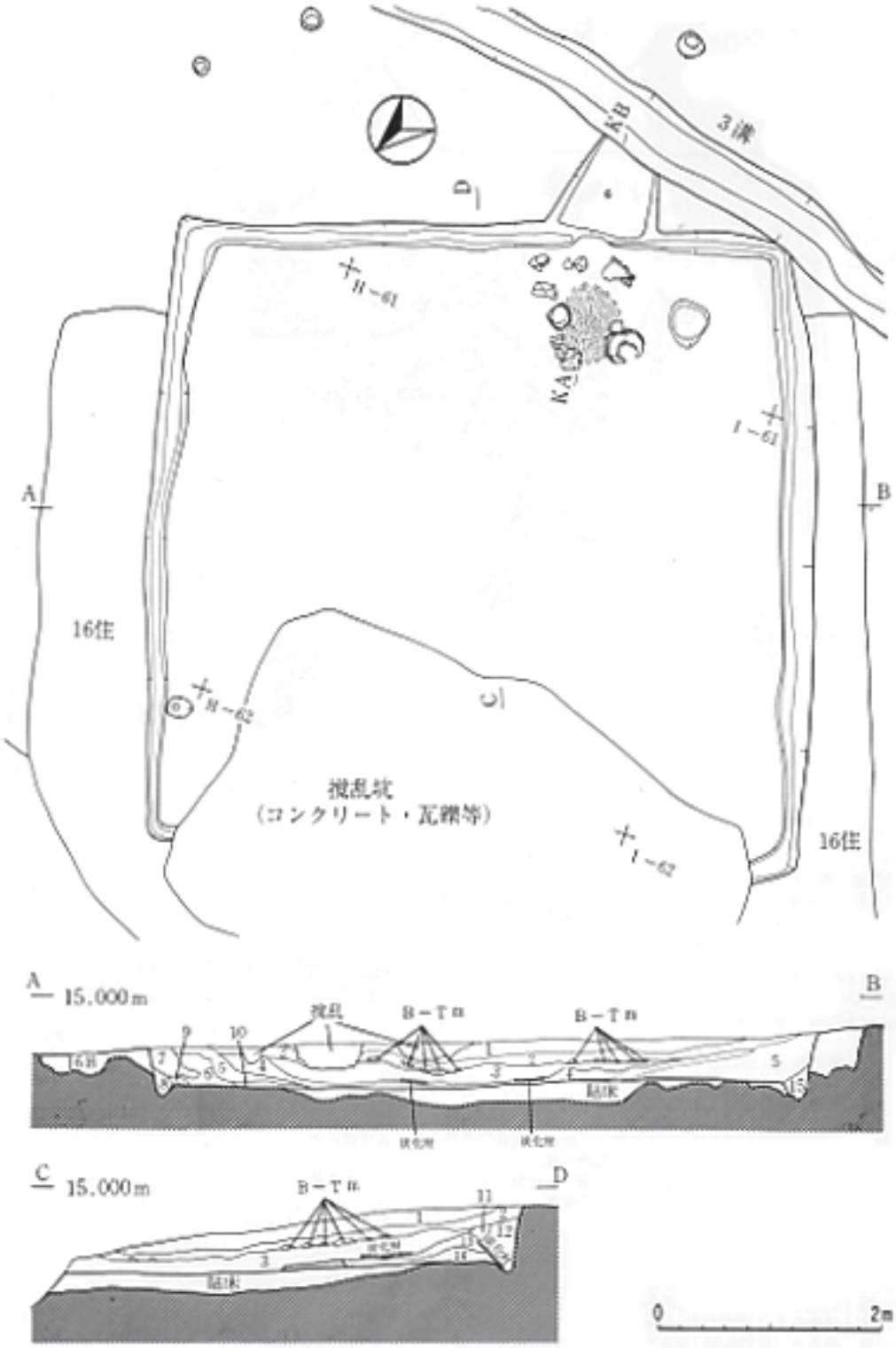
[柱　　穴]　南西側で1基のピットを検出した。このピットが柱穴の1つと思われるが、他のものについては不明である。

[カ　マ　ド]南壁西寄に位置し、半トンネル式の煙道を有する。袖は、土師器甕・堝、支脚と礫を芯材とし粘土を貼って構築しているが、粘土自体は崩壊した部分が多く、袖の形状は失われている。袖と同様に天蓋にも土師器を芯材として使用している。カマド範囲の確認が遅れたこともあり燃焼室の規模・高さは不明だが、住居廃絶時に崩壊したと考えられる。また、燃焼部の軸線と煙道の軸線は屈折するが、同一の施設として扱った。燃焼部の範囲と煙道の規模から、大型のカマドであったと推定される。

[堆　　積　　土]16層に分層した。第2層中に黄褐色火山灰が見られ、色調とガラス質を含むことと粒子の細かさから白頭山・苫小牧火山灰と推定した。この火山灰は、第3層の上面でも間層としてレンズ状をなしているが、この層より下位には見られない。また、第3層より下位の堆積層から大量の炭化材が出土し焼失家屋と判断したが、炭化材とともに厚さ5～8cmの焼土層が床面中央部やや上とカマド崩落土やや上で見られる。これらの上位層となる第3層には多量のローム粒が含まれ、人為堆積の可能性がある。第4層は粘土質であるため、人為堆積または屋上から落下した可能性がある。本遺構における埋没過程については、家屋の焼失→第3層堆積→火山灰混入及び第2層堆積→第1層以降の自然堆積であると推測される。なお、十和田a火山灰は見られない。

[その他の特秩施設]　鉄滓・鍛冶滓の出土、炭化材の出土状況、焼土層の存在などから、本遺構廃絶後あるいは本遺構内に鍛冶場的な遺構が持たれた可能性を想定したが、その検出と特定はできなかった。

[出　土　遺物]第3層より下位の出土では、土師器甕・堝・支脚などが見られる。土師器甕の主な外面調整は、胴部のヘラケズリである。土師器坏（12）は第2・3層からの出土である。須恵器は、壷と思われる破片が床面から出土しているが復元個体はない。須恵器杯も同様で、13は第2・3層からの出土である。7は口縁部を失っているが、擦文土器と思われる。堆積土中の出土であるが炭化材のから出土しており、同一個体と思われる頸部の破片は床面で出土している。また、鍛冶滓・鉄滓・台石と思われる鉄分の付着した石などが出土している。

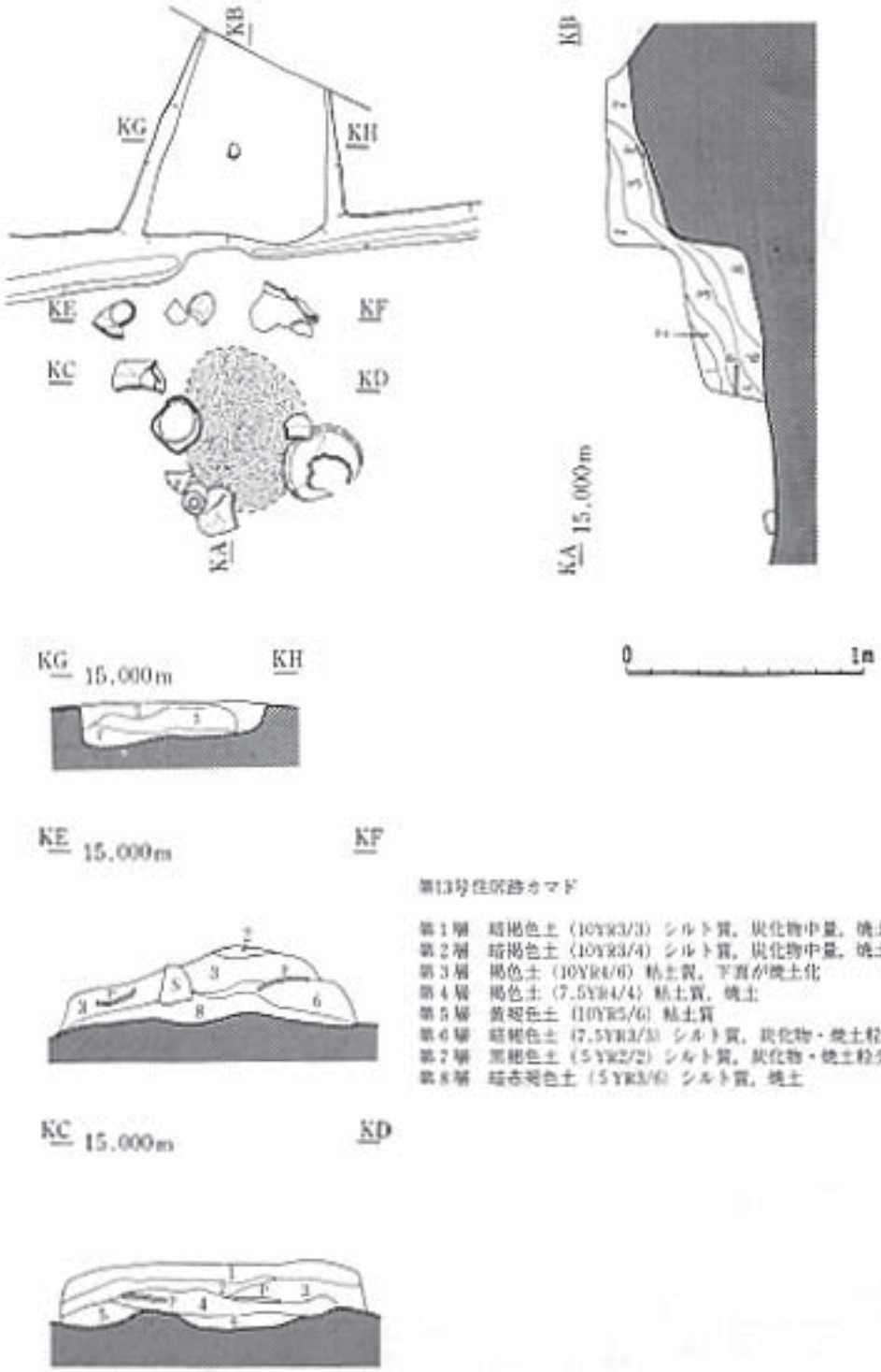


第58図　第13号住居跡(1)

第13号住居跡

第1層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質，炭化物，ローム粒少量
第2層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，B－Tm混入，炭化物少量
第3層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質，炭化物，ロームブロック
第4層　明褐色土（7.5YR5/6）粘土質
第5層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化材・炭化物多量，ロームブロック
第6層　褐色土（10YR4/6）粘土質，炭化物少量
第7層　にぶい褐色土（10YR4/4）シルト質，炭化物少量，ロームブロック多量
第8層　褐色土（10YR4/6）粘土質，炭化物少量
第9層　明褐色土（7.5YR4/6）粘土質
第10層　橙色土（7.5YR6/8）粘土質，炭化物少量
第11層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物・焼土粒少量
第12層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物，ローム粒少量
第13層　褐色土（10YR4/6）シルト質，炭化物，ローム粒少量
第14層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物・焼土粒少量
第15層　褐色土（10YR4/6）シルト質
第16層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物・ローム粒少量

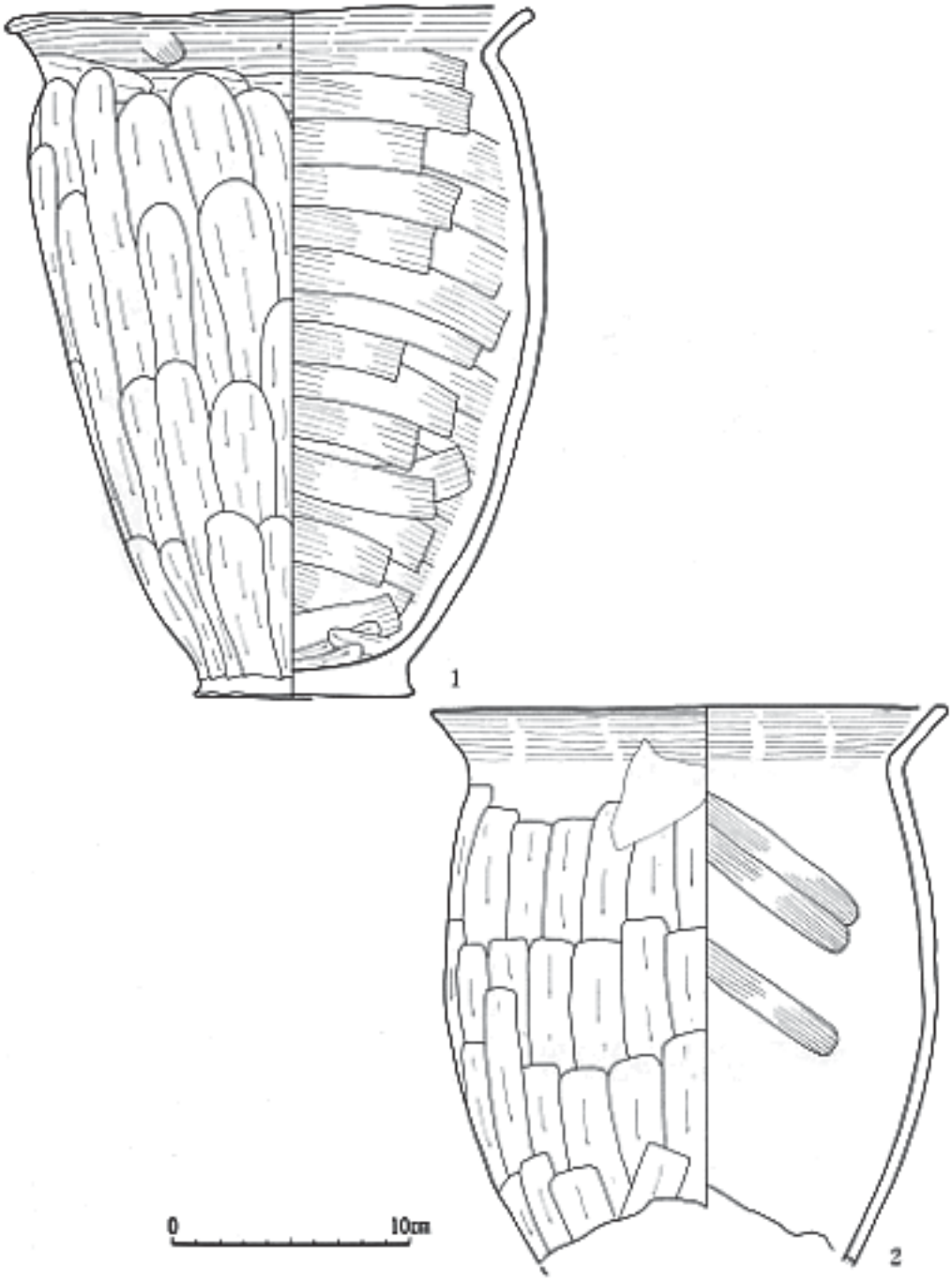
第59図　第13号住居跡(2)



第13号住居跡カマド

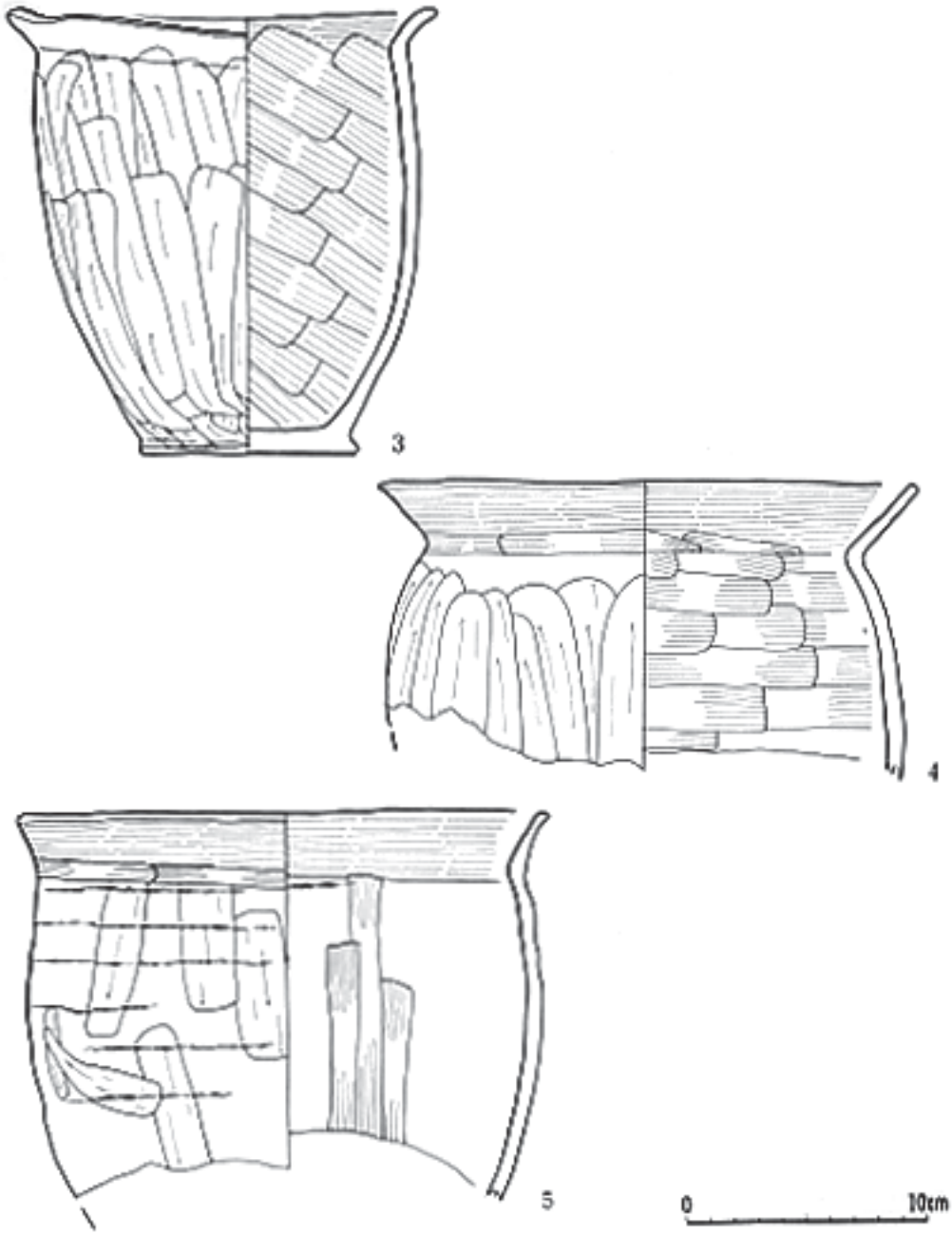
第1層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物中量，焼土粒多量
第2層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物中量，焼土粒多量
第3層　褐色土（10YR4/6）粘土質，下面が焼土化
第4層　褐色土（7.5YR4/4）粘土質，焼土
第5層　黄褐色土（10YR5/6）粘土質
第6層　暗褐色土（7.5YR3/3）シルト質，炭化物・焼土粒少量
第7層　黒褐色土（5YR2/2）シルト質，炭化物・焼土粒少量
第8層　暗赤褐色土（5YR3/6）シルト質，焼土

第60図　第13号住居跡　カマド



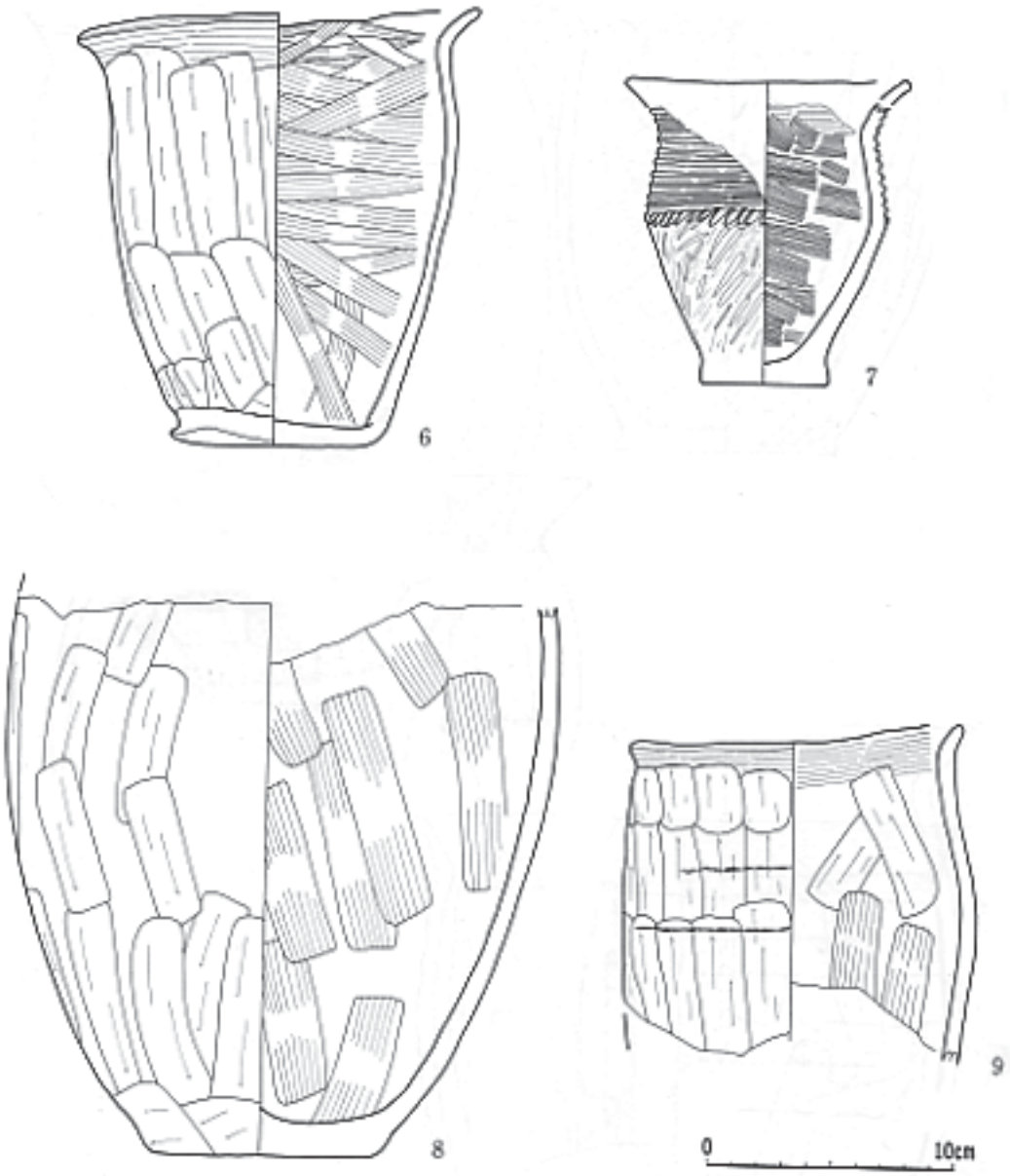
番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
61-1	3	土師器　甕	22.2	24.0	9.2	ナデ	ヘラケズリ		ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ		甕 I_1	32
2	3	土師器　甕	22.2	−	−	ナデ	ヘラケズリ		ナデ	ヘラナデ			甕 I_1	37

第 61 図　第 13 号住居跡出土遺物（1）



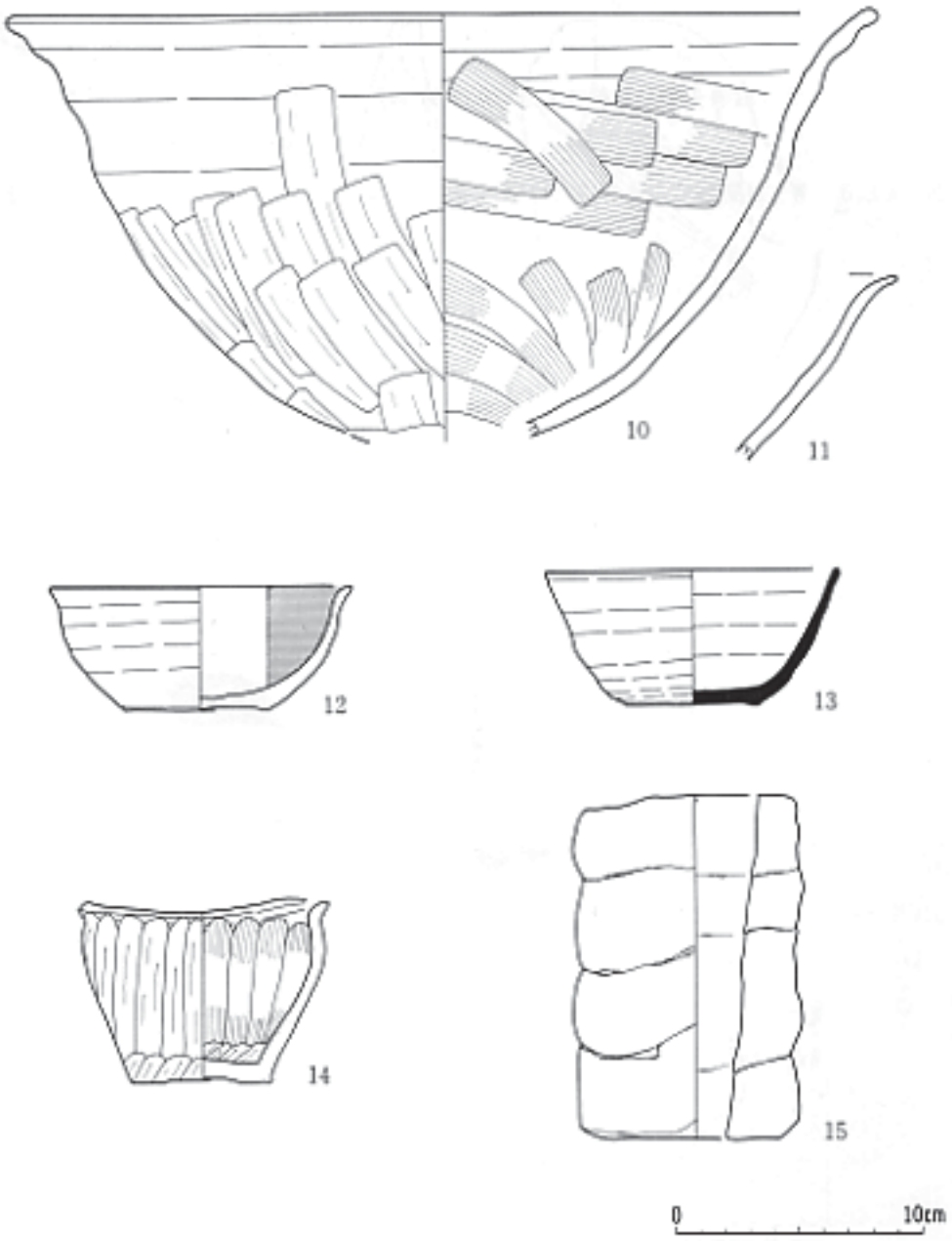
番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
62-3	3	土師器　甕	18	18.5	9		ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		甕Ⅱ$_1$	1
4	カマド	土師器　甕	22.6	－	－	ナデ	ヘラケズリ	－	ナデ	ヘラナデ	－	－	甕Ⅰ$_1$	35
5	床直	土師器　甕	21.5	15.8	－	ナデ	ヘラケズリ	－	ナデ	ヘラナデ	－	－	甕Ⅰ$_1$	36

第62図　第13号住居跡出土遺物（2）



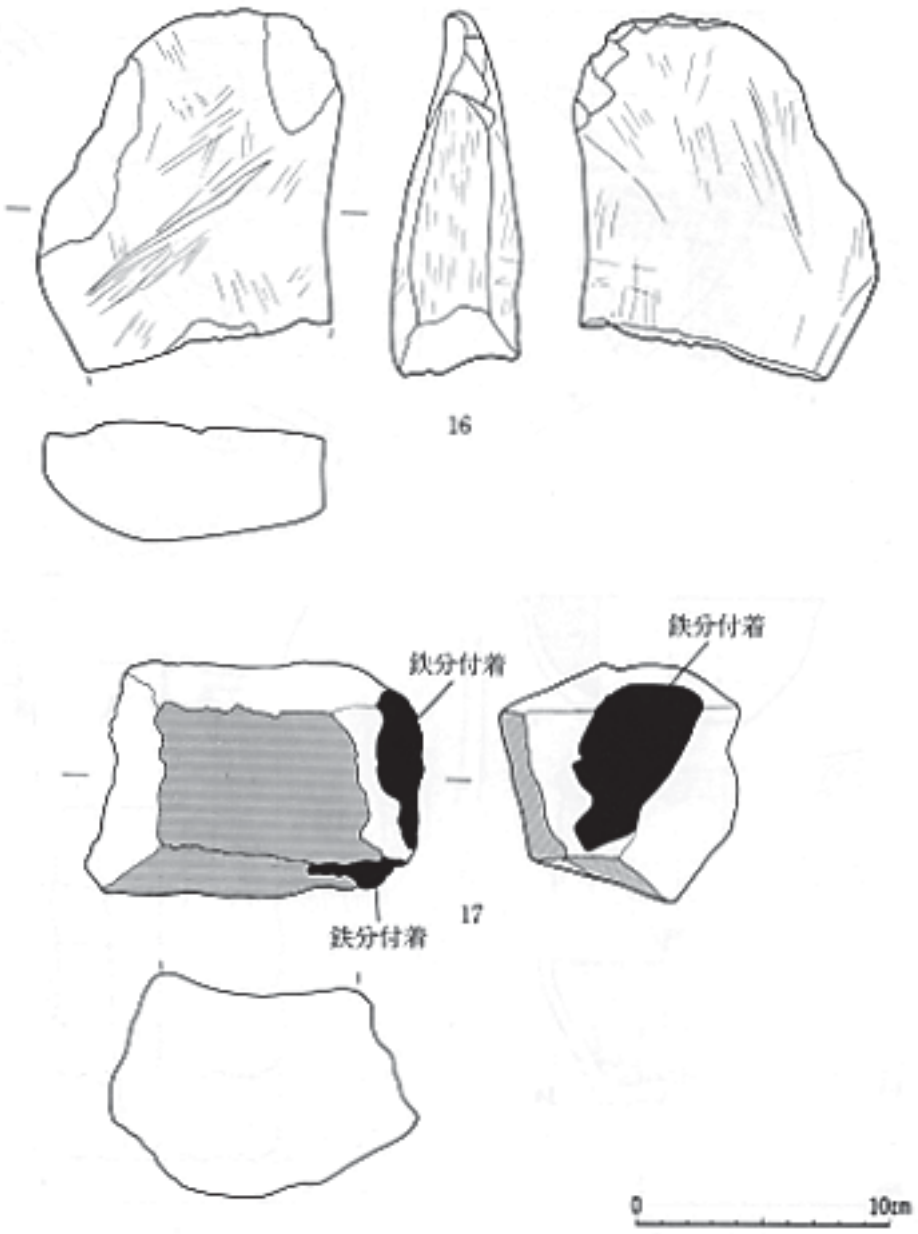
番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
63-6	床	土師器　甕	16.5	18	9	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ 輪積痕	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	砂底	甕Ⅱ$_1$	3
7	4	擦文土器　甕	－	－	5	－	沈線	ミガキ擦痕	－	ナデ	ハケメ			59
8	床直　カマド	土師器　甕	－	－	9.0			ヘラケズリ			ヨコナデ		甕Ⅰ	44
9	床直　カマド	土師器　甕	13.5	－		ナデ	ヘラケズリ	－	ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	－	甕Ⅱ$_2$	33

第63図　第13号住居跡出土遺物（3）



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
64-10	カマド	土師器　堝	35.5	−	−	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	ヘラナデ	ヘラナデ	−		60
11	3	土師器　堝	−	−	−	ナデ	ヘラケズリ	−	ナデ	−	−			63
12	$\frac{2}{3}$	土師器　坏	12.3	5.0	5.6	ロクロ						回転糸切り	坏$_2$	4
13	$\frac{2}{3}$	須恵器　坏	12.0	5.0	5.5	ロクロ		ロクロ	ロクロ		ロクロ	回転糸切り	坏b	5
14	$\frac{3}{4}$	土師器　鉢	10.2	7.3	5.8	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ		小型	26
15	カマド	支脚	9.0	13.8	9.0									40

第 64 図　第 13 号住居跡出土遺物（4）



第 65 図　第 13 号住居跡出土遺物（5）

第14号住居跡（第66～70図）

[位　　置] M・N－83・84・85、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、主軸方位はS－10°　－Eである。壁長は、南壁5．3m・北壁5．4m・東壁5．5m・西壁5．4mである。

[　壁　]壁高は、南壁35cm・北壁30cm・東壁25cm・西壁5cmである。

[　床　]第Ⅵ層を床とし、貼床は見られない。

[壁　溝] ほぼ全周する。カマド付近で途切れ袖の下まで続いていない。

[柱　穴] 計4基のピットを検出したが、主柱穴の配置は不明である。

[カ　マ　ド]南壁西寄に位置し、半トンネル式の煙道を有する。燃焼部は、第Ⅵ層を掘り込み粘土を貼っており、袖も一体となり粘土で構築している。燃焼室の高さは不明だが、住居廃絶時に崩壊したと考えられる。

[堆　積　土]2層に分層した。ほぼ全層に炭化物が含まれ、第3・5・7層に焼土粒が含まれている。第4層に黄褐色火山灰が少量見られ、白頭山・苫小牧火山灰と判断した。

[その他の特殊施設] P_1で、燃焼を受けた面を検出した。この面の上には、黄褐色火山灰が流入している。また、P_3でも同質の火山灰を検出した。

[出　土　遺物] 床面から多量の細片が散乱した状況で出土した。復元できたものは少ないが、それらの大部分は土師器甕の破片である。また、4は、内面をミガキ調整され、二次加熱によるためか黒斑がある。また、小型土器（2・5）も出土している。土師器坏は少なく、数片のみである。また、須恵器も同様で、長頸壷と坏の破片が数片のみである。この他の遺物では、刀子の一部と思われる鉄製品と砥石（7）が出土している。

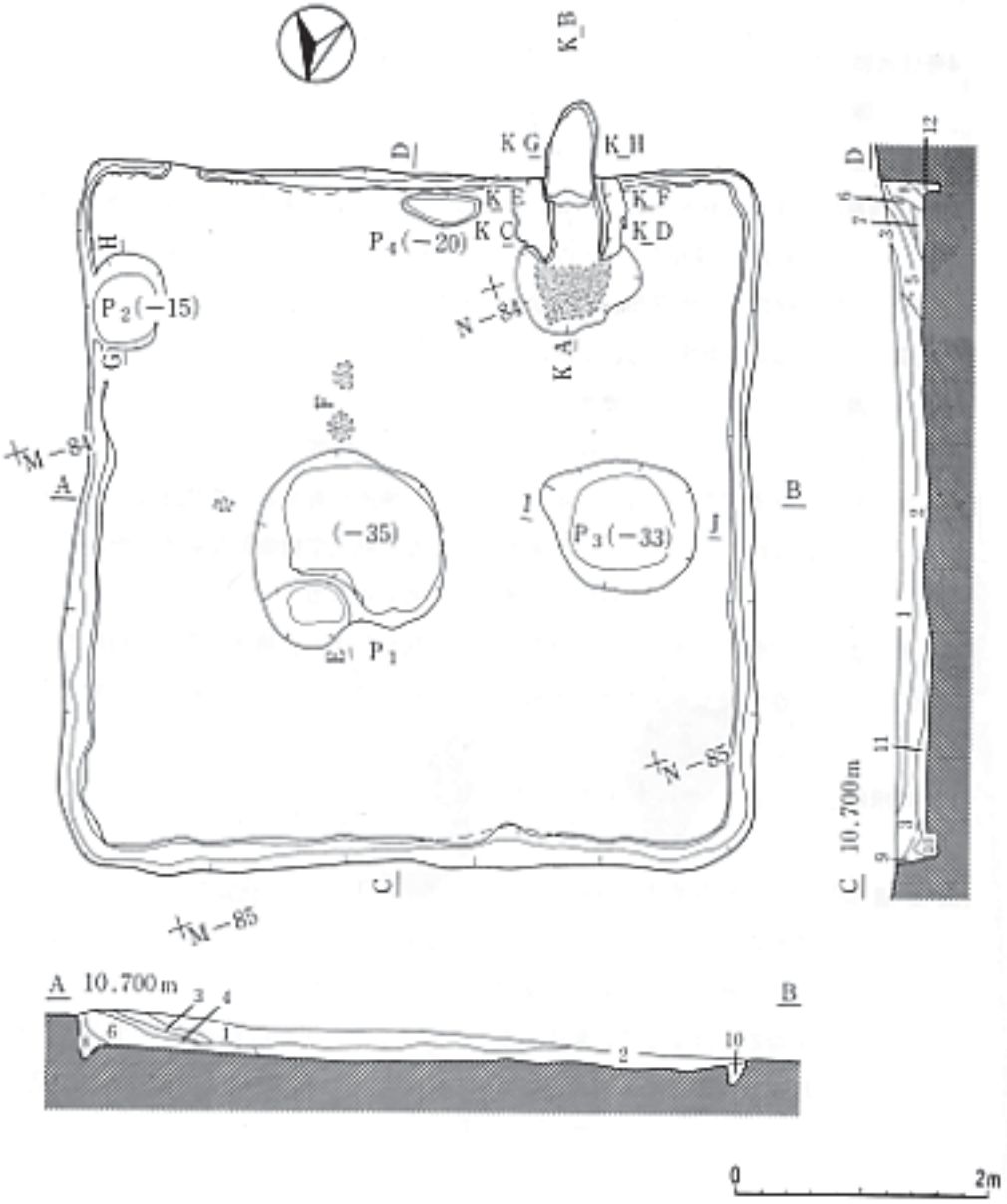
第15号住居跡（第71～74図）

[位　　置] I・J－59・60、第Ⅵ層で黒褐色土と灰白色火山灰の落ち込みを確認した。

[重　　複] 東側に張り出した黒褐色土の落ち込みがあり、本遺構に伴う施設と思われたが、堆積土の違いなどから別の遺構であり、本遺構が新しい。また、南壁西側とカマド煙道部は撹乱を受けている。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、主軸方位はS－52°　－Eである。壁長は、北壁4．8m・東壁4．8mであり、南壁と西壁も同様であると推測される。

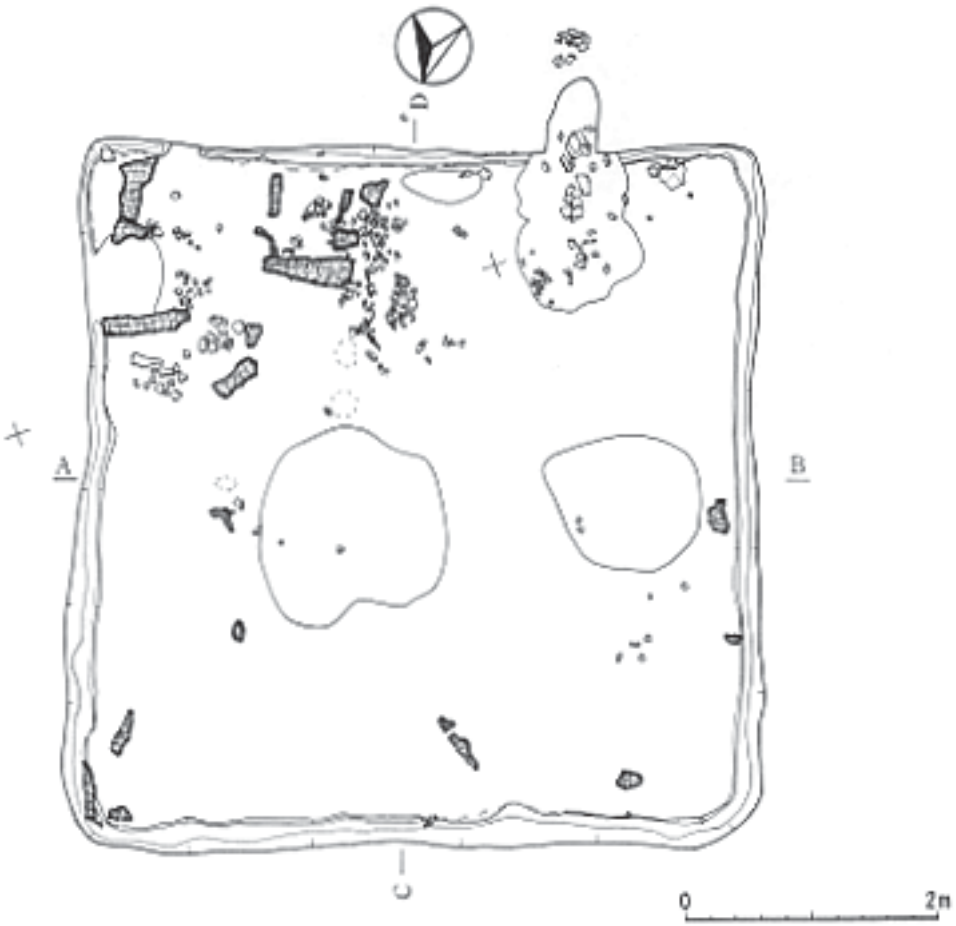
[　壁　]壁高は、南壁25cm・北壁20cm・東壁25cm・西壁20cmである。



第14号住居跡

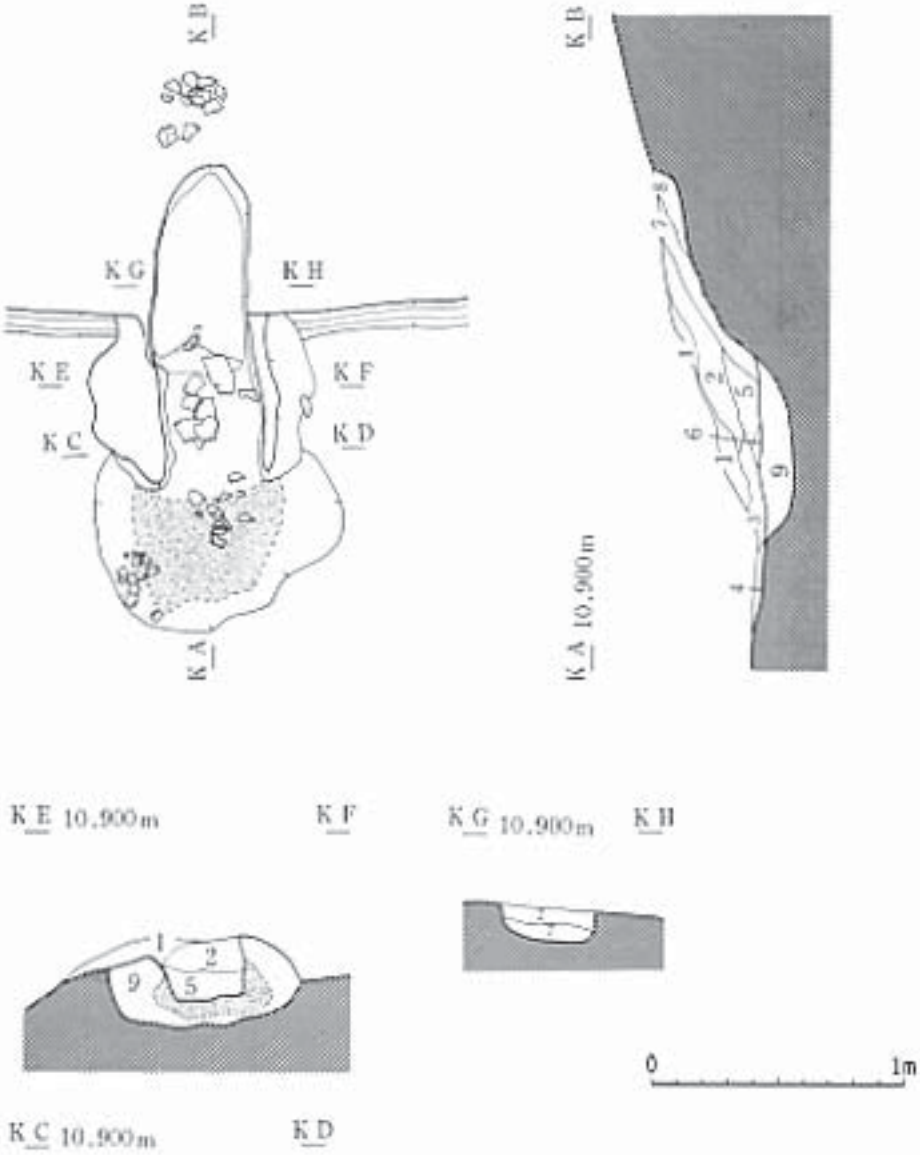
第1層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質，炭化物少量
第2層　黒色土（10YR1.7/1）シルト質，炭化物少量
第3層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物・焼土粒少量
第4層　褐色土（10YR4/4）シルト質，B－Tmテフラ少量
第5層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物・焼土粒少量
第6層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質，炭化物少量
第7層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物・焼土粒少量
第8層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，炭化物少量
第9層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物少量
第10層　褐色土（10YR4/6）粘土質
第11層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質，炭化物少量
第12層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質，炭化物少量

第66図　第14号住居跡出土遺物（1）



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
70-1	床直カマド	土師器　甕	－	－	11.0	－	－	ヘラケズリ	－		輪積痕	砂底	甕Ⅰ	42
2	床直	土師器　小型土器	10.2	8.6	6.7	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ	ヘラ削り		小型	21
3	カマド 煙道上位	土師器　甕	16.0	19.0	8.3	ナデ	輪積痕 ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		甕Ⅱ$_1$	29
4	床直	土師器　鉢				ロクロ	ロクロ	ミガキ 手持ケズリ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	回転糸切り	鉢	28
5	1	土師器　小型土器	2.6	2.2	1.5									31
6	カマド	土師器　甕	－	－	－	ナデ	ヘラケズリ	－	ナデ	ヨコナデ	－	－	甕Ⅰ	38

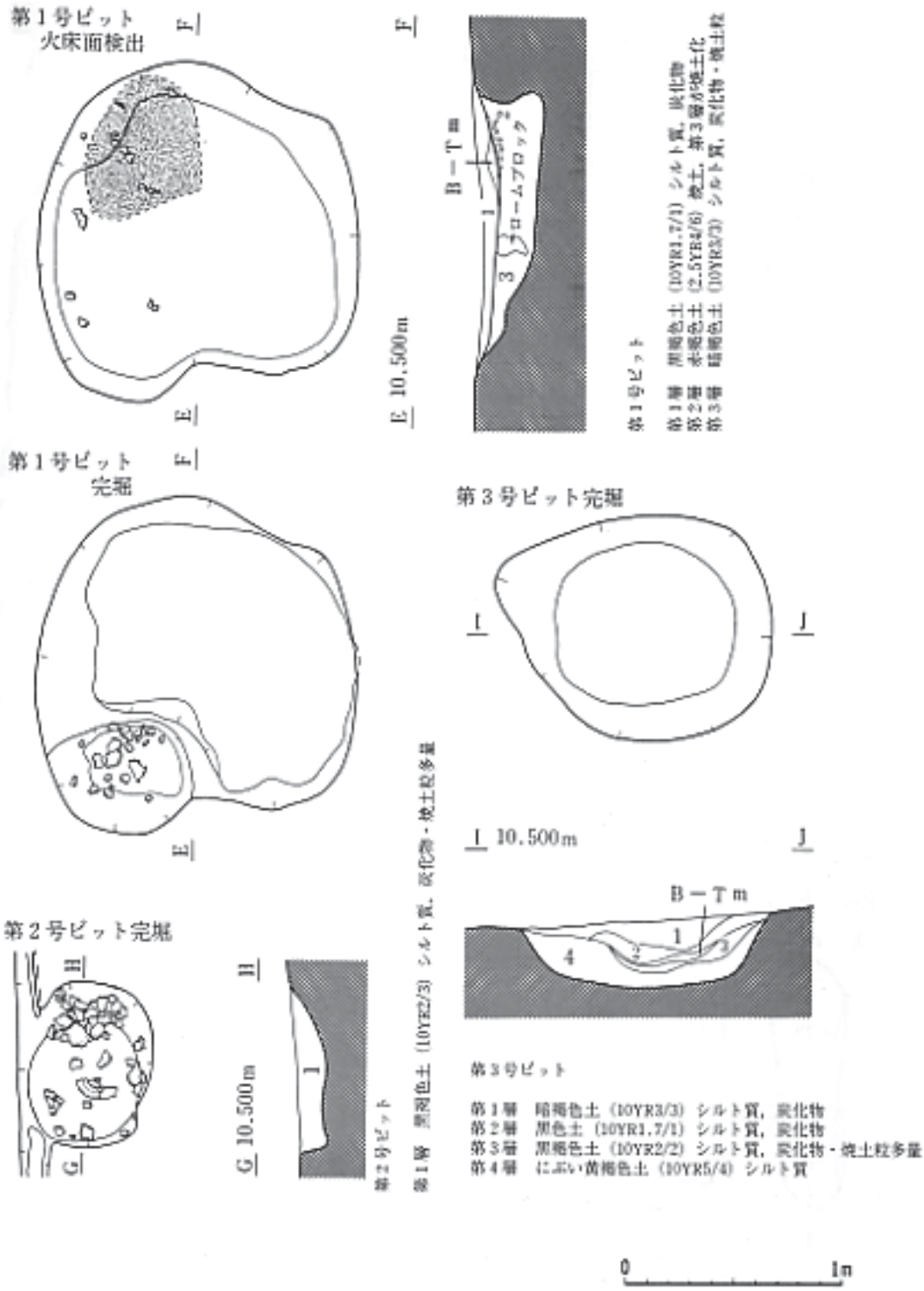
第 67 図　第 14 号住居跡出土遺物（2）



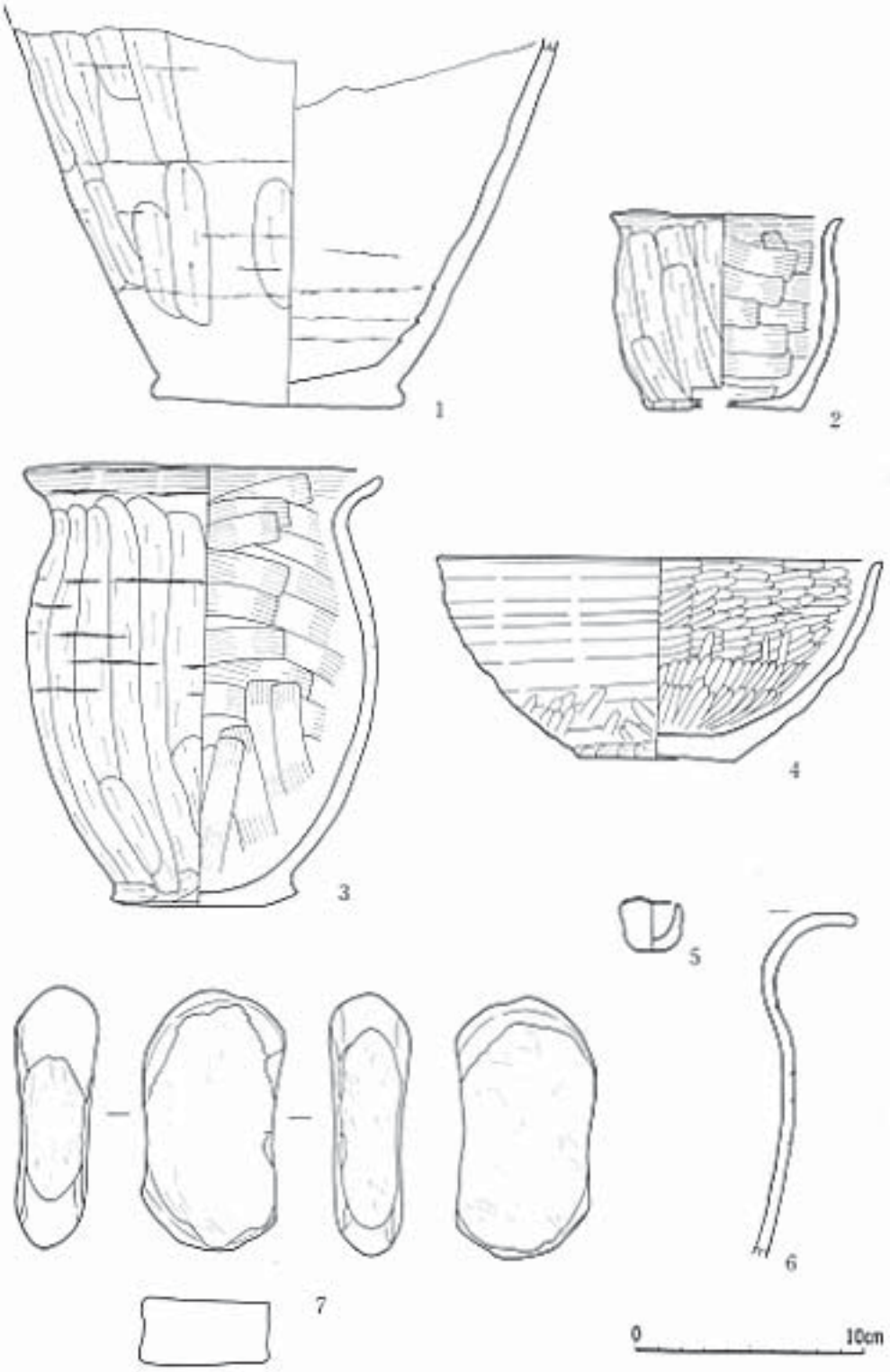
第14号住居跡カマド

第1層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，B－Tカテフラ少量，炭化物・焼土粒少量
第2層　にぶい黄橙色土（10YR6/4）シルト質，炭化物少量
第3層　黒褐色土（10YR3/2）シルト質，炭化物少量，焼土粒多量
第4層　黒褐色土（10YR2/2）シルト質，炭化物多量
第5層　明褐色土（10YR5/8）シルト質，炭化物・焼土粒多量
第6層　褐色土（10YR4/6）シルト質，焼土粒少量
第7層　暗褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物少量
第8層　黄褐色土（10YR5/6）シルト質
第9層　暗褐色土（10YR3/4）粘土質，炭化物少量

第68図　第14号住居跡カマド



第69図　第14号住居跡第１・２・３号ピット



第70図　第14号住居跡出土遺物

[　　床　　]一部で第Ⅵ層を床とするが、全体的に貼床である。若干凹凸が見られ、踏み締まりは見られない。

[壁　　溝]　部分的に途切れるが、ほぼ全周する。

[柱　　穴]　計5基のピットを検出した。柱穴の配置として、P_3・P_4・P_5の3基を特定したが、P_2も可能性がある。

[カ　マ　ド]南壁西寄に位置する。撹乱を受けているが、半トンネル式の煙道を有すると推定した。袖は、粘土を貼って構築している。また、支脚として坏と小型土器を使用し、袖に組み込むように構築している。燃焼部には、浅いくぼみが見られる。燃焼室の高さは不明だが、住居廃絶時に崩壊したと考えられる。また、燃焼部の北側も床面からは若干くぼんでいる。

[堆　積　土]9層に分層した。第6・7・9層に灰白色火山灰が含まれ、色調と粒子の粗い浮石質であことから十和田a火山灰と推定した。この火山灰は、床面のほぼ直上にまで入り込んでいる。また、第6層より上位の第2～5層には、ロームブロックが比較的多量に含まれている。これらのことから、本遺構が廃絶後まもなく十和田a火山灰の混入があり、その後人為的に埋め戻していると推定した。

[その他の特殊施設]　カマド東袖の横に構築されたP_1内に一次的な焼土層を検出した。性格は不明であるが、この層の上位堆積土内から5・7と縄文時代の石鏃（第38図4）が出土している。石鏃については、後世の流れ込みと判断した。

[出　土　遺　物]床面、カマド内とピット内から、土師器甕・坏・小型土器が出土している。6は、カマド袖に組み込まれていたものである。5と7は、P_1からの出土である。須恵器坏（8）は第1層からの出土で、床面からは出土していない。また、炭化材と細かな炭化物を床面で検出した。

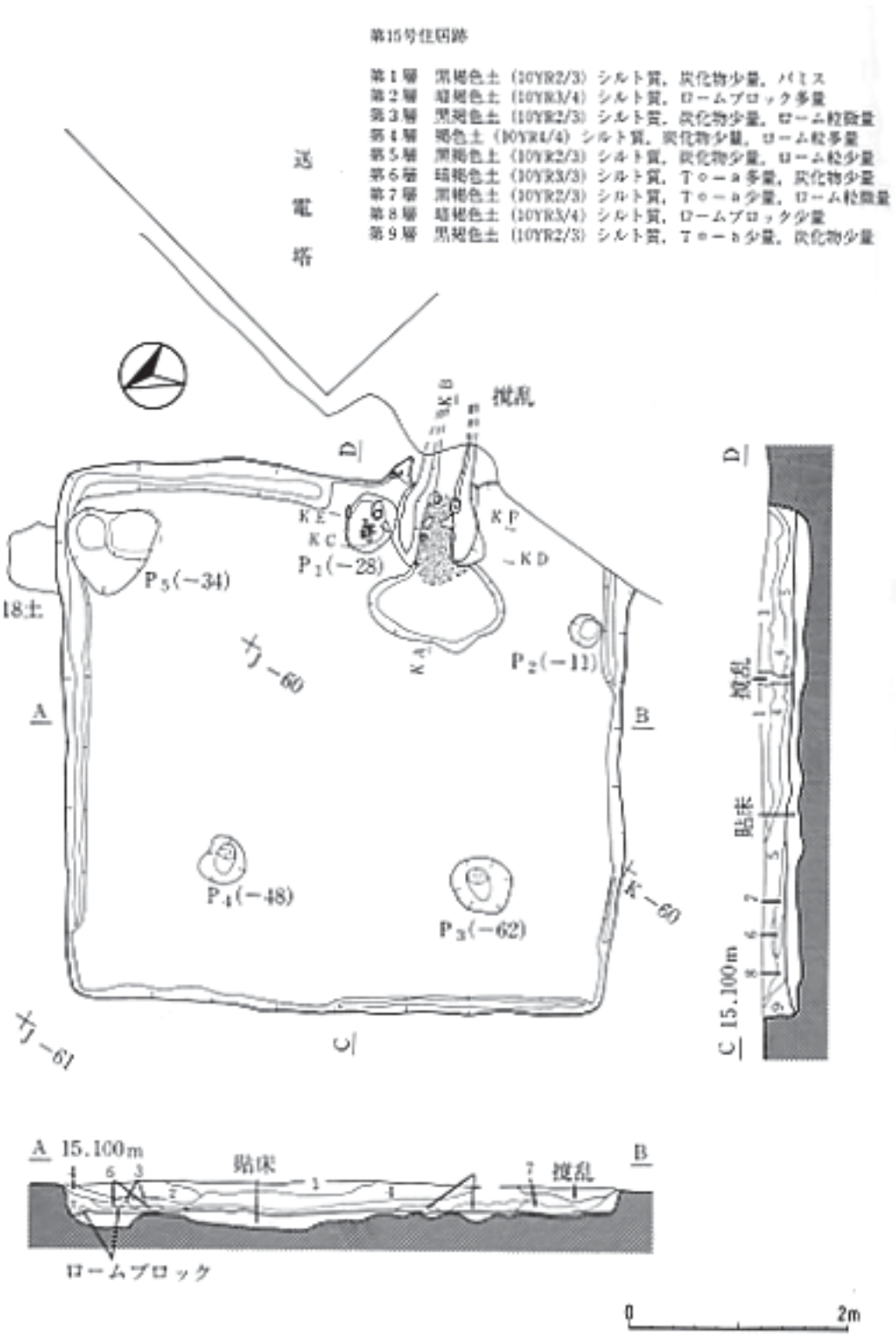
第16号住居跡（第75・76図）

[位　　置]　G・H・I一60・61・62、第Ⅵ層で第13号住居跡とともに暗褐色土の落ち込みを確認した。

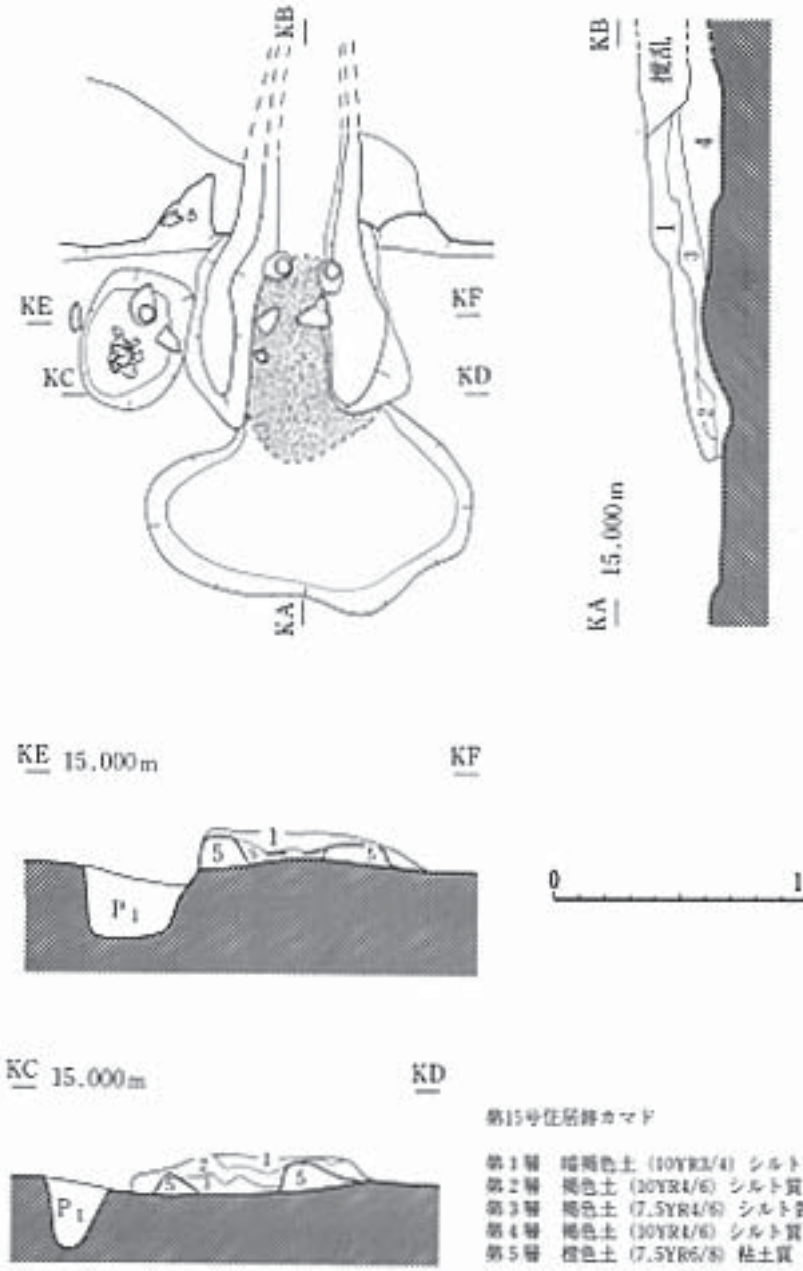
[重　　複]　第13号住居跡と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模]　隅丸方形を呈すると思われる。壁長は、西壁で6．9mである。南壁・北壁・東壁も同様で大型の竪穴住居であると推測される。

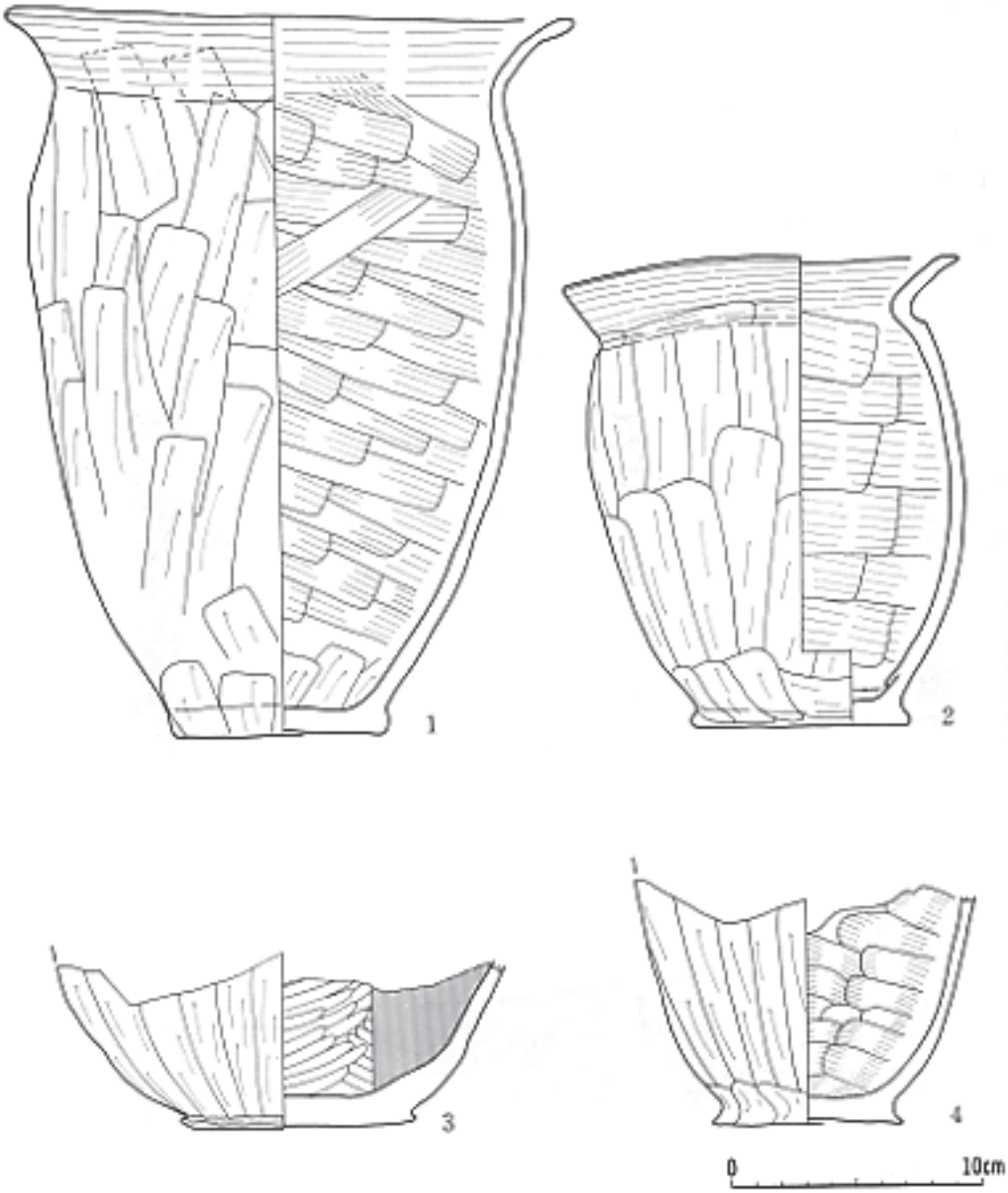
[　　壁　　]北側ほど壁高は低くなり、北壁は存在せず壁溝のみの検出である。南壁が最も高く、40cmである。



第71図　第15号住居跡

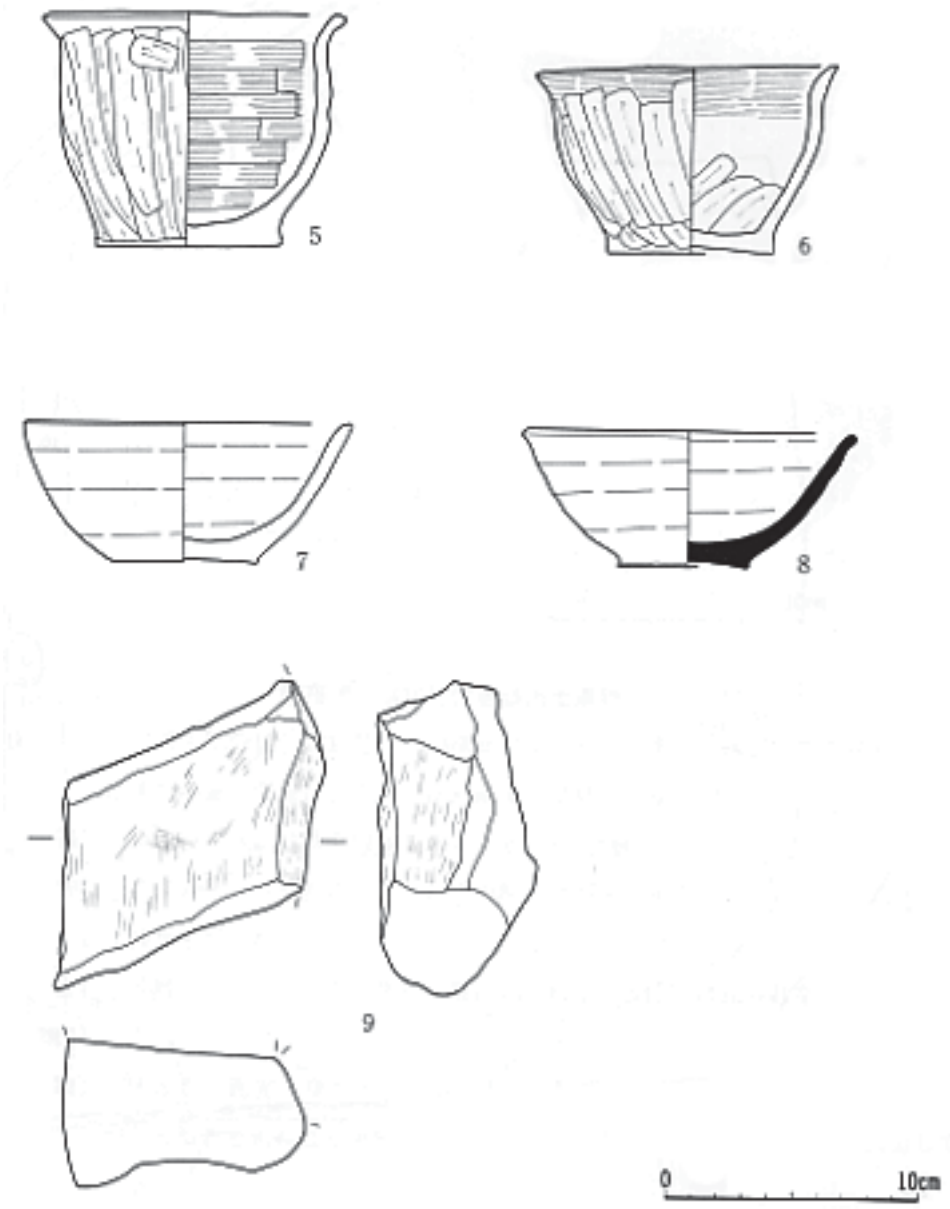


第72図　第15号住居跡カマド



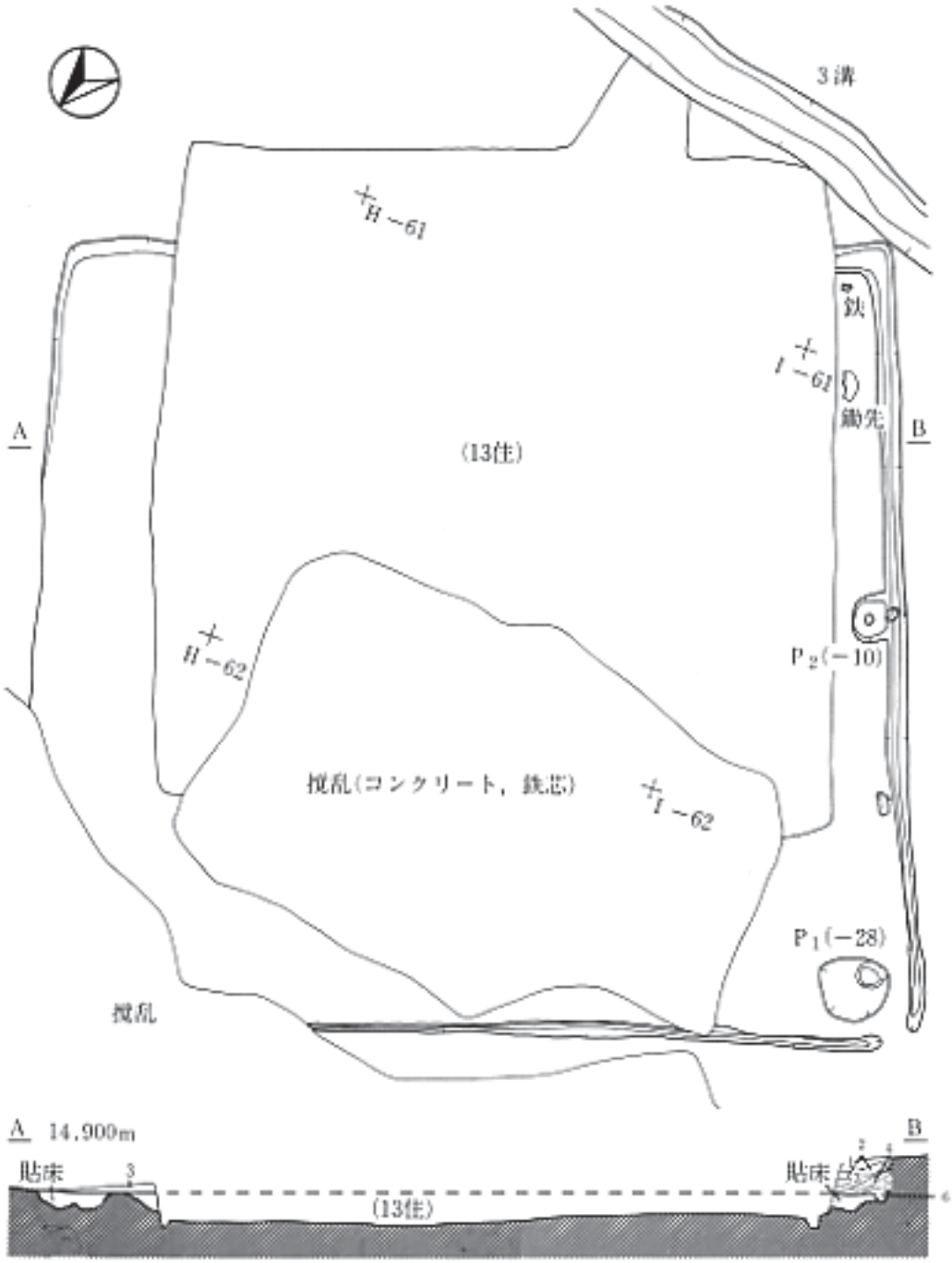
番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
73-1	床直　P_1	土師器　甕	23.0	29.5	8.5	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		甕 I_1	13
2	床直	土師器　甕	16.0	19.0	9.0	ナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヨコナデ	輪積痕	砂底	甕 II_1	2
3	床直	土師器　甕	－	－	9.5	－	－	ヘラケズリ	－		ミガキ 黒色処理	砂底	甕Ⅳ	27
4	カマド□ P	土師器　甕	－	－		－	－	ヘラケズリ	－		ヘラナデ	砂底	甕Ⅱ	24

第 73 図　第 15 号住居跡出土遺物（1）



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
74-5	P_1	土師器　小型土器	12.0	9.2	7.3		ヘラケズリ	ヘラケズリ		ヘラナデ	ヘラナデ		小型	12
6	カマド 3	土師器　小型土器	11.9	7.5	6.7	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	小型	16
7	P_1 1	土師器　坏	13.0	5.5	5.7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	坏4	7
8	1	土師器　坏	13.2	5.4	5.1	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	坏b	6

第 74 図　第 15 号住居跡出土遺物（2）

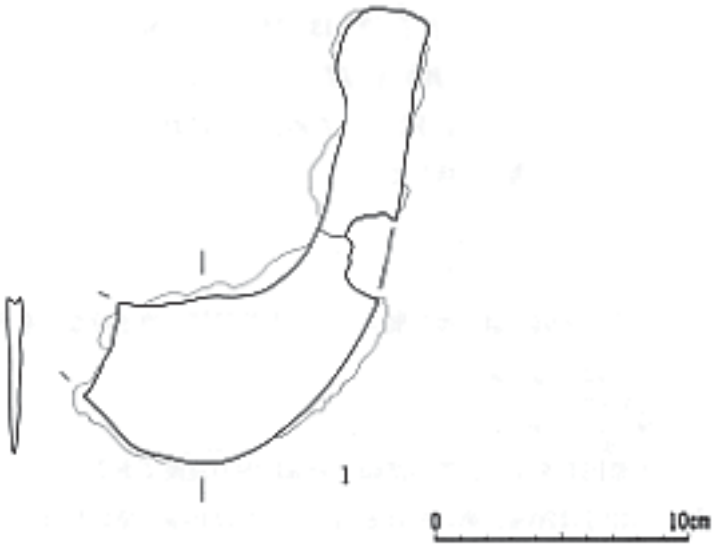


第16号住居跡

第1層　暗褐色土（10YR3/4）シルト質，粘土ブロック，炭化物
第2層　黄褐色土（10YR5/6）シルト質，焼土・炭化物
第3層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質
第4層　明黄褐色土（10YR6/6）ローム粒主体
第5層　暗褐色土（10YR3/3）シルト質，炭化物，焼土粒
第6層　黒褐色土（10YR2/3）シルト質，炭化物

0　2m

第75図　第16号住居跡



第76図　第16号住居跡出土遺物

[　　床　　]床の大部分は、第13号住居の構築により不明である。確認できた範囲では、貼床である。床面は、平坦で踏み締まりは見られない。

[壁　　溝]　東側を除き、壁溝を検出した。

[柱　　穴]　2基のピットを検出した。柱穴の配置は不明である。

[カ　マ　ド]検出していない。

[堆　積　土]6層に分層した。炭化物が全層に見られる。火山灰は見られない。

[その他の特殊施設]　なし。

[出　土　遺　物]床面から鋤先半身が出土している。土師器は、破片のみである。また、P_1から大型甕と思われる須恵器片が出土している。その他、鉄滓などが出土している。

2　土　　壙

歴史時代の土壙としたもののなかで、第12・13・14・15・16号土壙については、その確認状況・配置・規模・堆積土から、歴史時代の住居跡または何らかの遺構の一部痕跡の可能性があると思われる。しかし、その決定材料が乏しいため、本書においても調査時そのままの個別の遺構番号を付して扱うが、報告は一括して行う。

第12・13・14・15・16号土壙（第77図）

[位　　置]　H・I－53・54、撹乱層を除去した第Ⅵ層で焼土粒などを含んだ落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[平面形・規模]　不整円形を呈し、開口部60×50cm以内の規模である。

[　壁　]第12号は20cm、第13号は8cm、第14号は10cm、第15号は7cm、第16号は22cmである。

[　底　]いずれも底面は堅いが、特に共通性は見られない。

[堆　積　土]各号とも1層のみの堆積である。にぶい黄褐色土が主体となるのは第12・14・16号で、他の第13・15号は暗褐色土が主体となっている。また、焼土粒が第13・15号に特に多く含まれ、第12・14号にも含まれている。炭化物は第13・15号に多量に含まれ、第12・16号にも含まれている。

[出　土　遺　物]なし。

第17号土壙（第77図）

[位　　置]　H・I－66・67、第Ⅵ層でロームブロックを多量に含んだ暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　南東隅に撹乱を受けている。

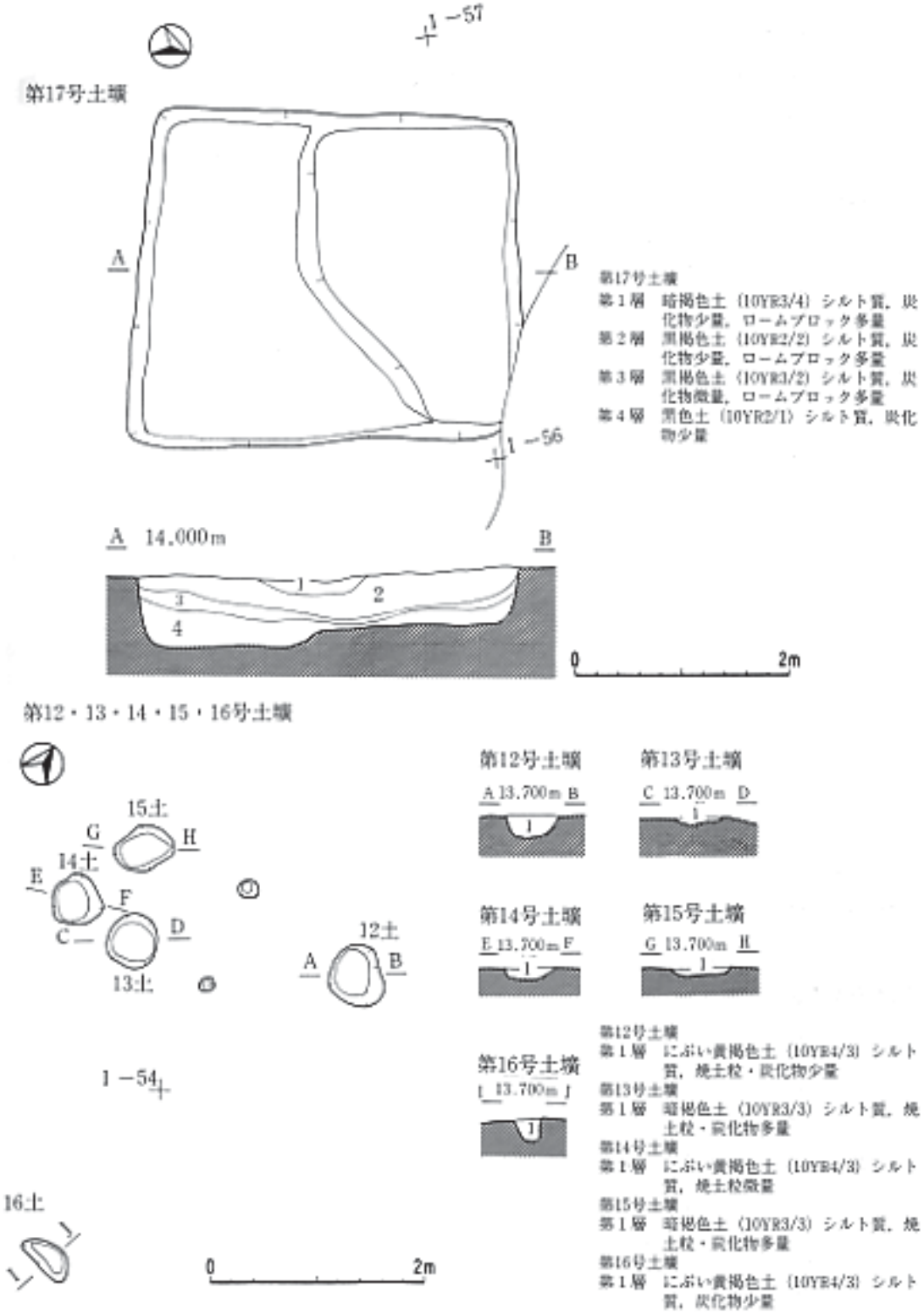
[平面形・規模]　不整方形を呈する。壁長は、北壁3．3m・西壁3．1mで、南壁と東壁もほぼ同様と推測する。

[　壁　]南壁60cm、北壁50cmである。

[　底　]中央部で段状となる。

[堆　積　土]4層に分層した。全層にロームブロックが見られ、特に第1～3層に多い。また、炭化物も少量含まれている。

「出　土　遺　物]土師器甕の破片が出土している。



第77図　第12～17号土壙

3　溝状遺構

第1号溝状遺構（第78図）

[位　　置]　J・K・L－65・66、第Ⅵ層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[平面形・規模]　直線状を呈する。最大幅65cm、全長9m、最深部45cmである

[堆　積　土]3層に分層した。いずれにも炭化物が少量含まれる。

[出　土　遺　物]なし。

第2号溝状遺構（第78図）

[位　　置]　J・K・L・M－64・65・66・67、第Ⅵ層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　なし。

[平面形・規模]　直線状を呈する。最大幅50cm、全長m14．5m、最深部18cmである。

[堆　積　土]2層に分層した。ともに炭化物が少量含まれる。

[出　土　遺　物]なし。

第3号溝状遮構（第79図）

[位　　置]　G・H・I・J－60・61、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　第13号住居跡と重複するが、本遺構が新しい。

[平面形・規模]　若干曲折するが、ほぼ直線状を呈する。最大幅56cm、全長16．5m、最深22cmである。

[堆　積　土]3層に分層した。炭化物が少量含まれ、焼土粒は微量である。

[出　土　遺　物]土師器片が数片出土している。

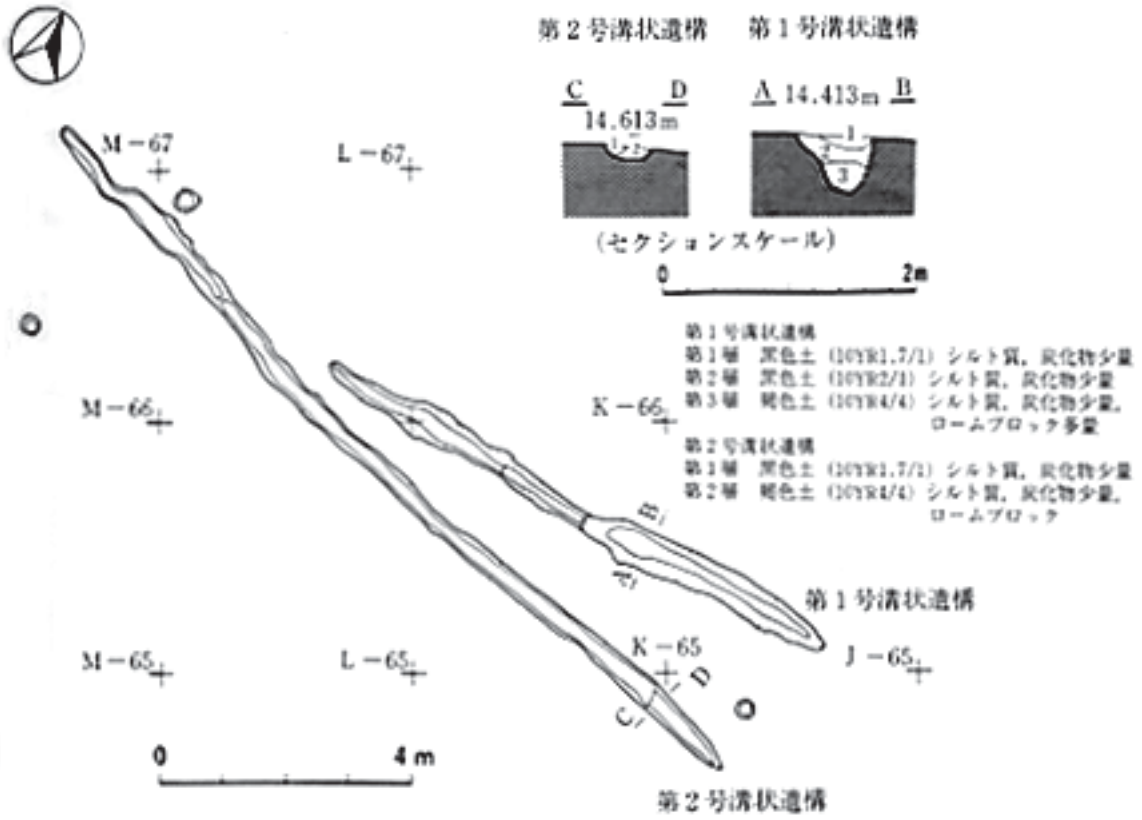
第4号溝状連構（第80・81図）

[位　　置]　I・J・K－47・48・49・50、第Ⅵ層で黒褐色土・黄褐色火山灰・ロームブロック混入土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　北東部を撹乱により失っている。

[平面形・規模]　南東部を開いた、馬蹄形を呈する。開口部（開溝部）東側が良好な形状を保有しており、最大幅170cm、最深55cmである。他の部分は削平を受けているが、掘り方断面形は一律ではなく、U字形と㈜字形の部分が見られる。

[堆　積　土]4層に分層した。開口部東側にのみ黄褐色火山灰が見られ、白頭山・苫小牧火山灰と判断した。この火山灰は堆積土上位のみの混入である。そのため、確



第78図　第１・２号溝状遺構

認時において見られた部分もある。第4層は、ロームブロックが多いことから、壁の崩落と思われる。

[出　土 遺　物]開口部東側から集中して出土している。遺構に伴うものであるか不明であるが、火山灰の下位から、1と4などが出土している。また、鉄滓も出土している。

第５号溝状遺構（第80図）

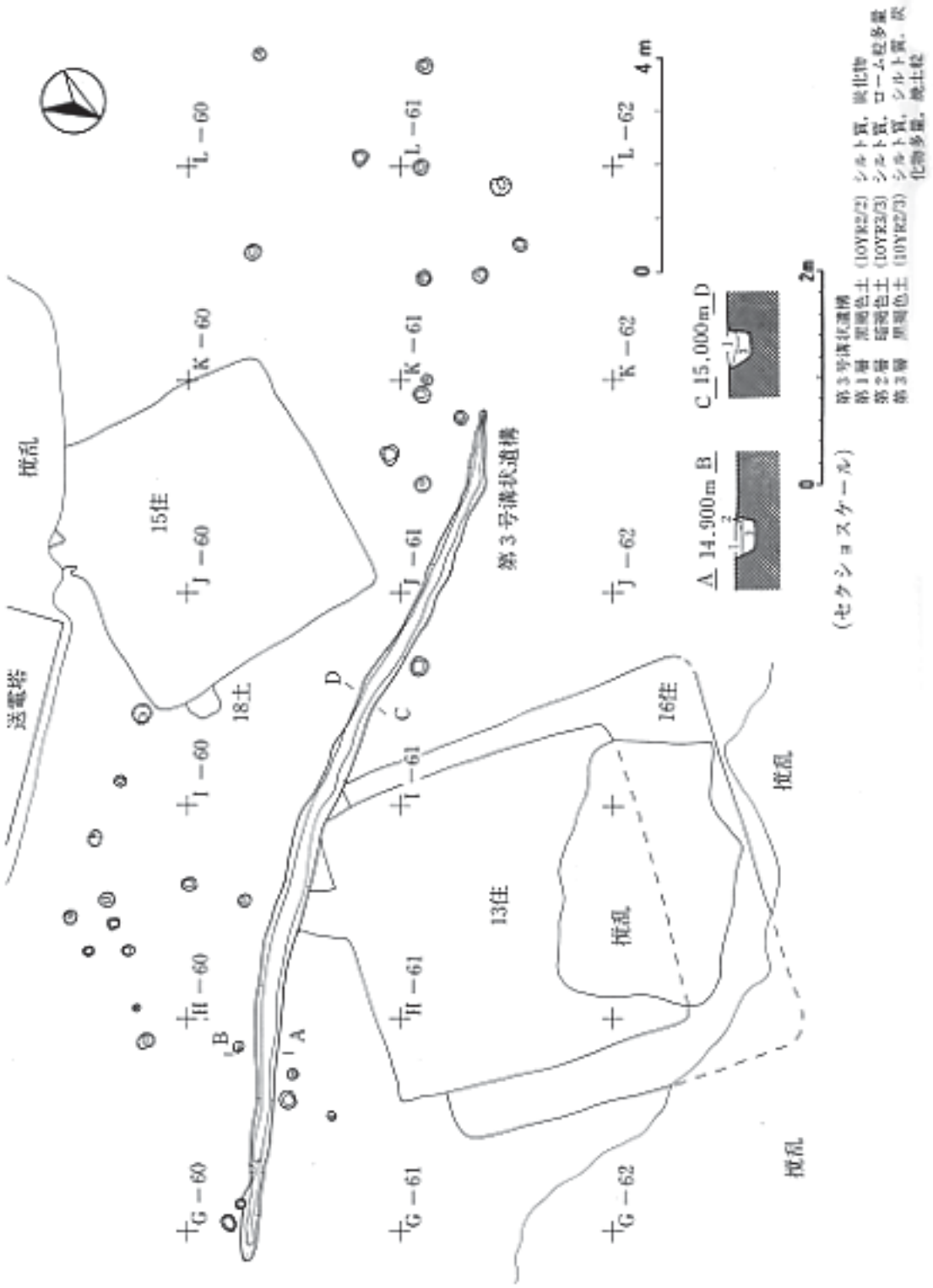
[位　　置]　G・H－47・48・49、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　第６号溝と重複するが、本遺構が新しい。

[平面形・規模]　削平を受けているが、元来、北側は東側へ回り込む残存部同様の弧を描いていたと推測される。

[堆　積　土]3層に分層した。第2・3層は、壁の崩落と推測される。

[出　土 遺　物]なし。



第79図　第３号溝状遺構，第２号柱穴状ピット群

第６号溝状遺構（第80図）

[位　　置]　H・I・J－49・50、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　第５号溝・第７号溝と重複する。第５号よりは古く、第７号よりは新しい。

[平面形・規模]　削平を受けているが、元来、北側から東側と西側へ続き南へ回り込むものであったと推測される。

[堆　積　土]3層に分層した。第３層は壁の崩落によるものと推測される。

[出　土　遺　物]土師器・須恵器片が出土している。

第７号溝状遺構（第80図）

[位　　置]　G・H－49、第Ⅵ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重　　複]　第６号溝と重複するが、本遺構が古い。

[平面形・規模]　残存部では、直線状を呈する。

[堆　積　土]3層に分層した。第３層は壁の崩壊と推定される。

[出　土　遺　物]なし。

4　柱穴状ピット群

今回の調査では、柱穴と思われる小ピットを数基検出したが、掘立柱建物跡としてその関係を把握するまでに至らなかったため、「柱穴状ピット群」として一括して扱った。

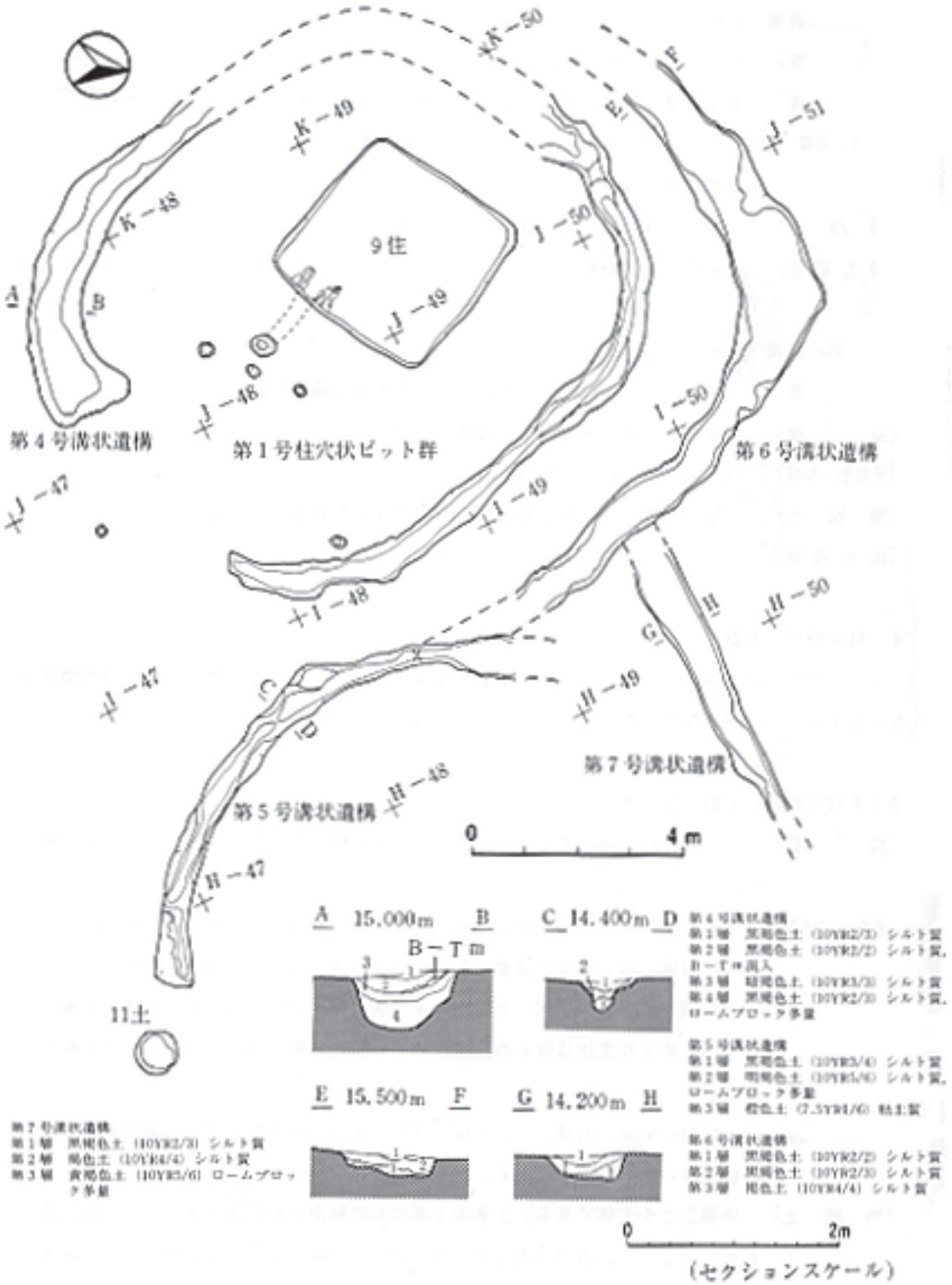
第１号柱穴状ピット群（第80図）

[位　　置]　I・J－47・48、第Ⅵ層で黒褐色土と灰白色火山灰の小円形状の落ち込みを確認した。

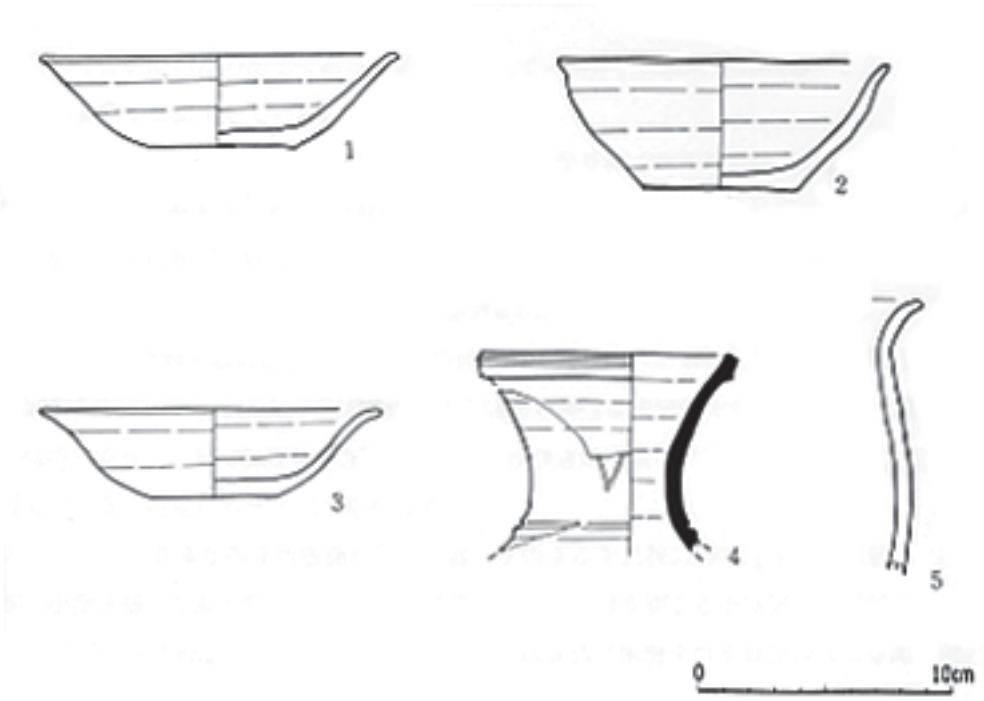
[重複・付属施設]　それぞれのピットの関係は不明である。また周囲には、第９号住居跡、第４号溝状遺構、第６号溝状遺構がある。住居に伴う掘立柱建物の事例やその２つを取り囲む外周溝の事例があるが、本遺構においては、第９号住居跡の主軸とのずれや第4号溝状遺溝との位置などから、これらとの関係については不明な点が多い。

[平面形・規模]　上位層が東側で消滅しているが、径20～30cm、深さ11～27cmの規模を呈し、平面径はいずれも円形である。

[堆　積　土]黒褐色土が主体である。５基中１基のみの検出だが、混入する火山灰は、浮石質であることと灰白色系であることから十和田a火山灰と判断した。この火山灰は第９号住居跡でも検出されているため、ほぼ同時期のものであることは



第80図　第4～7号溝状遺構、第1号柱穴状ピット群



番号	出土層位	種類・器種	法量（cm）			外　面　調　整			内　面　調　整			底面	分類	整理番号
			口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半			
81-1	1	土師器	14.1	3.6	5.8	ロクロ		ロクロ	ロクロ		ロクロ	回転糸切り	坏$_5$	11
2	2 3	土師器　坏	13.2	5.1	5.7	ロクロ						回転糸切り	坏$_4$	9
3	2 4	土師器	13.6	3.5	5.6							回転糸切り	坏$_5$	10
4	2	須恵器　長頸壺	10.4			ロクロ			ロクロ					22
5	1	土師器　甕	－	－	－	ナデ		－	ナデ	ハケメ	－	－	甕Ｉ$_1$	62

第 81 図　第 4 号溝状遺構出土遺物

言えるであろう。他の混入物では、炭化物とローム粒が少量見られた。

第 2 号柱穴状ピット群（第 79 図）

[位　　置]　G ～ L － 59 ～ 61、第Ⅵ層で小円形状の落ち込みを確認した。

[重複・付属施設]　それぞれのピットの関係は不明である。

[平面形・規模]　径 16 ～ 38cm、深さ 8 ～ 30cm の規模を呈し、平面形はいずれも円形である。

[堆　積　土]道路として使用されていた面と確認した面とに大差がないため、堅くしまった堆積土である。いずれも黒色土や黒褐色土が主体となっており、炭化物やローム粒の混入が全体的に見られる。

第2節　出土遺物

1　土　師　器

出土した土師器の分類は以下のとおりである。

(1)　甕

器高から、Ⅰ大型（30cm程度）、Ⅱ中型（20cm程度）、Ⅲ小型（15cm程度）に分けられる。

器面調整はほぼ同様で、口縁部の内外面が横方何のナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリで内面は横または斜めのヘラナデである。ロクロによる調整が見られたのは、第4号住居跡から出土した1片のみである。また、砂底のものとそうでないものとがある。

甕Ⅰ$_1$類　口縁部が「く」字状に外反するもので、器面調整は前述のものである。
甕Ⅰ$_2$類　口縁部の外反が小さく直立状のもので、調整は甕Ⅰ$_1$類と同様である。
甕Ⅰ$_3$類　調整においてロクロを使用したものである。破片1片のみと少ない。

甕Ⅱ$_1$類　口縁部の形状と器面調整が甕Ⅰ$_1$類と同様のものである。
甕Ⅱ$_2$類　口縁部の形状が甕Ⅰ$_2$類と同様のもので、調整は甕Ⅰ$_1$類と同様である。

甕Ⅲ類　器面調整が甕Ⅰ$_1$類と同様のものである。

甕Ⅳ類　内面に黒色処理を行ったものである。底部のみで器形・器高とも不明である。

(2) 坏

いずれもロクロによる整形であり、切り離し方法はすべて回転糸切りである。

坏$_1$類　ロクロ整形で、内面にヘラミガキを行ったものである。ロクロ目の凹凸は顕著でない。
坏$_2$類　ロクロ整形で、内面に黒色処理を行ったものである。内面のヘラミガキは明瞭なものとそうでないものがある。
坏$_3$類　ロクロ整形で、再調整が行われず、ロクロ目の凹凸が顕著なものである。
坏$_4$類　ロクロ整形で、再調整が行われず、ロクロ目の凹凸が顕著でないものである。
坏$_5$類　ロクロ整形で、再調整を行わないもので、器高が低く皿に近い形状のものである。

(3) 堝

第13号住居跡のみの出土である。底部を失っているが、丸底と思われる。また、別個体の破片も同遺構から出土している。

堝$_1$類　ロクロ整形で、再調整が行われたもの。
堝$_2$類　ロクロ整形が行われないもの。

(4) 鉢

坏を大きくした形状を呈するものが、第14号住居跡から出土している。外面のロクロ目の凹凸は段状を呈し、指ではなく、工具によるものと思われる。器厚は厚く、焼成は良好で赤色を呈している。内面にヘラミガキを行っている。

(5) 小型土器

器高が10cm以下のものを小型土器とした。

2　須恵器

器形の明らかになったものは坏のみである。この他にも長頸壷、短頸壷あるいは甕と思われる破片が出土しているが、接合関係が思わしくなく器形を把握するまでに至っていない。

坏a類　ロクロ整形、回転糸切りである。内外面とも青灰色を呈するものである。火だすきの痕跡が見られる。
坏b類　ロクロ整形、回転糸切りである。内外面とも灰白色を呈するものである。火だすきの痕跡が見られる。

3　擦　文　土　器

第13号住居跡から、1点出土している。口縁部を失っているが、肩部が張り出し、底部がすぼむ擦文土器独特のプロポーションに類似する。頸部に平行沈線が施され、肩部を棒状工具のようなもので右上から左下方向にかき出すような列点状の施文を行っている。胴部外面には、ミガキとも擦痕とも思えるような調整を行い、内面ではハケメ調整を行っている。

出土層位は、白頭山・苫小牧火山灰より下位である。

4　支　　脚

第3・9・13号住居跡から輪積みによる中空式のものが1点ずつ出土している。3住出土のものは、製作時に頂部に孔を設けているが、9住出土のものは摩滅による可能性がある。13住出土のものは、頂部をふさがないものである。また、9住のものには、底辺部に「∧」状の刻みが1対ある。

5　砥　　石

第13・14・15号住居跡から出土している。

6　鉄　製　品

鉄製品と明瞭に判別できたものは、第9号住居跡堆積土内から出土した刀子と第16号住居跡床面から出土した鋤先である。

7　鉄　　滓

第13・16号住居跡、第4号溝状遺構から出土している。

（小林）

	土師器															須恵器					擦文	備考
番号	大型甕			中型甕		小型甕	内黒甕	坏					堝	鉢	小型	坏		壷		甕		
	甕Ⅰ$_1$	甕Ⅰ$_2$	甕Ⅰ$_3$	甕Ⅱ$_1$	甕Ⅱ$_2$	甕Ⅲ	甕Ⅳ	坏$_1$	坏$_2$	坏$_3$	坏$_4$	坏$_5$				坏a	坏b	長頸壷	短頸壷			
1住	○			○				○							○							
2住						□																
3住	○									□												
4住		○	□	□			○															
6住	○																					
9住	○																					
11住	○															○						
12住																						
13住	○			○	○				△				○		○		△				○	
14住	○			○										○	○							
15住	○			○			○								○	△						
16住																				(○)		
17土	□							□														
1溝																						
2溝																						
3溝																						
4溝	□			□						□		□						□				
5溝																						
6溝																						
7溝																						

○カマド・床面（底面）・ピットからの出土　□堆積土下位からの出土　△堆積土上位からの出土

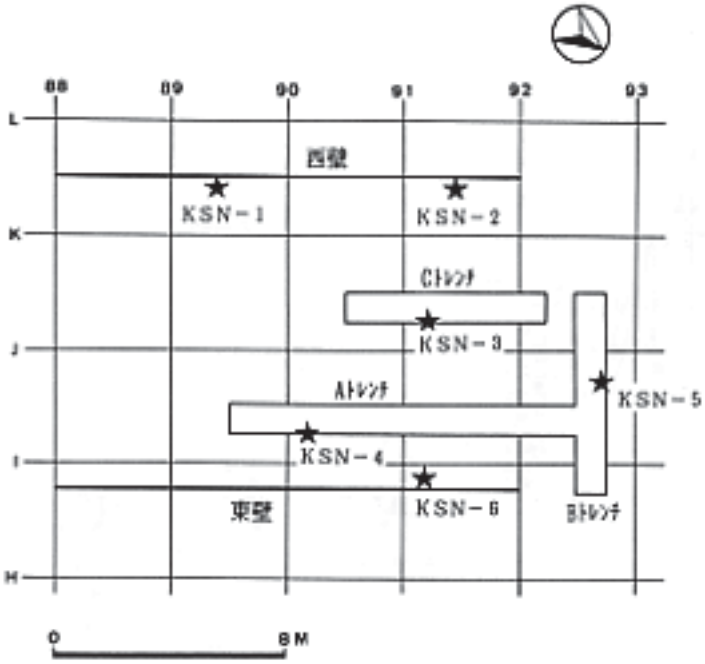
第VI章　小三内遺跡低地域の古環境

大阪市立大学理学部　辻　誠一郎・植田　弥生
流通科学大学　　南木　睦彦

小三内遺跡の北西部では、台地から沖館川低地への地形変換点における地質が観察された。ここでは、台地を構成する岡町層を不整合に覆う完新世堆積物が連続的に観察され、前述のように縄文時代前期以降の考古遺物が検出された。さらに、湿地成の泥炭層とともに多量の木材化石を含む河成の堆積物が確認された。小三内遺跡は広い意味では三内丸山遺跡の一部をなすもので、縄文時代前期を中心とするこの地域の人間と環境の交渉史の解明を進める上で糸口となる基礎的な資料を提供するとみられた。そこで、予察的ではあるが、遺跡発掘調査区域での層序・編年、および植物化石群の産状と組成を検討した結果、以下のような成果を得ることができた。

第１節　層序と編年

層序・編年および植物化石群の産状・組成の検討は、発掘調査区域内の西壁・東壁、および



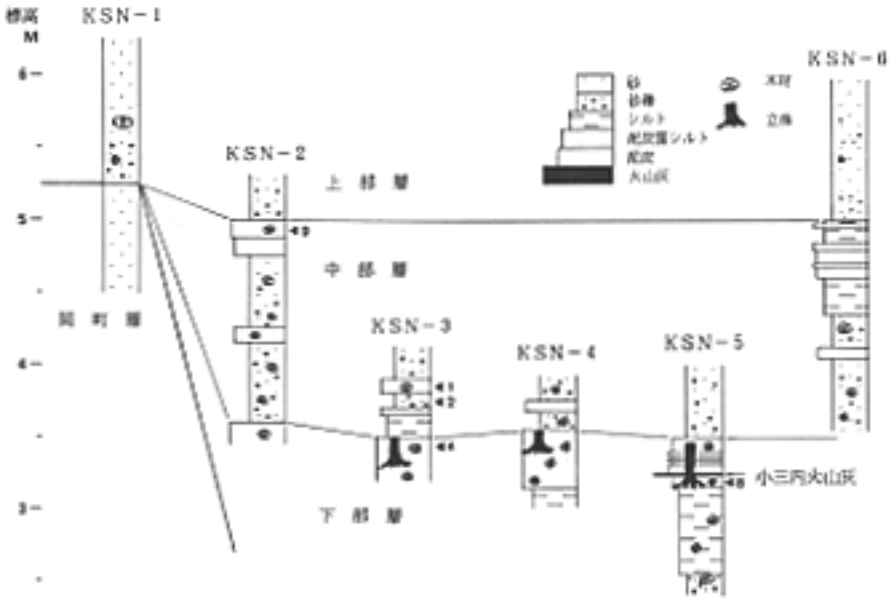
第82図　低地域調査区、西壁・東壁および地質柱状図の位置

A・B・Cの3つのトレンチで観察された堆積物に対して行った。それぞれの位置と地質柱状図を示した主要地点の位置を第82図に示した。

A. 層序区分

第84図の西壁・東壁の断面スケッチに示されるように、調査区域内の台地から低地への変換点において、台地を構成する更新世岡町層と完新世堆積物との明瞭な不整合が確認された。完新世堆積物は礫・砂・シルト・泥炭といった湿地成および河成の堆積物からなるが、層位的な層相の変化にもとづいて、下位から、下部層、中部層、上部層の3層に大きく区分された。主要な地点(KSN－1～6)における地質柱状図を第83図に示した。

下部層は、発掘調査によって標高約2.5mまで掘り下げられたBトレンチの観察結果から、少なくとも、下位から砂礫層、砂・シルト互層、木本泥炭層の3層に細分できる。砂礫層はトレンチ最下部で確認されたにすぎないが、軽石礫なども多量に含み、出水量が著しいので、下位にかなり厚く堆積しているものと予想される。砂・シルト互層は層厚約50～60cmで、低地側で砂が、台地縁でシルトが卓越する。また、下部で砂が、上部でシルトが卓越する。砂・シルト互層は多量の植物細片を含み、下部では直径20cm前後の木材が散在する。木本泥炭層は、層厚約40cm、主として褐色の植物遺体が密集する木本泥炭からなり、埋没立株が散在する。これ



第83図　主要地点の地質柱状図（位置は図1参照）

は張り出した根系を持ち、しばしばわずかな幹をも持つ。根系は木本泥炭層の基底より下位の砂・シルト層には及ばない。木本泥炭層は、低地側ではシルトの含有率が高く、灼熱消費量は40％以下であるが、台地縁では木材片やその他の植物片の含有率が高く、灼熱消費量は50％前後となる。低地側の木本泥炭層の下部には、層厚1mm前後の白色の火山灰層が挟在する。ここでは、便宜的に小三内火山灰と呼んでおくことにする。これはBトレンチで部分的に認められたにすぎないが、後で詳述するように、十和田中掫テフラに対比される可能性が高い。

中部層は、下位の木本泥炭層を部分的に削り込んで堆積する。層相の層位的変化にもとづいて、下半部の砂礫層と上半部のシルト・草本泥炭互層の２層に細分される。砂礫層は、層厚約50～100cm、層相の変化が著しいが、全般に礫が卓越する。また、木材片その他の粗粒植物片に富む有機質な泥がしばしばレンズ状に挟在する。シルト・草本泥炭互層は、層厚約20～40cm、暗灰色シルトと黒褐色草本泥炭からなるが、全般にシルトが卓越する。草本泥炭は繊維状植物片に富み、灼熱消費量は40％以上と高い。

上部層は砂礫層からなり、砂が全般に卓越する。葉理が著しく発達し、しばしば植物細片と砂が縞模様を呈する葉理が見られる。層厚は約1．5mであるが、東壁で見られるように、下位の中部層を鋭く削り込み、3mに及ぶことがある。大小の多数の木材が含まれるが、ほとんどは断面に対して垂直に、すなわち沖館川に平行に包含されている。

B．編　　年

上記の層序区分単位に具体的な年代を与えうる資料はこれまでのところ、考古遺物、火山灰、および放射性炭素年代の３つである。

前章で詳述されたように、東壁およびその東方奥からは考古遺物が出土している。下部層の木本泥炭層とその相当層から縄文時代前期末の土器が多数出土し、東館からは木製品も見出された。さらに、上部層をなす砂礫層の下部からは、縄文時代中期末の円筒上層ｅ式土器～後期の十腰内㈱式土器が出土している。木本泥炭層からの遺物はまとまりがあること、木本泥炭層が捜没林を包含するなど現地堆積の可能性が高いことから、木本泥炭層の形成期は縄文時代前期末とみなしてよいだろう。円筒上層ｅ式土器は、一部が中部層の草本泥炭に包含されていたことから、中部層の形成期はおおむね縄文時代前期末以降、縄文時代中期末までとみることができる。上部層中の十腰内Ｉ式土器は、上部層の堆積状態からみて二次的に運ばれた可能性が高いが、少なくとも下位層の包含層とは層位的には矛盾せず、縄文時代中期末～後期初頭ないしそれ以降とみなすことができる。

下部層の木本混炭層下部に挟在する白色火山灰層すなわち小三内火山灰の岩石記載的性質を、パレオ・ラボ調査研究部の菱田　量氏に分析していただいた結果は以下の通りである。火山灰の最大粒径は0．5mm、重鉱物組成は斜方輝石（55％）、単斜輝石（39％）と両輝石が優占、

軽鉱物組成は長石類（43%）と火山ガラス（57%、うち軽石型スポンジ状の火山ガラスが51%を占める）からなる。温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）による火山ガラスの屈折率は1．5089－1．5132（平均1．5108)、斜方輝石の最大屈折率は1．7036－1．7078（平均1．7057）である。これらの岩石記載的性質は、既報の十和田火山を噴出源とする十和田中掫テフラ（To－Cu）のそれとほぼ一致する。すなわち、町田・新井（1992）によると、重鉱物組成が斜方輝石・単斜輝石、軽鉱物に軽石型火山ガラスを含み、火山ガラスの屈折率は1．510－1．514、斜方輝石の屈折率は1．704－1．708である。

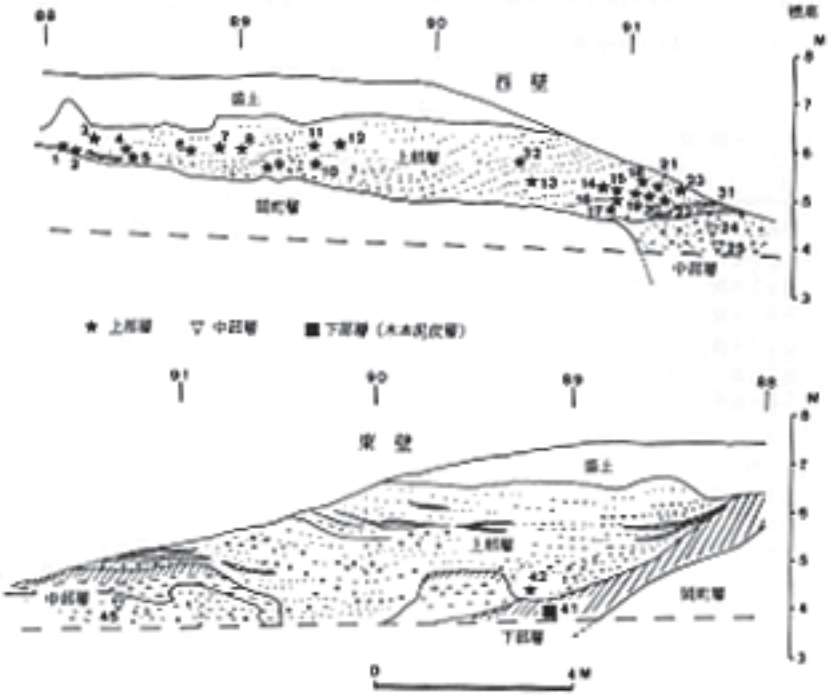
放射性炭素年代は後述のように、八戸工業大学において測定され、下部層の砂・シルト互層中の木材が約5，330年前、木本泥炭層中の埋没林の木材が約5，240～5，050年前、上部層の砂礫層中の木材が約2，690年前という結果が得られている。これらの放射性炭素年代は、出土した考古遺物による編年と矛盾せず、また、下部層の木本泥炭層に挟在する火山灰がこれまでほぼ5,000年前とされてきたTo－Cuに対比されることを裏付ける。

第2節　植物化石群

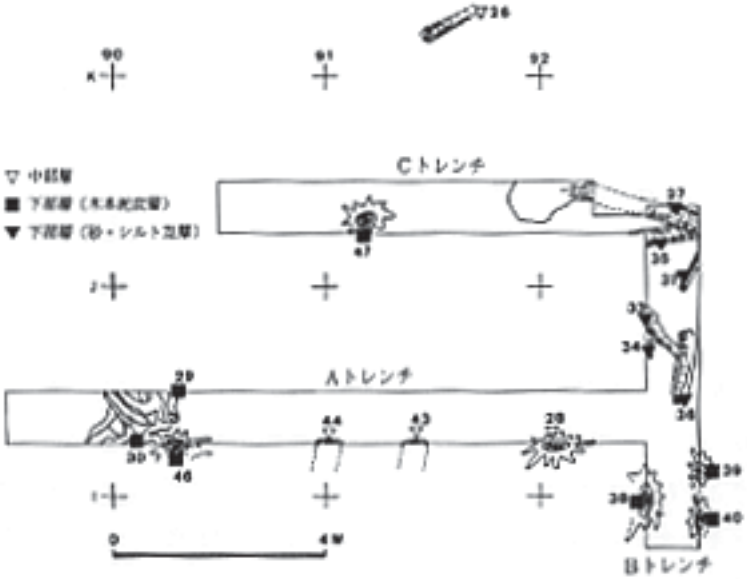
植物化石群の検討は、木材化石群、種子・果実などからなる大型植物化石群、および花粉化石群の3群について行った。木材化石群はすべて西壁・東壁および3トレンチから現地で採取したものである。大型植物化石群は、地点KSN－3の中部層の試料1と2、および下部層の木本泥炭層の試料4について水洗選別によって得たものである。花粉化石群は、地点KSN－5の下部層の木本泥炭下部（小三内火山灰直下、試料8）および地点KSN－2の中部層の草本泥炭（試料9）から得た。木材化石群と花粉化石群の標本は大阪市立大学に、大型植物化石群の標本は流通科学大学に保管されている。

A．木材化石群

樹種同定用に採取した木材化石はすべて断面スケッチ（西壁・東壁）およびトレンチ平面図に位置を落とした。採取した木材化石は表4に示したように、下部層の砂・シルト互層から6点、木本泥炭層から8点、中部層から8点、および上部層から25点で、計47点である。これらのうち木本泥炭層からのものはすべて埋没林をなす立株の幹あるいは根系から採取されたものである。各層位単位ごとに同定した樹種構成には特徴があり、下部層では3種以内であるのに対して、中部層は6種、上部層は10種に及ぶ。すなわち、下部層の砂・シルト互層の木材化石は、サワグルミ・コナラ属コナラ節・トネリコ属で、いずれも根材以外の木材である。木本泥炭層の立株は不明散孔材1点を除いてすべてトネリコ属に同定された。これに対して中部層と上部層では、トネリコ属を含むものの、ヤナギ属・クリ・トチノキなど雑多な落葉広葉樹が同定された。とくに上部層では、ヤナギ属・ハンノキ属ハンノキ亜属・ニレ属が目立つ傾向がある。



第84図　西壁および東壁の断面スケッチと木材化石の位置・試料番号



第85図　A、B、Cトレンチと付近の木材化石の産状・試料番号

表4　小三内遺跡から産出した木材化石の樹種

（計数以外の数字は図3、4に示した試料番号）

分　類　群	下部層		中部層	上部層	計
	砂・シルト互層	木本泥炭層			
ヤナギ属			24	14, 16, 18, 20	5
サワグルミ	34, 36, 37				3
ハンノキ属ハンノキ亜属				9, 13, 17, 19	4
ハンノキ属ハンノキ亜属（根材）				7, 8, 11, 22	4
ハンノキ属ハンノキ亜属（立株）			28		1
コナラ属コナラ節	27, 35				2
コナラ属コナラ節（根材）				1, 2, 3	3
クリ			31	5	2
ニレ属				12, 15, 21	3
モクレン属			26		1
カエデ属				6	1
トチノキ			45	4	2
ハリギリ				10	1
エゴノキ属				42	1
トネリコ属	33		25, 43, 44	23, 32	6
トネリコ属（根材）		29			1
トネリコ属（立株）		38, 39, 40, 41, 46, 48			6
不明散孔材（立株）		30			1
計	6	8	8	25	47

以上のような層位による産状の違いは、当時の堆積環境の違いとそれに対応した植生の違いを反映している。すなわち、下部層の下部では水域縁辺にサワグルミなどからなる河畔林的な植生がみられたが、木本泥炭層の形成期では泥炭地化が進行し、トネリコ属湿地林に変化した。中部層・上部層形成期では河川の活動の影響が顕著に見られる氾濫低地となり、ヤナギ属やハンノキ属を主体とする河畔・湿地林が成立していたとみられる。

B. 大型植物化石群

大型植物化石群の同定・計数結果を表5に示した。水洗選別に用いた試料が500c.c. ないし200c.c. と少ないため、種実類の産出個数は決して多くはないが、それにもかかわらず種類は多く、同定された分類群数は、木本類30、草本類25にのぼる。とくに中部層の試料1からはそのほとんどの分類群が検出されている。木本類での共通点は、亜寒帯性あるいは暖温帯件の種を含まないことであろう。下部層と中部層ではいくつかの差異があり、下部層の木本泥炭層からは、木本類ではハンノキとヤチダモの産出が目立つ。これに対して中部層からは、木本類・草本類ともに下部層には産しない分類群が多種確認される。その主なものは、木本類ではクワ属・クリ・サルナシ・タラノキ・ニワトコ、草本類ではイヌビエ・カナムグラ・カタバミ属など畑雑

表5　小三内遺跡の地点KSN－3から産出した大型植物化石

（数字は産出個数で、試料1は500cc、試料2と4は200c．cの堆積物を0．5mm目で水洗篩別して得た個数。＊印は定量堆積物以外から産出したもの）

分類群	産出部位	1	2	4
木本				
イヌガヤ	葉	4		
ヤナギ属	果実	6		
オニグルミ	核	＊	＊	
サワグルミ	核	4	1	
サワシバ	果実	6		
ハンノキ	果実			18
	果苞			2
クリ	果実	1	1	
ブナ	殻斗	＊		
	果実	1		
コナラ	殻斗			1
コナラ属コナラ亜属	殻斗	1		1
	幼果	1		
コナラ属	芽	1		
クワ属	種子	12		
イワガラミ	果実	1		
サクラ属サクラ節	核			1
キハダ	種子	2	1	1
ウルシ属	核	1		
イタヤカエデ	果実種子	6		3
ミツデカエデ	果実	1		
カエデ属	果実	1	1	
クマヤナギ属	核	3	1	
サルナシ	種子	4	1	
タラノキ	核	15	3	
ハリギリ	核	2		
ミズキ	核	1		
ハクウンボク	種子	1		
ヤチダモ	果実			3
ニワトコ	種子	9	1	
ヤブデマリ	核	1		
カンボク	核	7		
タニウツギ属	種子			
草本				
イヌビエ	穎	6		
エノコログサ属	穎			1
スゲ属	果実	39	2	30
カヤツリグサ属	果実	1		
カナムグラ	種子	2		
アサ	種子	2		
クワ	果実	1		
クサカラムシ属	種子	11		
ミズ属	種子	3		
ギシギシ属	果実	3		
ミゾソバ	果実	2	1	1
サナエタデ	果実	2		
ヤナギタデ	果実	1		
タデ属	果実	2	3	
ナデシコ科	種子	3		
ヘビイチゴ属	核	2	1	
カタバミ属	種子	1		
スミレ属	種子	5	1	
ウド	果実	9		1
イヌコウジュ属	果実	1		
シソ科	果実			
オトコエシ	果実	1		
ナス属	種子	1		1
ナス科	種子	1		
ゴキヅル	種子	1		

表6　小三内遺跡から産出した花粉化石の出現率

（木本花粉は木本花紛総数を、草本花粉とシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として産出）

分類群	XSN－5 8	SN－2 9
木本花粉	74.2	58.3
モミ属		0.3
ツガ属	0.2	
トウヒ属	0.6	
マツ属	0.4	0.3
スギ属		0.9
ヒノキ科－イチイ科－イヌガヤ科	2.6	3.7
ヤナギ属	0.6	1.4
クルミ属－サワグルミ属	13.7	7.1
クマシデ属－アサダ属	3.6	2.9
カバノキ属	0.4	1.1
ハンノキ属	22.0	13.1
ブナ属	2.4	5.1
コナラ属アカガシ亜属	0.2	0.6
コナラ属コナラ亜属	19.9	16.0
クリ属	2.6	39.1
ニレ属	2.4	1.4
ケヤキ属		0.6
エノキ属－ムクノキ属	1.5	1.4
カツラ属	1.1	0.6
フサザクラ属		0.3
キハダ属	0.2	
ユズリハ属		0.3
ウルシ属	2.1	0.3
ニシキギ属	0.2	
カエデ属	2.4	0.6
トチノキ属		0.3
クロウメモドキ科	0.4	
ブドウ属	0.4	0.3
マタタビ属	0.6	
ウコギ科	0.9	
ミズキ科	0.2	
エゴノキ属		0.3
イボタノキ属	0.2	
トネリコ属	18.2	2.0
草本花粉	19.3	37.2
ガマ属	0.2	
イネ科	5.7	14.0
カヤツリグサ科	10.1	7.8
ユリ科	0.2	0.7
クワ科	1.1	8.7
ギシギシ属		0.2
タデ属サナエタデ節		0.2
アカザ科	0.2	
カラマツソウ属	0.2	0.7
キジムシロ属近似		0.3
他のバラ科	0.3	0.7
マメ科	0.2	0.5
ミソハギ属		0.2
セリ科		0.2
ヨモギ属	1.0	3.2
他のキク亜科	0.3	

草あるいは人里植物的な分類群である。また、栽培植物か野性化したものか、あるいは野性種かは充分検討の余地があるが、アサが産出したことは特筆すべきことである。

以上のような層位による産状の違いについては、まず第一に、木本泥炭層が湿地環境であるため湿地林からもたらされた要素が目立ち、外来性の植物化石群が乏しいことを反映したことが考えられる。第二は、それにもかかわらず遺跡周辺の植生には変化があり、とくに人間の活動が植生の変化に関わった可能性が考えられる。

C. 花粉化石群

花粉化石群の組成を表6に示す。2試料についてではあるが、下部層の木本泥炭層と中部の草本泥炭層の花粉化石群にはいくつかの共通点と相違点が認められる。共通点としては木本類のコナラ属コナラ亜属・ハンノキ属・クルミ属－サワグルミ属および草本類のイネ科・カヤツリグサ科の高率の産出があげられる。相違点としては、下部層でのトネリコ属の高率の産出と中部層でのクリ属の高率の産出が際立っている。また、クワ科にも差異があり、中部層では高率で産する。

このような花粉化石群にみられる共通点と相違点は、つぎのような植生とその変化を示唆する。すなわち、両層の形成期を通してコナラ属コナラ亜属をはじめとする温帯性の落葉広葉樹林が堆積域縁辺から周辺台地にかけて成立していたが、下部層形成期ではクルミ属－サワグルミ属・ハンノキ属・トネリコ属が優占する河畔・湿地林が堆積域縁辺に成立していたのに対して、中部層形成期ではクリ属が優占するようになった。クリ属は水域での生育は考えにくいので、おそらく段丘崖から台地にかけて拡大したものであろう。

第3節　古　環　境

以上述べた層序・編年および植物化石群を総合すると、小三内遺跡における低地縁辺の環境の変遷史は、古い方から、下部層形成期、中部層形成期、および上部層形成期の3つの時期に区分することができる。下部層から中部層形成期への移行、および中部層から上部層形成期への移行は、ともに河川の活動の活発化によって急激に起こっている。したがって、それぞれの時期は河川の活動の回帰によって区分される。堆積環境、植生を復元しながら、各時期の性格を考えてみよう。

A. 下部層形成期

砂・シルト互層と木本泥炭層の形成期は、放射性炭素年代や火山灰編年によって、約5，300～5，000年前の比較的短期間と見積もられる。下部層の堆積環境は、河川の活動の影響のある環境から停滞水域もしくは湿地環境へ移行し、河川から湿地への連続的な環境変化を示すものである。この時つくられる湿地環境とは、少なくとも低地縁辺で湿地林が成立し、それらの生

産物によって泥炭が堆積するという特異なものであった。木本泥炭の形成環境については各地で資料が増えつつあるが、一般に、鬱蒼とした森林が成立し、その林床はじめじめとしていても人が歩き回ることのできる比較的乾いた環境が復元されている（辻、1991）。小三内遺跡においてこのような湿地の景観をつくる植生は、植物化石群から、ヤチダモやハンノキを主とする混地林であり、より乾いた低地縁辺から段丘崖にかけてはコナラやサワグルミなど落葉広葉樹を主とする森林であったと考えられる。

B. 中部層形成期

中部層をなす砂礫層とシルト・草本泥炭互層の形成期は、考古遺物の編年によって、縄文時代前期末から縄文時代中期末までの期間に入る。下部層から中部層形成期への移行は急激で、河川の活動の活発化という環境の急変によってもたらされた。これによって、堆積しつつあった木本泥炭層およびその生成に関わった森林は速やかに埋没した。中部層の砂礫層にはトネリコ属の大径木も含まれていたが、森林の埋没時に二次的に取り込まれた可能性が高い。中部層形成期を通して、下部層形成期と同様に、河川の活動の影響が強い環境から湿地環境へと堆積環境が変化したが、復元される湿地環境は草本類の湿地植物が繁茂するもので、木本泥炭の生成環境とは大きく異なっていたことは注目すべきことである。おそらくこれは、河川の活動の性格に大きく関わるのではないかと考えられる。

中部層形成期では、植生にも注目すべき変化がある。木本類ではクリが顕在化する。草本類でも、畑雑草・人里植物の性格の強い植物群、それにアサといった人の関わりが強く示唆される植物群が多種あらわれるようになる。これらのことは、段丘崖から台地にかけて、人と植生の密接な交渉を暗示するものであろう。

C. 上部層形成期

上部層形成期は、考古遺物の編年と放射性炭素年代によって、縄文時代中期末から縄文時代後期とみなせる。中部層形成期後半の草本泥炭が堆積するような湿地環境は、急激な河川の活動の活発化によって破壊された。わずかな発掘調査区域ではあるが、上部層が中部層を深くえぐるようにして堆積している様相は、河川の活動が運搬作用だけでなく下刻作用を伴うものであったことを示している。低地内の植生がヤナギ属やハンノキ属を主体とするものであったことは、こうした河川の活動による堆積環境の変化と呼応するものである。

引用文献

辻　誠一郎　1992　沖積平野における木本泥炭の性質と堆積環境　植生史研究　No. 9：23－31.

第Ⅶ章　分析と考察

第１節　歴史時代の住居跡について

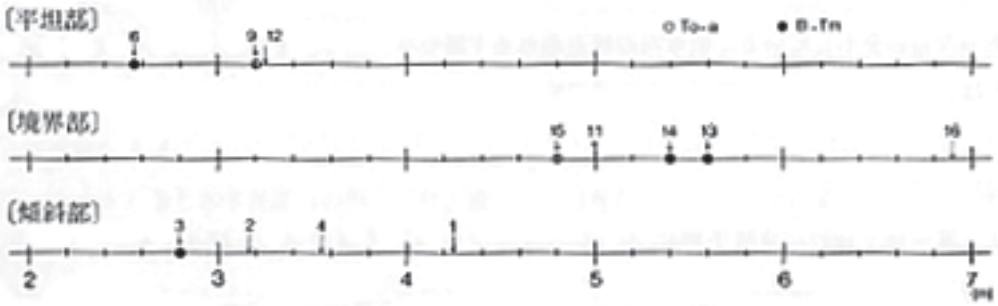
今回の調査において検出した歴史時代の住居跡は12軒である。この中で規模等が不明なものとカマドを検出していないものを除外すると、残り９軒となる。また、遺物に関しても床面及びカマドから良好な出土がすべてに見られたわけでもない。このような中で考察を加えるには統計学上資料不足の感はあるが、多少なりとも触れておきたい。

1　位置と地形

12軒の所在する地形を見ると、台地平坦（平頂）部・傾斜部・その境界付近とに三分できる。平坦部には６・９・12住、傾斜部には１・２・３・４住、境界部には11・13・14・15・16住が構築されている。この地形の区分は、地山であるローム層を表出させた時点でのものであるが、遺構構築当時においても黒色土がほぼ同様の勾配で堆積していたと思われる。

2　平面形と規模

平面形はいずれも方形またはそれに近く、特にいびつなものや張り出しを施設として伴うものは検出していない。規模を比較すると、おおよそ３群に分けることができる。推定値も混じるが12軒で確認した壁長をもとにそれぞれの平均値を比較すると、Ⅰ小型（2．5～3．6m）、Ⅱ中型（約４・3m）、Ⅲ大型（4．8～6．9m）となる。それぞれの数値を前項の地形区分に対応させると第86図のようになり、群が若干異なってくる。より明確になったことは、Ⅲ群の大型のものが境界部に集中していることである。一方、小型・中型としたものは、境界部には構築されていない。また、傾斜部に構築されたものはいずれも貼床であることから、斜面に大型の住居のものを構築しにくいことは想定される。しかし、平坦部における３軒は、いずれも小型のものであり、時期的な規格あるいは大型のものを必要としない何らかの原因等があったのであろう。



第86図　歴史時代住居跡の位置と規模

3　床

撹乱の激しい12住を除いた11軒中、貼床でないものは6・9・14住の3軒である。6・9住はともに小型に属し平坦部に構築されている点で共通している。

4　火山灰

検出した火山灰は、十和田ａ火山灰と白頭山・苫小牧火山灰で、本県では平安期の遺構に伴うものとして広く知られ、それぞれの降下時期等についてもこれまで多くの報告と事例が行われている。今回の調査では、1つの遺構から2枚の火山灰は検出していない。どちらか1枚の確認であり、12軒中6軒と半数である。十和田ａは9・15住、白頭山・苫小牧は3・6・13・14住でそれぞれ確認している。

なお、9住とその外周溝と思われる4溝には、異なる火山灰が堆積している。このことについては、時期の違いというよりも、2つの構造が異なったために混入に影響が出たものと考えている。

5　カマド

12軒中9軒で検出した。構築された壁は、3住を除くといずれも南壁である。この中で6住以外はいずれも中心から西寄に倍置している。袖の構造は、9住が地山の掘り残しであるが、その他はいずれも粘土で構築している。また、9件の煙道は唯一トンネル式である。

6　主軸方位

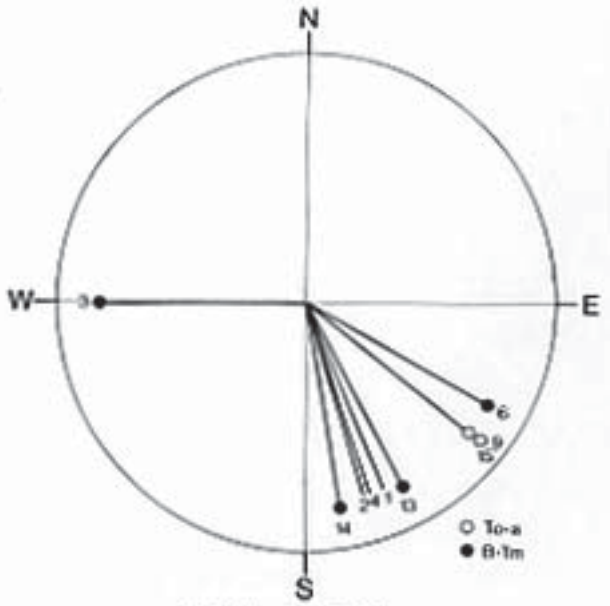
主軸線は、燃焼部から煙道に向かう中心線を設定し、第87図は磁北をもとにした座標に当てはめたものである。軸線は3群に大別できるが、9・15住においては同軸方位を示している。なお、この2軒からのみ十和田ａ火山灰を検出しており、火山灰を含めた堆積土の状況も非常に類似している。

2・4住においてもほぼ同じ方位を示している。

7　構築時期

各住居跡の構築時期については、良好な判断材料となりえる資料が極めて少ないため特定できないが、概略的には、火山灰の存在を考慮すると、10世紀初頭から中葉ごろに推定でさる。火山灰の混入が見られないものについても10世紀代と推定される。

（小林）



第87図　主軸方位

表７　歴史時代の住居跡一覧

住居番号	平面形	壁長（平均値）	主軸方向	床	仕置	袖の構造	煙道の構造	支脚	付属施般	周溝	降下火山灰	備考
1	方　形	4．25	S－23°－E	貼床	南壁西寄	粘土		土師器坏	P_1（灰だめ状）	有		焼失家屋？
2	方　形	3．17	S－17°－E	貼床	南壁西寄	粘土	半トンネル			有		
3	方　形	2．8	S－90°－E	貼床	西壁	粘土		（土製支脚）		無	B－Tm	北西側不明
4	方　形	3．65	S－19°－E	貼床	南壁西寄	粘土（平石）	半トンネル	土師器甕		有		
6	方　形	2．55	S－61°－E	地山	南壁東寄	粘上	半トンネル			無	B－Tm	3土と重複
9	方　形	3．2	S－52°－E	地山	南壁西寄	地山掘残し	トンネル	（土製支脚）		無	To－a	外周溝？
11	（方形）	（5．00）										西側未調査
12	（方形）	（3．20）										撹乱
13	方　形	5．6	S－28°－E	貼床	南壁西寄	粘土（土師器・礫）	半トンネル			有	B－Tm	焼失家屋
14	方　形	5．4	S－10°－E	地山	南壁西寄	粘土	半トンネル			有	B－Tm	焼火家屋？
15	方形	4．8	S－52°－E	貼床	南壁西寄	粘土	半トンネル	小型土器2個体	P_1（燃焼）	有	To－a	
16	方　形	6．9		貼床						有		

第2節　放射性炭素年代測定結果報告書

（財）青森県工業技術教育振興会
八戸工業大学助教授　村　中　　健

1993年9月26日、受領した木片試料5点について^{14}C年代測定の結果を報告する。依頼試料は前処理および化学処理してベンゼンを合成し、これにシンチレーターを加え20mlバイアルを作り測定試料とした。標準試料はNBS蓚酸標準体4990Cを化学処理して作成し、また、バックグラウンド試料は市販の化学用大理石から処理作成したものを用いた。

測定装置はアロカ社製の低バックグラウンド液体シンチレーションカウンターシステムLSC－LBⅡであり、年代測定試料、標準試料、バックグラウンド試料について各々50分間ずつ4リピート、10サイクル合計2000分間の測定をおこなった。

年代の算出には、^{14}C半減期としてLibbyの半減期5570年を用い、また、結果は1950年からの年数をBP年代として表記している。なお、付記した誤差は計数値の1σに相当する年数である。

記

HIT－86：小三内遺跡　A試料（砂礫層から出土した流木から採取）
BP年代：2690±50年

HIT－87：小三内遺跡　B試料（泥層から出土した埋没立株から採取）
BP年代：5240±60年

HIT－88：小三内遺跡　C試料（泥層から出土した埋没立株から採取）
BP年代：5050±70年

HIT－92：小三内遺跡　D試料（砂礫層から出土した流木から採取）
BP年代：5330±70年

HIT－93：小三内遺跡　E試料（泥層から出土した埋没立株から採取）
BP年代：5170±60年

第Ⅷ章　ま　と　め

小三内遺跡は、青森市大字三内字丸山に所在する遺跡であり、立地環境は、浪館段丘を基盤としている。この段丘は、沖館川の南東側に位置し広い台地状の地形である。この一帯は有数の縄文時代の遺跡密集地として知られており、小三内遺跡はこの一角を占めている。

今回の調査の対象となったのは約6，000㎡であり、舌状の台地先端部を横断する形となっている。そのため、台地の頂部である平坦部とそこから下る傾斜部、そして、沖館側へつながる低地域と大きく地形が区分される。

遺構が検出されたのは、台地平坦部と傾斜部であり、低地域では部分的なものであったが縄文時代前期後半の遺物包含層が検出された。この包含層は、沖館川流域で現在までに確認されたなかでは最下流に位置する。

検出した遺構は、縄文時代の住居跡が3軒、歴史時代の住居跡が12軒等である。従来、縄文時代の遺物の出土が主に報告されていただけに、歴史時代の住居跡が多いことで若干意外な感があった。

縄文時代の住居跡は、3軒中2軒は中期末葉に比定できる。特に、第8号住居跡からは、堆積土中とはいえ余市式土器群と思われる破片と完形品ではないが青竜刀形石器と思われるものが出土している。青竜刀形石器が遺構内から出土するのは非常に稀な事例であるが、余市式土器群とともに同一遺構内から出土したことで、北海道道南部に多い事例と比較検討する良好な資料となり得ると思われる。

歴史時代の住居跡の営まれた時期または廃絶した時期については、良好な出土状況を呈する土器が少なく、明確には確定できない。しかし、少量ではあったものの床面から出土した土器と傍証としてではあるが幸いに2種類の火山灰を検出したことにより、概ね10世紀前半ごろに推定することができる。

なお、第13号住居跡から擦文土器と考えられる個体が出土したが、その上位を覆う火山灰を考慮すると、今後、当資料が擦文土器編年に関し、貴重な資料となり得るものと思われる。

最後ではあるが、調査から本書刊行に至るまでご協力・ご援助を賜った多くの方々に改めて感謝の意を添え、まとめとさせていただきたい。　（担当職員一同）

引用・参考文献

青森県教育委員会　1974　第12集　近野遺跡発掘調査報告書
〃　1975　第22楽　近野遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）
〃　1975　第25集　中の平遺跡発掘調査報告書
〃　1977　第33集　近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）、三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書
〃　1977　第34集　水木沢遺跡発掘調査報告書
〃　1978　第37集　青森市三内遺跡
〃　1978　第38集　熊沢遺跡
〃　1978　第41集　三内沢部遺跡発掘調査報告書
〃　1979　第46集　松元遺跡発掘調査報告書
〃　1979　第47集　近野遺跡発掘調査報告書（Ⅳ）
〃　1979　第49集　細越遺跡
〃　1984　第88集　朝日山遺跡
〃　1985　第89集　尻高（2）・（3）・（4）遺跡発掘凋査報告書
〃　1986　第98集　弥栄平（1）遺跡発掘調査報告書
〃　1987　第105集　山本遺跡発掘調査報告書
〃　1988　第111集　李平下安原遺跡
〃　1989　第119集　館野遺跡
〃　1990　第130集　杢沢遺跡
〃　1991　第133集　富ノ沢（1）・（2）遺跡
〃　1991　第137集　富の沢（2）遺跡
〃　1992　第143集　富ノ沢（2）遺跡
〃　1993　第147集　富ノ沢（2）遺跡・富ノ沢（3）遺跡
(財) 北海道埋蔵文化財センター　1991　第72集　余市町フゴッペ貝塚
南茅部町教育委員会　1980　白尻B遺跡
青森市教育委員会　1962　1　三内霊園遺跡調査概報
〃　1970　4　三内丸山遺跡調査概報
〃　1988　□ 三内丸山　遺跡発掘調査報告書
〃　1993　第16集　三内丸山（2）遺跡発掘調査概報
古代城柵官衙遺跡検討会　1993　『特集シンポジウム北日本における律令期の土器様相』（第18回収録）
穴　澤　善　功　1984　製鉄からみた鉄製産の展開　『季刊考古学』8
阿　部　義　平　1971　ロクロ技術の復元　『考古学研究』18－2
新　谷　　武　1981　五所川原周辺の須恵器窯跡出土の長頸壷について　『弘前大学孝古学研究』1号
江　坂　輝　彌　1957　前期縄文文化に対する一考察　『史想』7
〃　1970　『石神道跡』
小　川　貴　司　1979　回転糸切り技法の展開　『考古学研究』26－1
工藤雅樹・桑原滋郎　1972　東北地方における古代土器生産の展開　『考古学雑誌』57－3
桑　原　滋　郎　1969　ロクロ土師器坏について　『歴史』39
〃　1976　東北地方北部および北海道の所謂第　形式の土師器について　『孝古学雑誌』61－4
〃　1976　須恵系土器について　『東北考古学の諸問題』
〃　1977　津軽で作られた須恵器　『考古風土記』2
菊　池　徹　夫　1984　擦文文化と鉄　『季刊考古学』8
北　林　八洲晴　1983　古代（奈良・平安）『青森県の考古学』
小井川　和　夫　1984　いわゆる赤焼土器について　『東北歴史資料館研究紀要』10
坂　詰　秀　一　1974　津軽持子沢窯跡第二次調査概報　『北奥古代文化』6
〃　1975　津軽前田野目窯跡群をめぐる課題　『北奥古代文化』7
清　水　潤　三　1959　青森県青森市三内遺跡　『日本考古学年報』8
〃　1961　青森県青森市三内遺跡　『日本考古学年報』9
〃　1962　青森県青森市三内遺跡　『日本考古学年報』11
〃　1963　青森県青森市三内遺跡　『日本考古学年報』6
杉　井　　健　1993　竈の地域とその背景　『考古学研究』40－1
高橋信雄・赤沼英男　1984　蕨手刀からみた東北北部の古代製鉄技術　『季刊考古学』8
高　橋　正　勝　1981　北海道南部の土器　『縄文文化の研究』4
富　樫　泰　時　1983　青竜刀形石器　『縄文文化の研究』9
町田　洋・新井房夫　1992　『火山灰アトラス』
中　島　栄　1983　石冠・土冠　『縄文文化の研究』9
那須孝悌・市原壽文　1983　「低湿性遺跡」および関連する用語の定義について　『考古学研究』30－2
成　田　滋　彦　1984　東北地方北部の大木10式土器の周辺　『奥南』3
本　間　　宏　1987・88　縄文時代後期初頭土器群の研究（1）・（2）『よねしろ考古』3・4
野　村　　崇　1985　北海道出土の青竜刀形石器とその系譜　『論集・日本原史』
〃　1988　『日本の古代遺跡40　北海道』
三　浦　圭　介　1979　東北地方北部の集落遺跡　『日本考古学協会昭和54年度大会研究発表シンポジュウム資料』
三　宅　徹　也　1974　青森県における円筒下層式土器群の地域展開　『北奥古代文化』6号
〃　1978　円筒土器の概念とその崩壊　『青森県立郷土館調査研究年報』3
〃　1981　円筒土器　『縄文文化の研究』3
〃　1988　円筒土器下層様式　『縄文土器大観』1
村　越　　潔　1974　『増補円筒土器文化』
村越　潔・新谷　武　1974　青森県前田野目砂田遺跡発掘調査概報　『北奥古代文化』14
山　内　清　男　1929　関東北における繊維土器　『史前学雑誌』1－2
〃　1930　斜行縄紋に関する二三の観察　『史前学雑誌』2－3

写　真　図　版

遠　景　（N→）

A_1 近　景　（W→）

B_1 近　景　（N→）

B_2 土信周辺　近景　（N→）

基本層序　（H－85，W→）

表土・撹乱層と基本層序（B_2←→B_1）

表土直下の撹乱確認　（A_1）

撹乱層　（A_2）

写真１　調査区全景・堆積土層

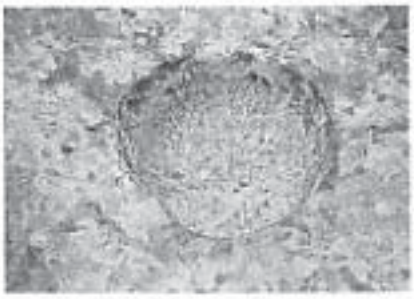
第８号住居跡　完掘

第８号住居跡　第１号炉

第８号住居跡　青竜刀形石器出土

第10号住居跡　炭化物検出面（手前６土）

第10号住居跡　埋設土器



第１号土壙　完掘

第２号土壙　完掘

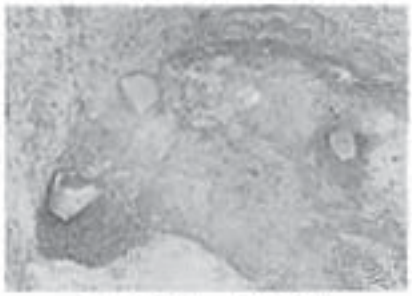
第４号土壙　完掘

写真２　縄文時代の遺構(1)

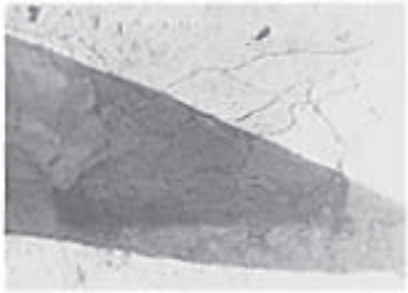
第5号土壙　完掘

第6号土壙　完掘

第7号土壙　完掘

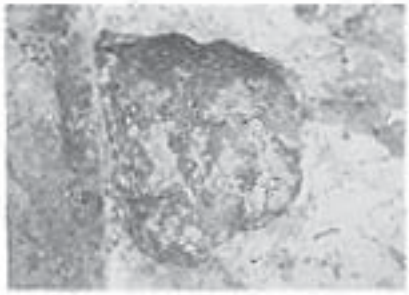


第9号土壙　遺物出土



第10号土壙　セクション

第11号土壙　完掘



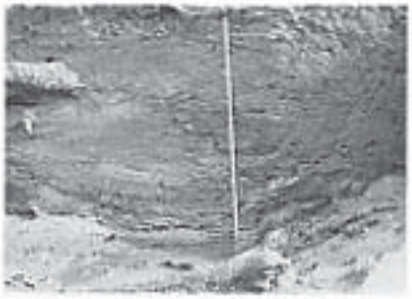
第18号土壙　完掘

遺構外出土　石冠

写真3　縄文時代の遺構(2)，遺構外出土石冠

西壁

Aトレンチ(埋没林及び流木)



砂層と第Ⅵ層（地山）

棒状木製品・土器底部破片出土

砂層最下部・地山直上の出土

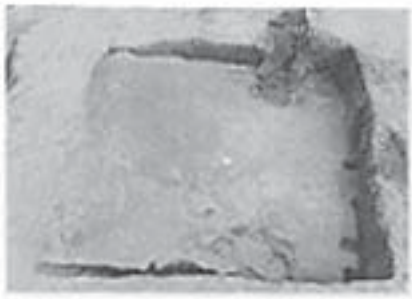
第Ⅳc層　円筒下層d式土器出土

← 遺物密集地 →

遺物密集地堆積状況

写真4　低地域の調査

第1号住居跡　カマド



第2号住居跡　完掘

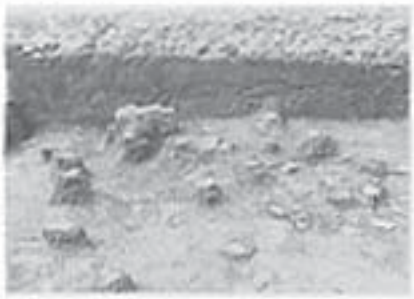
第3号住居跡　完掘

第3号住居跡　土師器甕出土（床面）

第4号住居跡　完掘

第4号住居跡　カマド

第6号住居跡と第3号土壙



第11号住居跡と盛土状況

写真5　歴史時代の遺構(1)

第９号住居跡　完掘

第９号住居跡　支脚等出土（床面）

第13号住居跡　炭化材出土

第13号住居跡　カマド・土師器出土

第14号住居跡　完掘

第14号住居跡　カマド

第15号住居跡　完掘

第15号住居跡　カマド

写真６　歴史時代の遺構(2)

第13・16号住居跡　完掘

第16号住居跡　出土金助先

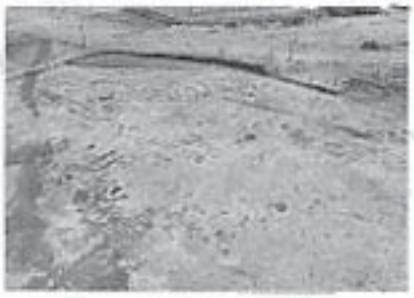
第17号土壙　完掘

第9号住居跡、第4・5・6号溝状遺構

第4号溝状遺構　遺物出土

第4号溝状遺構　B－T面検出面

第5・6・7号溝状遺構(奥は9住と4溝)



第2号柱穴状ピット群

写真7　歴史時代の遺構(3)

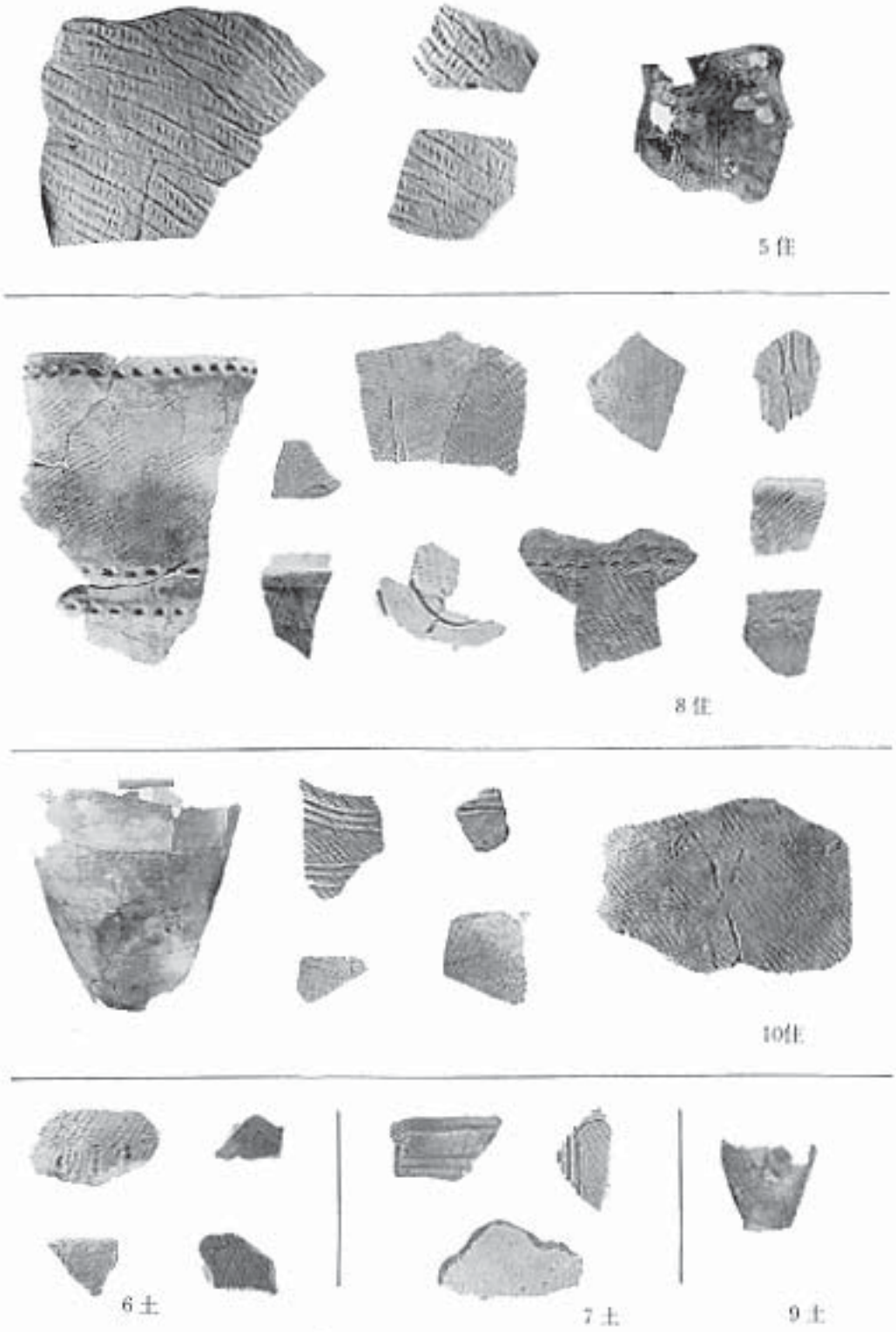


写真8　遺構内出土土器

写真9　第Ⅳc層出土土器(1)

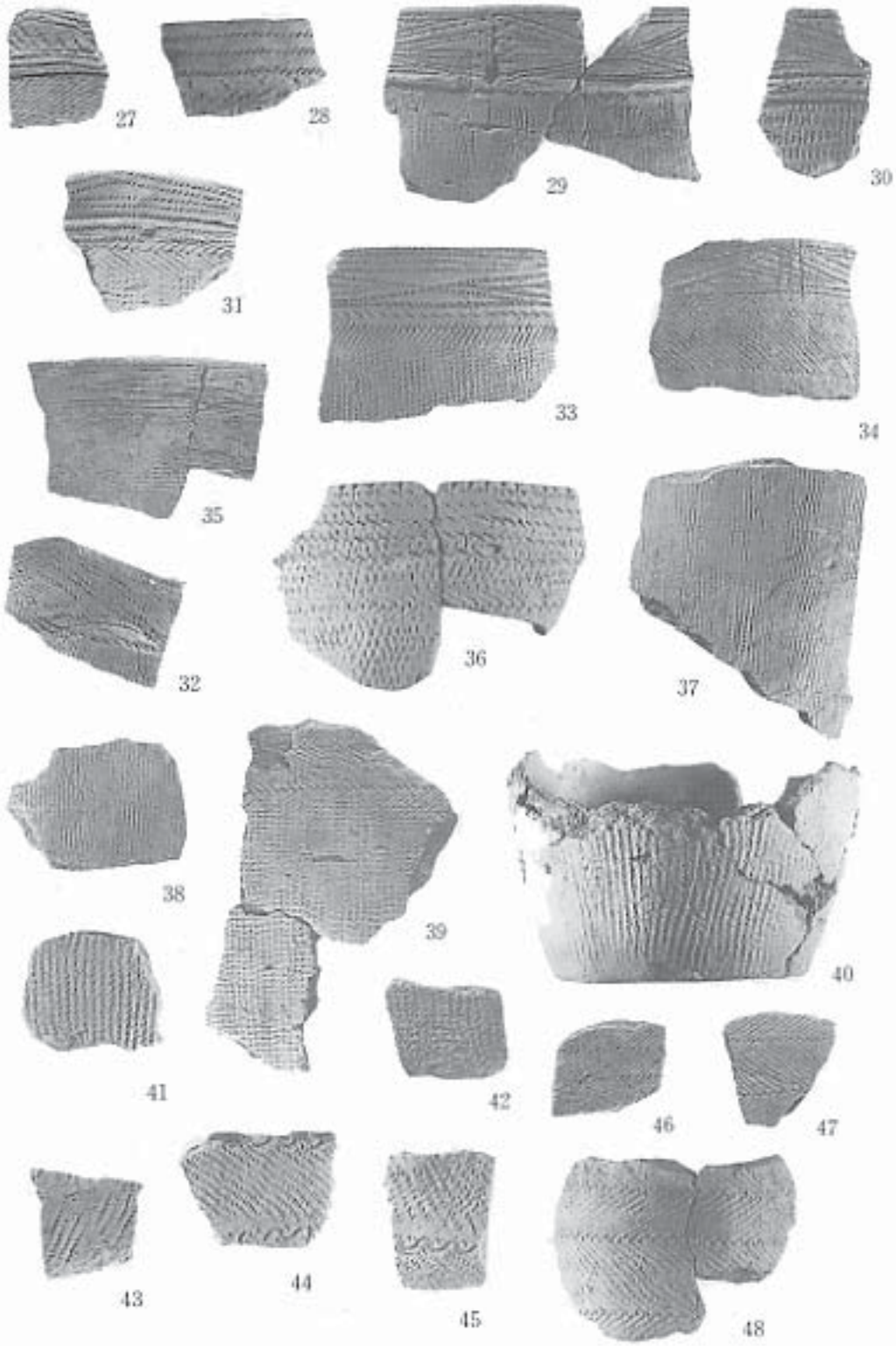


写真10　第Ⅳc層出土土器(2)

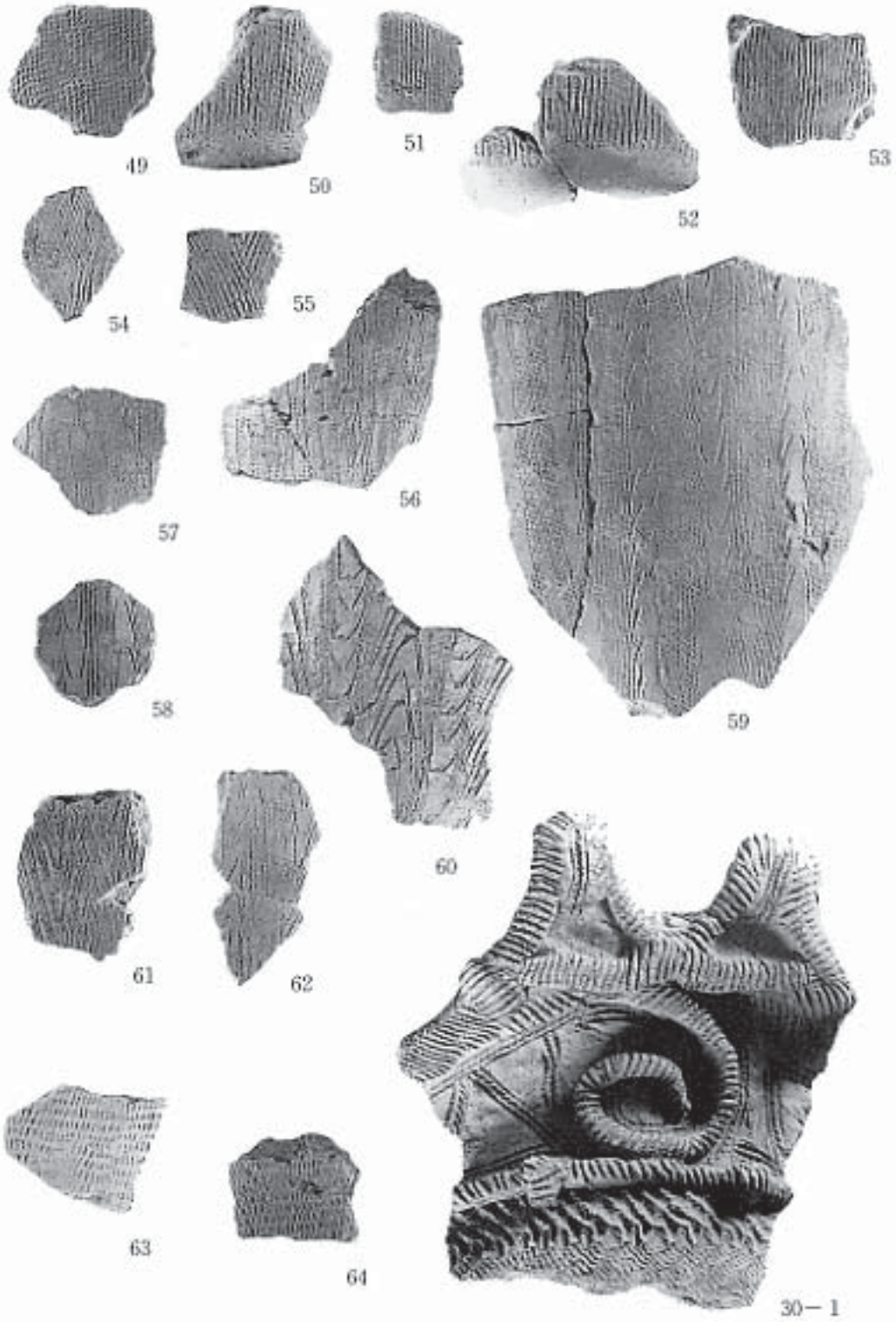


写真11　第Ⅳc層出土土器(3)

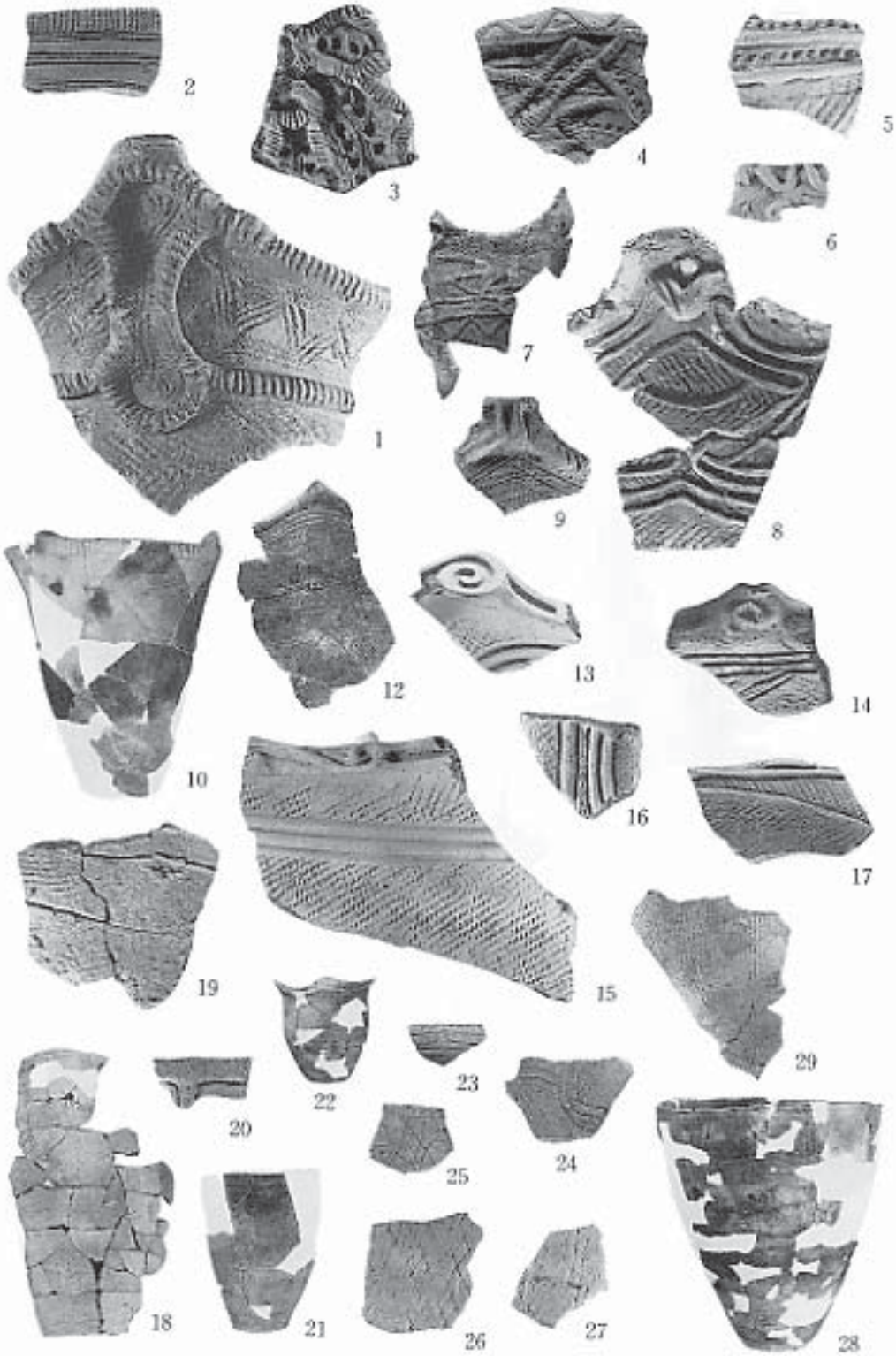


写真12　遺構外出土土器

写真13　第８号住居跡出土石器・石製品

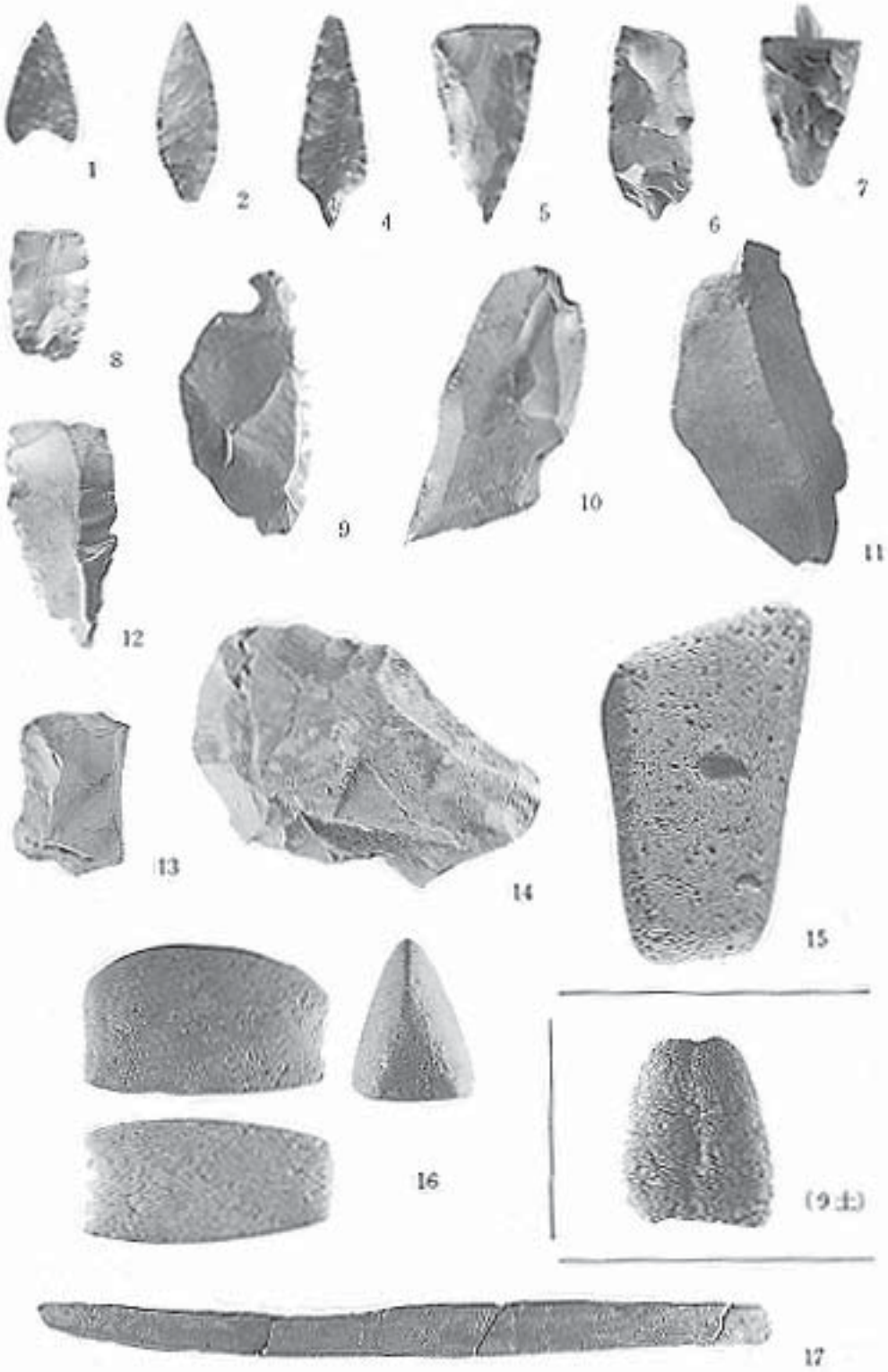


写真14　9土・遺構外出土石器・石製品・木製品

写真15　遺構内出土土師・須恵器(1)

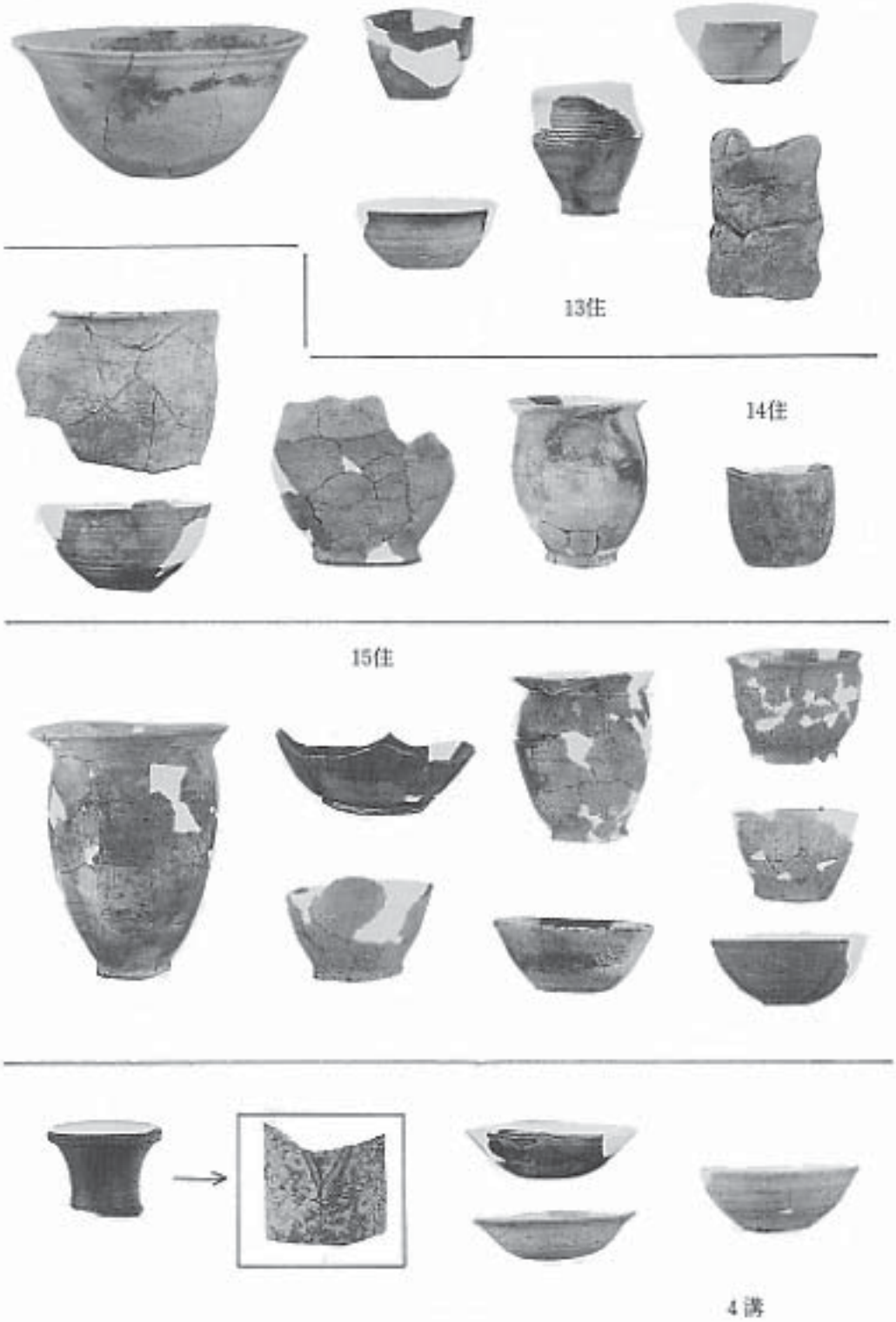


写真16　遺構内出土土師・須恵器(2)

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965『四ッ石遺跡調査概報』
〃	3	1967『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979『螢沢遺跡』
		1983『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983『山野峠遺跡』
〃		1985『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『横内城遺跡発掘調査報告書』
〃		1988『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書	第16集	1991『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1994『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994『三内丸山（2）遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第22集

市内遺跡詳細分布調査報告書

発行年月日　平成6年3月31日

発　　行　青森市教育委員会

〒030　青森市中央一丁目22－5

TEL　0177－34－1111

印　　刷　東北印刷工業株式会社